

綿貫観音山古墳Ⅱ

石室・遺物編

1999

群馬県教育委員
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

『鎌倉観音山古墳Ⅱ』正誤表

	誤	正
P.50	①頭推大刀(付図5・第31図)	①頭推大刀(付図4・第31図)
P.51	②纏り横頭大刀(付図5・第32図)	②纏り横頭大刀(付図4・第32図)
P.55	③三原横頭大刀(付図5・第33図)	③三原横頭大刀(付図4・第33図)
P.173	(2)金銅製鞍轡表飾板(付図4)	(2)金銅製鞍轡表飾板(付図5)
P.193~205 (7)金銅製歩 揺付鎧具 の項中	芯棒	心棒

綿貫觀音山古墳Ⅱ

石室・遺物編

1999

群馬県教育委員
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団



墳丘全景（上空北西から）



横穴式石室（玄室から奥壁）



横穴式石室（玄室から羨道部）



調査時の玄室内部



副葬品の出土状況（馬具）

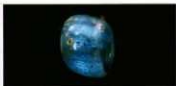


副葬品の出土状況（銅製水壺、土器）



黙帯鏡

ガラス玉類



銀地鍍金空玉
(内面接合痕)



銀地鍍金空玉
(内面接合痕)



装身具類



金銅製半球形服飾品



金銅装飾付太帯



頭椎大刀



環り環頭大刀



環り環頭大刀 (鞘口金具一銀象嵌)



環り環頭大刀 (鞘尻金具一銀象嵌)



頭椎大刀 (柄部)



三累環頭大刀 (柄頭)



鹿角装小刀・刀子



銀装刀子



铁冑



腕手



腕手



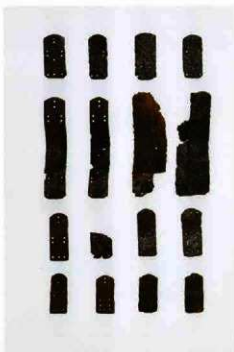
胸当



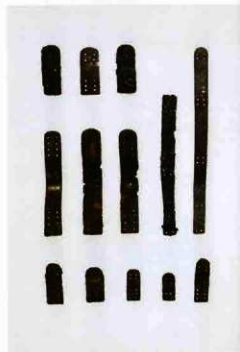
胸当



铁剑



挂甲小札



挂甲小札



金銅製鞍橋表鈔板 (後輪)



金銅製環狀鏡板付轡



鉄地金銅張心葉形鏡板付轡



鉄製盞鐘



銅製環鈴



金銅製步搖付飾金具 (1)



金銅製步搖付飾金具 (6)



金銅製步搖付飾金具 (70)



金銅製步搖付飾金具 (2)



金銅製步搖付飾金具 (54)



金銅製步搖付飾金具 (74)



金銅製花弁形飾付雲珠



金銅製花弁形飾付辻金具(2)



金銅製步搖付飾金具 (19)



鉄地金銅張製革帯当金物



金銀對心鳳形拍翼 (1)



土器類



銅製水壺

序

昭和48年に国指定史跡となった観音山古墳は、昭和42、43年に発掘調査され石室内からの出土品の絢爛さが学術的にも、美術的にも全国的な注目を集めました。

諸般の事情で正式な発掘調査報告書の刊行が遅れていましたが、群馬県教育委員会は観音山遺跡の重要性に鑑み平成5年に「上野観音山古墳発掘調査報告書編集委員会」を発足させ、発掘調査報告書の刊行を計画且つ報告書刊行事業を当事業団に委託、平成5年から6年計画で事業をスタートさせました。

群馬県教育委員会より事業を受託した当事業団は、委員会、関係機関等の指導を賜りながら事業を進め、平成9年度には「墳丘・埴輪編」の調査報告書を刊行しました。そして本年度、残されていたところの「石室・遺物編」の調査報告書が完了しましたので、ここに「綿貫観音山古墳発掘調査報告書—石室・遺物編—」を上梓したく存じます。

本編には、昭和52年に国指定重要文化財となった銅製の水瓶、金銅製太帯を始めとするところの石室内出土品、その他が報告されています。出土品が重要文化財ということで群馬県立歴史博物館での展示の合間をぬって事業を進めなければならぬ時間的な制約の中、関係機関並びに担当職員、整理補助員には多大な迷惑、苦勞をかけた。

また発掘調査後30年を経たため、その間に保存修理、その他により出土当時と形態等が変化し報告方法等で難渋しましたが、委員会のご指導のもとに滞りなく作成、報告することが出来ました。

本編の刊行をもって「綿貫観音山古墳発掘調査報告書」刊行事業は終了しました。事業着手以来何かとご指導をいただいた編集委員会の委員皆様、文化庁文化財保護部記念物課、同美術工芸課、東京国立文化財研究所、明治大学、群馬県教育委員会、群馬県立歴史博物館、発掘調査参加者、執筆者、当事業団の関係職員等に衷心より感謝申し上げます。そして本報告書が、先に刊行した「墳丘・埴輪編」とともに、我が国並びに東アジア地域の古代史解明に大いに活用されることを願ひ序とします。

平成11年3月25日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 菅野 清

例 言

1. 本書は綿貫観音山古墳(国史跡指定名称「史跡観音山古墳」)の発掘調査報告書である。なお、1998年に「綿貫観音山古墳1」が群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団から、1981年に「史跡観音山古墳一保存修理事業報告書一」が群馬県教育委員会から刊行されている。

2. 綿貫観音山古墳は、群馬県高崎市綿貫町字観音山1572番他に所在する。

3. 本古墳の発掘調査は群馬県教育委員会が実施した。

4. 調査期間及び担当者

第Ⅰ次 調査期間	1967(昭和42)年3月4日～3月14日
調査担当者	梅澤重昭(群馬県立博物館学芸員)
第Ⅱ次 調査期間	1967(昭和42)年7月25日～8月25日
調査担当者	大塚初重(明治大学文学部教授) 梅澤重昭(社会教育課主事補) 外山和夫(群馬県立博物館学芸員)
第Ⅲ次 調査期間	1967(昭和42)年11月20日～12月6日
調査担当者	第Ⅱ次調査と同じ
史跡 調査期間	1976(昭和51)年4月1日～1979(昭和54)年3月31日
整備時 調査担当者	大塚初重(明治大学教授) (1976年度) 梅澤重昭(群馬県総務部管財課係長) (1976年度) 桜場一寿(文化財保護課保護主事) (1976～79年度) 大江正行(文化財保護課保護主事) (1976年度)
調査員	神保佑史(群馬県立吉井高校教諭) 清水久男(明治大学大学院生)

5. 本書の作成のための整理作業は、第Ⅲ次調査終了後の1969(昭和44)年2月19日～2月28日、1970(昭和45)年に遺物整理作業が実施された。1972(昭和47)年12月4日～1973(昭和48)年5月15日には群馬県庁倉内で保存処理の措置を施した。

これらの作業を経て、群馬県埋蔵文化財調査事業団は群馬県教育委員会より委託を受け、1998(平成10)年4月1日～1999(平成11)年3月31日まで整理作業を実施した。

6. 1999(平成10)年度の綿貫観音山古墳報告書刊行編集委員会の委員は以下のとおりである。

委員長	大塚初重(明治大学名誉教授)
副委員長	梅澤重昭(群馬大学教授)
委員	小林三郎(明治大学教授)、青木繁夫(東京国立文化財研究所) 桜場一寿(群馬県立桐生女子高校教諭) 外山和夫、岡部 央、唐澤至朗(群馬県立歴史博物館) 菅野 清、赤山容造、神保佑史、坂本敏夫、平野進一、佐藤明人、徳江秀夫 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)
	西形恵司、水田 稔、巾 隆之、津金澤古茂、田口正美(群馬県教育委員会文化財保護課)

7. 本書作成時の事業団組織及び担当者は以下のとおりである。

管理・指導 赤山容造/渡辺 健/神保佑史/坂本敏夫、佐藤明人

事務担当 笠原秀樹、小山建夫／須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司、岡嶋伸昌

総括・監修 大塚初重（明治大学名誉教授）

梅澤重昭（群馬大学教授）

編集 徳江秀夫

文章執筆 大塚初重

梅澤重昭

小林三郎（明治大学教授）

森本岩太郎（聖マリアンナ医科大学名誉教授）

平田和明（聖マリアンナ医科大学教授）

青木繁夫（東京国立文化財研究所修復技術部）

平尾良光（東京国立文化財研究所保存科学部）

榎本涼子（東京国立文化財研究所保存科学部）

大西純子（東京国立文化財研究所保存科学部）

早川泰弘（東京国立文化財研究所保存科学部）

外山和夫（群馬県立歴史博物館副館長）

桜場一寿（群馬県立桐生女子高校教諭）

山口 充（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）

大谷 猛（東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員）

飯島義雄（群馬県立歴史博物館主幹兼専門員（学芸員））

杉山秀宏（群馬県立太田女子高校教諭）

蘇 哲

李 進熙

キャロライン・パシィーパーカー

赤山容造（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

平野進一（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

佐藤明人（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

徳江秀夫（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

図版作成 桑原恵美子、尾田正子、須田育美、木暮芳枝、八峰美津子、伊東悦子、池田美喜子、

藤井輝子、福島和恵、儘田澄子、下境マサ江、飯田和子（事業団整理補助員）

遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団係長代理）

遺物の関 邦一（群馬県埋蔵文化財調査事業団主任）

科学的処理 土橋まり子（事業団嘱託員）小村浩一、高橋初美（事業団補助員）

8. ガラス玉類・銀地鍍金空玉・耳環・挂甲小札に関する蛍光X線分析・X線透視撮影については国立歴史民俗博物館永嶋正春氏に依頼し、多くの教示を得た。

9. 委託の関係 鶴シ技術コンサル、鶴調研、鶴パレオ・ラボ

10. 出土遺物は群馬県立歴史博物館に保管してある。

11. 本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関から御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表します。

小田富士雄、亀田修一、河上邦彦、小池雅典、杉山彰裕、高野貫行、田中清美、千賀 久、時枝 務、南雲芳昭、土生田純之、林部 均、古谷 毅、群馬県立歴史博物館（50音順、敬称略）

12. 調査にあたって、明治大学考古学研究室をはじめ地元の方々には作業に従事していただくとともに多くの

便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。

調査参加者（50音順、敬称略）

第Ⅰ次調査

池田正男、大谷 猛、大山晃平、小田野哲憲、桜場一寿、重南和子、杉山彰梧、中沢貞治、長野隆子、
那倉栄子、藤瀬慎博、藤田富士夫、増田 修、水田 稔、八木勝行、矢島俊雄

第Ⅱ次調査

小林三郎、池田正男、伊藤晋祐、大江正行、大河原英秋、大島納美子、大谷 猛、笠井康夫、清藤一順、
小島曉子、小島かの子、桜場一寿、佐藤明人、杉山彰梧、関口 完、辻林 浩、外山政子、長谷部達雄、
原田道雄、洲上善庸、水田 稔、山口 充、山田美津子、和田京子

第Ⅲ次調査

天野静江、綾 芳子、池田正男、石崎道子、稲葉由理、岩波康次、上田秀夫、江口千恵子、大島納美子、
大谷 猛、笠井康夫、菊池泰志、小松聡江、坂本厚子、桜場一寿、佐藤明人、佐藤玲子、篠永 定、
島巡賢二、土屋ひろみ、中丸一郎、中村和子、中村史子、長野隆子、早川長子、松本喜久夫、水田 稔、
山口 充、李 光江

1969年資料整理

池田正男、大島納美子、大谷 猛、小島かの子、桜場一寿、佐藤明人、中村史子、山口 充

1970年資料整理












大塚初重、小林三郎、岩波康次、大谷 猛、金子眞土、小島かの子、桜場一寿、佐藤明人、中村史子、
原田道雄、平野進一、山口 充、綿貫文子

1972年資料整理、保存処理

石川正之助、石井敦子、中沢 悟、原田美幸、星野伸子、茂木由行、綿貫文子

凡 例

1. 口絵写真の一部は群馬県立歴史博物館所有の写真を使用している。
2. 石室関係の挿図は「史跡観音山古墳-保存修理事業報告書-」掲載図面を使用している。
3. 遺構・遺物図中の縮尺は各図中に表示した。他と異なるものについては随時縮尺を付しておいた。
4. 遺物番号は器種別に通番を付した。この番号は本文、挿図、表、写真図版を通じて表示を統一してある。
5. 遺構・遺物図中のスクリーントーンは次のことを表す。

石室天井石の断面		銅製水瓶の漆喰状の物質		漆	
遺物の断面		鞍飾金具裏面の付着者		ガラス丸玉の緑色部分	
布の細かい織		皮質		鹿角	
布の粗い織		木質			

6. 遺物図は1969年、1970年作成の実測図を基本にし、これに加除筆をしたものを使用した。

目 次

口 絵	
序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
本文中写真目次	
写真目次	

第1章 石室の調査と経過

1. 主体部横穴式石室の調査	(梅澤重昭)	1
(1) 第I次調査時の主体部横穴式石室の調査		1
(2) 第II次調査時の主体部横穴式石室の調査		3

第2章 横穴式石室

1. 構造と規模	(板場一寿)	7
(1) 石室の位置		7
(2) 石室の規模・形状		7
(3) 石室の構造		18
2. 副葬品の配置	(梅澤重昭)	21
(1) 玄室前室部右側壁部副葬品群		21
(2) 玄室前室部右側壁際副葬品群		21
(3) 玄室中央部左側壁部副葬品群		22
(4) 玄室部屍床左側部副葬品群		25
(5) 屍床中央部分副葬品群		26
(6) 屍床右側壁部副葬品群		27

第3章 遺 物

1. 出土遺物一覧		29
2. 鏡	(小林三郎)	30
(1) 半肉刻獣帯鏡		30
(2) 仿製二神六獣鏡		32
3. 装身具		32
(1) ガラス玉類	(佐藤明人)	32
(2) 銀地鍍金空玉	(佐藤明人)	35

(3) 耳環	(佐藤明人)	37
(4) 金銅製半球形服飾品	(梅澤重昭)	39
(5) 金銅装鈴付太帯	(梅澤重昭)	45
(6) 櫛	(徳江秀夫)	49
(7) 銅製筒形金具	(徳江秀夫)	49
(8) 鑑子	(徳江秀夫)	49
4. 武器・武具		50
(1) 大刀	(徳江秀夫)	50
(2) 小刀	(徳江秀夫)	57
(3) 刀子	(徳江秀夫)	60
(4) 鉄鉾	(徳江秀夫)	67
(5) 鉄鏃	(杉山秀宏)	70
(6) 飾り弓	(徳江秀夫)	113
(7) 鉄冑	(徳江秀夫)	113
(8) 胸当	(徳江秀夫)	115
(9) 挂甲	(徳江秀夫)	115
5. 馬具類		165
(1) 轡	(梅澤重昭)	165
(2) 金銅製鞍橋表飾板	(梅澤重昭)	173
(3) 籠	(梅澤重昭)	177
(4) 金銅製心葉形杏葉	(大谷 猛)	187
(5) 金銅製花卉形鈴付雲珠および金銅製花卉形鈴付辻金具	(梅澤重昭)	188
(6) 金銅製門板形座金	(徳江秀夫)	191
(7) 金銅製歩揺付飾金具	(大谷 猛)	193
(8) 鉄製雲珠・鉄製辻金具	(大谷 猛)	210
(9) 鉄地金銅張製革帯当金物	(大谷 猛)	212
00 鉄製革帯当金物	(大谷 猛)	212
01 銅製環鈴	(大谷 猛)	220
02 鉸具	(大谷 猛)	220
03 留金具	(大谷 猛)	226
6. 工具	(徳江秀夫)	229
7. 器種不明の石室内出土遺物	(徳江秀夫)	229
8. 容器		230
(1) 銅製水瓶	(外山和夫・飯島義雄)	230
(2) 土器類	(平野進一)	232
9. 吊手金具	(桜場一寿)	238
10. 自然遺物		238
(1) 種子	(徳江秀夫)	238

(2) 貝 殻	(徳江秀夫)	238
11. 出土人骨について	(森本岩太郎・平田和明)	239
(1) はじめに		239
(2) 人骨の出土状態		239
(3) 人骨の所見		239
(4) まとめ		240

第4章 分 析

1. 金属製品の自然科学的研究	(平尾良光・榎本淳子・大西純子・早川泰弘)	241
(1) はじめに		241
(2) 資 料		241
(3) 鉛同位体比について		241
(4) 化学組成について		243
(5) 鍍金の厚さ		257
(6) 全体考察		259

第5章 金属製品の修復

1. 金銅装鈴付太帯	(青木繁夫以下同じ)	269
2. 金銅製鞍轡表飾板		270
3. 金銅製歩揺付飾金具		270
4. 金銅製花卉形鈴付雲珠・金銅製花卉形鈴付辻金具		270
5. 金銅製心葉形杏葉		270
6. 鉄地金銅張心葉形鏡板付轡		271
7. 金銅製環状鏡板付轡		271
8. 金銅製半球形服飾品		271
9. 金銅製円板形座金		271
10. 銅製水瓶		271
11. 獸 帯 鏡		271
12. 神 獸 鏡		272
13. 銅製環鈴		272
14. 銅装刀子		272
15. 鹿角装刀子および刀子		272
16. 金銅製歩揺付飾金具台座内の木質遺物の同定について		272
(1) 試 料		272
(2) 同定方法		272
(3) 結 果		272

第6章 小 結

1. 遺構に関する考察	287
(1) 観音山古墳の石室の系譜	(桜場一寿) 287
(2) 綿貫観音山古墳の主体部横穴式石室と角閃石安山岩載石削石横石室	(梅澤重昭) 297
2. 遺物に関する考察	314
(1) 半肉刻獣帯鏡について	(飯島義雄) 314
(2) 金銅装鈴付太帯について	(梅澤重昭) 315
(3) 挂甲について	(徳江秀夫) 325
(4) 大刀・刀子の刀装について	(徳江秀夫) 329
(5) 鉄鏝について	(杉山秀宏) 334
(6) 出土馬具類の馬装組成	(梅澤重昭) 342
(7) 銅水瓶について	(飯島義雄) 346
(8) 玄室内の須恵器について	(平野進一) 348

第7章 結 語

1. 綿貫観音山古墳の位置と古墳群	(大塚初重・梅澤重昭以下同じ) 351
2. 発掘調査の経緯	351
(1) 発掘にいたるまでの経緯	351
(2) 発掘調査の経緯	352
(3) 発掘資料の整理・保存修理等	352
3. 墳 丘	352
4. 埴 輪	353
5. 主体部横穴式石室の構造	354
6. 石室内の副葬品	354
(1) 副葬品の配置	354
(2) 主な金属製造品	355
7. 綿貫観音山古墳の構築年代とその性格	356

サマリー

英 文	(赤山容造、キャロライン・バシーバーカー) 357
ハンブル	(李 進昭 訳) 364
中 国 文	(蘇 哲 訳) 371

挿図目次

第 1 図	外部施設発掘区図 (1:1,000)	8	第 58 図	鉄線D3	86
第 2 図	第 1～3 号調査発掘調査区配置図 (1:1,000)	9	第 59 図	鉄線D3	87
第 3 図	石室開口部実測図 (1:40)	10	第 60 図	鉄線D4	88
第 4 図	石室発掘区実測図 (1:100)	11・12	第 61 図	鉄線D5	89
第 5 図	石室実測図 (1:100)	13	第 62 図	鉄線D6	90
第 6 図	石室真込被覆土層図 (1:100)	15・16	第 63 図	鉄線D7	91
第 7 図	墳丘および石室の構造 (1:300)	17	第 64 図	鉄線D8	92
第 8 図	石室天井石実測図	19	第 65 図	鉄線D9	93
第 9 図	石室内出土遺物の位置①—支室右側前面 (1:15)	21	第 66 図	鉄線D10	94
第 10 図	石室内出土遺物の位置②—屍床部右側～支室右側前面 (1:15)	22	第 67 図	鉄線D11	95
第 11 図	石室内出土遺物の位置③—支室左側前面～屍床部左側 (1:15)	23	第 68 図	冑	111・112
第 12 図	石室内出土遺物の位置④—屍床部左側上層 (1:15)	24	第 69 図	弓—両頭金具	113
第 13 図	石室内出土遺物の位置⑤—屍床部左側下層 (1:15)	25	第 70 図	胸当	114
第 14 図	石室内出土遺物の位置⑥—屍床部中央 (1:15)	26	第 71 図	各型式の挂甲小札①	117
第 15 図	石室内出土遺物の位置⑦—全体 (1:40)	28	第 72 図	各型式の挂甲小札②	118
第 16 図	鉄帯鍔拓影	30	第 73 図	挂甲小札①	124
第 17 図	神袈裟拓影	31	第 74 図	挂甲小札②	125
第 18 図	ガラス丸玉	33	第 75 図	挂甲小札③	126
第 19 図	ガラス玉類の長さ・厚さ(長さ)比	35	第 76 図	挂甲小札④	127
第 20 図	緑地鍍金空玉	36	第 77 図	挂甲小札⑤	128
第 21 図	耳環	38	第 78 図	挂甲小札⑥	129
第 22 図	金銅製半球形服飾品①	39	第 79 図	挂甲小札⑦	130
第 23 図	金銅製半球形服飾品②	40	第 80 図	挂甲小札⑧	131
第 24 図	金銅製半球形服飾品③	41	第 81 図	挂甲小札⑨	132
第 25 図	裝飾の文様構成(推定)	44	第 82 図	挂甲小札⑩	133
第 26 図	金銅製鈴付太帯付風鈴形態の分類	48	第 83 図	挂甲小札⑪	134
第 27 図	金銅製鈴付太帯附復原模式図	48	第 84 図	挂甲小札⑫	135
第 28 図	銅製筒形金具	49	第 85 図	挂甲小札⑬	136
第 29 図	釧子	49	第 86 図	挂甲小札⑭	137
第 30 図	柄頭部部位	50	第 87 図	挂甲小札⑮	138
第 31 図	頭椎大刀柄頭～柄部	52・53	第 88 図	挂甲小札⑯	139
第 32 図	狭り頭頭大刀鎌象嵌	54	第 89 図	挂甲小札⑰	140
第 33 図	三葉頭頭大刀柄頭	56	第 90 図	挂甲小札⑱	141
第 34 図	小刀①	58	第 91 図	挂甲小札⑲	142
第 35 図	小刀②・刀装具	59	第 92 図	挂甲小札⑳	143
第 36 図	銅装刀子	61・62	第 93 図	挂甲小札㉑	144
第 37 図	刀子①	64	第 94 図	挂甲小札㉒	145
第 38 図	刀子②	66	第 95 図	挂甲羅状鉄札①	146
第 39 図	鉄剣①	68	第 96 図	挂甲羅状鉄札②	147
第 40 図	鉄剣②	69	第 97 図	挂甲羅状鉄札③	148
第 41 図	鉄鏃の形式構成	69	第 98 図	挂甲羅状鉄札④	149
第 42 図	鉄鏃出土状況	70	第 99 図	挂甲羅状鉄札⑤	150
第 43 図	長形柳葉鍔復原図	71	第100 図	籠手①	152
第 44 図	長形柳葉鍔分類図	72	第101 図	籠手②	153
第 45 図	長形柳葉鍔の 3 類型	73	第102 図	籠手	155・156
第 46 図	長形柳葉片刃鍔・有頸部狭長三角形鍔復原図	74	第103 図	組紐織履模式図・布織履模式図	159
第 47 図	鉄線①	75	第104 図	挂甲小札㉓	160
第 48 図	鉄線②	76	第105 図	挂甲小札㉔	161
第 49 図	鉄線③	77	第106 図	挂甲小札㉕	162
第 50 図	鉄線④	78	第107 図	挂甲小札㉖	163
第 51 図	鉄線⑤	79	第108 図	挂甲小札㉗	164
第 52 図	鉄線⑥	80	第109 図	金銅製帯状鍔板付髷	166
第 53 図	鉄線⑦	81	第110 図	鉄地金銅製心葉形鍔板付髷	167・168
第 54 図	鉄線⑧	82	第111 図	鉄製帯状鍔板付髷	171
第 55 図	鉄線⑨	83	第112 図	鉄製髷髷	172
第 56 図	鉄線⑩	84	第113 図	金銅製鞍轡表板飾部唐草文様式図	174
第 57 図	鉄線⑪	85	第114 図	後輪木胎部の木取り模式図	176
			第115 図	鉄製巻鍔	179・180
			第116 図	木胎漆塗巻鍔(左側)復原図	181

第117回	木胎漆塗面銀(1)	183・184
第118回	木胎漆塗面銀(2)	185・186
第119回	金銅製心葉形香蓋	187
第120回	金銅製花卉形鈴付雲珠(左) ・金銅製花卉形鈴付辻金具の花弁の截断面	188
第121回	金銅製花卉形鈴付雲珠・金銅製花卉形鈴付辻金具	190
第122回	面鏡の復原模式図	191
第123回	金銅製円板形塔金	192
第124回	金銅製步揺付飾金具(1)	194
第125回	金銅製步揺付飾金具(2)	195
第126回	金銅製步揺付飾金具(3)	196
第127回	金銅製步揺付飾金具(4)	197
第128回	金銅製步揺付飾金具(5)	198
第129回	金銅製步揺付飾金具(6)	199
第130回	金銅製步揺付飾金具(7)	200
第131回	金銅製步揺付飾金具(8)	201
第132回	金銅製步揺付飾金具(9)	202
第133回	金銅製步揺付飾金具(10)	203
第134回	金銅製步揺付飾金具(11)	204
第135回	鉄製雲珠	210
第136回	鉄製辻金具	211
第137回	鉄地金銅製革帯当金物	213
第138回	鉄製革帯当金物(1)	214
第139回	鉄製革帯当金物(2)	215
第140回	鉄製革帯当金物(3)	216
第141回	鉄製革帯当金物(4)	217
第142回	鉄製革帯当金物(5)	218
第143回	銅製摩訶(1)	220
第144回	銅製摩訶(2)	221
第145回	金銅製鏡具	222
第146回	鉄製鏡具(1)	223
第147回	鉄製鏡具(2)	224
第148回	鉄製鏡具(3)	225
第149回	鉄地銀板張留金具	227
第150回	鉄地金銅製留金具・金銅製留金具	227
第151回	鉄製留金具	228
第152回	工具	229
第153回	器種不明の金属器	229
第154回	銅製水瓶	231
第155回	須恵窑の銘本	233
第156回	須恵窑(1)	236
第157回	須恵窑(2)・土師窑	237
第158回	卑手金具	238
第159回	銅質観音山古墳から出土した資料の鉛同位体比 (A式)図	244
第160回	銅質観音山古墳から出土した資料の鉛同位体比 (B式)図	244
第161-1 a 回	銅質観音山古墳から出土した銅製水瓶本体 (資料番号:1-1)の蛍光X線スペクトル (XFL828)	246
第161-1 b 回	銅製水瓶本体(1-1) a 図の縦軸を拡大したスペクトル 図	246
第161-2 a 回	銅質観音山古墳から出土した銅製水瓶蓋(1-2)の蛍光 X線スペクトル図(XFL829B)	246
第161-2 b 回	銅製水瓶蓋(1-2) a 図の縦軸を拡大したスペクトル 図	246
第161-3 a 回	銅質観音山古墳から出土した銅製水瓶蓋(1-3)の蛍 光X線スペクトル図(XFL830)	247
第161-3 b 回	銅製水瓶蓋(1-3) a 図の縦軸を拡大したスペクトル 図	247
第161-4 a 回	銅質観音山古墳から出土した銀装刀子銀板部(2)の 蛍光X線スペクトル図(XFL836B)	247
第161-4 b 回	銀装刀子(2) a 図の縦軸を拡大したスペクトル 図	247

第161-5 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製帯状鏡板付飾 (3)の蛍光X線スペクトル図(XFL833)	248
第161-5 b 回	銅質帯状鏡板付飾(3) a 図の縦軸を拡大したスペ クトル図	248
第161-6 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製心葉形香蓋(5) の蛍光X線スペクトル図(XFL831)	248
第161-6 b 回	金銅製心葉形香蓋(5) a 図の縦軸を拡大したスペ クトル図	248
第161-7 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製鈴付太帯(6-1) の蛍光X線スペクトル図(XFL838B)	249
第161-7 b 回	金銅製鈴付太帯(6-1) a 図の縦軸を拡大したスペ クトル図	249
第161-8 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製鈴付太帯に付 属した金銅製鈴(6-2)の蛍光X線スペクトル (XFL839)	249
第161-8 b 回	金銅製鈴付太帯付飾鈴(6-2) a 図の縦軸を拡大した スペクトル図	249
第161-9 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製鞍轡表飾板前 輪(7)の蛍光X線スペクトル図(XFL834)	250
第161-9 b 回	金銅製鞍轡表飾板前輪(7) a 図の縦軸を拡大したス ペクトル図	250
第161-10 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製鞍轡表飾板後 輪(8)の蛍光X線スペクトル図(XFL835)	250
第161-10 b 回	金銅製鞍轡表飾板後輪(8) a 図の縦軸を拡大したス ペクトル図	250
第161-11 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製步揺付飾金具 50(9-1)の蛍光X線スペクトル図(XFL842)	251
第161-11 b 回	金銅製步揺付飾金具50(9-1) a 図の縦軸を拡大した スペクトル図	251
第161-12 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製步揺付飾金具 50(9-2)に付属した金銅製步揺(9-2)の蛍光X線ス ペクトル図(XFL843)	251
第161-12 b 回	金銅製步揺付飾金具50(9-2) a 図の縦軸を拡大した スペクトル図	251
第161-13 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製步揺付飾金具 2(10-1)の蛍光X線スペクトル図(XFL840B)	252
第161-13 b 回	金銅製步揺付飾金具2(10-1) a 図の縦軸を拡大した スペクトル図	252
第161-14 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製步揺付飾金具 2(10-2)に付属した金銅製步揺の蛍光X線スペクトル 図(XFL841)	252
第161-14 b 回	金銅製步揺付飾金具2(10-2)に付属した金銅製步揺 a 図の 縦軸を拡大したスペクトル図	252
第161-15 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製步揺付飾金具 72(11-1)の蛍光X線スペクトル図(XFL844)	253
第161-15 b 回	金銅製步揺付飾金具72(11-1) a 図の縦軸を拡大し たスペクトル図	253
第161-16 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製步揺付飾金具 72(11-2)に付属した金銅製步揺の蛍光X線スペク トル図(XFL845)	253
第161-16 b 回	金銅製步揺付飾金具72(11-2)に付属した金銅製步揺 a 図の 縦軸を拡大したスペクトル図	253
第161-17 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製花卉形鈴付雲 珠(15)の蛍光X線スペクトル図(XFL832)	254
第161-17 b 回	金銅製花卉形鈴付雲珠(15) a 図の縦軸を拡大した スペクトル図	254
第161-18 a 回	銅質観音山古墳から出土した金銅製半球形服飾品 (19)69の蛍光X線スペクトル図(XFL837)	254
第161-18 b 回	金銅製半球形服飾品 a 図の縦軸を拡大したスペク トル図	254
第162回	異なる測定器による質量試料の蛍光X線スペクトルの違 い	258

第163回	中国西周時代の青銅器が示す船同位体分布 A：華北産、B：華南産、L：遼寧省産の船が主として示す領域……………260
第164回	中国戦国時代の貨幣が示す船同位体分布 A：華北産、B：華南産、L：遼寧省産の船が主として示す領域……………260
第165回	中国戦国時代の各国の分布……………261
第166回	金銅製太帯鈴鍔着位置様式図……………274
第167回	石室平面形の企画(方眼は0.35m)……………288
第168回	石室平面形の企画(方眼は0.24m)……………289
第169回	玄室左壁図(修理前)……………292
第170回	玄室右壁図(修理前)……………293
第171回	玄室奥壁図(修理前)……………294
第172回	玄室奥隅部展開図……………294
第173回	玄室奥隅部展開図……………295
第174回	玄室奥隅部展開図……………296
第175回	鏡質観音山古墳、見瀬丸山古墳横穴式石室プラン相関図……………303
第176回	横穴式石室壁材様式図……………306
第177回	主体部横穴式石室構築の背景となる諸条件……………309
第178回	上毛野地域における横穴式石室古墳造営の系譜的展開模

式図……………312	
第179回	金銅製太帯の分類……………318
第180回	袴帯と太帯の系譜……………319
第181回	帯を表現した埴輪人物像……………322
第182回	注甲小札様式図……………325
第183回	注甲小札・鍔模式図……………327
第184回	総社二子山古墳出土銅鍔大刀……………329
第185回	鏡象被蓋文……………331
第186回	群馬県内出土長頸柳葉集束成図……………334
第187回	群馬県内出土長頸片刀・脇片刀刀身集束成図……………336
第188回	群馬県内出土有頸長三角形・柳葉、有頸短長三角形・脇 鍔柳葉集束成図……………337
第189回	後期古墳出土鉄鏃例1)……………339
第190回	後期古墳出土鉄鏃例2)……………340

付図1	石室展開図
付図2	石室内出土遺物の位置
付図3	金銅製鍔付太帯
付図4	大刀
付図5	金銅製柳葉鍔部

表 目 次

第1表	ガラス丸玉計測値一覧……………34
第2表	鉄地金銅製空玉計測値一覧……………37
第3表	耳環計測値一覧……………38
第4表	金銅製半球形彫飾品計測値一覧……………42
第5表	金銅製半球形彫飾品の大きさの分類……………44
第6表	金銅製鍔付太帯計測値一覧……………45
第7表	金銅製鍔付太帯付属飾計測値一覧……………47
第8表	短装刀子計測値一覧……………61・62
第9表	刀子計測値一覧……………64
第10表	鉄鈿計測値一覧……………69
第11表	鉄鏃計測値一覧……………97
第12表	弓一両鋼金具計測値一覧……………113
第13表	注甲小札型式別数一覧……………116
第14表	金銅製環状鏡板付柳葉環鏡板部計測値一覧……………165
第15表	同上轉引手部計測値一覧……………165
第16表	鉄地金銅製心葉形鏡板付柳葉環鏡板部計測値一覧……………169
第17表	鉄製環状鏡板付柳葉環鏡板部計測値一覧……………170
第18表	同上轉引手部計測値一覧……………170
第19表	鉄製鏡馬銜部計測値一覧……………170
第20表	同上轉引手部計測値一覧……………170
第21表	同上轉引手部計測値一覧……………170
第22表	鏡各部計測値一覧……………178
第23表	金銅製花卉形鍔付雲珠 ・金銅製花卉形鍔付金具計測値一覧……………189
第24表	金銅製歩部付鍔金具計測値一覧……………206
第25表	鉄地金銅製革帯当金物計測値一覧……………212
第26表	鉄製革帯当金物計測値一覧……………219

第27表	鉄地銀板製留金具計測値一覧……………228
第28表	鉄地金銅製留金具計測値一覧……………228
第29表	金銅製留金具計測値一覧……………228
第30表	鉄製留金具計測値一覧……………228
第31表	測定に供された鏡質観音山古墳から出土した資料……………242
第32表	鏡質観音山古墳から出土した銅製品の船同位体比……………243
第33表	鏡質観音山古墳から出土した資料の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比……………255
第34表	金銅製歩部付鍔金具各部位の鍔金厚みとX線強度比……………259
第35表	藤ノ木古墳から出土した帯金具の船同位体比……………262
第36表	石室の推定使用尺度……………287
第37表	A類 「上段墳丘内横穴式石室」前方後円墳……………299
第38表	B類 「下段墳丘内横穴式石室」前方後円墳……………299
第39表	主体部横穴式石室の推定使用尺度……………302
第40表	石室壁材の原石の種類と加工石材の分類……………306
第41表	上毛野地域主要横穴式石室古墳の規模と主体部玄室幅の対長比……………311
第42表	石材及び石積み仕様を前提とする上毛野地域の横穴式石室の形態分類……………313
第43表	金銅製太帯3種の裾幅尺度換算……………317
第44表	「中幅帯」を表現した埴輪人物像……………321
第45表	広幅の帯を表現した埴輪人物像……………321
第46表	太帯着帯を表現する埴輪人物像の太帯表現仕様の分類……………323
第47表	出土馬具4式の組成推定復原……………343
第48表	出土馬具4式の組成を構成する馬具一覧……………345

本文中写真目次

図版1	金銅製円板形座金……………192
図版2-1	観音山古墳後円部石室内出土の主要人骨片……………240
2-2	観音山古墳後円部石室内出土の主要人歯片……………240
図版3-1	(資料番号1)銅製水瓶全体像……………264
3-2	(資料番号1-1)銅製水瓶本体、船同位体用銅製試料

の採取箇所(CP648)……………264	
3-3	(資料番号1-3)銅製水瓶蓋、試料採取箇所(CP649)……………264
3-4	(資料番号1-4)銅製水瓶蓋(中央)、3より深い金属部を採取(CP650)……………264

3-5	(資料番号1-5)銅製水瓶舌(中央内側)。舌内面側から鋸を採取(CP651) ……………264	6-3	(資料番号9-1)金銅製歩留付飾金具50。測定箇所(XFL842) ……………267
3-6	(資料番号4)鉄地金銅張心葉形鏡板付髹。試料採取箇所(CP657) ……………264	6-4	(資料番号9-2)金銅製歩留付飾金具50。測定箇所(XFL843) ……………267
3-7	(資料番号3)金銅製環状鏡板付髹。全体像 ……………264	6-5	(資料番号10-1)金銅製歩留付飾金具2。測定箇所(XFL840B) ……………267
3-8	(資料番号3)金銅製環状鏡板付髹。試料採取場所(CP653) ……………264	6-6	(資料番号10-2)金銅製歩留付飾金具2。測定箇所(XFL841) ……………267
図版4-1	(資料番号5)金銅製心葉形杏葉1。表面全体像 ……265	6-7	(資料番号11-1)金銅製歩留付飾金具72。測定箇所(XFL844) ……………267
4-2	(資料番号12)金銅製歩留付飾金具31。試料採取箇所(CP655) ……………265	6-8	(資料番号11-2)金銅製歩留付飾金具72。測定箇所(XFL845) ……………267
4-3	(資料番号13)金銅製歩留付飾金具61。試料採取箇所(CP654) ……………265	図版7-1	(資料番号15)金銅製花卉形飾付雲珠(最大花卉)。測定箇所(XFL832) ……………268
4-4	(資料番号14)金銅製歩留付飾金具45。試料採取箇所(CP656) ……………265	7-2	(資料番号19)金銅製半球形銀製品69。測定箇所(XFL837) ……………268
4-5	(資料番号15)金銅製花卉形飾付雲珠(最大花卉)試料採取箇所(CP658) ……………265	7-3	鍍金の厚さを測定した金銅製歩留付雲珠42 矢印は鍍金の厚さを測定した位置 ……………268
4-6	(資料番号16)金銅製花卉形飾付辻金具(最小花卉)試料採取箇所(CP659) ……………265	図版8	金銅製飾付天帯(修復前) ……………274
4-7	(資料番号17)金銅製半球形銀製品1。分析時№3-52(CP660) ……………265	図版9上	金銅製鞍轡表飾形前輪(修復前) ……………275
4-8	(資料番号18)金銅製半球形銀製品2。分析時№4-67(CP661) ……………265	9下	金銅製鞍轡表飾形後輪(修復前) ……………275
図版5-1	(資料番号1-1)銅製水瓶本体。蛍光X線測定箇所(XFL828) ……………266	図版10上	金銅製歩留付飾金具(修復前) 下 金銅製花卉形飾付雲珠・金銅製花卉形飾付辻金具(修復前) ……………276
5-2	(資料番号1-2)銅製水瓶の銅製蓋。測定箇所(XFL829B) ……………266	図版11	金銅製心葉形杏葉(修復前) ……………277
5-3	(資料番号1-3)銅製水瓶の銅製舌。測定箇所(XFL830) ……………266	下	金銅製環状鏡板付髹(修復前) ……………278
5-4	(資料番号2)銀装刀子。測定箇所(XFL836B) ……266	図版13上	鉄地金銅張心葉形鏡板付髹(修復後) ……………279
5-5	(資料番号3)金銅製環状鏡板付髹。測定箇所(XFL833) ……………266	13下	鉄地金銅張心葉形鏡板付髹(修復前) ……………279
5-6	(資料番号5)金銅製心葉形杏葉1。測定箇所(XFL831) ……………266	図版14上	金銅製半球形銀製品(修復前) ……………280
5-7	(資料番号6-2)金銅装大帯付属金銅製飾。測定箇所(XFL839) ……………266	下	金銅製円板形磁金(修復前) ……………280
5-8	(資料番号6-1)金銅装飾付天帯。測定箇所(XFL838B) ……………266	図版15上	鞍轡鏡背面(修復前) ……………281
図版6-1	(資料番号7)金銅製鞍轡表飾形前輪。測定箇所(XFL834) ……………267	15左下	鞍轡鏡X線写真 ……………281
6-2	(資料番号8)金銅製鞍轡表飾形後輪。測定箇所(XFL835) ……………267	15右下	神鏡鏡(修復前) ……………281
		図版16左上	銅製水瓶(修復前) ……………282
		右上	銅製環状鏡板付髹(修復前) ……………282
		下	銀装刀子(修復前) ……………282
		図版17上	銀装刀子(修復前) ……………283
		下	鹿角装刀子(修復前) ……………283
		図版18	鹿角装刀子(修復前) ……………284
		図版19	金銅製歩留付飾金具台座内木質遺物顕微鏡写真 ……285

写真目次

P L 1-1	調査前の墳丘(南西から)	5-3	第Ⅱ次調査風景(玄室床面の積査)
1-2	後門部、石室の調査第Ⅱ次調査(西から)	5-4	第Ⅱ次調査風景(遺物出土状況の記録)
1-3	後門部、石室の調査第Ⅱ次調査(西から)	5-5	第Ⅱ次調査風景(玄室扉床部右側の記録)
P L 2-1	天井石と被覆(開口部から)	P L 6-1	史跡整備調査前の状況
2-2	天井石と被覆(奥から)	6-2	封土の掘削
2-3	天井石と被覆(左壁から)	6-3	石室中軸線対土断面(北から)
2-4	天井石と被覆(左壁から)	6-4	石室横断対土断面(西から)
P L 3-1	石室入口へ奥道左壁	P L 7-1	石室露出(開口部側から)
3-2	石室入口閉塞状況	7-2	石室露出(奥から)
3-3	石室入口	7-3	石室露出(左壁から)
3-4	天井石の崩壊と遺物の出土状況(第Ⅰ次調査)	P L 8-1	石室入口
3-5	天井石の崩壊と遺物の出土状況(第Ⅰ次調査)	8-2	奥道右壁
P L 4-1	玄室右壁崩壊状況	8-3	奥道左壁
4-2	玄室床面の検出状況	P L 9-1	玄室右壁
4-3	玄室右壁の残存状況	9-2	玄室左壁
P L 5-1	第Ⅱ次調査風景(天井部封土の除去)	P L 10-1	玄室全景(奥から)
5-2	第Ⅱ次調査風景(天井石の積査)	10-2	玄室全景(右方から)

- 10-3. 玄室奥壁
- P L 11-1. 左壁裏込断面
11-2. 左壁裏込断面
11-3. 右壁裏込断面
11-4. 右壁裏込断面
- P L 12-1. 右壁裏込
12-2. 石室右奥裏込裏込土
12-3. 奥壁裏込
- P L 13-1. 左壁裏込 (奥から)
13-2. 左壁裏込
13-3. 玄室左軸石
13-4. 玄室横石および基礎
- P L 14-1. 復原後の石室一入口部
14-2. 溝道
14-3. 鉄道右壁
14-4. 溝道左壁
14-5. 玄室右壁
14-6. 玄室左壁
14-7. 玄室天井石の懸架
14-8. 玄室奥壁
- P L 15-1. 玄室左壁跡遺物出土状況 (第 1 次調査時)
15-2. 玄室右壁跡遺物出土状況
15-3. 馬具一金属製鞍轡表飾板出土状況 (左壁跡)
15-4. 馬具一鉄製鞍轡出土状況 (左壁跡)
- P L 16-1. 玄室左壁跡遺物出土状況
16-2. 馬具出土状況 (左壁跡)
16-3. 甲冑・鉄織出土状況 (左壁跡)
16-4. 馬具出土状況 (左壁跡)
16-5. 馬具出土状況 (左壁跡)
- P L 17-1. 挂甲・鉄織出土状況 (左奥隅)
17-2. 挂甲・鉄織出土状況 (左奥隅)
17-3. 挂甲出土状況 (左奥隅)
17-4. 挂甲・鉄織出土状況 (左奥隅)
17-5. 鉄織出土状況 (左奥隅)
- P L 18-1. 胴当出土状況 (屍床部左側)
18-2. 馬具・神袢・小刀出土状況 (屍床部左側)
- P L 19-1. 金銅製半球形彫飾品出土状況 (屍床部中央)
19-2. 耳環・ガラス丸玉出土状況 (屍床部右側)
19-3. 耳環・ガラス丸玉・人歯出土状況 (屍床部右側)
19-4. 刀子出土状況 (屍床部中央)
19-5. 大刀刀装具出土状況 (屍床部右側壁際)
- P L 20-1. 大刀出土状況 (屍床部左側壁際)
20-2. 金銅装飾付太帯・大刀・鉄帶鏝出土状況 (屍床部右側壁際)
20-3. 鉄帶鏝・大刀出土状況 (屍床部右側壁際)
20-4. 大刀出土状況 (屍床部右側壁際)
- P L 21-1. 金銅装飾付太帯・銀装刀子出土状況 (屍床部右側壁際)
21-2. 金銅装飾付太帯出土状況 (屍床部右側壁際)
21-3. 銀装刀子出土状況 (屍床部右側壁際)
21-4. 銀装刀子鞘頭出土状況 (屍床部右側壁際)
21-5. 銀装刀子鞘出土状況 (屍床部右側壁際)
- P L 22-1. 大刀鞘部・空玉出土状況 (屍床部右側壁際)
22-2. 大刀・耳環出土状況 (屍床部右側壁際)
22-3. 鉄帶鏝出土状況 (屍床部右側壁際)
- P L 23-1. 銅製水瓶・須恵器出土状況 (右壁際)
23-2. 銅製水瓶・須恵器出土状況 (右壁際)
23-3. 須恵器出土状況 (右壁際)
23-4. 須恵器出土状況 (右壁際)
23-5. 須恵器出土状況 (右壁際)
- P L 24-1. 須恵器出土状況 (右壁際)
24-2. 須恵器出土状況 (右壁際)
24-3. 須恵器出土状況 (右壁際)
24-4. 須恵器出土状況 (右壁際)
24-5. 須恵器出土状況 (右壁際)
- P L 25-1. 吊手金具出土状況 (玄室奥壁)
25-2. 吊手金具出土状況 (玄室左壁)
25-3. 吊手金具出土状況 (玄室奥壁)
25-4. 吊手金具出土状況 (玄室左壁)
25-5. 吊手金具出土状況 (玄室左壁)
- P L 26. 鉄帶鏝・神袢
P L 27. 鉄帶鏝・耳環
P L 28. 銀地鍍金空玉・ガラス丸玉
P L 29. 金銅製半球形彫飾品
P L 30. 金銅装飾付太帯
P L 31. 胴当大刀
P L 32. 鍔り塚頭大刀
P L 33. 三葉塚頭大刀・小刀・刀装具
P L 34. 銀装刀子
P L 35. 鹿角装刀子・刀子
P L 36. 鉄鉞・鹿角装刀子
P L 37. 鉄鏝(1)
P L 38. 鉄鏝(2)
P L 39. 鉄鏝(3)
P L 40. 鉄鏝(4)
P L 41. 冑
P L 42. 冑・胸当・飾弓一両頭金具
P L 43. 挂甲小札(1)
P L 44. 挂甲小札(2)
P L 45. 挂甲小札(3)
P L 46. 挂甲小札(4)
P L 47. 挂甲小札(5)
P L 48. 挂甲小札(6)
P L 49. 挂甲小札(7)
P L 50. 挂甲小札(8)
P L 51. 籠手
P L 52. 胴当
P L 53. 鉄地金銅張心形形骸板付冑
P L 54. 金銅張心形形骸板付冑・鉄地金銅張心形形骸板付冑
P L 55. 鉄製鞍轡表飾板付冑・鉄製鞍轡
P L 56. 金銅製鞍轡表飾板
P L 57. 金銅製鞍轡表飾板
P L 58. 鉄製皮囊
P L 59. 木胎漆器蓋
P L 60. 金銅製心形形骸板
P L 61. 金銅製花弁形飾付冑・金銅製花弁形飾付比金具
P L 62. 金銅製步部付助金具(1)
P L 63. 金銅製步部付助金具(2)
P L 64. 金銅製步部付助金具(3)
P L 65. 金銅製步部付助金具(4)
P L 66. 金銅製步部付助金具(5)
P L 67. 金銅製步部付助金具(6)
P L 68. 金銅製步部付助金具(7)
P L 69. 金銅製步部付助金具(8)
P L 70. 金銅製步部付助金具(9)
P L 71. 鉄製管珠・鉄製比金具
P L 72. 鉄地金銅張革帯当金物・鉄製革帯当金物
P L 73. 銅製環飾
P L 74. 金銅製器具・鉄製器具
P L 75. 鉄製器具
P L 76. 金銅製留金具・鉄地金銅張留金具・鉄地金銅張留金具・鉄製工具・銅製筒形金具・繻子・石室内出土の形態不明の金属製品
P L 77. 石室吊手金具・自然遺物・繻
P L 78. 銅製水瓶
P L 79. 銅製水瓶
P L 80. 土器 (須恵器)
P L 81. 土器 (須恵器・土師器)
P L 82. 金属器のX線写真

第1章 石室の調査と経過

総貫観音山古墳の発掘調査の経緯については、前編「墳丘・埴輪」編において発掘調査日誌抄を付載して、記述されている。主体部横穴式石室、および同石室内出土遺物類調査、整理・保存修理等の作業の経過についてもその概要は既載されているところである。よって、本編「石室・遺物」の編纂にあたっては、主体部横穴式石室の調査、および出土遺物類の調査・整理・保存修理にいたる経緯について詳細を明らかにするべく、再度その調査の経過について記述することとする。

1. 主体部横穴式石室の調査

主体部横穴式石室の調査は、昭和42年度調査（第Ⅰ次調査）と昭和43年度第Ⅰ期調査（第Ⅱ次調査）において実施された。両次の調査とも、平行して墳丘部、および埴輪類の調査と平行して実施された。

(1) 第Ⅰ次調査時の主体部横穴式石室の調査

前編「墳丘・埴輪」編において既述されているところであるが、第Ⅰ次調査（昭和43年3月4日～3月17日）は、桑園造成を目的として墳丘上の雑木林を開墾しようとする開発行為にたいして、中止措置を採った文化財保護行政サイドが、総貫観音山古墳の現状保存の方針を地元関係者に周知し、その対策を模索するなかで進められた。

そのため、先づは墳丘部遺構の残存状況を明らかにし、埴輪類の配列状況を把握して、その保全をはかる資料を得るという目的をもって、墳丘の主要部に次のトレンチを設定し、発掘に着手した。すなわち、墳丘主軸線に直交して後門部中心部位・くびれ部位・前方部中心部位を基点に発掘区（幅2.0mのトレンチ）を設定しその発掘区内における墳丘傾斜面、および埴輪配列の確認を目的とした。

最初に着手した後門部西側部設定のBトレンチ内

において、墳丘中段平坦面が検出され、その部位を中心に埴輪類破片が濃密に検出されている。そこで、中段平坦面をBトレンチ両側に発掘区を拡張し、C区（第1分冊P4第2図参照）とした。Bトレンチ南側をC-I区、北側をC-II区として埴輪類の検出を行った結果、C-II区は濃密な残存状態を示し精査にあたった。これが復原された祭人グループの人物群像である。C-I区は、攪乱などもあり、原状をとどめるものはほとんどなく、分布も稀薄であった。そこで、C-I区の南方向に発掘区を拡張し、D区（3m×4m）とした。D区内においても分布は稀薄であったが、上段墳丘裾部寄りに埴輪片の散布が拡がっており、発掘区を拡張した。そして、中段平坦面の範囲と上段墳丘立上り部位を確認するべく、ボーリングステッキによる埋没土層の検索を行った。その結果、D区の東側部・上段墳丘裾部と推定される部位に、局所的に集石カ所の存在することが判明した。調査開始して3日目の3月6日のことである。そこで同部分に調査区（1m×4m）を拡張し、集石カ所の検出に務めた。その結果、溝道入口部の牛込砂岩の天井石の架橋状態も確認でき、その部位が主体部横穴式石室の入口部にあたることが判明した。

この主体部横穴式石室入口部の発見は、総貫観音山古墳の主体部の存在を確認することとなったが、その位置が後門部中心位から斜め後方の西南西方向（墳丘主軸に対し72度東）、約14.0mの付近にあることから、大規模なものであろうことが推定できた。と同時に、同部位における地層の攪乱はまったく認められないことから、未盗掘のまま残されているのではないかと推定された。

このことは、総貫観音山古墳の現状保存の方策を模索していた県教育委員会にとっては、史跡保存の方針を確認たらしめるのに十分な内容であり、開発サイドにたいして、その保存方の協力を求める上で

何物にも勝る説得力のあるものと映じた。同時に、墳丘部分の保存に止まることなく、主体部横穴式石室と、その内部の副葬遺物等の保全をはからねばならないという新たな文化財保護の課題を提起されることとなった。総貫観音山古墳の発掘調査は、墳丘部分の調査に止めるのではなく、主体部横穴式石室の調査も避けられるのではないということは、総貫観音山古墳の保存を推進する上で、誰にも疑い得ないものとなったのである。

ここで、調査は、墳丘部の調査から一步踏み込んで、その保存状態を明らかにすることを目的に、主体部横穴式石室羨道入口部の調査を進めることになったが、それに着手したのは、発掘調査を開始してから4日経った3月7日からである。

羨道部填塞の構設状態を検出する作業は、次の順を追って実施している。

3月7日 羨道入口部を封じる填塞石がどのような方法でなされているかを明らかにするには、それが施設された羨道前面部の平坦面の範囲を確認する必要がある。墳丘中段平坦面から、その作業を終日進めた結果、墳丘中段平坦面上段墳丘部を「几」字形に入り込ませた平坦面を設け、その側部壁面には河原石を挿積みにした擁壁が羨道入口寄りに構設されていることが明らかにされた。このことは主体部の横穴式石室への埋葬後、羨道部入口を填塞した後は石室入口前面には墓道等の施設は設けないで「几」字形平坦面は後円部の上段墳丘内に埋め戻し、その外側に中段平坦面をめぐらしたものであり、したがって、羨道部直前には、埴輪類、その他土器等の遺物類の配置は認められないことの傍証ともなった。

3月8日 羨道部前面の「几」字形平坦面部位の覆土除去を進めたが、同部分の覆土は均質な黒褐色土で充填していることが確認できた。黒褐色土の覆土除去後、露出した填塞石の実測を進めた。填塞石は、いずれも拳大から人頭大の河原石で、羨道入口部を充填した後、その外側を補強積みする方法を取っていて、羨道入口部に凭せ掛けるように重ね積

みしていた。「几」字形平坦面のほぼ中央位に人頭大を上廻る河原石を単独に置いており、填塞石積みの範囲の目安としたものと推定された。

3月9日 羨道部填塞石群の実測を終日行い、それを夕方にて終了。夕方、県教育委員会社会教育課文化財保護係長、磯貝福七社会教育主事と今後の発掘調査の進め方を協議し、石室内部調査計画を確認した。

3月10日 羨道部入口の填塞河原石の除去作業を進め、夕方になり、羨道部の大半が開口した。羨道内部の填塞は、入口部から1.7mの部位までを盲積みして、隙間に小形石材を詰め込むようにしていた。羨道部側壁部は入口部から約1.2mの部位までが河原石の互の目様積みで、それから奥部の約3.2mの範囲は人頭大強の紡錘状浮石質角閃石安山岩の加工石材の互の目様積みであるが、カット面が小さく自然面を多く残す石材である。天井石は3石で構成され、いずれも牛伏砂岩の一部に加工も認められる割り石であることが判明した。警備のため、向後、現場に交替で露営することとした。

3月11日 夕方までに、羨道内の填塞石のほとんどを除去し終り、石室(玄室)内部の保存状況が判るようになる。羨道部開口作業に着手し、5日目にその作業を完了したことになる。夕方、石室側壁の防護のため羨道部の填塞河原石除去部分に支持杭木を組み、石室内の保存状況を点検、一部の撮影を行う。

羨道部が開口して、最初に目にした玄室内の情景は、強く印象に残っている。左側壁部は、ブリック状の角閃石安山岩の載石をレンガ積みにした壁面がゆがみながらも、奥壁部まで残っており、その壁面中央位に崩壊した右側壁側に落下した天井石が凭せ掛かり、その下部を中心に崩壊した右側壁材が転がり、土砂が流出して、玄室内の空間は、玄室入口部から左側壁寄りを買って奥壁部左隅部にとどめており、床面は左側壁際を残し、他は埋没していた。しかし、残存する側壁面は、ノミの閉り痕もあざやかに残っており、それが既知の横穴式石室側壁石材積

1. 主体部横穴式石室の調査

み技法の事例から、群馬県内において特徴的に認められる紡錘形浮石質角閃石安山岩の截断加工した石材を使った載石積みの横穴式石室であることが判明した。ちなみに、紡錘形浮石質角閃石安山岩加工石材使用の横穴式石室古墳については、故尾崎喜左雄博士の研究があり、それが、利根川中流域に分布し、榛名山二ツ岳に給源が求められる石材であり、群馬県地域における古墳編年研究に大きく貢献されて来たものであることを付記する。奥部の壁面には鉄製吊手金具も装着されたまま残っているものがあり、床面の露出部分は拳大の敷石上に、側壁際の側溝状の凹みに落ち込むような状態でおびただしい副葬の遺物類が累積していた。おおむね、露出分布する遺物類は、左側壁の中央位から奥壁手前1.8mの約3.2mの範囲に馬具類の金銅製品、鉄製品が分布し、奥壁寄りの2.2mの範囲には武器・武具類を中心に分布していた。それぞれの部位における遺物類の出土状況は第2章2の副葬品の出土状態と、その位置の記述を参照されたい。

3月12日 朝、石室内に入り、奥室右隅部に立て掛けて置かれていた大刀が盗難にあっていることがわかる。昨夜12時過ぎまで警備を行った後、朝方にかけて被害にあったものと思われたが、他の遺物類の残存状況は昨日確認したままの状態であり、盗人は目についた大刀1点のみを持ち去ったものと推定された。午前中、高崎警察署の現場検証を受けた後、作業に着手した。玄室内の遺物類散布の状況を撮影し、遺物類分布図を作成するという作業の繰り返しで終日を過ごした。

3月13日 昨日に引き続いて、玄室内の遺物類調査は、撮影→配置図面作成→遺物取り上げを繰り返し行いながら進めた。作業は玄室中央位から屍床手前部分の左壁際に転落散在する馬具類を中心に終始した。

文化庁・亀井正道調査官の現地視察があり、今後の調査方針について協議した。その結論は、崩壊天井石の除去作業、大量の遺物類の存在を考えると、今年度中に調査を完了することは不可能である

こと。よって、進行中の調査は、露出遺物類に限定して実施することとし、埋没部分の調査については、来年度(昭和43年度)調査として計画する。したがって、同方針にもとづいて今年度調査を終了した段階で羨道部を埋め戻し、崩壊石室全体調査を改めて策定することに決定した。

3月14日 奥壁寄りに分布する挂甲小札群部分の調査を進めた。挂甲小札群の分布範囲は1.2m×1.2mで、その範囲の一面に小札群に埋没して、金銅製瓊状鍔板付櫛、金銅製花弁形鈴付雲珠1点・金銅製花弁形鈴付辻金具3点、仿製神獸鏡1面、ハマグリ葎1対、櫛残片などが存在し、小刀、刀子類も存在した。挂甲小札群の奥壁寄りの部位には、大量の鉄鏃類、大刀、小刀、鉾身同石突、刀子類などの武器類が分布した。これらの撮影・配置図作成・遺物類の取り上げを繰り返し、進めた結果、これらの遺物類の分布範囲が、玄室最奥部に設けられた屍床の前面右側位にあたり、屍床部は角閃石安山岩の小円礫を敷きつめ、前面に間仕切の石列を設けていることも判明した。

3月15日 前日からの作業を引き続き行いそれに終始した。

3月16日 屍床露出部分の遺物分布範囲の調査を継続し、主要遺物の取り上げを行ったが、挂甲小札類・鉄鏃類など多量なものについては残置して、再調査時に行うこととし、冑・挂甲小札の一部と、金銅製馬具類・仿製神獸鏡・ハマグリ・櫛の出土範囲の調査にとどめることにして、それらの取り上げ後、保安のための埋土被覆を構じた後、羨道入口部を封鎖し、夕方作業を終えた。

3月17日 午前、遺物類の保管をお願いした近隣の民家から、県立博物館へ関係資料とともに搬入し、現地の調査体制を解放した。

(2) 第Ⅱ次調査時の主体部横穴式石室の調査

昭和43年度事業として実施した綿貫観音山古墳の発掘調査は、史跡指定と保存に向けて必要な資料を作成すること、および、埴輪類や主体部横穴式石室

第1章 石室の調査と経過

内の副葬物類の全容解明と、それらの保全をはかる目的をもって計画・実施された。

よって、調査は墳丘部分・周堀・中堤範囲の確認調査と、主体部横穴式石室の調査となったが、主体部横穴式石室の調査は、第2次調査の中核を占め、7月25日から8月25日までの期間をそれに当てて実施された。33日間におよんだ調査期間は、前半の7月25日から8月13日までの21日間は、石室内部調査の前提となる玄室部天井石除去工事と石室部養生工事、および、それに先行し、あるいは附帯する調査で経過した結果、後半の8月14日から8月25日までの12日間は玄室内調査期間となった。なお、玄室内調査終了後、8月26日から8月30日にかけて、天井石除去工事の請負業者による埋め戻しが実施された。

以上のごとき日程となった主体部横穴式石室の調査は、崩壊している玄室右側壁部と、落下している天井石の除去を行わなければ作業不可能であることは、衆目の一致するところであり、その撤去工事という大掛かりな土木工事を伴うもので、それが、調査開始時の長引く梅雨後の天候不順とも重なって、調査を難渋させたが、その天井石除去工事とそれに附帯する石室部養生工事は、次のごとく進められた。工事にあたっては、第1次調査時に調査機材の借用等に便宜をいただき、社長自身が現場にかよひ状況を知悉されていた高崎市・信沢工業株式会社（社長信沢克己）に工事を発注して実施したが、その工法については検討を重ね、次に記す内容のものとなった。

まず、石室構設部位の後円部上段墳丘部分を石室天井石構架レベル面まで掘削して、天井石を露頭させる。そのために掘削した積土は、後円部西側くびれ部に集めて工事作業場を仮設する。掘削範囲はできるだけ主体部横穴式石室構設部位に限定し、後円部東半部墳丘の掘削は行わない。また、後円部南側、すなわち、石室右側部も崩壊した玄室右側壁部の崩壊石材の除去に必要とする範囲にとどめ、玄室部の未崩壊部分の保全をはかる。そのため、後円部上段

墳丘の掘削範囲は、おおむね、墳丘主軸線を右翼縁に、玄室左側壁部から1.5m南側に並げた線位を左翼縁とする西側くびれ部方向に面した扇形の範囲を発掘区に設定し、その範囲の上段墳丘積土を天井石構架レベルまで掘削するというものであった。また、発掘区内の掘削は、重機（バックホー、小型ブルドーザー）を導入し、作業の効率化をはかることとした。

天井石の撤去作業は、ウインチによる吊り上げ工法を採用する。そのため仮設作業場で吊り上げ用支持台・梁を鋼材で組み立て、石室上に架設する。また撤去作業時の石室側壁部の崩壊を防止するため、玄室、羨道内部に角材（バタ角材）を井桁に組んで充填する。撤去する天井石は玄室部の天井石3石とし、吊り上げた下に重量H型鋼材を敷き、その上をコロをかませて仮設作業場に移動する。天井石を除去した後の側壁・奥壁材の崩壊と防止石室内の作業の安全を確保するため、重量H型鋼材を玄室側壁・奥壁の天端部に平行して井形に枠組みし、それを支えに壁面に沿って矢板を打ち込み、壁面との間に足場板を挟み壁面の保護をはかる。そして、そのあと、玄室内に充填しておいた角材を撤去する。以上の方法を採用した玄室天井石撤去および石室養生の工事は、予想を超える大規模なものとなり、調査期間も、これに大幅費やすことになった。この縮質観音山古墳で採用された発掘調査の前段階の石室露出工事をあえて名付けるならば“オープンカット工法”ともいべきもので、後の同古墳の史跡整備事業における石室修復工事の施工の参考となり、役立った工法であったことを付記しておく。

かくして、主体部横穴式石室の調査は、まず、上段墳丘掘削に先立ち、後円部墳頂部の埴輪類の調査と、墳丘積土土層の調査を7月27日から8月1日にわたって実施した。その結果、後円部墳頂部は後世における盗掘等での攪乱層が全体にわたって認められ、原位置を留める埴輪類は確認できなかった。結果的には攪乱層に混入する埴輪破片の採集に終始した。後円部頂部に樹立された埴輪類の調査結果については前編第3章2を参照されたい。

この墳頂部分の攪乱層の埴輪類の調査・取り上げのあと、石室上部を覆う積土層の排土作業に着手したが、その掘削にあたっては、あらかじめ掘削したトレンチ内での土層層序を基準にして、バックホーでの掘削を進めた。8月2日に着手した。その掘削で、玄室中央位直上の積土層内に埋められた須恵器壺1点が発見されている。他に積土層内に埋設された遺物類は検出されなかった。

石室上部を覆う積土層は、ローム質土と黒褐色有機質土とを互層に積み、一種の版築状の堆積層序を示すものであったが、石室天井石に約50cmまでせまる盗掘坑も存在し、本古墳の主体部が数次にわたってなされた盗掘行為の難をまねがれたものであることも追認出来た。

石室天井部を覆う積土の掘削には4日間を要し、8月5日に天井石裏込め部分を露出したが、その構設は、玄室部3石、羨道部3石の天井石を並べて構築した隙間に詰め石を施し、その上に河原石・砂利を敷きつめて、玄室上部を亀甲形に縁取りしていた。それは天井石全体を被覆するものではなく、隙間を充填し、その上部を粘土質土でおさえるという仕様のものであることが確認された。8月6日、この天井石裏込め部分の実測図面の作成・撮影を済ませたが、その作業を追うかたちで、午後から天井石撤去工事の準備に着手した。

天井石撤去工事は、8月9日までを要して工所用機材の設置、吊り上げ支持台、梁を設置し、8月10日から8月13日までの4日間を要して、玄室部天井石3石を仮設作業場に移動して終わった。まず玄室中央位の第2石の撤去から着手し、次いで奥壁寄りの第3石、最後に羨道寄りの第1石という順に進めた。天井石撤去後、ただちに壁体部の養生工事に入り、8月13日に一連の工事を完了した。

一方、石室内の調査・準備作業も併行して進められた。7月26日に、羨道部開口作業に着手し、7月27日に、羨道部充填河原石の排除を完了し、石室内側壁面実測の準備を進めた。玄室主軸線（奥壁中央位と羨道部中央位とを結んだ軸線）を基準にして、

実測割り付け線を設定するとともに、側壁、奥壁面を構成する残存壁材個々に番号を記入し、解体・修復時の作業に備えることにした。それにもとづいて進められた石室壁体部の実測・撮影の作業は7月28日から7月30日までの3日間を要して完了し、床面に露出する残存遺物類の保護措置をムシロ等を敷きつめて行い、天井石撤去作業に備えた。

天井石撤去作業にともなう石室崩壊防護に備える石室内養生工事は7月31日から8月1日にわたって実施し、バク角材并桁組み作業を完了している。

以上の諸作業を完了、はじめて、石室内調査に着手することになったが、その作業は、おおむね、次の通り進んだ。

8月14日 石室内の発掘調査に着手、まず、石室内の充填補強材の撤去を完了し、崩落埋没土砂の排除を進めた。

8月15日 崩落埋没土砂の排除作業を続行し、それに埋没していた床面の崩壊側壁材の崩落状態が露出する。

8月16日 崩落状態図を作成・撮影後に崩壊側壁材の撤去を番号を記入し進める。次第に床面の露出部分が拡がるなかで、玄室入口に近い右側壁部の壁際側溝状に床面が凹んだ部位に須恵器壺類が検出される。

8月17日 玄室入口に近い右側壁部の須恵器壺類の検出を進めるとともに、崩壊側壁材の撤去を進める床面の露出作業を続行する。その結果、右側壁部の崩壊部分は、最もはげしい中央部位が床面レベルの壁材を残して、放射状に拡散し、天井石第2石の下部が完全に崩落、それに影響されて、奥壁寄りの第3石下の第2石寄りの部分と羨道寄りの第1石下の第2石寄りの部分とが崩落し、第3石と第1石の天井石は、その重みで、その下部の側壁体部をかううじて支えていたという状態が観察できた。

8月18日 崩壊側壁材の撤去をほぼ完了し、須恵器類のうち、蓋杯・高杯類を中心とする一群が、壺・壺・台付長頸壺の一群とは別に、右側壁中央位に近い壁際の側溝状凹みに落ち込んだ状態で検出され

第1章 石室の調査と経過

る。また、その一群と接して、銅製水瓶・土師器埴・器台等が須恵器高杯・甕等とともに検出されはじめ。また奥壁寄りの屍床側部の側溝状凹みに落ち込んだ状態で金銅装鈴付太帯・大刀類・獸帯鏡が存在することも明らかになる。これらの遺物群の周辺には木質腐蝕質の有機物が埋没土に多量に混在していることも確認される。

8月19日 玄室奥壁部寄りの屍床部分は奥壁から3mの位置に長大な河原石を並べて間仕切りとして屍床部としていることが確認される。屍床部には床面に角閃石安山岩の那大の円礫を敷きつめ、玄室前面の河原石敷きの床面と仕様を異にしていることも明らかになる。屍床右側部側溝状凹みに落ち込んでいる遺物類の検出を進め、銀地鍍金空玉・ガラス製丸玉・銅芯金張製耳環・中空純銀製耳環・細身純銀製耳環・小刀・刀子類などのほかに骨片等の検出が進んだ。屍床中央位に有機質腐蝕土塊に混在する状態で多量の金銅製半球形服飾品が検出される。

8月20日 前日からの作業を継続し、出土状態図の作成・撮影の作業を進める。一方屍床左側部の挂甲小札群・鉄鏃群の分布状態図の作成に着手する。

8月21日 前日からの作業を継続する。

8月22日 前日からの作業を継続し、終了した遺物類から取り上げに着手する。金銅装鈴付太帯下部に銀装刀子類（5点）が検出される。

8月23日 出土状態図の作成、挂甲小札類の分布状態図の作成作業に集中。遺物類の取り上げを進める。

8月24日 挂甲類・鉄鏃類分布状態図の作成を継続する。

8月25日 午前中、挂甲類・鉄鏃類分布状態図の作成作業を終わったあと、その取り上げを完了し、石室内の調査を終了する。

石室内調査後の埋め戻し作業は、8月26日から8月30日の5日間をあてて、天井石撤去を担当した施工業者によって実施された。移動した天井石は移動位置に置き、玄室上に組んだ重量H型鋼材上に支持

梁を架し、その上にコンクリート打設用形枠材を並べて、覆土をもどして積土し、発掘調査前の後円部墳丘の形状に造成した。これらの埋め戻し作業は、史跡指定後の古墳復原整備事業に備えて、実施した。同時に、工事用機材の撤収を行った。

第2章 横穴式石室

1. 構造と規模

後円部上段丘に巨大な両袖型横穴式石室が所在する。全長約12.6m、奥壁幅約3.9m、奥壁の高さ約2.3mの空間をもつ。壁石は榛名山二ツ岳を給源とする角閃石安山岩転石を加工し、天井石は牛伏砂岩の巨石で構築されている。

昭和42年の本調査では、玄室に架かる天井石を移動して石室内部の調査を実施した。また昭和52・53年の石室半解体修理工事では、壁体を解体修理し、天井石を再架構するのに伴い、石室構造および構築方法の調査を実施している。本項では両調査の結果を総合して報告する。

(1) 石室の位置

石室の方位は中軸上S-39°40'-Wを示し、南西に開口する。ただし、後述するように石室構築の基準は入口から奥壁に向かって右壁にあると考えられ、その方向は4°ほど西に傾き、S-43°40'-Wを示す。前方部はN-28°51'-Wで北々西に向いているから、前方部方位に対しては左へ107°29'の大きな開きをもっていることになる。

墳丘との平面的な関係でいうと、図上復元した後円部のほぼ中心に石室奥の右隅が位置している。

入口は後円部中段面内縁より1.07m高く、奥へ5.35m入った位置にある。中段内縁は当時の地表面(標高73m)から2.38mの高さにあるから、地表からの高さは3.45mとなる。さらに墳丘の裾部は地表を1.06m掘り下げており、見かけ上の高さは4.51mとなる。なお、後円部高さは内堀底面からは9.25mであり、その中位に石室が開口していることになる。墳丘と石室との位置関係は平面のみならず、立面についても計画的に配置されたことがわかる。

(2) 石室の規模・形状

① 前庭

中段丘面と石室入口の間は扇形に開く前庭状の

平坦面になっていたと思われる。

石室入口の袖石は、横長の河原石を入口に対し横積にし、両脇に延びる河原石積に連なる。この間隙に延びる石組みは、裏込め石組みに連なる施設であり、さほど整然としたものとはいえず、前庭状遺構を構成する施設とは認め難い。石の大きさは拳大からやや大きい程度のものが主体である。本来は墳丘盛土に覆われていたものであろう。

床面は中段面内縁から、石室入口まで緩やかに上り傾斜になる。床面には長径70cm大の河原石が2個認められた。入口の袖石から外方へ1mのところに、85cmの間隔を開け、ちょうど門石のように配置されている。閉塞石とは離れており、入口を示す表示のごくと思われる。敷砂利等の施設は認められない。また墳丘面と前庭状遺構面との法面にも石組み等の施設は認められなかった。

前庭部には、よくしまったローム混土層が堆積していた。前庭部床面から入口部天井石までの土層はほぼ水平に堆積し、5層に分離できる。人為的な埋土と考えられる。

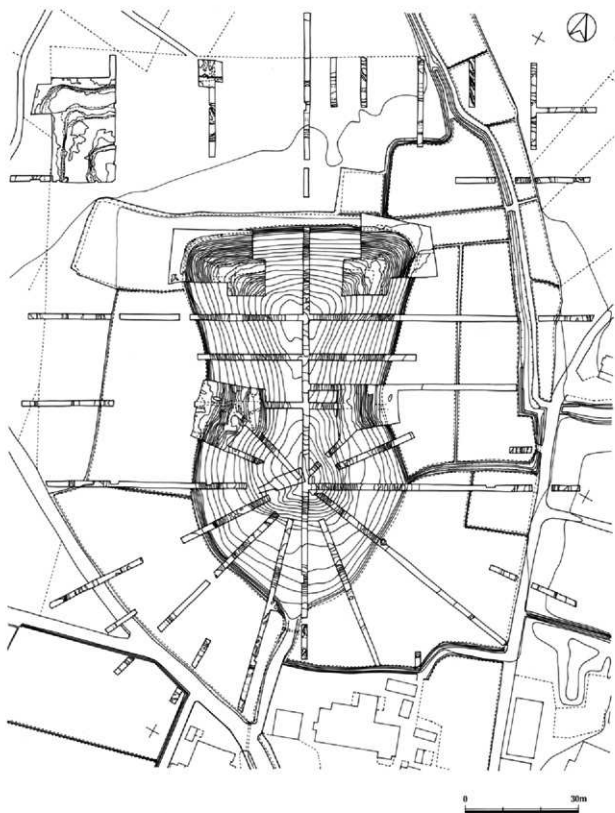
前庭部は、奥行き5.35m、奥幅約2m、高さ約1.7m、先端幅6mほどを想定している。なお、先端は上段丘蓄線に沿った円弧をなし、数十cmの段があったらうと推定している。

② 羨道

入口は狭く、天井は屈まないと潜れないほどであるが、奥に行くに従い広くなり、やがて巨大な玄室に至る。長大な玄室に比べ、羨道は短い。

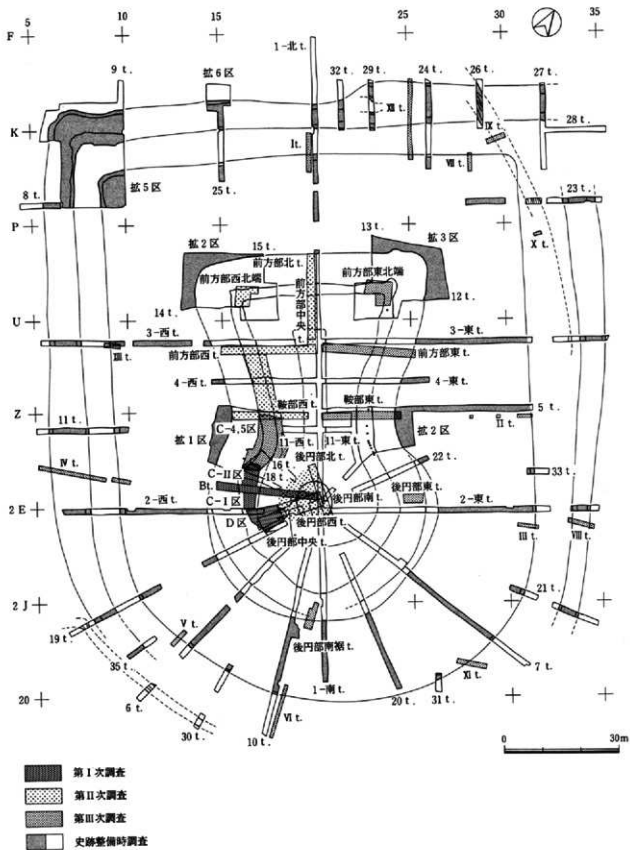
平面構成は冨形である。床面には河原石が敷かれる。入口には河原石を並べた間仕切りが設けられる。これより外方が前庭状遺構の平坦面になる。床面は入口から1.2mの間が9度ほどの下り勾配となり、これより奥は平坦になる。この変換部辺りで側壁の材質が異なる。

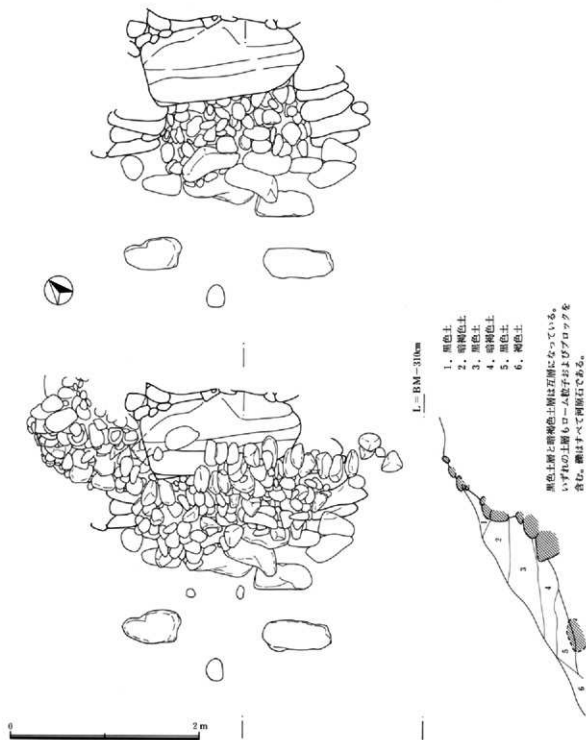
前半は河原石を用いた小口積みないし横積みの乱



第1図 外部施設発掘図 (1:1,000)

1. 構造と規模





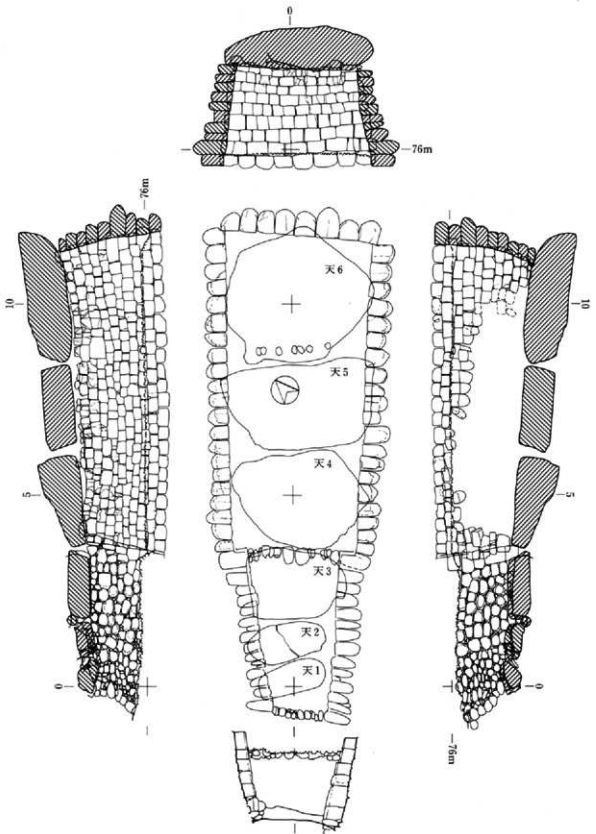
第3図 石室開口部実測図 (1:40)

石積で、壁面を内傾させる。入口両脇の袖石はやや大ぶりの横長の材を壁面と同じ内面構成のまま奥へ傾斜をつけて積まれる。右袖石は7石、左袖石は6石で構成される。その上に天井石が庇状に架かる。

奥半は角閃石安山岩の転石を一面削りにし、五目

積みとする。左側上方は当初の壁面より、大きく迫り出している。同石材の前端部は入口部同様に直斜状に積まれている。左側が7石、右側が5石の構成である。右壁面にやや大きめの用材が用いられ、整然とした積み方が看取される。

黒色土層と暗褐色土層は互層になっている。いずれの土層もローム粒子がよびアロップを含む。礫はすべて河原石である。



第5図 石室実測図 (1:100)

第2章 横穴式石室

玄室との境界は素形の袖部となる。袖石は五面を整形した載石を用い、左右の袖とも6段に積み上げる。床面は自然石を一列に並べた根石で区切られる。位置は両袖部と一致し、玄室床面中央へ0.18m下がる。

羨道部の天井石は牛伏砂岩の自然石3石で構成される。羨道幅に応じ、奥方へ大形石が用いられる。

入口に架かる第1天井石の中軸線は、石室中軸線に対し13度ほど斜めに配置されている。袖石の正面傾斜が左袖で急で、右袖で緩やかであるためであろうか。第1天井石前縁は、間仕切り石から左方で0.35m、右方で0.9m奥へ入る。第1天井石は庇状の前面と上面の見掛りに、壘による整形が施されている。

羨道部中央に架かる第2天井石は中央が割れている。

第3天井石は偏平な安定した形をしている。ただし、左方へ荷重がかかったためか、左壁がはみだし、その分、天井石も左側が下がっている。比較的安定している羨道中央部での壁面内傾は左壁で15度、右壁で19度であった。

袖石は、その小口面を羨道に、横面を玄室に向けた。横面は玄室側壁に寄せかける積み方であるが、根石のみは側壁との隅角部をL形に切り込み、側壁と一体化させている。袖石の玄室方への傾きは左袖15度、右袖19度である。

石室の発見当初、羨道の空間は河原石によって満たされ、完全に閉塞されていた。閉塞石は入口の間仕切り石外方70cmに河原石の大石を置き、そこから羨道全体を満たしていた。閉塞石は人頭大の河原石を主体とする砂利で、河原から運んで来た純粋な状況を保っていた。その容積は8.2m³ほどになる。極めて厳重な閉塞施設であったといえる。

③ 玄室

玄室は羨道に較べ精緻さが際立つ。閉塞石の一部を取り払うのに数日を要し、玄室に一条の光が差し込んだとき、壁面は白く輝いて見えた。壁体は総て角閃石安山岩の載石で構築されている。奥壁は9段積みで90石、左壁は10段積みで242石で構成される。

右壁は約3分の2が崩壊し、玄室に架かる巨大な天井石3石は右へ倒れ込み、用材は裏込めの流入とともに玄室内に転落していた。土砂の堆積は左壁際で留まり、壁際の副葬品は辛うじて原初の状況を保っていた。右壁は、残存状況と石材の数量調査から左壁と同様10段積みで235石の構成と確認できた。互目積を基本とし、随所に切組積の手法が用いられる。壁石は長円形の転石の小口を内面とするものがほとんどで、裏面のみに自然面を残す。内面は壁面傾斜に合わせて整形され、他の四面は直角に仕上げられる。

奥壁には大形の石材を用い、左右の側壁には奥壁寄りと下部に大石を用いる傾向がある。

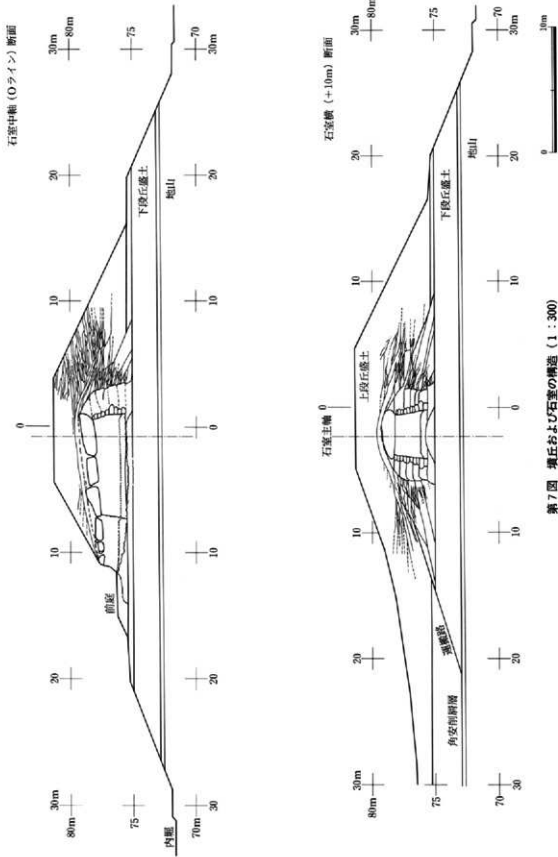
壁面の横の通し目は中央がたわむ。根石の設置高も中央が両端部に較べて低くなっている。経年の変化で壁体中央が沈み、さらに壁面中央が内部に迫り出した結果とも考えられるが、左右および奥壁に同様な傾向がみられることから、なお当初からの状況と理解したい。

玄室平面形は羽子板状を呈す。奥壁と右壁は直角を成し、玄室右壁と羨道右壁は平行に設定されている。したがって、左壁は奥壁幅と玄室前端幅の差の分だけ奥壁に斜行して配置されたといえる。同様に羨道左壁も羨道奥幅と入口幅の差だけ減減して設置されたとみられる。

床面は河原石を台形状に敷き詰めている。中央は高く平らにし、壁際で急角度に落とし込んでいる。副葬品の多くは、この壁際に沿って配置されていた。

奥壁から3m離れて河原石の間仕切りが設けられ後室がつくられている。間仕切りは奥壁と平行せず、むしろ左壁と直行する配置となっている。この区画には拳大から卵大の角閃石安山岩転石が一面に敷き込まれ、屍床面を成す。

後室の壁面には鉄製の吊手金具が打ち込まれていた。現位置を確認できたのは左壁の2カ所と奥壁の1カ所である。奥壁右の1カ所は金具の鉄錆びが痕跡として残っていた。左奥壁と奥壁2カ所の吊手金具には平織りの布片が付着していた。いずれも壁石



第7図 墳丘および石室の構造 (1:300)

の目地に茎子を根元近くまで打ち込んである。右壁は崩壊のため設置位置は不明であるが、床面から1個の吊手金具(第158図3)が出土している。出土位置は間仕切り石中央近くで、右壁崩壊とともに落下したものと考えられる。左壁手前の吊手金具(第158図1)設置位置に対応するものであろう。

吊手金具の高さは床面から1.8mほどで、天井石から壁石を2段ほど下がった位置である。したがって、屍床面を構成する後室の壁面は三面とも2個ずつの吊手金具によって布が巡らされていたと考えられる。ただし、6個の吊手金具のみで布を張り巡らしたとすると、金具の設置位置から、三面を五角形状に張り巡らす状況が想定される。また壁面上端は布で隠れず、下端についても布の長さは不明である。

天井石は、本調査に当たって石室左方へ移動した。玄室壁体上端は偏平な河原石を一列に敷き並べ、天井石の設置面としていた。羨道から奥壁にかけ、壁体は徐々に高さを増すが、羨道との境で特に際立った差異は認められない。天井石下面をそろえて載架されたものである。

(3) 石室の構造

石室は、後円部中段丘上に構築される。入口は後円部高さのほぼ中に位置し、平面的には玄室右奥隅が後円部のほぼ中心に位置している。

石室内部の造作の精美さや墳丘との位置関係の整合性などから、本石室の構築にあたっては、計画的な作業手順と基準尺の使用が想定される。

① 石室構築面

石室本体を構築するため、基礎地業が施される。構築面は、地山(標高≒73m)から後円部下段丘を2.1m盛土した位置にある。墳丘中段面より0.5m下位になる。同面は石室中軸を奥壁方へ延長した裏込め石組み下端と玄室右壁中央右方の裏込め石組み下端の2カ所で確認している。

修理工事にあたっては、地盤強度を調べるため、玄室右壁の裏込め石組み外方で標準貫入試験を実施した。結果は、自然状態にある良好なローム層がN値4~5に対し、下部盛土はN値8~12と高い数値

を示した。また、ボーリング試料の軸圧縮強度は、良好なローム層が15 t/m²以下であるのに対し、38.9~47.2 t/m²の支持力があるという。石室の接地荷重は最大で約27.8 t/m²と計算されており、十分な支持力をもってることがわかった。ローム上を版築状に堅く叩き締める工法の結果であろう。

石室床面の位置は蒲鉾状に盛土される。範囲は長さ8m、幅3.8m(推定)、高さ0.6mほどである。この状況は裏込め石組みと玄室床面下調査から判明した。玄室中央は高く、端部は壁根石より内側で終わるようである。排水を意図した施設と考えられる。

② 基礎地業

蒲鉾状盛土の周囲に砂礫による基礎地業が設けられる。厚さ0.5mで上面は蒲鉾状盛土上面より0.1m下位に置く。平面形は隅丸長方形で右奥のみ直角に近い。中軸長17.5m、奥幅7.8m、前幅6.0mの範囲で、外端には石組みが施され、その外方はローム土で覆われる。

玄室内面から地業石外端までの幅は、奥壁部で2.4m、玄室左壁部で2.5m、右壁部で2.7mとなる。また石室入口部では左方で2.7m、右方で2.7mの幅をもつ。

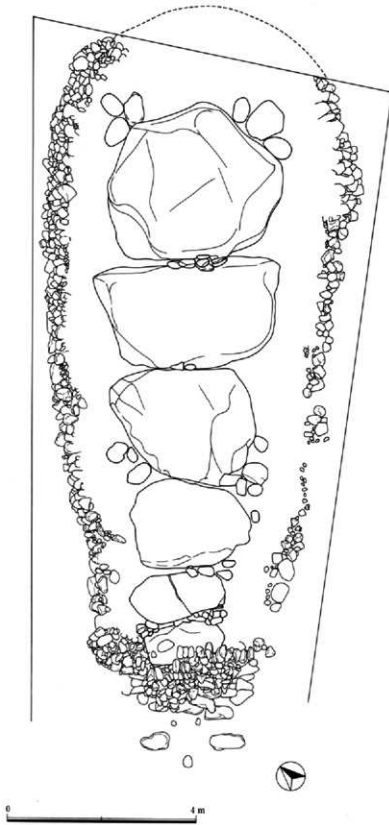
羨道根石は玄室根石より0.5mほど高く設置されているから、同部分の地業石は約1mの厚みをもつことになる。

地業石前端は石室入口の前方2.5mにまでおよぶ。前庭状遺構はこのうえに0.6mの盛土をし、面を整えたものである。

③ 玄室壁石の積み上げ及び裏込め

根石は地業の砂利面に直接置かれる。本来は大小の河原石の間隙を砂が充填し、根石の設置面にも砂が敷き込まれていたであろうが、石室崩壊等による漏水によって砂が流れ、空隙が生じていた。特に右壁前半部には水アカにより壁石裏面が赤褐色になっているものも散見された。地業石は河原から直接運搬されたごくきれいな状態であった。

各辺の根石は整形された内面を直接的に配置される。奥壁8石、左壁21石、右壁20石をもって構成さ



第8図 石室天井石実測図

れる。目地の空きは上部の壁石に較べ3～5cmと大きい。床面下に隠れてしまうことを見越しての造作であろうか。根石上面はほぼ平らに面を成す。この上に2段目以降の壁石が順次積み上げられる。これと同時に裏込め石とその外方を覆う裏込め土が施される。裏込めの単位は壁石1段ないし2段毎で、裏込め石外端は石組みが築かれる。このことは、裏込めの単位毎に石組み位置が若干ずれること、裏込めの各単位の上面に、壁石を加工し積み上げる際に乗る削りかすが薄い層を成すことから容易に判断できた。裏込め石組みが単位毎にずれるのは、前工程の石組みは、次の工程の時には裏込め土で覆われているためである。裏込め石組みの範囲は地栗石のそれとほぼ一致し、上方に至るまでその幅はほとんど変化しない。換言すれば、壁面の内傾とほぼ同角度で裏込め石組みが施工されたことを意味する。

壁石は左右壁が10段、奥壁が9段から構成される。しかし、左右の壁体は奥方から2ないし3回の工程に分かれる。このことから、壁体の構築は30から40工程に分けて施工されたものと考えられる。

④ 天井石の設置

天井石6石のうち、玄室に架かっていた3石は、いずれも牛伏砂岩の巨石である。修理工事で吊り上げたクレーンの荷重測定によれば、手前の第4石が約12t、中央の第5石が約16t、奥の第6石が約22tの数値が得られた。このような重量物をどのような方法で運搬し、石室に講架したのであろうか。

玄室左方の横断面の所見によれば、玄室左方の裏込め土の最上面に直斜面が認められる。上方は左壁上端に至る。また、墳丘整備工事に先行した規模確認調査で設定した11-西トレンチおよび36トレンチにおいて、墳丘盛土下の地山面に玄室壁石と同じ角閃石安山岩の削り屑層と、そこから石室上半端に至る傾斜をもつ堅い斜面が検出されている。削り屑層は石室用材の一次加工の場所と考えられ、傾斜面は石室裏込め最上面の傾斜に連なる作業運搬路と考えられる。図上復原すると傾斜角は17度ほどとなる。天井石の運搬路としてもこの傾斜面が利用されたも

のと考えたい。因に傾斜面下端は墳丘くびれ部にあった。

⑤ 天井被覆

天井石の崩落により、石室調査は天井石および壁石を除去することから始められた。天井石の移動に先立ち、天井石上面の調査が実施された。後円墳頂部からのトレンチの所見では天井石まで2.2mの深さがあった。図上で復原したところ、第6天井石の最高部が頂部から約2m、第5天井石は2.5mとなる。

天井石は、壁石上端との間に偏平な河原石を挟み込んで載架させていた。6石の天井石の接合部は凹凸や空隙があり、そこには大小の角礫や河原石が丹念に充填され、表面は蒲鉾状になるようにしてあった。また、天井石と壁体との間隙も大量の砂礫で充填してあった。天井石と砂礫によって上面が整えられた端部は、大きめの河原石によって石組みが施されていた。全体の平面形状は長円形を呈し、入口から3.5mほどの羨道部付近でいったんすぼまる。その規模は石室長軸上で約13.3m、幅は玄室中央で約6m、羨道部で4.1mとなる。天井上面端部は石室裏込め石組みと接続している。

天井石を被覆している砂礫層は、厚い淡黄褐色粘土層に覆われる。中軸上での厚さは約0.6mである。同層は粒子の細かい、よく締まったローム質土で、石室全体を一体化するとともに、防水の役割も果たしたのであろう。被覆粘土層の上面は山なりに施設され、範囲は壁石裏込めをも覆っている。確認できたところでは奥壁上方へは23度の勾配で壁面から5.7mまで、壁根石上から高さ1.6mまで確認しており、さらに外方へ延びる傾向を示している。また左壁外方へは20度の勾配をもって壁根石外方へ5.2m、壁根石からの高さ3.0mまでを確認している。

なお石室周辺の墳丘盛土（後円部上段丘）は、石室天井石レベルまではほぼ水平に、それより上部については内側に傾けて版築状に積み傾斜が認められる。

2. 副葬品の配置

観音古墳主体部の横穴式石室に埋葬された副葬品は、大別して、(1)玄室前室部右隅部から中央部にかけて右側壁に沿って配置された供養用須恵器群、(2)右側壁部“しきみ石”部分に置かれた銅製水瓶、および須恵器・土師器群、(3)左側壁中央部分を中心に側溝中に累積していた馬具類、および武器類、(4)屍床左壁部分の挂甲と武器類・馬具類・鏡の群、(5)屍床部分中央部分の金銅製半球形服飾品(スパンコール)類、(6)屍床右壁部分の武器類・金銅製装身具類・鏡の群に分けられる。用途性格の異なる品物を複合して配置している部分は、屍床の両側部分のみであり、他は、単一の用途性格の品物を配置していたことが注意された。

(1) 玄室前室部右側壁部副葬品群

ここに配置された副葬品は、いずれも須恵器類であり、大甕2点、杯身3点、杯蓋2点、有蓋台付長頸壺1点、壺1点、提瓶1点、甕1点、高杯3点の計14点である。側壁根石部の側溝に落ちこむ状態で、その上部には右側壁壁体石材が崩落し、おしつぶされていた。

出土状態から復原される玄室前室部右壁際の須恵器群は、玄室前室部右隅部から2.50mの地点にかけてほぼ一列に配置されたものである。

玄室前室部右壁際から約0.70m離れて大甕18、次いで約0.50m間隔を置いて大甕19、次に約0.40m間隔を置いて壺17、その隣接した地点に有蓋台付長頸壺15・16が置かれていた。壺、有蓋台付長頸壺のかたわらに杯蓋の1・2が一列に配置されていた。その間隔は0.20~0.30mである。杯身の4・5は蓋部とセットであるが、3は身部のみである。

有蓋台付長頸壺から約0.80m離れた位置に提瓶14が置かれ、その範囲に高杯9・10・11がほぼかたまった状態で置かれていた。提瓶には隣接した状態で甕13が置かれ、この提瓶部分が玄室前室部右壁部須恵器群の最屍床寄りの部位に位置していた。この部



第9図 石室内出土遺物の位置(1)―
玄室右側前面(1:15)

分に副葬された高杯、甕、および蓋杯の一部は胎土造りとも粗雑であるのが特徴的である。

大形容器としての大甕を玄門部寄りの場所に置き、壺、有蓋台付長頸壺に蓋杯とを組合わせ、次いで提瓶、甕、高杯を組合わせて配置したことになる。

(2) 玄室前室部右側壁際副葬品群

玄室屍床前面の“しきみ石”が右側壁に接する位

第2章 横穴式石室

置を中心に供獻の容器類が側壁根石部の側溝内に落ち込んだ状態で出土した。その範囲は、玄室奥壁部隅より2.6mの地点から玄門部方向に0.50mの間であり、銅製水瓶1点、土師器高杯1点、須恵器高杯3点、甕1点、土師器埴1点の計7点で、小形器形の容器と盛器であり、いずれも吟味された作りの優秀なものである。崩壊した壁体の下部に側壁二段目の石材と床面とに扶まれた状態で発見された。

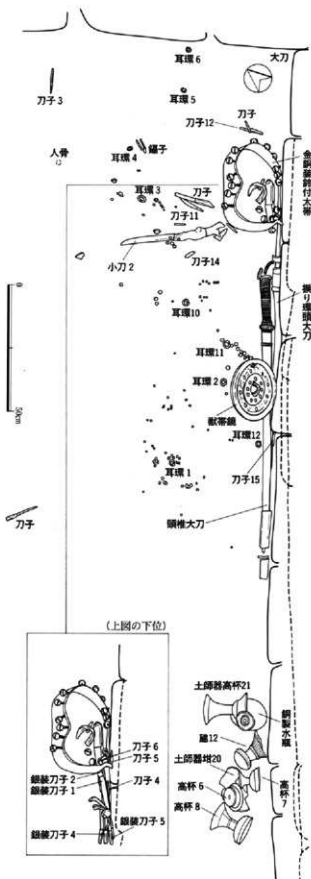
これら副葬品群の配置は、屍床寄りの位置に銅製水瓶が側壁壁体の傾斜と同様に口縁部を内側に傾けた状態で位置し、胴部一カ所に床面小礫が食い込んで、その部分だけ破損していたが、他は底部を除いて破損もなく、ほぼ完形ともいえる形態をとどめていた。この銅製水瓶の肩部に杯部をもたせかけるように土師器高杯21が横倒しになっており、銅製水瓶の隣接部に口縁部の欠損した甕12が側壁方向に横倒しになり、この甕12の底部に接して小形の高杯7が側壁方向に倒れ、その底部に反転した高杯6が位置していた。これら2ケの高杯の下部に土師器埴20が破壊した塊となって発見された。玄門方向最端部に位置していたのは高杯8であり、側壁方向に倒れかかる状態で位置していた。

玄室前室部右壁際副葬品群の最端部に位置していた提瓶との間は2.7mの間隔である。本玄室内に副葬された食物供獻の容器類は二カ所に、おそらくは葬送儀礼の供獻の内容の相違にもとづいて副葬されたものと推定される。石室内においては他の地点からは土器類はまったく発見されず、また、木製器類等の副葬の存在を玄室前室右壁際部分においては傍証する有機物は、残存を認められなかった。

(3) 玄室中央部左側壁部副葬品群

玄室左側壁部分には奥壁隅部から4.90mの位置、すなわち玄門部分から3.40mにはじまって奥壁方向に副葬品が発見された。この部分は、玄門寄りの部分が天井石の崩壊による影響を受けて若干散在した状態を示すものもあったが、土器類に埋没したのも少なく、原位置を保っていたと考えられる。

この部分の副葬品の配置状態は、屍床前面“しき



第10図 石室内出土遺物の位置②—

屍床部右側～玄室右側前面 (1:15)

須恵器・土師器の番号は土器通算の備付番号

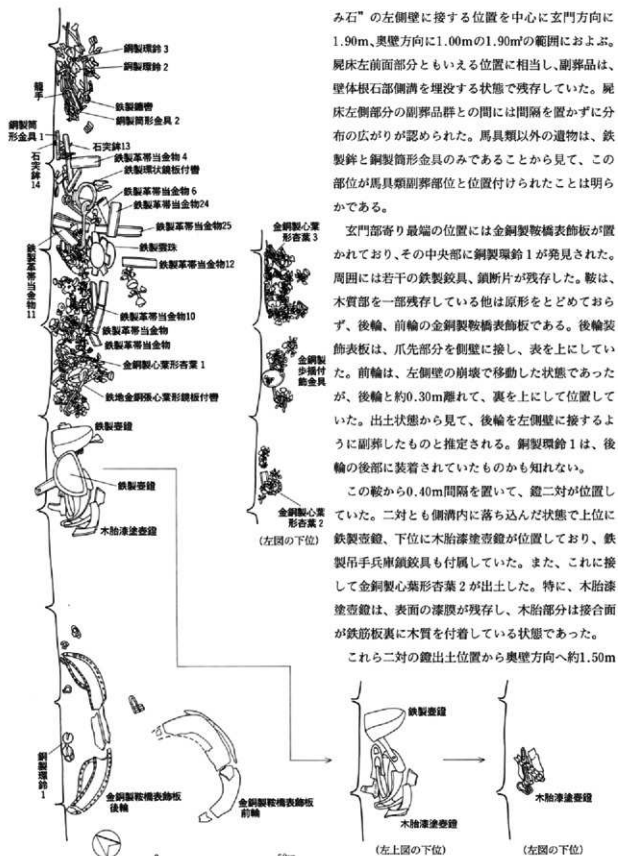
2. 副葬品の配置

み石”の左側壁に接する位置を中心に玄門方向に1.90m、奥壁方向に1.00mの1.90m²の範囲におよぶ。屍床左前面部分ともいえる位置に相当し、副葬品は、壁体根石部側溝を埋没する状態で残存していた。屍床左側部分の副葬品群との間には間隔を置かず分布の広がりが見られた。馬具類以外の遺物は、鉄製鉾と銅製筒形金具のみであることから見て、この部位が馬具類副葬部位と位置付けられたことは明らかである。

玄門部寄り最端の位置には金銅製鞍橋表飾板が置かれており、その中央部に銅製環鈴1が見えられた。周囲には若干の鉄製鉾、鎖断片が残存した。鞍は、木質部を一部残存している他は原形をとどめておらず、後輪、前輪の金銅製鞍橋表飾板である。後輪表飾板は、爪先部分を側壁に押し、表を上にして置いた。前輪は、左側壁の崩壊で移動した状態であったが、後輪と約0.30m離れて、裏を上にして位置していた。出土状態から見て、後輪を左側壁に接するように副葬したものとして推定される。銅製環鈴1は、後輪の後部に装着されていたものかも知れない。

この鞍から0.40m間隔を置いて、鍔二対が位置していた。二対とも側溝内に落ち込んだ状態で上位に鉄製鍔、下位に木胎漆塗鍔が位置しており、鉄製吊手兵車鎖鉾も付属していた。また、これに接して金銅製心葉形杏葉2が出土した。特に、木胎漆塗鍔は、表面の漆膜が残存し、木胎部分は接合面が鉄筋板裏に木質を付着している状態であった。

これら二対の鍔出土位置から奥壁方向へ約1.50m



第11図 石室内出土遺物の位置③—玄室左側前面～屍床部左側（1：15）

の範囲は、側溝を埋め尽くした状態で馬具類が発見された。この部分から出土した馬具類の種類は、鉄地金銅張心葉形鏡板付轡1点、鉄製環状鏡板付轡1点、鉄製遮轡1点、金銅製心葉形杏葉3点、鉄製雲珠1点、金銅製歩揺付飾金具77点、銅製環鈴2点、鉄製革帯当金物31点、鉄製鉸具6点、鉄製鉾石突5点、銅製筒形金具2点であった。

鉄製環状鏡板付轡は、上下に両方の鏡板が対峙した状態で壁体部に密着していたが、その間には金銅製歩揺付飾金具と、その座に付属する金具類がつまり、また金銅製心葉形杏葉1が表を上にして存在した。この部分は、玄室屍床前面の“しきみ石”の外側の位置である。“しきみ石”を挟んで対する屍床左側溝部分に、引手を玄門方向に向けて鉄製環状鏡板付轡1点が遺物群の表面に置かれ、その周辺には鉄製革帯当金物類の多くが

集中していた。これら鉄製革帯当金物類と、壁体部に挟まれた状態で金銅製歩揺付飾金具の大部分が位置したわけで、その出土状態は渾然として塊状をなす状態で、鉄製雲珠がその上面に裏がえしとなり、辻金具は足部分を壁体部に密着し、金銅製心葉形杏葉3がその頭部に裏面をあてた状態で出土した。3枚の杏葉の間隔は、約0.70mでほぼ等間隔であった。辻金具の下部には壁体部に沿って弧を描く鉄製革帯当金物11が位置しており、あたかも雲珠類は、革帯当金物に囲まれた配置を示していた。そして、この部分には三個の鉄製鉾石突10~12が側溝床面に挿し立てた状態で発見された。この石突は、3点とも一カ所に挿し立てられたものと考えられる。この他の石突は、他の13・14が前の3個の置かれた位置から



第12図 石室内出土物の位置(4)―屍床部左側上層(1:15)

奥壁方向に0.50m離れて、これらも側溝床面に挿し立てられていた。これらの石突の上部からは、杖状の木製軸部に金銅製キャップを持つ銅製筒形金具1が壁体に平行の状態では位置していた。

石突13・14の位置は、奥壁より2.35mの位置で、この部分から0.10mの部分は副葬品は少なく、その間隔を置いて奥壁寄りに約0.40mの範囲にわたり、鉄製籠手、鉄製轡轡1点、銅製環鈴2点、銅製筒形金具2の断片、その他、挂甲小札類が出土した。いずれも壁体部に沿って、鉄製脚当1が最上部に位置しており、この部分に崩れ落ちたものと考えられた。銅製筒形金具2の断片は、その1と約0.15mの間隔を置き、先端部が斜めに玄門方向を向いていた。

銅製環鈴2・3は、上下に重なって出土した。



第13図 石室内出土遺物の位置図—尻床部左側下層 (1:15)

玄室中央部左側壁部に副葬された遺物類は、馬具類が主であり、金銅製手播付飾金具が異常に大量である。また、金銅製心葉形杏葉3点、鉄製雲珠等は大型で、轡は、形式の異なるもの3点、鍔も形式を異にした2点、馬具類以外では銅製筒形金具2点と、鉄製鉾石突5点があり、他に籠手1点が置かれていた。

(4) 玄室部尻床左側部副葬品群

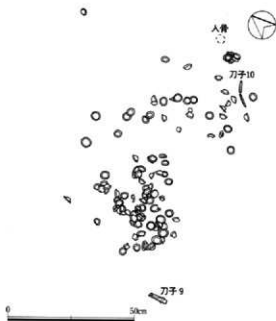
この部分での調査は、第I次、第II次の2次にわたって実施した。第I次調査では、挂甲1領分とその周辺部を中心に調査し、前面寄りの挂甲1領(挂甲B種)、胃1領、金銅製環状鏡板付轡1点、金銅製花卉形鈴付雲珠1点、同辻金具3点、鉄地金銅製革帯当金物11点、仿製鏡1点、小刀1点、鹿角装刀子2点、櫛残欠、銅芯金張製耳環等を取り上げた。

第II次調査では挂甲1領分、および付属の脇当、鉄鍔、鉄製鉾身7点、三果環頭大刀刀身1点を取り上げた。特に鉄鍔類は、多量に側壁部に沿って副葬されており、鉄製鉾身類は石室尻床前左側部発見の石突数より1点多い数で、奥壁に寄った部分に存在していた。なお、史跡整備時の精査により三果環頭大刀の柄頭、鞘尻金具、鉄製鉾身3点が尻床敷石下から発見された。

挂甲類は、崩壊しており、発掘時には鉄製小札類が 1.20×1.20 mの範囲に累積した状態で、その外側は左側壁側溝部分に落ちこみ、側壁に接していた。他の遺物類は、この挂甲小札群の周辺に位置する状態で発見された。挂甲小札の保

存状態は、良好で、錆化のあまり進行していないものも存在したが、第I次調査で取り上げたB種は、革摺裾板の分布範囲が 0.55×0.45 mの楕円形に拡がり、その内部に革摺部小札を沈めた状態で、さらに、その上表に各部分の小札が崩れ落ちた状態で、その最上面上には三日月形の胸当1枚が重なり、胃は側壁寄りに転落した状態であった。B種は、奥壁から1.30m、左側壁部から0.80mの位置を中心に置かれていた。

第II次調査で取り上げたA種は、B種とほぼ並んで、奥壁から0.80m、左側壁から0.70mの位置を中心として置かれていた。A種の革摺裾板の範囲は 0.75×0.65 mの楕円形のプランで、B種に比して小札の崩壊状態に乱れがあったが、内部に脇当一具を蔵しており、明らかに挂甲一領分を収納した状態で



第14図 石室内出土遺物の位置(6)一屍床部中央(1:15)

副葬されていた。B種については籠手、脇当が約1.0m離れて側溝部分に転落していることから組み立てて置かれたものであろう。

鉄鏃は確認できた点数が493点であったが、有頸脇扶長三角形鏃1点、長頸脇扶片刀鏃19点、長頸柳葉鏃473点で矢柄は寛口部分の有機材質が残存しているのみで、そのほとんどは奥壁から1.40~1.80mの左側壁側溝部分に置かれていた。鉄鏃の置かれた状態から矢柄部分を切断して、鏃切先を内側に向けて副葬したものと考えられた。

鉾身は、7点が奥壁から0.50m前後離れたA種の側部で、鉾先に一定の方向を示さずに、4点は、側壁寄り、3点は、奥壁側に散在していた。屍床前面左側部の石突の出土状態とあわせると、鉾身は、左側壁部に沿って奥壁に立てかけ、副葬されたものと推定される。その場合の鉄製鉾の全長は、3.2~3.5mであったと推定される。

三稜環頭大刀は、側溝部分の最下部で、切先を前室方に向けて副葬され、切先部は鉄鏃群の下部に位置する配置であった。

これらの副葬品類を見ると、屍床左壁部遺物群は、武器、武具類を中心に構成していることが注意され

るが、これら遺物群の内側、すなわち挂甲類に接する屍床上には奥壁部から1.30m離れた位置にハマグリが1点、その上に仿製二神六獣鏡が鏡面を上にして存在し、その周囲に小刀、鹿角装刀子、金銅製花卉形鈴付雲珠、同辻金具、および、その付属品と考えられる鉄地金銅張製革帯当金物が置かれ、金銅製環状鏡板付轡が挂甲B種の縁に埋没した状態で存在した。鹿角装刀子2点は、切先が挂甲B種の草摺にかくれた状態で、小刀とともに、仿製二神六獣鏡の上に柄部を位置せしめていた。小刀の切先は、前方向を取っており、刀剣類は、いずれも切先が屍床前面方向を取っていることが注意された。

金銅製花卉形鈴付雲珠、および辻金具は、仿製二神六獣鏡の上部に大形の雲珠を置き、ほぼ等間隔で挂甲B種の内側に沿って辻金具が出土した。それらは、付属の鉄地金銅張製革帯当金物類、金銅製環状鏡板付轡とセットをなす面製の装飾具を推定できるが、それらはまた、他馬具類とは異なって、特別な副葬位置であることが注意された。

櫛残欠は、仿製二神六獣鏡の下部と、小刀の切先の先方約0.20mの位置に出土し、他に銅芯金張製耳環1点が挂甲B種の前方に約0.20m離れて出土した。

この屍床左側部の副葬品は、伝世的な性格の強い鹿角装刀子類と呪術的性格を示すハマグリと、仿製二神六獣鏡の組合わせに特殊馬具類、櫛類が加わって、屍床中央に近く副葬された遺物群と、その外側の武器、武具類の遺物群に分けられる。

(5) 屍床中央部分副葬品群

この部分出土の副葬品は、床面直上に堆積する有機質物質層に包含された状態で累積していた金銅製半球形服飾品であり、他は刀子の残片2点と、屍床右側副葬品群の一部が混入したにすぎない。装身具類のみの副葬品群で、金銅製半球形服飾品は、数は115点以上である。

分布状態は、奥壁から1m、右壁から1.5mの石室主軸線より若干右壁に寄った点を中心に0.3×0.4mの範囲に約75点が累積し、その出土状態は、6個~10個の単位で7~8群から構成していた。これらの群

から奥壁右側方向に散開する状態で、他のものが分布していた。その範囲は、 0.65×0.40 mであり、この部分の右壁寄りには銀地鍍金空玉、刀子10、遺骨片（脊椎）が混在していた。他は、2点が奥壁寄りに離れて単独出土した。

金銅製半球形服飾品は、同範囲に散在していた有機質物質の装飾金具であることは明確で、その出土位置から推定して、被葬者の遺骸をまとう服飾類のものであったろうと考えられよう。

(6) 屍床右側壁部副葬品群

この部分における副葬品の分布範囲は、屍床右側溝を中心に奥壁から2.2mまでである。大刀3点、金銅装鈴付太帯1点、銀装刀子5点（1は金銅装鈴付太帯に装着）、獸帯鏡1点、小刀2点、刀子8点、銀地鍍金空玉30点、ガラス丸玉54点、銅芯金張製耳環7点、中空純銀製耳環2点、細身純銀製耳環1点であった。

まず、奥壁隅部に切先部を接地させた大刀が立掛けられており、この大刀の切先部を内側に置く位置に金銅装鈴付太帯が屍床側溝部に落ち込む状態で存在した。金銅装鈴付太帯は、奥壁部から0.4mの位置で、鈴吊手鎖の結着部が上側縁辺にあって、副葬当時の位置は着装状態時のものを示していた。金銅装鈴付太帯の帯裏には銀装刀子1が装着されており、切先を前室方に向けていた。

金銅装鈴付太帯装着の刀子の下部に銀装刀子4点、2～5が一束となって副葬されていた。奥壁部分から0.5～1mの範囲で、側溝最深部で側壁根石に密接する状態であった。

これら銀装刀子類の真上に柄部を位置させて側溝に沿って大刀2点が副葬されていた。石室中央寄りには頭椎大刀で上部、右側壁部寄りには振り頭頭大刀で下部に、両大刀とも刃部を下方にしていた。頭椎大刀と振り頭頭大刀の間には、振り頭頭大刀の柄の部分だけのずれがあり、振り頭頭大刀が金銅装鈴付太帯に柄頭部分を接した位置関係を保っていた。大刀類2点の切先の部分は、奥壁部から2.1mで、屍床右側手前の銅製水瓶を主とした副葬品群との間隔は0.5mである。

大刀類のほぼ中央部分の上位置に、側溝に傾斜した状態で獸帯鏡1点が背面を上にして位置し、多量の有機質物質が付着していた。織物残欠であることが確認された。付着の状態から見て、獸帯鏡は、錦様織物で包装されていたものと考えられる。

以上は、屍床右側部に沿って置かれた副葬品類であるが、この部分では内側の屍床縁辺部分に銀地鍍金空玉、ガラス丸玉類、銅芯金張製耳環、中空純銀製耳環、細身純銀製耳環類からなる装身具類と、他に小刀1点、刀子類5点が散在し、若干の遺骨類も残存していた。

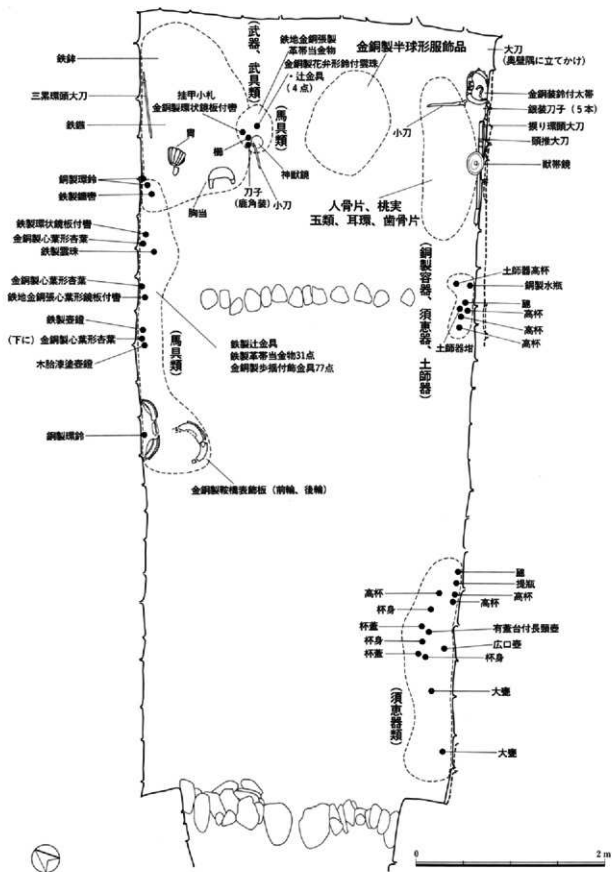
小刀2は、柄部を金銅装鈴付太帯に接し、切先を内側にし、付随するように刀子11、14が散在した。刀子5は、金銅装鈴付太帯の奥壁側側溝部に位置していた。

銀地鍍金空玉は、獸帯鏡の周辺から小刀2の周辺にかけて散布していた。約 0.50×0.60 mの範囲で、この部分にガラス製丸玉類若干と、銅芯金張製耳環1点、中空純銀製耳環類2点が含まれている。

ガラス製丸玉類は、頭椎大刀の内側の屍床面の縁辺に沿った 1.2×0.4 mの範囲に散在し、特に、獸帯鏡の内側前面に集中し、他は、頭椎大刀の柄部内側に集中していた。前者の群中には齒（人骨）が残存した。後者は、空玉群に含まれる位置にあることが注意された。

銅芯金張製耳環は、5・6の2点が奥壁に近い位置、3・4の2点が金銅装鈴付太帯の約0.30m内側の床面、細身純銀製耳環12は、頭椎大刀の刀身ほぼ中央部分、中空純銀製耳環11が獸帯鏡内側前面のガラス丸玉群中、中空純銀製耳環10は、頭椎大刀柄部内側のガラス丸玉群中に、それぞれ、単独の状態散布した。中空純銀製耳環10・11の2点は、獸帯鏡側部の空玉群中で、一対をなす出土状態であった。

屍床右側部分の副葬品は、宝器的な性格をもつ獸帯鏡と、儀式的性格の強い大刀類、刀子類、金銅装鈴付太帯等に加えて、装身具類としての玉類が中心となっていることが、遺骨の残欠がこの部分に存在したということとともに見て取れる。



第15図 石室内出土遺物の位置(7)一全体(1:40)

第3章 遺物

1. 出土遺物一覧

総貫観音山古墳の横穴式石室内からは以下に記した遺物が出土している。なお、数量の次にある（ ）内の数字は史跡整備時に出土した点数を表す。

1	鏡		4	馬具	
	獣帯鏡	1		轡	4
	神獸鏡	1		鉄地金銅張心葉形鏡板付轡	1
2	装身具その他			金銅製環状鏡板付轡	1
	銀地鍍金空玉	30		鉄製環状鏡板付轡	1
	ガラス玉類	54		鉄製轡	1
	耳環	13		金銅製鞍橋表飾板	1
	銅芯金蛋製耳環	10		鍔	2
	中空純銀製耳環	2		鉄製鍔	1対
	細身純銀製耳環	1		木胎漆塗鍔	1対
	金銅製半球形服飾品	117以上 (8以上)		金銅製心葉形杏葉	3
	金銅装鈴付太帯	1		金銅製花弁形鈴付雲珠	1
	櫛	1		金銅製花弁形鈴付辻金具	3
	銅製筒形金具	2		金銅製門板形座金	8
	鐺子	1		金銅製少播付飾金具	77
3	武器・武具			鉄製雲珠	1
	大刀			鉄製辻金具	2
	頭椎大刀	1		鉄地金銅張製革帯当金物	11
	振り環頭大刀	1		鉄製革帯当金物	31
	三累環頭大刀	1		銅製環鈴	3
	直刀	1		金銅製鉸具	2
	小刀	3		鉄製鉸具	29前後
	その他刀装具	4		鉄地銀板張製留金具	3
	刀子	20		鉄地金銅張製留金具	4
	銀装	5		金銅製留金具	12
	鹿角装	6		鉄製留金具	6
	刀子	9	5	工具	
	鉄鉦			鑿	3
	鉦身	9(1)		錘	1
	石突	5	6	容器	
	鉄鏃	493以上		銅製水瓶	1
	弓一両頭金具	1000		須恵器	19
	冑	1		土師器	2
	挂甲	2領	7	自然遺物	
	胸当	1		ハマグリ	1
	籠手	1双以上		桃果核	1
	膺当	1双	8	人骨	
			9	石室吊手金具	4



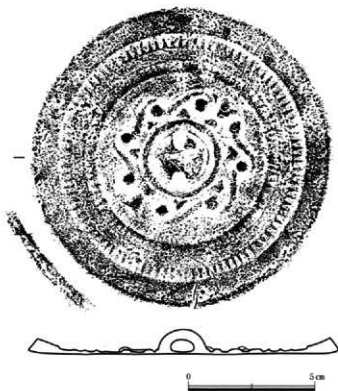
2. 鏡

(1) 半肉刻獸帯鏡 (第16図)

石室玄室内奥の屍床と推定される区画の東壁に沿った位置に配置してあった。金銅装鈴付太帯、銀装刀子、捩り環頭大刀、頭椎大刀、銅製水瓶などと共に発見された。鏡は、壁に立てかけるように鏡面を

壁側に向けていた。屍床と推定される部分の出土品と出土位置からみて、その東側が頭位、西側が足位方向と考えられる。したがって半肉刻獸帯鏡は、頭位に近く他の副葬品と共に配置されたものとみてよい。

鏡は、ほとんど完形をなしており、発見時から現在まで原形を保っている。発見時には、鏡背文様部分にかなり多くの付着物があったが、遺物の整理作



第17図 神獸鏡拓影

業の段階でもその付着物を除去せずに、付着物の分析結果を持つことにしていた。したがって、暫くの間、鏡背文様の細部にわたる観察が不十分で、他の類似資料との比較検討が容易でなかったことは事実である。いま整理作業中の所見と、その後のクリーニング作業終了時での所見とを加えて観察結果を報告することにする。

鏡は、半肉刻獣帯鏡と呼びならわしているものである。

面径 23.35cm 背径 22.40cm

鈕径 3.67cm 鈕座径 4.52cm

鈕高2.07cm、縁厚7.65cmあって面反り約0.5cmをはかる。鏡体は平均2.5mmほどの厚さをもつ。

主文様は四葉座七乳の間に七獣を配している。いわゆる四靈三瑞を表現した典型的な獣帯鏡のスタイルを示しているが、本鏡の場合、いずれの獣形も明瞭な表現が認められない。

円座をもつ鈕を中心に円座をもつ九小孔を配し、小孔間に鳥文とみられる便化した文様と、三単位鳥文間に「宜」「孫」「子」と推定しうる文字が右廻りに

表現されている。

柳齒文・円圈帯（二条の円圈にはさまれた一条の細円圈で構成）・柳齒文を経て内区主文様帯にいたる。

主文様帯の外側には銘帯がめぐらされているが、きわめて不鮮明であって全容を解説できない。判明した部分を記すと次のようになる。

尚方作竟真大巧

上有仙人不知老

渴飲玉泉飢食棗

□□□□□□

壽如金石□□□号

銘文は三十五文字を右廻りに表わす。このうち「上」と「壽」は逆字（左字）の可能性があるが、全文を推定すると神佛思想にかかわる銘文としては完備していると考えられる

銘帯に接して柳齒文があり縁が一段厚く作られ外向柳齒文を経て縁の文様帯となる。縁の文様帯は不鮮明であるが、部分的に観察しうるところから判断すると流雲文と唐草文とが混じって生ずる独特の草葉文系の文様帯となっている。四神鏡、細線刻獣帯鏡や他の半肉刻獣帯鏡の縁文様帯として用いられているものと同系のものと理解できる。

本鏡は、同類式鏡としては大形鏡に属しているが、総体的に鋳上りの悪さが指摘できる。鏡背文様を詳細に観察すると、きわめて微細な擦痕がいたる所に見られる。あたかも磨きかけたかのように見えるが、鋳造後の処理も不十分であった為ではないかと推定しうる。さらに、鏡背の一部分に円形の窪みがあり、鋳造時に生じたものと考えられる。古墳副葬後に生じたものでないことは、出土状態からみて明らかである。また、銅質は白銅質に見えるが、錫や鉛の含有量が多いとされる特徴をみる。鋳上りの不鮮明さと銅質とは無関係ではないので、本鏡の製作技術や製作地の考察にも何らかの材料を提供しうるものと考えられる。

また本鏡は、同類式鏡の中では群を抜いて大形で

あるばかりでなく、すでに知られているように韓国・武寧王陵出土鏡、滋賀県三上山下古墳出土鏡(二面)と同范関係にあることが知られている。

(2) 仿製二神六獣鏡 (第17図)

石室屍床部の西側、足部位方向の壁に寄った場所から発見された。武器、武具類、馬具類などと共に配置されていた。異形冑、金銅製環状鏡板付冑、金銅製花卉形鈴付雲珠などの金銅製品と隣接している。頭部位に半円刻獣帯鏡を、足部位に仿製神獣鏡を、という配置に注目しておきたい。

鏡は、発見時より完形をなしており、現在でも原形を保っている。

面径 12.28cm	背径 11.83cm
鈕径 2.00cm	鈕座径 2.29cm
鈕高 1.00cm	縁厚 0.525cm

鏡面の反りは縁の部分で0.2cm弱。鏡面全体には殆ど反りはなく、縁に近いところで外反するのみ。

鏡背の主文様は二神と六獣を配列したと考えられるが、かなり変形が著しい。すなわち、鈕をはさんで変形した神像を各一軀を置く。神像は頭部が円形乳状に変形し、体軀は三角形で、肩に相当する部分から両手表現とおぼしき細線の表現があり、神像は右手を上にあげ、左手を下に向ける。両神像にはさまれた部分に四乳を配し、その各乳間を蕨手状の文様で連繫させて、さらに不定形な文様を鈕をめぐる円圏から派生する不定形な浮文がある。獣形文は動物の体軀を表現したものであろうが原形を推定できない。龍をイメージしたものかも知れない。

鈕は円座をもち外周に円圏を一条めぐらす。円圏は断面が蒲鉾状を呈する。外区は主文様帯に連結して櫛齒文帯・外向櫛齒文帯・素文帯・外向櫛齒文帯と続き、素文の鏡縁に向かって徐々に肥厚する縁をもつ。鏡体は平均1.5mmほどと計測されるが、縁厚が5mm余と、鏡全体の造りからみると厚目に鋳造されている。

鏡背文様帯や外縁部周辺は丸味を帯びたつくりとなっている。

文様は全体的に不鮮明であるが、銅質は比較的良

好であると見受けられる。地金は全面が緑錆におおわれているが、鏡面、鏡背の一部の青銅地金が露出しているところをみると、黄金色を呈する部分と、白銅色を呈する部分とがある。鋳造時の技術的な側面を考える上で参考になるのではないだろうか。

鏡面は全面にわたり布の銹着をみるが白銅色を呈する部分が鏡面部に多く認められる。

本鏡でとくに問題としなければならないのは、神像の体軀の表現ではなかろうか。神像とおぼしき文様の頭部と体軀との接合部に表現されている両腕と思われる表現は、明らかに右手を上、左手を下に向けている。この表現は二神像と同様である。この姿は、むしろ神像というよりも、むしろ仏像=釈迦像を表現したのではないかという疑問すら生じさせる。観音山古墳の他の出土遺物の中には水瓶、蓮華蕾を形どった鈴などがあって、仏教的な色彩の濃い遺物が含まれていることからみて、鏡の主文様として仏教的な影響があることも当然のことながら考慮しておく必要がある。ことに三角縁神獣鏡類の中に、三仏三獣鏡があることを考えると、鏡背文様の中に仏像が採用されることは、当時の宗教的背景を重ねてみて当然のことだとも思える。

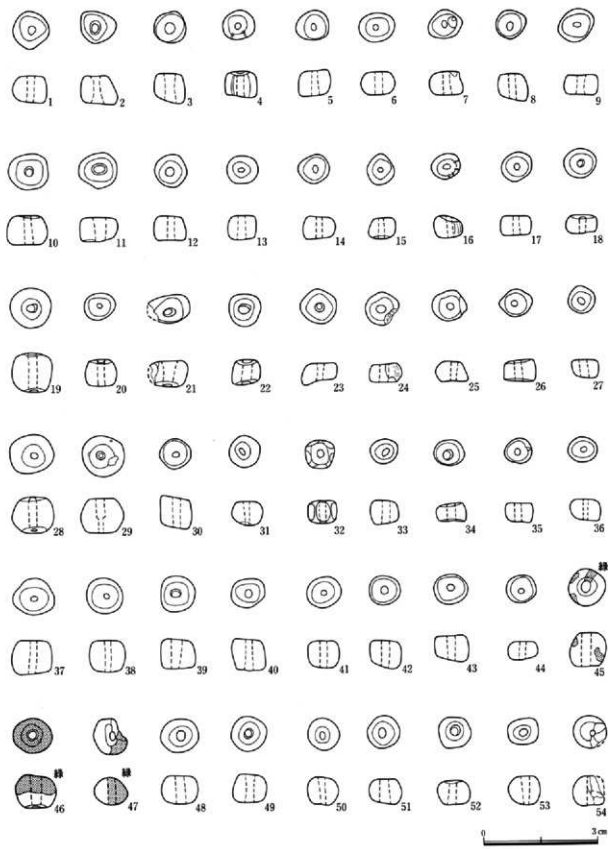
観音山古墳とほぼ同時期の古墳の出土品をみると、銅鏡や蓮華文を付した遺物があり、その可能性を物語っているものと考えられる。

3. 装身具

(1) ガラス玉類 (第18図)

① 出土状況

ガラス玉類は石室内屍床部の南側壁下を中心に54個検出された。紺・青緑色の小玉、黄色の丸玉等がそれぞれに混在し、石室中軸方向に広く飛び散っていた。一カ所、数個の小玉が一連に繋いだ糸が解けたかのように連なり、この中に黄色丸玉も2個含まれ、両種が混在していた。また、被葬者の歯との混在も一部では認められ、耳環や銀地鍍金空玉と出土範囲が重なる状況であった。



第18図 ガラス丸玉

第3章 遺物

② 種類と特徴

石室から出土したガラス玉類は形状、色調等から2種に大別できる。一種は濃紺色あるいは緑青色の角の丸い白形の小玉で、出土数は44個を数える。他の一種は黄色の比較的大粒の丸玉

である。出土数は10個を数えるが、このうちには、黄色地に斑状に紺または緑色を合わせた「トンボ玉」が3個含まれる。

(a) 小玉

形状は上下に研磨による面をもち角が丸く仕上げられた白形を呈するものが主体である。大きさ、形状ともに差違が大きく、歪みも目立つ。特に厚さ(長さ)は、最小4.5mmから最大9.9mmで、径の大小に関わらず数値幅が大きく、標準値も見いだせない。また不整形のもの、上下の研磨面が平行せず傾きが大きいもの等が目立つ。

成形方法については、ガラスが縦に引き延ばされた際生じた、極細い黒色夾雑物の縦線や微細な気泡の筋をガラス内部や表面に観察できるものが少なくない。製作工程について、引き延ばしたガラスの棒あるいは管を個々の玉に切断し、加熱または研磨により角を丸め、玉の表面を研磨し、上下に研磨面を作出したと想定できる。研磨面には微細な気泡痕や擦痕が観察される。円孔は孔内壁面が滑らかな円筒状で、棒状具による穿孔・整形が行われた様子がうかがえる。

遺存状態については、一部欠損したものの、劣化による細かい亀裂や白濁に覆われ、破砕し易い状態のものがある。

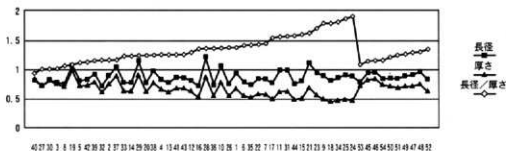
(b) 丸玉

黄色のガラス丸玉はそのほとんどが一様に球形で、研磨による平面を上下に作っており、ガラス小玉と比較すると全体的に形状、大きさとも一律で、

第1表 ガラス丸玉計測値一覧

単位 (cm)

No	取上げNo	縦	横	厚さ	孔 径	色 調	備 考
1	C-109	0.940	0.900	0.680	0.190	紺	
2	C-108	0.820	0.890	0.760	0.300	紺	一部欠損
3	C-112	0.760	0.780	0.760	0.300	紺	
4	C-5	0.800	0.830	0.660	0.140	紺	
5	C-119	0.785	0.810	0.720	0.160	紺	
6	C-118	0.780	0.750	0.550	0.200	紺	
7	C-111	0.780	0.850	0.580	0.240	紺	一部欠損
8	C-110	0.750	0.760	0.710	0.200	紺	
9	C-115	0.880	0.900	0.500	0.200	紺	
10	C-123	0.940	1.070	0.780	0.215	紺	
11	C-129	0.810	0.990	0.630	0.310~0.330	紺	
12	C-127	0.820	0.810	0.630	0.180	紺	一部破損
13	C-124	0.710	0.780	0.620	0.210	紺	
14	C-126	0.780	0.740	0.630	0.180	紺	
15	C-130	0.800	0.790	0.500	0.180	紺	
16	C-120	0.660	0.720	0.530	0.145	紺	
17	C-114	0.780	0.780	0.500	0.170	紺	
18	C-128	0.755	0.810	0.450	0.170	紺	
19	C-9	1.075	1.010	0.990	0.220~0.160	紺	
20	C-15	0.720	0.790	0.630	0.150	紺	
21	C-7	0.800	(1.105)	0.680	0.310~0.220	紺	一部欠損
22	C-11	0.850	0.820	0.590	0.270~0.280	紺	
23	C-8	0.905	0.940	0.550	0.210~0.200	紺	
24	C-16	0.845	0.880	0.460	0.250	紺	一部欠損
25	C-12	0.840	(0.900)	0.480	0.200	紺	一部欠損
26	C-13	0.740	0.765	0.555	0.190	紺	
27	C-17	0.720	0.730	0.720	0.210	紺	
28	C-21	0.980	1.200	0.880	0.130	紺	
29	C-23	1.140	1.130	0.910	0.210~0.120	紺	一部破損
30	C-31	0.790	0.830	0.810	0.145	紺	
31	C-28	0.990	0.830	0.630	0.210	紺	
32	C-27	0.725	0.715	0.620	0.185	紺	
33	C-26	0.630	0.780	0.630	0.210	紺	
34	C-25	0.680	0.855	0.470	0.250	紺	
35	C-22	0.630	0.740	0.520	0.170	紺	一部破損
36	C-24	0.645	0.750	0.550	0.120	紺	
37	C-116	0.980	1.060	0.900	0.160	紺	
38	C-80	0.920	0.980	0.780	0.160	紺	
39	C-78	0.910	0.920	0.790	0.210	紺	
40	C-32	0.795	0.825	0.860	0.185~0.220	紺	
41	C-73	0.800	0.870	0.690	0.190	紺	
42	C-74	0.760	0.830	0.730	0.200	紺	
43	C-79	0.780	0.860	0.680	0.210	紺	
44	C-85	0.720	0.760	0.480	0.180	紺	
45	C-121	0.930	0.920	0.820	0.250	紺・黄色	
46	C-6	0.930	0.955	0.830	0.250~0.195	紺・黄色	
47	C-66	0.900	0.890	0.700	0.200	紺・黄色	一部欠損
48	C-65	0.880	0.960	0.740	0.260	黄色	
49	C-117	0.860	0.880	0.700	0.260	黄色	
50	C-14	0.840	0.820	0.700	0.100	黄色	
51	C-113	0.760	0.840	0.680	0.290	黄色	
52	C-30	0.810	0.820	0.610	0.270~0.190	黄色	
53	C-29	0.740	0.780	0.720	0.210~0.110	黄色	
54	C-20	0.840	0.820	0.730	0.110~0.210	黄色	一部欠損



第19図 ガラス玉類の長径・厚さ(長さ)比

歪みが少なく共通の製作方法によっていると思われる。しかしガラス丸玉は総数10個を数えるが、このうち1個(第18図No51)は他の9個と材質・形状、色調、製作方法が異なる。9個の丸玉に共通する特徴は、ガラス内に細かい気泡が顕著で、また上下の研磨面や円孔内の壁面に気泡の痕跡が目立つものの玉の表面には研磨調整による擦痕や気泡痕等は認められず滑沢である。第18図No50の円孔の内壁には径1.5mm前後の気泡痕の空洞が複数空く。また、ガラスの色むらから製作時のガラス材の混和状況がうかがえるが、一部に円孔を軸に横(直行)方向に濃淡の縞模様を観察できるものもある(第18図No48)。第18図No46は緑色と黄色ガラスを上下に合わせるが、これもそれぞれに濃淡の縞模様を観察することができる。しかし第18図No45、第18図No47のトンボ玉では濃淡の縞模様の方向を異にするガラス小塊を融合させた様子が認められる。円孔は上下両端の径が異なり縦断面が梯形の筒状を呈する。また9個の丸玉すべてに、円孔の内側全面に黒色物質が附着している。これは軸棒の離型剤の残存かと思われる。3個のトンボ玉と他の6個の丸玉は、前者が2色のガラスを合わせるという点で異なるが、他の特徴は共通しており、両者の製作方法は基本的に同じといえる。唯一他と特徴を異にする第18図No51は上下の研磨面も大きく、濁りの無い黄色で気泡がほとんど見られず、ガラス材引き延ばしによる色の濃淡による極細かい縦縞が明瞭に観察される。円孔の内壁も研磨による整った滑沢な円筒形を示すなど、ガラス材、製

作方法を他の丸玉と著しく異にしている。

(2) 銀地鍍金空玉 (第20図)

① 出土状況

空玉は総数30個出土している。出土位置はガラス玉類と同様屍床部南側壁下に散在するが、特に散帯鏡の傍らには十数個一連に玉を繋いだ糸が解けたかのように連なって出土している。また奥壁方向50cm離れた辺りには5個のまとまりを見るが、この10cm奥壁側の近接位置には被葬者の歯が列状に数個遺存する。空玉の出土状況は60cm範囲内に数個ずつのまとまりを示し、被葬者の歯、ガラス玉類、耳環等の装身具の分布域と大きく重なっている。

② 大きさと形状

出土した30個はすべて、同じ形状、大きさ、材質であり、上下が丸く膨らんだ偏平な球形を呈する。側部の相対面する位置には径1.1mmの正円形の孔を一对穿つ。一部に上下面が凹んだ状態のものは製作後の変形である。すべて同一規格で製作されている。空玉の径は1.5~1.6cmで、相互の差は最大1mm。長・短径の差は大半が0.2mm以下で、形状は整っている。材質は銀製で水銀アマルガムによる鍍金を施したか否か明瞭ではない。色調は鈍い銀色で、やや金色味のある光沢をもっている。側部には上下の半球のあわせ目の線が僅かに認められる。

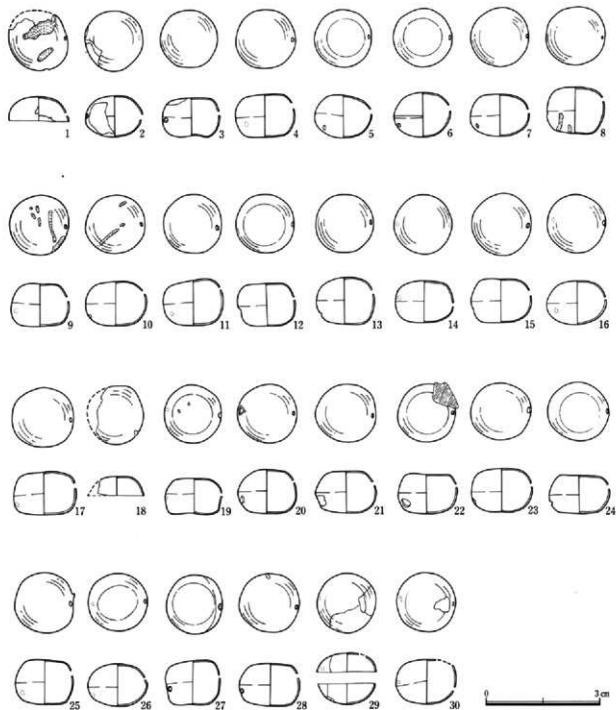
③ 製作痕

製作に関わる痕跡は裏面、断面観察が可能な破損した個体で認められる。側部の孔の穿孔方向については、内面の孔の周囲に金属の突出が観察されるこ

第3章 遺物

とから外側からの穿孔が明らかである。接合の痕跡は良好に観察でき、裏面の合わせ目が線状に僅かな盛り上がりとして認められる(口絵3)。盛り上がった金属は溶接材の接合面からはみ出しである。溶接は鑢接と推察される。半球同士の接合は相互の端部を溶接材により接合させていることが確認でき

る。第20図2では破損部の裏面のあわせ目と接合断面が観察可能である。上下半球の形状の僅かな差により端部の接合部の一部にずれが生じ、裏面側では接合部で壁の厚みによる段差が残っている。しかし、外面は研磨調整により段差をなくし滑らかな球面に仕上げている。また、この端部のズレにより観察さ



第20図 銀地鍍金空玉

れた端面には平らな研磨面が認められる。このことから上下半球の接合に先立ってそれぞれ端部を平坦研磨し、かつ相合致する形に調整が行われたものと推察される。

(3) 耳環 (第21図)

① 出土状況

耳環は総数12個出土している。銅芯金張製9個(第21図1～9)、中空純銀製2個(第21図10～11)、細身純銀製1個(第21図12)よりなる。その他遺存状態が悪く材質・構造が不明確なのが1個ある。出土位置は屍床部南側壁から奥壁を中心に、ガラス玉類、銀地鍍金空玉等の装飾品とほぼ重なる。特に個々の位置関係で注意されるのは、銅芯金張製の第21図No.5とNo.6が奥壁際に、第21図No.3とNo.4が被葬者の歯の列の近接位置に、また中空純銀製の第21図No.10とNo.11が軟帯鏡の近接位置にそれぞれに20～25cm間隔に2個一対を想定させる位置関係を示していた。しかし第21図No.8や第21図No.7は分布の中心から特に離れた位置に見られ、第21図No.12の細身純銀製の環は1個体のみの確認である。

② 大きさと形状

(a) 銅芯金張製耳環

すべて断面円形で環の長径は最大が3.55cm、最小が3.12cmで形状、大きさと相互の差は小さい。一部に表面に張った金が破れ、破損部には粉状に錆化した銅芯が覗ける(第21図No.6、第21図No.3、第21図No.4)。

(b) 中空純銀製耳環

環の長径は3.57～3.52cmで銅芯金張製よりやや大きめである。環の両端が凹面状に整えられており、これは中空の管の端部に凹面状のフタを接合しているものと考えられる。また、X線観察により中空の管の中には形状、材質不明の物質がそれぞれに2～3個入っており、振ると管内を移動する状態が分

第2表 銀地鍍金空玉計測値一覧

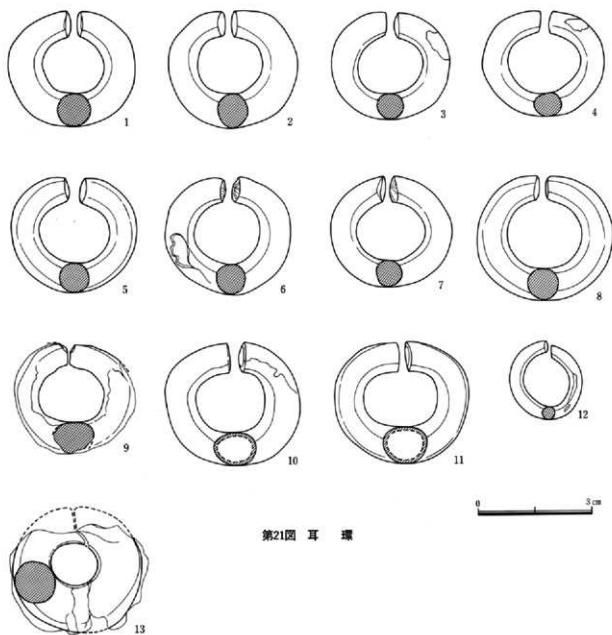
単位 (cm)

No	取上げNo	長径	短径	高さ	穴の位置	備考
1	B-95	1.55	1.50	0.62		半欠(穴が1個)
2	B-116	1.55	1.50	1.10		半欠(穴が1個)一部欠損
3	C-36	1.52	1.51	1.02		
4	C-37	1.51	1.48	1.12	片寄っている	
5	C-38	1.58	1.56	1.16	片寄っている	
6	C-39	1.58	1.56	1.16	片寄っている	
7	C-40	1.55	1.55	1.10	片寄っている	
8	C-41	1.54	1.50	1.20		
9	C-42	1.52	1.50	1.09	片寄っている	
10	C-43	1.60	1.52	1.16		
11	C-44	1.58	1.52	1.20	片寄っている	
12	C-45	1.50	1.50	1.10		玉の中に糸が入っている
13	C-46	1.52	1.50	1.22		
14	C-47	1.55	1.55	1.10	片寄っている	
15	C-49	1.58	1.56	1.14		
16	C-50	1.57	1.55	1.15	片寄っている	
17	C-51	1.58	1.54	1.12	片寄っている	
18	C-52	1.50	1.40	0.50		半欠
19	C-53	1.50	1.50	0.95	片寄っている	
20	C-54	1.50	1.50	1.18		一方の穴の部分が破損
21	C-55	1.58	1.54	1.10		一方の穴の部分が破損
22	C-62	1.58	1.50	1.04		一方の穴の部分が破損
23	C-64	1.61	1.50	1.10		玉の中に糸が入っている
24	C-68	1.60	1.50	1.04		
25	C-69	1.54	1.52	1.16	片寄っている	一部破損
26	C-71	1.55	1.50	1.05		一部破損
27	C-72	1.54	1.50	1.15	片寄っている	
28	C-76	1.58	1.54	1.10		一部破損
29	C-87	1.55	1.50	不明		破片の復元形、一部欠損
30	C-105	1.56	1.55	1.15	片寄っている	一部破損

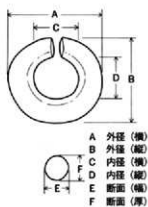
かる。

(c) 細身純銀製耳環

断面円形で径も小振りで、形はやや長円形の環で両端部の合せにはややズレが認められる。他の遺物の部品の可能性もあるが、耳環とみるのが妥当であろう。



第21圖 耳環



第3表 耳環計測値一覽

單位 (cm)

No	取上げNo	A	B	C	D	E	F	備考
1	C-1	3.320	3.040	1.65	1.45	0.85	0.820	
2	C-33	3.440	3.050	1.70	1.50	0.75	0.880	
3	C-56	3.140	2.880	1.70	1.45	0.70	0.700	
4	C-57	3.120	2.820	1.90	1.55	0.70	0.620	
5	C-58	3.300	3.000	1.85	1.60	0.90	0.850	
6	C-59	3.275	2.980	1.75	1.55	0.75	0.780	
7	No 1	3.210	2.860	1.85	1.50	0.70	0.650	
8	D-7	3.550	3.280	1.85	1.75	0.85	0.820	
9		(3.100)	(2.900)	1.70	1.50	(1.05)	(0.850)	右先端寄径0.70
10	C-48	3.575	3.230	1.85	1.55	1.15	0.870	
11	C-34	3.520	3.195	1.95	1.45	1.15	0.865	
12	C-70	1.880	2.140	1.25	1.45	0.40	0.340	
13		3.400	(2.900)	1.25	1.10	1.05	1.100	

(4) 金銅製半球形服飾品 (第22~24図)

① 出土点数および出土状態

出土総点数は、115個。屍床のほぼ中央位、奥壁中央位から100cmの部位を中心に、石室主軸方向約105cm、幅約105cmの、ほぼ11,025cm²の範囲に存在した。

(第14図参照) 屍床床面の敷石上に密着して残存した黒褐色のペースト化した有機質物層に圧着した状態、あるいは混入した状態で存在していた。有機質物層は、目測では厚いところでも10cmに満たないマット状の塊りを呈していたことから、それは被葬者の遺骸上に畳んで置かれた繻衣のごとき服装品の腐蝕した残存物とするのが無理のないところと推定された。半球形飾金具は、その服装品に縫い取り、散りばめられたスパンコール様の装飾品と考えられる。

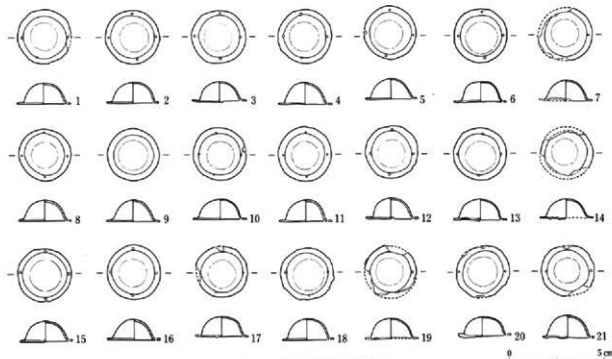
半球形飾金具と命名された装飾品は、円球を半載したかのごとき円丘形を呈していることから、発掘現場でその視覚的印象をもって命名した名称である。正確には、金銅製半球形(円丘形)服飾品とすべきであり、適切な名称としては、衣服に縫い付けた金属製装飾品という観点から、金銅製半球形(円

丘形)スパンコールと呼ぶのが可能な服飾品である。

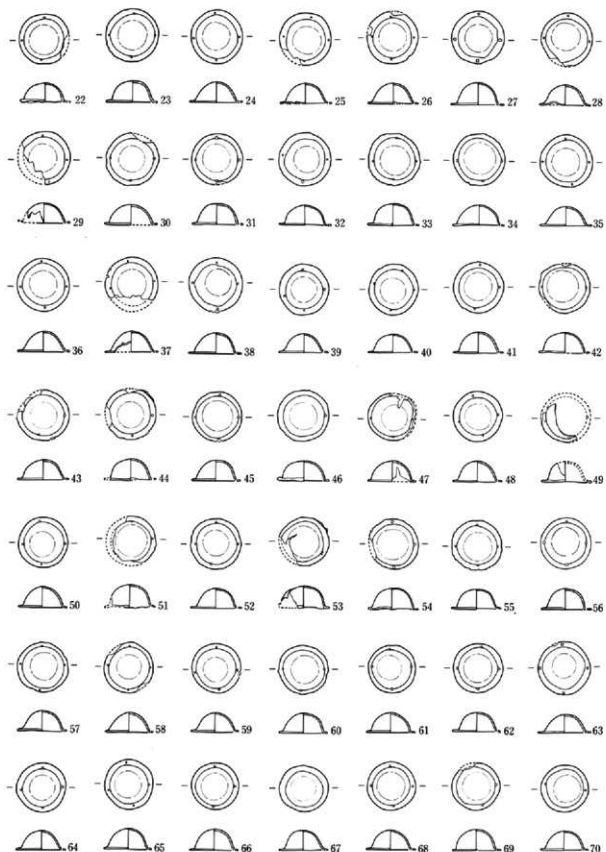
② 法量および形態的特徴

出土総点数115点を観察すると、そのうち完形を留めているのは、64点、他の51点は一部欠損しているが、それらは、いずれも同一形状のつくりという特徴がある。すなわち、浅い円丘形にプレスして整形した本体部の縁を鑿付き平縁形に仕上げた形状である。縁部には鑿り穴を、ほぼ4等分位に穿った4穴のものが大多数を占めているが、2穴・3穴のものがそれぞれ1点ずつ認められる。鑿り穴の径は0.10cm内外と微小径である。

調査時、その多くは表面に緑青錆が発生し、覆われていたが、一部には金メッキの表面が錆下に観察できるものもあり、同時に、繊維物質を附着していたものが80点、木質を附着していたものが1点確認できた。繊維物質の附着状態は、凹面部に附着が認められたもの61点、凸面部に附着が認められたもの5点、凹面、凸面の両面に認められたもの10点、その他、縁部の鑿り穴に認められたもの4点であった。凹面部に附着した繊維物質が大多数を占めているということは、この金銅製半球形服飾品が、凹面を布



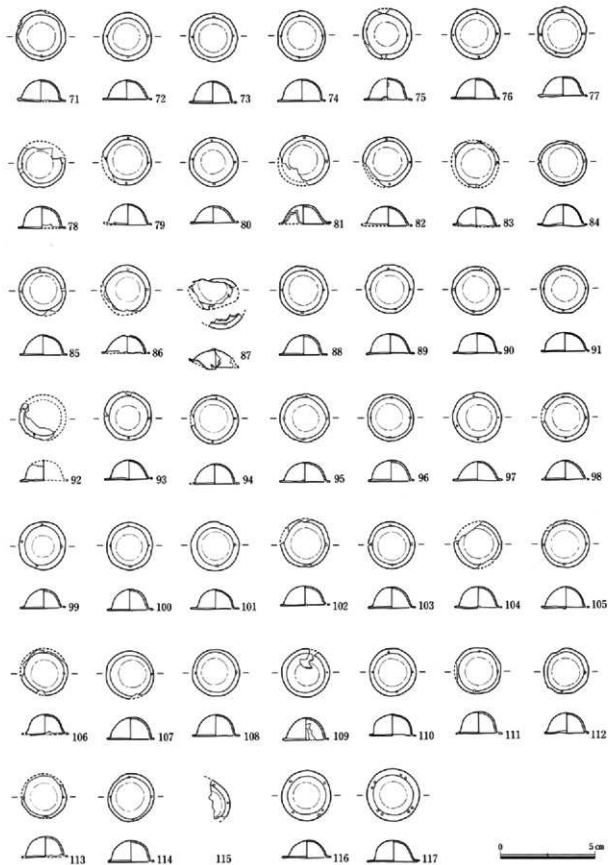
第22図 金銅製半球形服飾品(1)



第23圖 金銅製半球形服飾品(2)

0 5 cm

3. 裝身具



第24圖 金鍍製半球形裝飾品(3)

第4表 金銅製半球形器物品計測値一覧

単位 (cm)

No	取上げNo	直径	立上り直径	高さ	厚さ	残存	備考
1	B-10	2.860	2.25	1.140	0.080	完形	内に布片付着
2	B-62	2.850	2.10	1.100	計測なし	完形	
3	B-77	2.840	2.10	1.135	0.050	完形	穴に繊維(?)
4	B-27	2.830	2.15	1.150	0.060	完形	外に布片付着
5	B-33	2.800	2.11	1.100	計測なし	一部欠損	内(門)部にねじれ状の繊維、木片
6	B-34	2.800	2.17	1.080	0.055	完形	内に布片
7	B-53	2.800	2.13	1.110	計測なし	一部欠損	
8	B-82	2.800	2.10	1.100	0.060~0.070	完形	内外に布片(平織)
9	B-102	2.800	2.10	1.100	計測なし	完形	
10	B-9	2.795	2.10	1.100	0.060	一部欠損	
11	B-5	2.790	2.15	1.140	0.070	完形	
12	B-91	2.790	2.14	1.120	0.070	完形	
13	B-12	2.780	2.20	1.130	0.050	完形	内に布片
14	B-115	2.800	2.20	1.000	0.050	一部欠損	内に布片付着(平織)
15	B-20	2.760	2.35	1.140	0.060	完形	内に布片
16	C-106	2.780	2.27	1.080	0.060	完形	
17	B-74	2.780	2.20	1.060	0.040	一部欠損	内に布片
18	B-21	2.780	2.20	1.120	0.070	完形	内外に布片付着
19	B-7	2.780	2.20	1.080	0.450	一部欠損	穴と端間糸痕(?)
20	C-131	2.770	2.16	1.010	0.055	一部欠損	
21	B-3	2.760	2.20	1.160	0.070	一部欠損	内に布片
22	C-134	2.780	2.10	1.040	0.060	一部欠損	内に布(?)
23	B-39	2.760	2.30	1.145	0.070	完形	
24	B-13	2.750	2.15	1.100	計測なし	完形	内に繊維(経織)
25	B-65	2.750	2.10	1.100	0.050	一部欠損	内に布片(平織経織)
26	B-66	2.750	2.10	1.100	0.050~0.060	一部欠損	内に布片(平織経織)
27	C-135	2.750	2.05	1.150	計測なし	完形	内に布付着
28	B-59	2.750	2.09	1.110	計測なし	一部欠損	内(門)部に布付着
29	B-61	2.750	2.15	1.080	計測なし	一部欠損	内に布片(平織)
30	B-44	2.740	2.25	1.040	0.080	一部欠損	内外に布片付着(穴の上に付着)
31	B-80	2.740	2.20	1.110	0.060	完形	
32	B-28	2.735	2.18	1.080	0.055	完形	
33	B-38	2.720	2.16	1.120	0.075	完形	内に繊維
34	B-104	2.720	2.30	1.070	0.060	完形	内に布片
35	B-15	2.710	2.10	1.050	計測なし	完形	内に繊維付着
36	B-50	2.710	2.10	1.080	計測なし	完形	内外に布(繊維)付着
37	B-17	2.700	2.10	1.100	計測なし	一部欠損	内に布片(平織経織)とねじれ状の繊維
38	B-56	2.700	2.06	1.150	計測なし	一部欠損	
39	B-67	2.700	2.00	1.000	0.050~0.060	完形	内に布片(平織)
40	B-69	2.700	2.10	0.960	0.040~0.050	完形	内に布片(平織)付着
41	B-107	2.700	2.10	1.100	0.070	完形	内に布片
42	B-46	2.680	2.30	1.040	0.070	一部欠損	内に布痕
43	B-85	2.680	2.20	1.050	0.070	一部欠損	
44	B-71	2.670	2.10	1.040	0.070	一部欠損	内に布片
45	B-84	2.670	2.20	1.080	0.060	一部欠損	内に布片
46	B-30	2.660	2.20	1.060	0.055	完形	内に布片
47	B-23	2.650	2.05	1.100	計測なし	一部欠損	
48	B-79	2.650	2.10	1.100	0.060~0.070	完形	内に布片(経織)
49	B-41	(2.670)	(2.10)	(1.060)	(0.07)	1/3	
50	B-81	2.650	2.10	1.100	0.060~0.070	完形	内に布片(平織)
51	B-26	(2.650)	2.05	1.160	0.060	一部欠損	
52	B-11	2.640	2.10	1.015	0.005	完形	
53	B-25	2.640	2.15	1.140	0.055	一部欠損	
54	B-29	2.620	2.20	1.090	0.045	一部欠損	穴の端間に糸(?)が付着(3穴)
55	B-36	2.620	2.10	1.060	0.050	完形	内に布片、穴と端間に繊維(2穴)
56	B-94	2.610	2.23	1.080	0.080	完形	内に布片
57	B-31	2.610	2.20	1.050	0.070	完形	内に布片付着
58	B-19	2.600	2.06	1.000	計測なし	一部欠損	内に布片(平織経織)
59	B-35	2.600	2.06	1.030	計測なし	一部欠損	内に布片(平織)
60	B-37	2.600	2.10	1.050	0.080	完形	内に布片、骨片
61	B-45	2.590	2.08	1.040	0.060	完形	内に布片付着
62	B-47	2.610	2.10	1.005	0.060	完形	内外に布片付着(平織)

3. 装身具

No	取上げNo	直径	立上り直径	高さ	厚さ	残存	備考
63	B-54	2.600	2.05	1.000	計測なし	一部欠損	内の土中に繊維と小木片
64	B-68	2.600	2.00	1.000	0.050	完形	内に布片(平織)付着
65	B-83	2.600	2.00	1.100	0.060~0.070	完形	内に布片(平織)と皮質
66	B-100	2.600	1.95	1.100	0.070	完形	
67	B-105	2.600	2.00	1.100	0.070	完形	
68	B-108	2.600	2.00	1.050	0.050	完形	内に布片(平織)付着
69	B-110	2.600	2.05	1.100	0.070	一部欠損	内に布片(平織)付着
70	B-113	2.600	2.00	1.000	0.050~0.060	完形	
71	C-107	2.600	2.25	1.080	0.060	一部欠損	内に布片(平織?)
72	B-114	2.600	2.10	1.000	0.050	完形	
73	B-48	2.590	2.00	1.140	0.070	完形	内外に布片付着
74	B-86	2.580	2.10	1.140	0.070	完形	
75	B-103	2.580	2.15	1.100	0.050	一部欠損	
76	B-4	2.580	2.05	1.030	計測なし	完形	内外に繊維
77	B-101	2.560	2.08	0.990	0.070	完形	
78	B-106	2.560	2.10	1.130	0.070	一部欠損	
79	B-18	2.550	2.10	1.000	計測なし	一部欠損	外に布(数本)経織織(畳目状)内に繊維
80	B-51	2.550	2.06	0.900	計測なし	完形	内に木片
81	B-57	2.570	2.00	1.000	計測なし	一部欠損	凸(外)部凹部に布
82	B-58	2.550	2.06	1.060	計測なし	一部欠損	凹(内)部に布塊
83	B-60	2.560	2.02	1.090	計測なし	一部欠損	凹(内)部に布
84	B-75	2.550	2.20	1.100	0.050	完形	内に布片
85	B-118	2.550	2.05	1.050	計測なし	一部欠損	
86	C-132	2.550	1.98	0.950	0.070	一部欠損	
87	C-133	2.550	2.15	0.900	計測なし	一部欠損	外に布片付着(平織)、潰れている
88	B-92	2.530	2.15	1.080	0.080	完形	内に布片
89	B-42	2.545	2.05	1.090	0.070	完形	穴に糸痕(穴と煙間)
90	B-43	2.525	2.10	1.030	0.040	完形	
91	B-72	2.520	2.10	1.035	0.060	完形	内に布片
92	B-96	(2.550)	(2.03)	(1.070)	不明	1/3	
93	C-104	2.510	2.07	1.060	0.060	一部欠損	内外に布片
94	B-6	2.510	2.06	1.100	計測なし	一部欠損	外に繊維(数本)
95	B-14	2.505	2.20	1.085	0.075	完形	外に繊維、金属片付着
96	B-88	2.520	2.10	1.100	0.070	完形	内に布片
97	B-49	2.500	2.07	1.020	計測なし	完形	内に布片(平織)
98	B-63	2.500	2.10	1.000	0.060	一部欠損	内に布片(平織)
99	B-78	2.500	1.90	1.000	0.060~0.070	完形	内に布片(平織)
100	B-90	2.500	1.95	1.100	0.060~0.070	完形	
101	B-112	2.500	1.90	1.000	0.050	完形	
102	B-98	2.500	2.16	1.080	0.045	一部欠損	内に布片(平織)付着
103	B-109	2.500	2.00	1.100	0.060	完形	内に布片付着
104	B-22	2.480	2.10	1.130	0.060	一部欠損	内に布片
105	B-70	2.490	2.15	1.090	0.050	一部欠損	内に布片
106	B-16	2.460	2.05	1.040	0.055	一部欠損	外の穴に繊維付着、金属片付着
107	B-64	2.450	2.05	1.110	0.060	一部欠損	内に布片(経織?)
108	B-76	2.460	2.10	1.140	0.070	完形	内に布片
109	B-32	2.410	2.06	1.130	計測なし	一部欠損	内に布片(平織)
110	B-73	2.430	2.00	1.150	0.050	完形	内に布片
111	B-93	2.410	2.06	1.140	0.050	完形	
112	B-97	2.350	1.94	1.100	0.060~0.070	完形	
113	B-99	2.350	2.07	1.090	0.050	一部欠損	内に布片
114	B-87	2.390	2.10	1.160	0.080	完形	内に布片付着
115	B-55				不明	1/3	

地に接着して縫い付けられたスパンコール様のもの
であったことを示しているといえよう。しかも、一
部には凸面部に付着しているものも認められること
から、この金銅製半球形服飾品を縫い付け、飾られ
た布帛は、その出土範囲から見て、遺骸に着用され

たか、あるいは、遺骸の体部を覆うように畳んで置
かれた繻女ではなかったかと推定される。残存した
繊維物質のなかには、織りの種類に、平織り、綾織
りのものが存在するとともに、異なる経糸からなる
織布で経織を推定できるものも認められる。綿・綾

第3章 遺物

を表地とした衣服に鑲められた服飾具であったのであろう。

総数115点にのぼる本資料についての、個々の計測値については、第4表に掲げている。その大きさは、全体径において、最大のものが2.86cm、最小のものは2.35cmであり、第5表のごとく分類される。

第5表から、本金銅製半球形服飾品は、全体径の大きさと、最大のもとの最小のものとの間には0.51mmの差があり、最も多くを占めているのは、径2.60cmを中心に、2.50～2.69cmの範囲に93点が集まっている。直径2.80cm以上は10点で、また直径2.40cm以下のものは11点である。これを本体部径について見ると、直径2.30cm以上、最大径は2.35cmのものは4点、その多くは、直径2.0～2.29cmの範囲に集まって

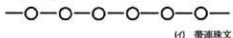
第5表 金銅製半球形服飾品の大きさの分類

全 体 径	(1)直径2.80cm以上	10	最大径2.86cm 1点存在
	(2)直径2.70～2.79cm	31	
	(3)直径2.60～2.69cm	30	
	(4)直径2.50～2.59cm	32	
	(5)直径2.40～2.49cm	8	
	(6)直径2.35～2.39cm	3	最小径2.35cm 2点存在
	(7)不明	1	破損品
	合 計	115	
本 体 径	(1)直径2.30～2.35cm	4	最大2.35cm 1点存在
	(2)直径2.20～2.29cm	19	
	(3)直径2.10～2.19cm	48	
	(4)直径2.00～2.09cm	37	
	(5)直径1.90～1.99cm	6	最小1.90cm 2点存在
	(6)不明	1	破損品
	合 計	115	
高 さ	(1)全高1.10～1.16cm	52	最大高1.16cm 2点存在
	(2)全高1.00～1.09cm	57	
	(3)全高0.90～0.99cm	5	最小高0.90cm 2点存在
	(4)不明	1	破損品
	合 計	115	

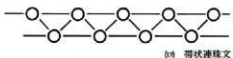
いて104点を数える。小形の1.90～1.99cmのものは、6点で、最小径のものは、1.90cmのものが2点存在する。円丘の高さについては、最大が1.16cmで2点存在し、最小は、0.90cmで、これも2点が存在する。大多数が1.00～1.16cmの範囲に集まっていて、109点がある。0.99cm未満のものは5点（最小径の2点を含む）である。以上のことから、本金銅製半球形服飾品は、大形品、あるいは、小形品を“役物”としたデザインがなされ、繡文に表現された図柄の主要部位を装飾したものであろうことが推定される。その紋様構成としては、第25図に示す(1)連珠文様、

(2)波文（鋸歯文）違之連珠文様、(3)亀甲繫ぎ文様、(4)青海波繫ぎ文様、他に葡萄状文様などが他例から類推されるが、それを断定し得る資料は腐失している。その可能性が存在するという指摘に止めて置くことにする。

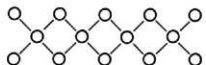
(1) 連珠文様



(イ) 帯連珠文

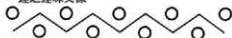


(ロ) 帯状連珠文

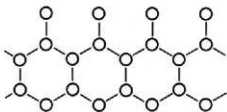


(ハ) 格子状連珠文

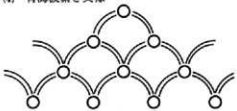
(2) 波文（鋸歯文）
違之連珠文様



(3) 亀甲繫ぎ文様



(4) 青海波繫ぎ文様



第25図 裝飾の文様構成（推定）

(5) 金銅装飾付太帯 (付図3)

① 出土状態

屍床右壁際、奥壁右隅部から60cm離れた部位の屍床床側部の溝状の凹みに落ち込んだ状態で存在した(第10図)。木質などの有機質を含む腐蝕土に埋まる状態で、鈴を吊る鑿り穴のある側縁部を上位に位置していた。残存した金銅装飾板は、太帯表飾の板金で、片端側(左端)から14.20cmの部位に偏円楕円形座付鉸具が装着されており、銀線兵庫鎖で吊った鈴が14個残存したが、腹巻き形に巻いた帯の端部の合わせが「b」字形に重なる着装時の形状をとどめていた。偏円楕円形座付鉸具の装着部位は帯端の重なる部位の外側にあたり、出土時の状態は、本太帯着装時の形状を示しているものと推定された。残存した金銅装飾14個のうち、8個は帯表面側に吊下し、他の6個は帯裏面側に吊下していた。他に鑿り穴に吊下用銀線が残存し、落下していた金銅製鈴も帯間に残存していた。本来は20鈴を吊下したものであることが推定された。これらの金銅製鈴は、帯表面を挿打するように装着され、その機能を完全にしていたと考えられることから、内側に吊下しているものは、この太帯の副葬時から時を経て、側溝に転落した時に反転し、内側に吊下する状態を来したものと推定される。本太帯の副葬時は、屍床右壁際に置かれた案の類の、いわば置台上に配置されていたものと推定され、これは、右側壁際の副葬遺物群についても同様であったと思われる。付近の右側壁際に残存した木質等の有機質腐蝕土は、その残存であったと考えられる。

ところで、本太帯の内側下部には銀装刀子類(5本)が一括で置かれた状態で出土し、そのうちの1点は、本太帯鉸具の裏留め金の部位に銀線で結び付けられていた。帯裏部内懐に銀装刀子を、その着装時には差していたものであったことをうかがわせる。また、奥壁隅部に立て掛けて置かれていた大刀の鞘部が本太帯と側壁部との間に立て掛けて置かれていたことも、帯表面に付着し、残存した鞘部木質の付着痕跡から同定できる。同大刀は、調査時に盗

難により、紛失しているが、石室開口時の現況写真から見て、鉄製鐙を装着し、柄部茎子を露出している様子が看取できる。しかし、柄頭部の刀装金具類は、太帯周辺に見えられておらず、装飾大刀類ではなかったことが推定される。同大刀が本太帯とセットをなすものであった可能性は考えられないことでもないので、発掘時の状況を記し添えることとする。

② 材質および形態の特徴

本太帯は、鍍金を片面に施した金銅板製で、その板材は厚さ0.05~0.07cm内外を計測する。この厚さ0.05~0.07cmの金銅薄板を全長105.10cm、幅9.40cmに裁断した長大な短冊形を示す。そうした形態の金銅板の周縁部に帯裏地を懸る鑿り穴を配し、その片側縁部(上縁部)の鑿り穴を用いて、ほぼ、同間隔に吊下する金銅製鈴の銀兵庫鎖を銀線が懸っている。銀線は、鑿り穴を通し、右捻りにして兵庫鎖の一部とを結んでいる。兵庫鎖は、一部に一環のものもあるが、多くは二環繋ぎの1.80cm内外の長さで、鈴頭部位がほぼ太帯中央位の高さに吊下し、その表面を挿打するように意匠されたものである(付図3)。

短冊形に裁断された表飾板金の端部は、両端とも隅角部を直角に切り落したままの形態で、他の事例に見られるような「爪先き」形の丸造り帯端ではない。方造り帯端ともいうべき形状で、帯端もほぼ、均一で、これも他の事例に見られるような中央部幅太の形態でもない。長大な短冊形太帯とすべき形態である。各部の計測値は、第6表のとおりである。

第6表 金銅装飾付太帯計測値一覧 単位(cm)

全長	帯 幅			鉸 具 位 置
	左端	中央位	右端	
105.10	9.40	9.50	9.50	左端位より16.20(芯心部) 上縁より4.50(芯心部)

以上のごとき、大きさの太帯表飾板金の各辺部には、縁部から0.20~0.30cmの間隔を取って一列に2穴一對、処々に1穴の小孔を配している。小孔は、穴径0.05cm内外で、上縁辺に配列する小孔の一部は、鈴吊下用の銀線鑿り穴に共用されている。この小孔の本来の用途は、太帯表飾板金に帯裏地を当て、懸った鑿り穴と推定される。小孔は、2穴一對とす

るものが多くを占めているが、部分的に単独孔のものも存在し、上縁側部に7カ所、下縁側部に3カ所認められる。2穴一対、および1穴の小孔間の間隔は、ほぼ、0.90～1.00cmで配列する。なお、右端部縁部にはこの種の腰り穴の他に、中央位に2.40cmの間隔を置いた一対のやや大き目の孔径をもった表面側から打ち貫かれた孔が配置されている。孔径は、0.15cmである。帯裏地に装着された締め帯の基部を表板金端に固定する腰り穴、または、鉋留め穴と推定される。また、上縁部左端から53.20cmの部位に幅0.70cm、奥行0.30cmの三角形の欠損部が存在するが、本部分が、帯全長のほぼ、中央位にあたることから見て、人為的な刻み目と考えられないでもない。断定は出来ないが、存在する事実の指標にとどめておくこととする。

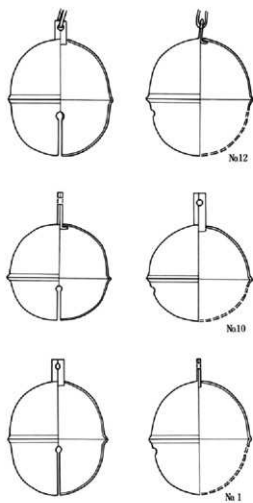
こうした表飾板金の裏面には、目の粗い平織り布の付着痕が各所に残存する。このことや残存有機物質等から見て、帯裏は、綿、あるいは、太織の平織麻布を芯材としたものであったことが推定できるが、帯裏が皮革製か、布地製のものであったか、これを伝えるものは、腐朽して残存していないので断定は出来ない。あえて、その仕様を推すれば、短冊形金銅製表飾板金に皮革、あるいは、布帛で裏打ちし、その縁部に連なる小孔を用いて腰ったものということになろう。

表飾板金の表面には、左端から14.20cmの部位(座金の中心位)に偏平楕円形座金付き金銅製鉋留め1具を装着している。座は、縦位に長軸を取っており、3.30×2.90cmの外径で、縁部に鉋状の接着代をめぐらしている。0.30cm幅の接着代には左右とも3個、上下とも1個宛の円頭鉋を配して、表飾板金の表面に固定している。偏平楕円形座頭部は、2.70×2.30cmで、高さ0.45cmである。鉋留め本体は、この座頭部の中央位と、それに重なる表飾板金部に、縦位置に長さ1.20cm、幅0.30cm内外の長方形穴を穿けて、蝶番離金を装着している。蝶番離金は、幅1.10cmの金銅板を折り曲げて、鉋留め部の軸金を巻き、合わせた足部分を長方形穴に通し、表飾板金の裏面で折り

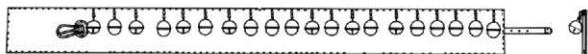
返し、固定している。表飾板金の裏面で折り返し代は、帯端方向に1.90cm、帯内側方向に1.70cmで、その先端部は両隅部を丸造りにしている。鉋留め部軸の太さは、0.20cm内外であることから見て、この蝶番離金は、幅1.10cm、長さ6.50cm前後の板材で、そのほぼ、中央位を折り曲げて頭部を外径0.50cmの環状にこしらえ、足部長2.50cm内外のものとしたもので、その足部を座金高さを残して、表飾板金の裏面に密着するように折り返し、座金部とて表飾板金を両面から挟んで、鉋留めしている。鉋留めは、座金部側部を留める3ヶ所の鉋のうち中央位の鉋を用いている。また、この蝶番離金の帯端方向折り返し部には、鉋留め部に右捻りに掛った銀線が鑿られている。それが、銀装刀子1点を本太帯の内懐に装着した留具であったことは、前述したとおりである。

こうした鉋留め座金の蝶番離金に装着する鉋留め本体部は、両端寄り部位を断面が短形状につぶした径0.30cm内外の金銅丸棒をその中央位で曲げて、茄子形の形態につくったもので、その基部に2段に柄穴を穿けて、蝶番軸金と爪軸金を嵌める。鉋留め本体の全長は、5.30cm。帯通し環部の最大幅は、2.90cm、要部幅は1.70cmを計測する。基部の蝶番軸金と爪軸金の間隔は、0.80cmで、爪軸金幅も1.70cmである。爪部は軸金長が2.00cm内外の爪長4.80cmのT字形の丸棒で、やや先端が細まる。

以上のような仕様を持つ帯本体には、金銅製鉋留め総数20個、表飾板金上縁部の腰り穴に腰った銀線造り兵庫鎖によって吊下され、表飾板金表面を揺打するようにつくられている。それら鉋留めの吊下範囲は、帯右端隅部から帯留め鉋留め座金部位までの約87.00cmの間である。吊下間隔は、必ずしも等分されてはいないが、2穴一対の腰り穴3組に1個の割合で吊下したものが多く、2カ所のみ4組に1個の部位がある。鉋留めが太帯着帯者の胴部を一周する形で吊下されたものとするれば、鉋留め部分に帯右端が合わり、帯裏に装着された締め帯が鉋留めによって緊縛されることになる。胴廻り90.00cm内外で着帯されたことになり、帯表板金の左端部約15.00cmの部位は、右端部



第26図 金銅鍍鈴付太帯付属鈴形態の分類



第27図 金銅鍍鈴付太帯展開復原模式図

(6) 櫛

乾燥が進行する過程で、歯が縦手状に丸まり、変形著しい状態になっている。この状況は出土直後には既に認められている。現在は、破片数18点を数え、櫛歯の先端は14点が残存している。丸まった櫛歯を延ばすとその長さは10.3cmを測る。歯の幅は約2mm、厚さは1mmであった。漆の付着は確認できなかった。これらの破片と共に皮製品が出土している。この部分では、端部をまつり縫いで縦じ合わせた様子が観察できる。

(7) 銅製筒形金具 (第28図)

これまでは杖状木器と呼ばれていたものである。2個体出土している。

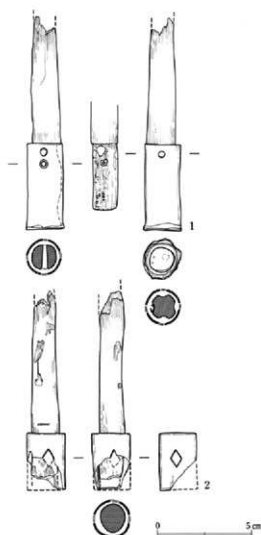
1は、断面円形の棒状品で木製である。端部を銅製の筒形品で覆っている。木質部の残存長は11.3cmで、中位で朽ちている。現状は乾燥が進行して、直径1.5cmに収縮しているが、原形は筒形品の径とほぼ同じ径量であったと考えられ、木質部に金属を重ねた痕跡が明瞭に認められる。木質部は全面に漆を塗布している。筒形品は、長さ4.5cm、直径2.1×1.9cmの円筒状を呈し、厚さ0.3mmの銅板を曲げて、端部を重ね合わせている。筒形品の上端寄りには90度ずつ振れて、対向する位置に直径4mmの小孔が二対穿たれている。そのうちの一对は、その下位、縦列の位置に同形の小孔を穿つ。これは木質部を貫通している。

2も、1同様、棒状を呈した木質部の端部に断面円形の筒形品が装着されたものである。木質部は、残存長10.0cm、直径1.5cmを測る。図中の下端は4分の3が欠損している。全面に漆が塗布されている。筒形品は、長さ3.0cm、直径2.0cmである。側面の中位に、長軸9.5mm、短軸6.0mmの菱形透孔が、4単位配されている。

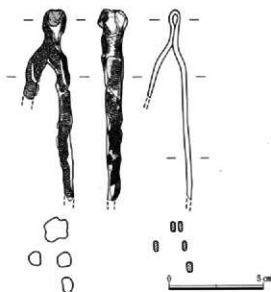
用途は不明である。

(8) 鑷子 (第29図)

断面長方形、幅5mm、厚さ2mmのほぼ一定の形状をした1本の棒状鉄を中位で折り返している。折り返し部分には縦長の環状部分をつくり、その基部を



第28図 銅製筒形金具



第29図 鑷子

強く押さえ込んでいる。2本の舌状部分は、両者ともその先端が欠損している。図中左側の残存長は4.9cm、図中右側の残存長は10.0cmである。

舌状部分内側の一部を除き、その他は全面に布が付着している。剥離面の観察から、布は一枚ではなく、二ないしは三枚が重なって残存していることが確認できる。最上位には織りの粗い布が、その下に織りの細かい、挂甲に付着したものと同様の細かい布目の布の重なりが見られる。環状部分には幅6mmの皮紐が通されていたのか、その一部が残存している。

4. 武器・武具

(1) 大 刀

① 頭椎大刀 (付図5・第31図)

右奥隅寄りの右壁際から、柄頭を奥壁方向に向けて出土した。振り環頭大刀も並行して検出している。柄頭は金銅装鈴付太帯と重なっていた。

本資料は、柄頭から鞘尻金具に至るもので、現状では柄頭、柄から刀身切先、鞘尻金具の3点に分離している。全長117.05cmを測る。

柄は、柄頭、柄頭縁金具、柄間巻、鈔縁金具からなる。長さは17.05cmを測る。柄頭は、柄に対してややうつむくように接続していたと考えられるが、現状においては直接の接点はない。断面は倒卵形を呈し、長径(高さ)9.1cm、短径(幅)6.05cm、長さ7.2cmである。外形は、合計7枚の板金から構成されているが、芯部分は残存しない。ただし、板金の固定に要所所に釘留めがなされている点を考慮すると木芯であった可能性も考えられようか。側面にはその中央に半円形の金具状の金板あるいは金張り板(1)を置き、この外縁を押さえるように、これに幅1.6mmの銀板(2)を回している。この板は、縦線2本により3区分され、中央に二条の波状文様、その両端の区画内に長方形の打ち出し文を配している。これらの文様は木地等に施した文様を押圧して打ち出す手法によるものである。さらにこれを側面の柄寄りにお

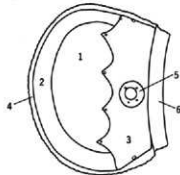
いた頂部4点をもつ王冠状の銀板(3)で押さえている。この板は横線で5段に区分され内区に列点文が施されている。柄頭の中央には幅0.9cmに筋金状に青銅地金張りの板(4)をめぐらしている。この部分には斜方向の刻目状の文様を充填している。この筋金状部分も(2)を留めた銀板で押さえられている。これらの板金は要所に長さ3.5mmほどの銀製の釘を打ち、板金の重ねを留めている。

懸通し孔は、外縁径1.5cm、内縁径0.7cmのリング状の薄板(5)に、輪花状の刻みを入れている。他例の矧目金具のように長い足を有するものでなく、4本の釘で留めて固定している。

以上の部品の文様構成は、佩表、佩裏ともほぼ同一である。

柄寄りの端部には幅8mmの青銅あるいは銅地金張りの縁金具(6)がめぐらされている。板の両端は、佩裏で重ね、釘で留めている。この金具は、側面を沈線で3区画し、中央に二重円形文を連続している。円形文は2cm幅内に7個の割合で並んでいる。両端には横位の刻み目が連続する。

柄間は、刻み目を施した銀線を葛籠している。2cmの幅内に10本が纏かれている。刻み目のピッチは1cm幅に15・16本である。全体形状は、背側がほぼ直線状であるのに対し、刃側は柄頭寄り、および鈔縁寄りが長径を増し、下端のラインが弧状をなすものである。葛籠は1本の銀線からなると思われるが、鈔縁寄りでは短い線をU字状に曲げ、線を1本ずつ柄木に取り付けている。この短線の両端は爪状を呈しており、柄木への装着を工夫している。現状では柄



第30図 柄頭の部位

間の中位で長径3.0cm、短径2.0cmを測る。

鐙に接して鐙縁金具が接する。幅0.65cmの断面倒卵形を呈する。長径4.9cm、短径2.9cmの銅地金張りの金具である。器面の文様は、柄縁金具と同様である。柄木の残存は現状では確認できない。

鐙は、長径7.08cm、短径4.65cm、長さ(幅)1.65cmで、銀板をドーム状に成形したもので、木芯と考えられるが現状では確認できない。いわゆる噴み出し鐙の形状に近いものである。器面に施された文様は、柄頭の筋金状部分と同様で、側面(佩表側)からみた時、右下りの刻目状文様を充填している。また、両小口面には長方形の打ち出し文が2列一周している。

刀身は、全長で109.6cmを測る。全体にやや錆膨れしている箇所が目立つ。また、鞘木の残存と考えられる木質が多く付着している。茎部分は、X線透視により鐙からの長さが17.5cmを測る。胴部中位での幅は約2.1cm、背の厚さ0.8cmである。茎尻は直線であるが背側は隅を欠しているか。胴部の中位に目釘が3カ所認められる。関の形状は不明瞭であるが、背側は直であることから片関の可能性が高い。

刀部は、全長89cm前後、平棟、平造りである。鞘口金具近くで刃幅4.5cm、背の厚さ9mmを測る。断面形は二等辺三角形である。切先寄りでは幅4.9cm、厚さ7mmとなっている。

刀身には鐙に接して鞘口金具が、さらにこれから23.8cm鞘尻寄りの位置に鞘間金具が装着されている。鞘口金具は銀製の板金を筒状にしたものである。長さ5.18cm、長径5.1cm、短径3.8cmで無文である。現状では佩表側の変形が著しい。

鞘口金具の両端には資金具が付く。銅地金張りである。幅0.81cmのリング状を呈するもので、側面の文様は、中央に二重の円形文が並ぶもので、柄頭縁金具と同様である。

鞘間金具は、長さ5.4cm、長径5.2cm、短径3.3cmを測る。佩裏には、横0.9×縦0.55cmの長方形の孔が縦位に現状で3カ所(もう1カ所存在すると思われる)ある。本資料には足金物の存在がみられないことか

ら佩用の為の帯袷の装置と考えられる。両端には、鞘口金具同様の資金具が各1個配されている。

鞘尻金具は、長さ6.3cmの筒状を呈している。断面は、やや扁平な倒卵形で、柄寄りの端部で長径4.7cm、短径2.8cmを測る。鞘尻に向けてその径をやや減じている。銅地銀張の板金をまるめ、刃側で重ね、2カ所を銀留めしていると考えられるが外面にはその痕跡が表れていない。現状は筒抜け状態である。端部には鞘口金具の両端に取り付けられたのと同様の銅地金張りの資金具が装着されていたと考えられる。長径4.5cm、短径2.6cm、長さ6.7cm、厚さ1mmである。文様構成も他の資金具と同様である。

なお、刀身のX線透視により茎元近くに鐙が装着されていることが確認できる。長さ1.8cmである。また、刀身の鐙元に径0.6cmの孔が穿たれ、この周囲の刀身面に佩表、佩裏ともに象嵌が施されていることが確認されている。象嵌は、孔を二重円で囲み、その外側に連弧文8単位を施している。

② 振り環頭大刀 (付図5・第32図)

玄室右奥隅寄りの右側壁際から頭椎大刀と並列して側壁際から出土した。柄頭は奥壁方向にあった。柄頭の位置は右奥隅から約0.8mである。

検出された刀装具は、振り環頭を有する柄頭、これと分離した鞘口金具・資金具を伴う刀身、刀身から遊離した鞘尻金具である。

柄頭は、小口部からみると平面形が長円形を呈していたと考えられる。木芯からなっていたと考えられるが残存せず、これを覆っていた銀板が背側の一部分のみ検出された。全体の形状は把握できない。長径の残存長は5.8cm、短径は6.3cmである。銀板は小口部から折れ、側縁部にまで延びている。小口部面上には列点文が二重に廻る。2cmに5個の割合である。また、側面にも同様の列点文が一周している。こちらは2cmに7個の割合である。

この銀板には半円形の鉄地銀張りの振り環頭が取り付く。振りの方向は右回りである。環は縦7.5cm、横3.6cmを測り、その径は、長径0.85cm、短径0.61cmである。鉄地に蛇腹状の文様を施し、これに銀張を

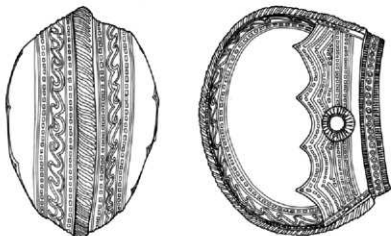
張り、環の内縁側で重ねている。環の末端は脚状に尖り、約1.25cmが柄頭部分に打ち込まれている。さらに基部には固定のため、頭椎大刀の柄巻に用いられていたのと同様の刻み目を有する銀線が2巻しており、この銀線端部も柄頭の板金を穿孔、貫通して地板に打ち込まれている。

柄部分には朽木が存在していたと思われるが腐朽し、木質は残存しない。銀板金具の破片の中には柄頭の鞘側の面を覆っていたと考えられるものがある。この部分に施された文様の構成は、小口部と同様である。また、この部位の形状から、柄の刃側は内彎していたことが想定される。

鞘口金具は、長径6.0cm、短径4.8cm、長さ5.3cmの筒状を呈する。地金の厚さは2.0~2.5mmで鉄製である。器面全体にわたり、銀象嵌により対向する一對の龍を主文様とした文様が展開する。龍はこの金具と重なって存在すると考えられるが現状では確認できない。

鞘口金具に接し、柄元には銀製の刀装具が装着されている。鐔の機能をもっていたものか。筒状を呈する金具で一周せず、背面は開放している。佩表・佩裏には長方形の透孔を設けている。

鞘口金具と接する位置にある貴金具は、2枚の金銅板を鋳留して刀身の周囲を一周させている。長径5.6cmを測る。佩表側の板金は、その端部を背側からやや佩裏へ回りこんだ位置で、刃側も同様に佩裏へ折り返った位置で、佩裏側のもう1枚の板金と重なり、それぞれ並置された2個の鋳で接合している。同様の鋳は、佩表側の中位からやや背側に寄ったところにも2個見られ、こちらは、装飾的效果をめざしたものと思われる。鋳頭の径は0.5cm、鉄地銀張と考えられる。佩表側の板金の幅は2.3cm、これに対し佩裏側の板金の幅は1.6cmと一段狭小となり、その分、鞘口金具との間に帯状の隙間が生じている。貴

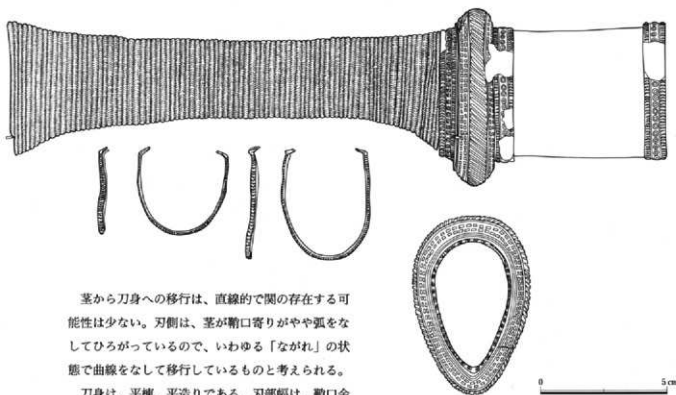


第31図 頭椎大刀柄頭～柄部

金具はもう一つ存在するが、現状では朽木、刀身から遊離し、原状での装着位置は不明である。長径7.8cm、短径3.74cm、長さ2.19cmの金銅製板からなり、無文である。鋳の取り付けも鞘口金具寄りの貴金具と同様で、佩表・佩裏ともに2個が並列している。

鞘尻金具は、鉄製の円筒状を呈するもので、長さ5.35cmを測る。柄寄りの端部は、長径7.63cm、短径4.84cmの断面倒卵形をなし、鞘尻に向かって徐々に径を増している。鉄地金の厚さは3.2~4.5mmである。側面には一對の龍を主文様とする銀象嵌の文様が施されている。内面には鞘木を形成していた木質が多く残存している。鞘尻は、倒卵形の板を側面板に接続し平尻の形状を成すもので、鉄地銀張の鋳が中央に一例5個、周縁に14個の合計19個打ち込まれている。鋳頭の直径は平均、3.5~5.6mmであるが多少のばらつきが生じている。脚の残長は最長で2.1cmである。

刀身は、全長113.2cmである。茎と刀身の境は、鞘口金具などの装着により判然としませんが、X線写真によれば茎長18.7cm以上と推定される。茎尻は、一文字である。茎の幅にもほとんど変化がなく、いわゆる「直」である。中位での幅は約2.9cm、背面の厚さ0.85cmである。器面には朽木の残存と考えられる木質を残す他、出土時には金銅装飾付太帯に垂架した鈴の一部が納着していた。X線透視により茎部には2カ所目釘が配されているのが確認できる。



茎から刀身への移行は、直線的で関の存在する可能性は少ない。刃側は、茎が鞘口寄りがやや弧をなしてひろがっているの、いわゆる「ながれ」の状態を曲線をなして移行しているものと考えられる。

刀身は、平棟、平造りである。刃部幅は、鞘口金具寄り4.3cm、背の厚さ1.0cm、切先寄り、全体の3分の2ほどの位置では幅4.0cm、厚さ1.0cmを測る。切先は、いわゆるフクラ切先である。

全体に木質の残存が顕著であるが、特に、鞘口金具から切先寄り28cm前後では鞘木が原形に近い状態で残存している。その断面は、刃部が尖る倒卵形を呈している。器面には布が巻かれていたと考えられ、幅3mmほどの縞状の痕跡が刀身と直行方向に残されている。

以上の刀装具とともに高さ2.0cm、長さ2.0cmの銀板が存在する。器面に施された文様のあり方や出土時の状況から、調査当時から鞘口の金具の背側に接する装具と考えられている。銀の板金を山形に折り、柄寄りの端部は、90度折り曲げている。中央に透孔を開けて、その周囲を長方形に区画施文している。

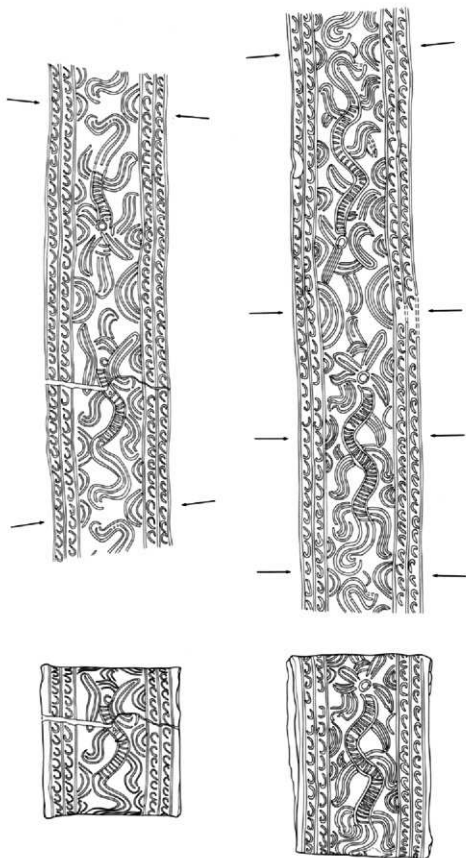
先述のように銀象嵌は、鞘口金具と鞘尻金具の各面に施されている。

象嵌は鞘口金具、鞘尻金具とも基本的に同一の文様で飾られている。象嵌の銀線幅は0.5~0.8mmである。

鞘口金具は、長さ7.3cmのほぼ円筒状を呈し、柄寄りの側縁端部の一週が22.1cmを測る。文様は、器面中央に背方向に頭部を向けた龍を主文様とする。両側縁を3条の直線文で区画し、その内側に縦6mm前後のC字状の文様を各2列ずつ縦列させている。配置の方向は柄寄りりと切先寄りで逆転している。柄寄りの区画内で31単位である。個々の文様は若干隙間を保ち、連続性を欠くものである。

佩表の龍の全長は10.6cmである。

佩表・佩裏の両方の龍とも大刀の背の方向に頭部を向けて配置されている。文様の進行為著しく背腹の判断が困難であるが井田川茶臼山古墳出土例の龍の舌が下向（腹側）であることを参考にすれば、佩表側の龍は、背中を鞘尻方向に向けていることになる。これに対し、佩裏側は背中を柄方向に配している。佩裏側の龍の全長は7.9cmである。頭部は上顎・鼻の表現が簡略化されている。耳は細部の区別が省略され、一連の弧線で描かれている。舌は下向に、下顎は直線的であり、顎髭は鱗状で反りも逆である。頭部の中央には径0.35cmの円文が配されている。目



第32図 振り環頭大刀鍔象嵌

を意識したものであるか。位置的には他例よりも下位にある。

胴部は幅0.5cmほどで表現され、大きく波状にうねっている。尾は下向きに巻いている。頭部寄りには横方向に細分され鱗状を呈している。尾寄りは縦方向に二分されている。

胴部からは、背中側に1本、腹側に1本、合計2本の脚が位置をずらして配置されている。ただし、この脚は魚の鰭状を呈し、後向きに取り付いている点が本来の龍における羽毛の表現と同じ表現方法となっている。

佩裏側の龍は全長7.2cmを測る。基本的には佩表のそれと同様の表現がされているが、頭部の表現が円文を基点に四方向に各部位が延びている。胴部は振幅の幅が小さく、動きが少ない表現となっている。2本の脚は対をなすよう胴部から延びている。

龍文と側縁の区画文の隙間には複数の重弧からなる半円文が弧を内側にに向けて配されている。背側、2つの龍の向合った頭の隙間には四糸1単位の重弧文が2単位対向する。刃側も対向する位置に柄側に2本1単位の、切先側は3本1単位の重弧文がみられる。これらは柄側で龍の足の表現がくずれたものを含め2単位、切先側では3単位が数えられる。

鞘尻金具は、背側の長さか7.5cmを測る。鞘尻に向かってわずかにその径を増やしているため周囲の長さは、柄側で27.4cm、鞘尻側で28.0cmである。鞘口金具同様両縁に三条の直線を一周させ区画をなし、その内にC字状の文様を縦列させている。最も柄寄りの区画内に32単位（うち1単位は、器面の剥落のため欠損）が認められる。最も鞘尻寄りの区画内には36単位（うち2単位が欠落）が配されている。

主文様である龍は佩表側で全長13.7cmである。

鞘尻金具は棟側が膨らんだ卵形を呈し、佩表・佩裏それぞれに一頭ずつの龍が大刀の背側に頭を向けて天地を逆にして配置される。すなわち、佩表側の龍は頭頂を柄方向に、腹を鞘尻に向けている。これに反し、佩裏側は頭頂を鞘尻に、腹を柄頭に向けているという構成である。佩表の龍の胴部は鞘口金具と同

様、頭部にある径0.5cmの円文を起点に波状に大きくうねっている。尾の先端は下向きに巻いている。胴部の幅は0.55cm、尾寄りの3分の1を除いて、内部を1～1.5mmの間隔で直線により細分し、鱗を表現している。鞘口金具より鞘尻金具のほうが割が長くなり、鱗表現をなす割合が増している。前後の脚は、製作工人が、本来の龍の脚の形状を理解していなかったため、胴部から交互に4本鱗状表現が後向きに延びている。腹側の後脚にあたる部分は爪状の突起が付随している。これが本来の脚を表現したものと考えられる。

佩裏側の龍の全長は10.5cmである。佩表の龍と同様、円文を起点に四方に顎や耳が延び、それぞれが頭部の一部を表現していたと思われるが、本来の龍の姿からはほど遠い表現となっている。頭頂側にはたてがみのなごりとみえる爪状の表現が残っている。大きくくねった胴部からは腹側に3本、背側に2本、合計5本の脚らしき突起が表現されており、後方の4本は対をなして延びている。背側の前脚、腹側の後脚には爪状の突起が付随している。

区画内との隙間に内向する重弧の半円文を配置する状況は、鞘口金具同様であり、背側に四糸の重弧からなる大半円文が対向する。刃側も対向する位置に配置されている。この間、龍の側部には佩表の柄側で6単位、鞘尻側で6単位がそれぞれ配されている。

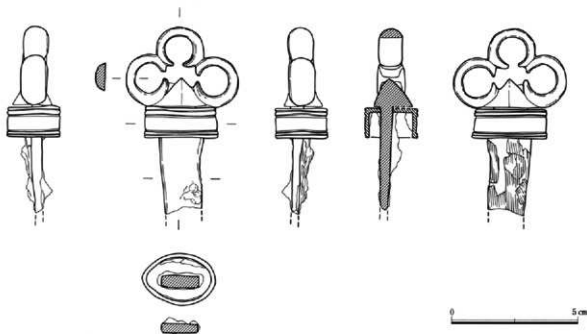
大刀の装具全体をみたとき、佩表では鞘口金具と鞘尻金具の龍は互いが同じ方向に背中を向けた状態に配置されていることが確認できる。反対に佩裏でも二つの龍が同じ方向に背中を向いている。

③ 三果環頭大刀（付図5・第33図）

玄室左奥隅寄りの側壁際から出土した。第Ⅱ次調査時に切先を開口部方向に向けて刀身部分を検出した。その後、史跡整備時の精査により柄頭・鞘尻金具を検出した。他の3本の大刀が右側壁際から検出されたのと対称的な出土状況にある。

現状では柄頭と茎以下の刀身、鞘尻金具の3点に分離している。

柄頭は、銅製の三果環頭で、鍔造と思われる。こ



第33図 三果環頭大刀柄頭

れに鉄製の基部が接視、銅製の柄筒金具が装着されている。基の端部は欠損している。全体の残存長は、7.4cmである。三果環の高さは、3.1cm、最大幅は4.5cmを測る。環の径は、上位の環がやや小振り、横幅が1.9cm、下位の二環は、高さに対して横幅が広く、計測値は縦2.0cmである。幅は、0.95cmである。それぞれの環の断面は、薄い菌傘形を呈し、内縁には工具による調整痕が観察できる。三環の中心を頂点として描出される三角形は、底辺の広い二等辺三角形となる。

これらの環は、側面からみると底辺の広い三角形、上縁からみると菱形を呈する基部の上に乗っている。

茎は、上位で幅1.7cm、厚さ4mmを測る。下位に向けてややその幅を狭め、幅1.5cmとなる。環頭から垂直に延びず、いくぶん折れるように延びている。環頭との接合状態については直接確認できないが、側面からの観察では、接合の位置が佩表側にやや片寄っているようである。これは刀身基部との接点との調整のため生じたものと考えられることもできようか。器面には佩裏側に木質が多く残存していたが、目釘の存在は確認できなかった。

柄筒金具は、高さ1.2cm、幅3.0cmを測る。断面長円形を呈するが、背側より刃側の曲面がやや尖りぎみである。地金の厚さは1.5mmである。上下両端に2条の突帯を付したような弱い稜が形づくられている。

刀身は、全長74.0cmを測る。鍔、鞘口金具が鞘を装着した時点での状態のままで固着している。鍔の口を境とすれば基部は長さ8.7cm、幅2.2cm、厚さ7mmを測る。基尻はやや斜方向に端部を形成している。端部から鞘方向0.9cmに鉄製の目釘の装着が認められる。

また、鍔寄りには柄木をなしていたと考えられる木質が良好に残存、一部に銀装刀子の柄を裝飾したのと同様、菅実を鮫肌状に貼り付けた状況が看取できる。刃部身は、65.3cmを測る。平棟、平造と考えられるが錆化が著しく、特に、切先は錆彫れが著しい。中位での刃部の幅は2.5cm、背の厚さは約5mmを測る。現状、切先寄りは先端の約13.0cmほどが大きくうつむいている。切先は、いわゆるカマス切先と考えられるが明瞭には判断できない。鍔の鞘寄端部で刃側の関を確認できる。直関である。背関は不明である。

鞘口金具は銅製である。最長部で2.3cmを測る。断面は、刃側にやや尖った倒卵形で、縦3.3cm、横2.6cm、厚さ0.1cmを測る。茎寄りの端部は、柄頭の柄筒金具と同様に肥厚させ、弱い稜を有する表現による装飾が施されている。鞘寄りの端部は、佩表・裏とも同形に、いわゆる「くりかた」が施されている。

鞘口金具の下には鐙が重なった状態にある。鞘口金具と同形で、それよりひと回り小規模である。茎寄りの端部には、鞘口金具同様の造作が施されている。長さは3.05cmである。

鞘尻金具は、刀身から遊離している。長さ2.7cmを測る。断面形は、倒卵形をなし、縦2.9cm、横2.2cmである。板金を曲げて筒状にし、これに端部の板を合わせ閉塞している。平尻である。柄寄りの端部は、鞘口金具や鐙と同様の造作が施されている。

④ 直刀4 (第35図)

刀身の一部である。残存長7.2cm、残存幅3.3cm、背の厚さ0.7cmである。平棟・平造りであるが刃部の断面形はやや膨らみをおびている。器面の一部に木質が付着する他には鞘木は残存しない。小片であり断定しがたいが、振り環頭大刀、頭椎大刀の刃部とも刃部幅が異なることから奥壁右隅、壁面に立てかけられた状態で出土した直刀の一部と考えられる。

⑤ 大刀刀装具 (第35図)

5は、幅0.8cm、厚さ0.4cmの一つの板状鉄材を折り曲げ、上位に環状部分を作っている。基部で、両者を強く押さえ込んでいる。環の外径は1.1cm、内径は0.3cmほどである。これから伸びる2本の舌状部分は大きく膨らみを有するが両者とも先端が欠損している。残存幅は2.8cmである。間敷切石に接して出土、右側壁からの距離は75cmである。

図右部分の残存長は4.9cm、左側の残存長は2.6cmである。刀装具の吊手金具の可能性が考えられる。

6は、一部に布が付着している。残長3.2cmである。幅0.5cm、厚さ0.2cmの一つの鉄材を折り曲げ、上位に環状部分をつくっている。環はやや縦長である。横位における外径は0.85cm、内径は0.3cmである。中位基部では、1.3cmにわたり二つの材が接し、やがて

分離、先端は舌状に膨らんでいる。鐙子の可能性も高い。

7・8とも金薄板からなる帯状品である。材質、文様構成から刀装具の一部と想定されるが、先述までの大刀・小刀の部位として所属する個体を断定するだけの根拠を得られなかった。

7は、長さ16.8cm、幅0.5cmである。器面上には長さ0.3~0.4×0.3cmの小判形の文様が35単位連続する。両端の文様は半円状である。文様は、型に薄板を押しあてて表出、あるいは、内側からの打ち出しによると思われ、8も同様の表出方法によるものと考えられる。

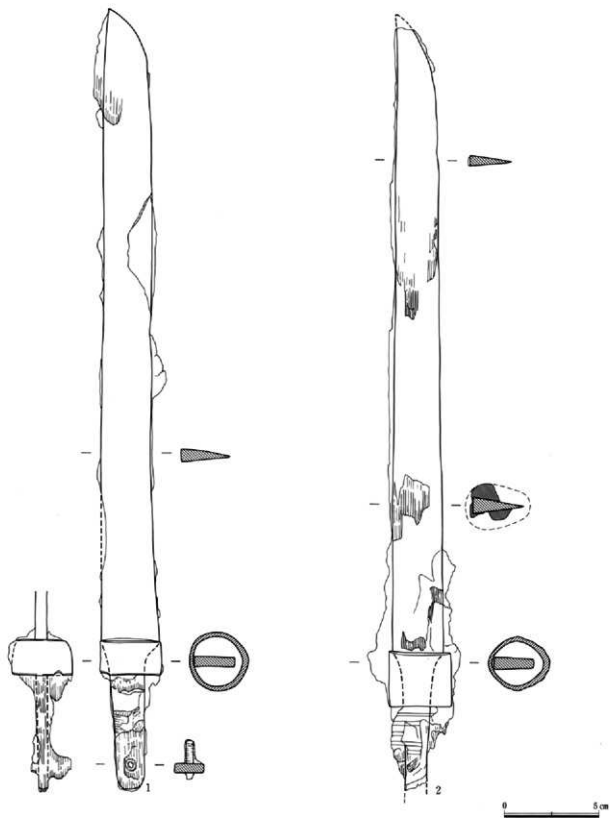
8は、長さ17.75cm、幅0.5cmである。両側縁は裏面にわずかに折り返されていたようである。7同様の小判形の文様が、31単位配置されている。

(2) 小刀

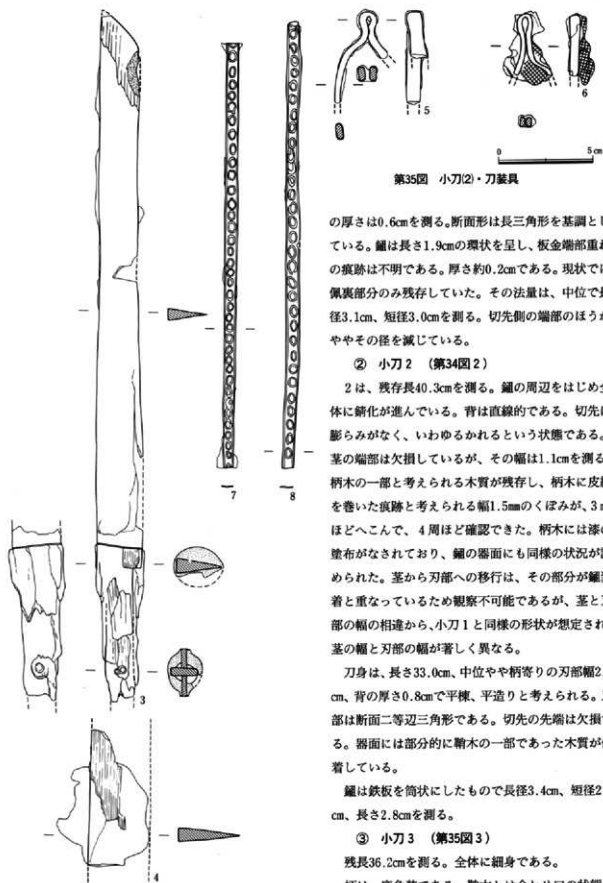
小刀は、3本出土した。いずれも尻床部床面上から出土している。小刀1は、茎が神獸鏡に重なるように出土している。切先は、開口部方向を向いていた。小刀3もこれに近接しての出土である。これに対して、小刀2は茎を金銅装飾付太帯に接するように出土しており、切先は石室の主軸に直行する状態であった。

① 小刀1 (第34図1)

1は、全長43.3cmを測る。刀身とこれに鐙が装着された状態で残存する。鐙の他には刀装具は認められない。基部長は、7.9cmである。茎は、尻側に向かってややしぼみ、茎元と茎尻の幅が異なる。茎尻は曲線をなす。茎尻から刃部寄り1.3cmのところに目釘が貫通して残存する。器面には柄木の一部と考えられる木質の残存が顕著で、部分的に、一部、柄に施されていた巻糸が残存していた。目釘の位置における茎の幅は1.5cm、背側の厚さは0.5cmである。断面台形をなしている。関は、背、刃ともなだらかな曲線を描くが、刃関のほうやや角度をもって刃部に移行する。刀身は平棟で、やや膨らみをもつ平造りと考えられる。刃部長は35.4cm、錆化のため処々の原形が失われているが、中位での刃部幅は2.5cm、背側



第34図 小刀 (1)



第35図 小刀(2)・刀装具

の厚さは0.6cmを測る。断面形は長三角形を基調としている。鐓は長さ1.9cmの環状を呈し、板金端部重ねの痕跡は不明である。厚さ約0.2cmである。現状では佩裏部分のみ残存していた。その法量は、中位で長径3.1cm、短径3.0cmを測る。切先側の端部のほうがややその径を減じている。

② 小刀2 (第34図2)

2は、残存長40.3cmを測る。鐓の周辺をはじめ全体に錆化が進んでいる。背は直線的である。切先は膨らみがなく、いわゆるかれるという状態である。茎の端部は欠損しているが、その幅は1.1cmを測る。柄木の一部と考えられる木質が残存し、柄木に皮紐を巻いた痕跡と考えられる幅1.5mmのくぼみが、3mmほどへこんで、4周ほど確認できた。柄木には漆の塗布がなされており、鐓の器面にも同様の状況が認められた。茎から刃部への移行は、その部分が鐓装着と重なっているため観察不可能であるが、茎と刃部の幅の相違から、小刀1と同様の形状が想定され、茎の幅と刃部の幅が著しく異なる。

刀身は、長さ33.0cm、中位やや柄寄りの刃部幅2.6cm、背の厚さ0.8cmで平棟、平造りと考えられる。刃部は断面二等辺三角形である。切先の先端は欠損する。器面には部分的に鞘木の一部であった木質が付着している。

鐓は鉄板を筒状にしたもので長径3.4cm、短径2.8cm、長さ2.8cmを測る。

③ 小刀3 (第35図3)

残長36.2cmを測る。全体に細身である。

柄は、鹿角装である。鞘木とは合わせ口の状態を

呈していたのであろうか。端部は、背側が刃側より切先方向に2mmほど出ている。ここを境とすると、茎長は、刃側で7.8cm、幅1.4cm、背側の厚さ0.5cmである。断面形は長方形である。茎尻から切先方向に1.5cmに目釘が貫通する。目釘の長さは2.5cm、径3mmである。この目釘に接してもう一つ、径2.5mmの目釘穴が穿たれている。鹿角の残存により関の状態は把握したいが、ともに基部から緩やかに刃部へ移行しているものと思われる。刀身の長さは28.1cm、中位で折れ、2片になっている。切先はカマス切先に近いものの、平棟・平造りと思われる、背は真つすぐ延びている。中位で幅2.1cm、背側の厚さ0.6cmを測る。

器面に一部木質が付着しているが、鞘木は腐朽しほとんど残存していない。切先寄りの刃部に漆の皮膜が付着している。

(3) 刀 子

刀子はその外装の状態から3種類に大別される。1は、銀装刀子で、5点が(第36図1~5)出土した。2つ目は、柄に鹿角を装備した鹿角装刀子で、刀身の残存するもの6点(第37・38図3~6)が確認され、他に鹿角の破片2点(第38図7・8)を図示した。3つ目は、木装の柄を装着したもの、あるいは基部が欠損して装具が不明なもので、あわせて8点(第38図9~17)ある。

① 銀装刀子 (第36図)

銀装刀子は、玄室右奥隅寄りの扉床右側壁際から、金銅装鈴付太帯と重複し、その下位から5本が一まとりになって出土している。そのうちの1点は、太帯の内側に差し込まれた、鉸具の裏留金具と銀線で結ばれた状態で出土している。

これらの銀装刀子は全体を構成する柄木、鞘木、これらを覆う金属板の数量等は同様な状態であるが法量、柄頭の合わせ方、柄の形状などにみられる相違から、1・2と3~5に2分類できる。

1は、全長37.5cmを測る。刀身を取り巻く装具の各部位は、柄頭、柄間、鞘、柄の前後に位置する1対の足金物(柄寄りのものを鞘口の金具、鞘中央寄

りのものを鞘間の金具と仮称する。以下の2~5の資料も同様に扱う)、鞘尻金具から構成される。鞘を除く金属部分はいずれも銀製である。

柄頭の先端は円頭形を呈する。木芯を金具状の2枚の銀板で覆い、背と刃側であわせている。そこに銀留の痕跡は無く、柄間の金具で端部を押さえている。

柄は、細かな格子目状の文様を有する銀板を一周させ、刃側で佩表側を上重ね、柄木に長さ5mmの銀製の釘を打込んで留めている。断面は長円形である。格子目は、裏面から鑿状の工具で打出したものと考えられ、縦が1cm幅内に5列、横が7列である。

柄、刀身は柄頭を除いて鞘に収められており、刀身と鞘口部分の関係はいわゆる呑口式状況にあったといえる。

鞘は、一対の足金物の間についてはほとんど残存しておらず、その構造、材質を把握したい状況にある。

鞘口の足金物以降の鞘木は、木質の上に布の付着が認められることから単なる白木の鞘ではなかったと思われる。断面形は柄や鞘尻金具と同形であったと考えられる。鞘口の足金物は、一枚の銀板を柄間にまわして、刃側で佩表側を上にして重ね、5カ所に銀製の釘を打込んで柄に固定している。残存する釘の残存は2本だけである。吊手部分も同じ板から造り出している。佩用のための孔は縦0.55cm、横0.18cmほどである。鞘口の足金物との間隔は、その中心で約9cmである。

鞘の途中には鞘間の足金物が位置する。形状は、柄口の金具と同様で、背側に鱗状の突出部を有しており、その中の柄寄りに佩用のための孔を有している。この部分は外圧により変形が著しい。孔には布製の紐の一部が残存している。

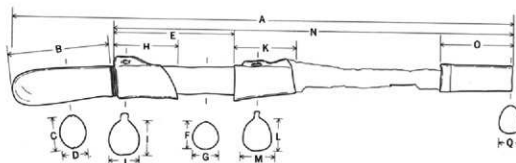
鞘尻金具は、断面倒卵形を呈す。柄寄りの小口端部は鞘木との装着の為かやや外反ぎみである。鞘尻は銀板を置く平尻である。尻側で端部の銀板を折りこんでいる。

刀身は、刃部長が12.15cmと想定される。背側は切

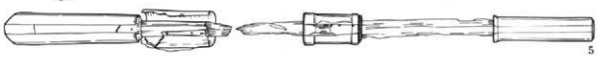
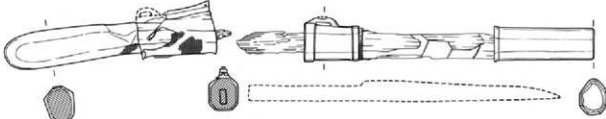
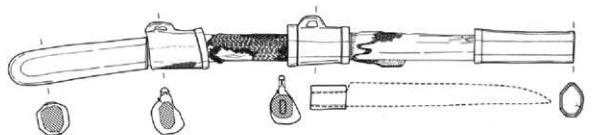
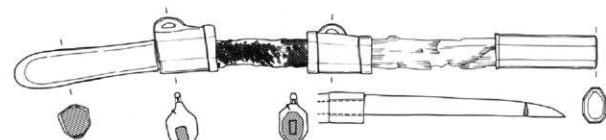
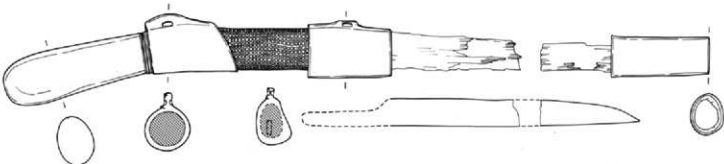
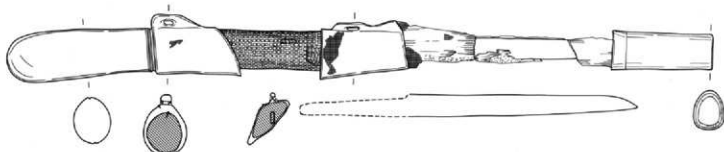
第8表 銀鍍刀子計測値一覧

No	取上げNo	柄			鞘口の足金物			鞘間の足金物			鞘長	鞘尻金具						
		全長	長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅		厚	長	幅	厚			
1	C-93	37.50	7.65	2.45	1.95	(9.00)	2.00	1.90	4.75	2.50	2.30	4.65	2.65	2.25	29.85	5.40	2.10	16.50
2	C-97	37.55	(7.55)	2.55	1.90	(8.60)	2.15	1.60	4.90	2.20	2.40	4.50	2.50	1.75	(30.00)	5.20	2.20	1.75
3	C-94	30.80	7.40	1.80	1.65	9.30	(1.50)	(1.20)	3.40	2.20	1.60	3.40	2.10	1.55	23.50	5.35	1.85	1.30
4	C-98	30.00	7.35	1.80	1.65	8.70	1.40	1.00	3.40	2.00	1.60	3.25	2.20	1.60	22.85	5.25	1.80	1.25
5	C-103	31.20	(7.00)	2.00	1.65	(8.90)			4.30	2.85	2.10	2.90	1.80	1.55	(24.30)	5.30	1.85	1.40

単位 (cm)



- A 全長
- B 柄頭長
- C 柄頭幅
- D 柄頭厚
- E 刃長
- F 刃幅
- G 刃厚
- H 鞘口の足金物長
- I 鞘口の足金物幅
- J 鞘口の足金物厚
- K 鞘間の足金物長
- L 鞘間の足金物幅
- M 鞘間の足金物厚
- N 鞘長
- O 鞘尻金具長
- P 鞘尻金具幅
- Q 鞘尻金具厚



先寄りが、ややうつむきぎみである。最大幅は1.2cm、厚さは中位の背側で約3mmを測る。茎は、鞘口の足金物の中に隠れている。茎と刃部の境、関は鞘口の足金物の右端の位置にあたと考えられ、X線写真によると柄間の大半には茎調部は及んでいない。同様に、刃部の切先は、鞘口金具の尻面にははるかに及んでいない状態であったと考えられる。

2は、1と同形を呈しているが、柄頭は2が若干長く、反対に鞘尻金具は1のほうが長い。現状では、鞘の中位が欠損し、2折となっている。全長は、36.5cm以上である。柄頭は、1に比して先端が下位を向き、全体が、背側を弓弦とすると、その反り返りが強くなっている。柄の格子目状の文様は1よりも粗く、1cm幅に縦が4列、横が5列である。鞘間の足金物は、1同様、銀板を刃側で重ねているが、孔の開けられた位置が、中位からやや柄寄りにある点が1と微妙に異なっている。

刀身は、基部と切先寄りの2片になっている。最大幅は1.75cmである。茎は、鞘間の足金物の中に隠れている。

3は、全長30.8cmを測る。4・5と各部位の法量、形状がきわめて類似している。1・2と比較して小型で、全体に細身の形状である。柄頭は長さ7.55cm、先端は丸みを呈している。木芯(柄頭から柄部分まで同一材から成る)に稜を有する銀板2枚を佩用の表裏から合わせて柄頭全面を覆い、その合わせ目には幅4～5mmの銅地に銀張の細板を筋金状に回し、板の端部、柄口の際で銀製の釘により固定している。柄頭断面は、八角形状を呈しており、この形状が鞘尻金具にいたるまでの各装具に一貫して採用されている。

柄間部分の器面には菅実を1cmあたりに9個ほど並べ、一見鮫皮を巻きつけたような視覚的效果が表現されている。これらは木質の上に漆を使用して固定した可能性が考えられる。

鞘口寄りの足金物も銀板を巻き、端部を刃側で佩表側を上にして重ねて、4本の銀製の釘で固定している。筒形の形状で柄側の端部は弱い稜をなして一

まわり膨らみを増し、厚みを帯びているようにみえる。佩用の孔は、柄頭側に片寄って位置し、側面からの形状は、半円形を呈している。

鞘間の足金物の形状、装着方法は、柄口寄りの足金物と類似しているが、長さ3.4cm、筒形の両端、小口部とも弱い稜をなして帯状のアクセントがついている。

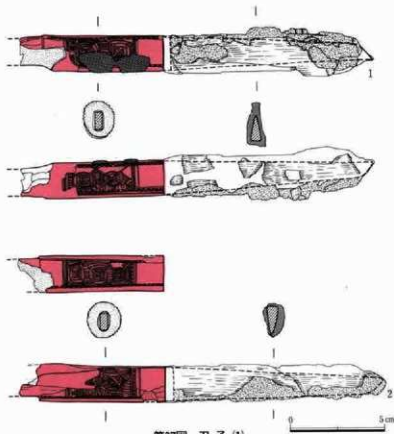
鞘口の足金物以下の鞘は木装であるが、大半が腐蝕し、原形は失われ、刀身に若干の木質が付着するのみになっていた。

鞘尻金具は、長さ5.35cmを測る。柄寄りの小口端部は、弱い屈曲して外反している。鞘尻は平況で、銀板をはめこんで固定、閉塞している。佩裏側の柄寄りの位置に2カ所、釘留痕があり、1カ所には釘が残存している。

刀身の刃部長は、10.7cm、最大幅は1.0cmである。背・刃ともわずかに関をもっているようである。茎の形状、長さは不明である。基部には銀板製で断面八角形の長さ1.9cmの釦が装着されている。

4は、全長30.0cmを測る。各部位の銀板の数量、装着固定の方法などで3と同様の構造である。柄部分には菅実を一面並べている。現在はこの上に、布が残存している。鞘の一部と考えられる。これと同様の布は、鞘間の足金物以下の鞘部分に残存する木質の上にも認められる。布は、漆を塗布して表面を強固にしてあったものと思われる。

5は、柄中位で分離し、2折となっているが、全長30.0cm以上を測る。基本的に3・4と共通した構成である。鞘口寄りの足金物は、これを固定した釘が欠落したことにより刃側の重なりが開放してしまい、内部の木質が露呈してしまっている。鞘間の足金物は、その佩用孔が柄側に片寄って造作されている点が3・4との細かな相違点である。器面に筋状の削痕を有することは3～5、ともに共通する点ではあるが、5の鞘尻金具はその状況が特に顕著である。刀身には鞘木の木質が残存しており、詳細な状況を把握することは困難である。



第37図 刀子(1)

② 鹿角装刀子 (第37・38図)

出土位置は、1・2が屍床左側壁寄り、2本とも神獸鏡に接して出土している。3～6は、屍床右側壁寄り、金銅装鈴付太帯・大刀類周辺からの出土である。

1と2の鹿角装の柄には文様が刻まれている。1

は、残長18.9cmを測る。柄の鹿角は、茎尻側先端を欠損するが、残長7.9cmである。佩表・佩裏の両面ともその中位に上下・左右を直線で区画したその内側に直弧文を基本とした文様が配される。佩表側では間隙に横線文帯をはさんで2単位が配置されている。佩裏の文様も佩表のそれとほぼ同一である。柄の鹿角の部分だけに赤色塗彩が施されている。また、この一部に三重もしくは四重に布の残存が認められる。

刀身の上には鞘が残存していたものと考えられる。木質あるいは漆膜の残存のため、正確な計測値等は確認できないが、刃部は長さ11.2cm、最大幅1.7cm以上である。

柄と鞘は合わせ口状を呈していた

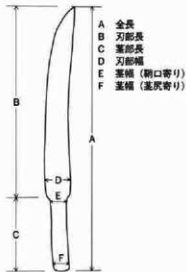
と考えられる。切先寄り、刃側に残存した漆膜上には黒色の二重の半円形文と直線文が描かれている。鞘には漆が全面に塗布され装飾が施されていたものと推察される。

2は、残長19.5cmを測る。柄の先端は欠損している。この資料にも柄の表裏両面に文様が刻まれている。

第9表 刀子計測値一覧

単位 (cm)

No	取上げNo	A	B	C	D	E	F	備考
1	No.2	(18.9)	(11.2)	(7.7)	(1.7)	1.9	1.9	
2	No.1	(19.5)	(11.7)	(7.8)	(1.7)	1.9	2.0	
3	C-95	(15.0)	(9.5)	(5.5)	(1.6)	(1.0)	0.8	
4	C-99	(14.1)	(9.5)	(4.6)	(1.6)	(1.1)	0.9	
5	C-100	(12.9)	(9.5)	(3.4)	(1.4)	(1.0)	0.9	
6	C-102	(16.5)	(12.0)	(4.5)	(1.4)	(1.0)	1.1	
7								鹿角の一部が残存
8								鹿角の一部が残存
9	B-1	(7.6)	(2.6)	(5.0)	(1.5)	(1.0)	(0.8)	
10	B-117	(11.3)	(10.8)	(0.5)	(1.7)	1.0	—	
11	C-63	(5.8)	(4.3)	(1.5)	1.1	(0.7)	0.4	
12	C-85	(8.4)	(8.4)	—	—	—	—	
13	C-138	(12.9)	(10.5)	(2.4)	1.3	1.1	(0.9)	
14	C-75	(6.1)	(6.1)	—	—	—	—	
15	C-83	(10.4)	(5.0)	(5.4)	1.4	(0.7)	(0.4)	
16	F-2	(10.2)	(10.2)	—	—	—	—	
17	C-136	(15.7)	(7.8)	(7.9)	1.8	1.4	1.1	



る。佩表側には長方形の区画内に直弧文状の文様が3単位、横位に並ぶ。佩裏側は、区画内に2単位の主文様とその間隙に条線が配されている。柄全面に赤色塗彩が施されている。

外部からの観察では、刀身の状況は把握できないが、残存長は11.7cmである。刀身部の上には木質と漆膜が残存している。

3～6の4本も柄は鹿角装であった。7・8は、いずれの個体に属するものかは判別できないが鹿角装柄の一部と考えられる。

3は残長15.0cm、刃部長9.5cmを測る。茎の長さは5.5cmである。茎に鹿角の残存が認められるため茎の原形は掌握しがたいが、やや反りを有しているようである。茎胴部の断面は、長円形、幅は1.0cmである。刃部は茎から背、刃ともに関を有しており、柄寄り基部で幅1.6cmを測る。断面は長二等辺三角形である。切先は欠損している。関寄りの佩裏に木質が良好に残存しており、鞘木の残片と考えられる。断面は倒卵形か。この木質には漆が塗布され、この上に布が付着していた可能性がある。

4は、残長14.1cmを測る。茎は長さ4.6cm、胴部の断面は長方形を呈し、皮紐を巻きつけた上に鹿角を装着していた。鹿角の器面には赤色塗彩が施されていた。茎尻から鞘寄り3.5cmのところ目釘が残存している。刃部へは関をなして移行すると思われるが、外観からは判断できない。長さ0.4cm、リング状の編が装着され、佩裏側に残存している。刃部長は9.5cm、切先が欠損している。刃部幅は1.6cmである。断面は二等辺三角形である。刃部には木質が残存しており、鞘木の一部と考えられる。また、器面には漆の塗布が認められる他、皮質の付着も確認されている。

5は、残長12.9cm、2片になっていた。茎尻は欠損している。柄には鹿角が装着される。断面は長円形を呈する。長径は1.5cmである。一部には赤色塗彩が認められた。茎胴部の断面は長方形で幅約1.0cmである。茎と刃部の幅の比較から関の存在が推定されるが、柄が鹿角におおわれているため詳細は不明である。刃部の長は9.5cmか。幅は茎寄りで1.4cm、断

面は二等辺三角形である。全体に木質が付着している。

6は、全長16.5cmと考えられるが、刃部の茎寄りで2片になっている。茎には鹿角の一部が残存し、器面には弧状の刻線により構成された幾何学的文様の一部が残存する。この上には赤色塗彩が施されていた可能性が高い。刃部は先端が欠損しており全様を把握することはできない。茎寄りの刃部幅は1.4cmである。鞘木の佩裏側に良好に残存していた。

7は、鹿角装の柄の一部である。主文様の一部と文様部分を区画する縦線が残存する。器面には赤色塗彩が施される。

8は、鹿角装の柄の一部である。横位の刻線が一条認められる。器面全体に赤色塗彩が施される。

③ 刀子 (第38図)

9～16は、刀子の一部である。柄は木装であったと推定される。

9・10は鹿床中央、金剛製半球形服飾品の一群に近接して出土している。11～15・17は鹿床右側壁寄り、大帯、大刀の周辺から分散して出土している。

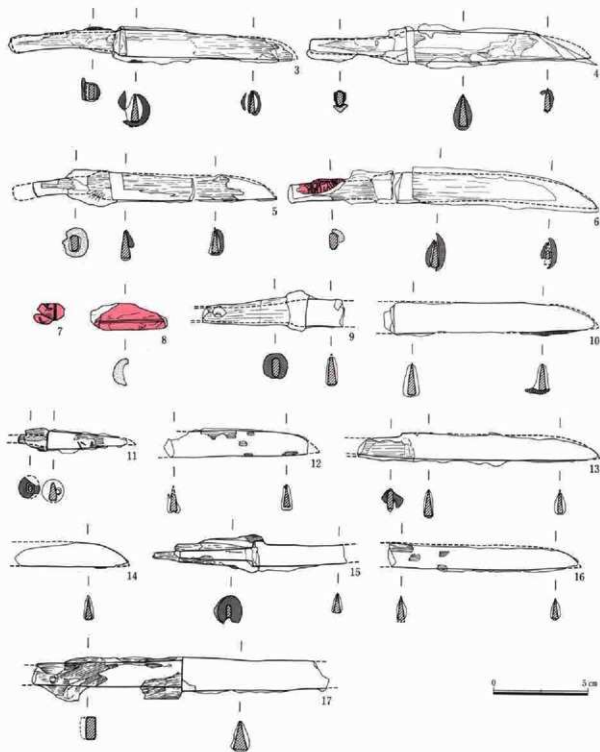
9は、茎から刃部基部にかけての破片である。残長は7.6cmを測る。茎は、茎尻に向かって先細る。中に1カ所目釘を残している。刃部への移行部にリング状の編が残存するが錆化が著しい。

10は、刃部の残存で、残長11.3cmを測る。断面形は二等辺三角形で幅1.7cmを測る。切先寄りには2種の布が重なって残存していた。

11は、残存長5.8cmの小型品である。茎尻、刃部切先のそれぞれ一部を欠損する。茎は、断面長方形、幅0.7cmである。柄は、断面長円形の木装部分が残存しており、器面には漆が塗布されている。刃部側の小口には径3mm、深さ2.5mmの小孔が穿たれている。刃部は、残長4.3cm、最大幅1.1cmを測る。茎との間は両関をなしている。他資料に比して著しく小型である。工具などと同様の役割、性格をおびていたか。

12・13・14・16は刃部を中心とした残存である。

12は、残長8.4cm切先寄りの残存である。13には木装の柄が一部確認できる。刃側に関が認められる。残



第38図 刀子(2)

長6.1cmである。

14も切先寄りの残存で、残長6.1cmを測る。

15は、茎から刀身中位までの残存である。残存長は10.4cmである。茎は茎尻に向かって突るように細

くなっている。長さ5.4cmである。柄は断面長方形の木装で、器面に漆が塗布しているようである。また、刃部寄りではこの上に皮質の付着がみられる。柄木の割れ目から両側であることが観察できる。刃部は

研ぎべりが著しい。その幅は1.4cmである。

16は、刃部の残存である。残長10.2cm、刃幅は1.2cmである。

17は、茎から刀身中位までの残存である。全容が把握できないが通常の刀子より大型であることから小刀、あるいは大刀子として分類される可能性もあろう。残長15.7cmを測る。茎は残長7.9cm、わずかに茎尻が欠損している。断面長方形で最大幅は1.4cmである。茎尻寄り位置に1カ所、目釘が茎に装着されたまま残存する。柄は木装である。刀身は両開をなして茎から移行、刃部の最大幅1.8cm、背の厚さ8mmを測る。

(4) 鉄 鉢 (第39・40図)

石室、左奥隅寄りから鉄鉢9本が出土している。奥壁と、柱甲・鉄鍔の出土位置の間あたり、奥壁からの距離は約0.5mである。8本(1~8)は、第Ⅱ次調査時の出土である。出土時の先端の方向は1が奥壁、2が左側壁、その他は開口部方向を向いていた。残りの1本、9は、史跡整備時に、左側壁、奥壁寄りから2石目の壁に接して先端を奥壁方向に向けて出土した。

石突(10~14)は、5本が検出されている。左壁際から馬具類とともに出土した。先端を下に向け、ほぼ垂直の状態を検出されたことから、左側壁に立て掛けて並べられていたとの調査時の所見がある。この地点での天井と床面との距離は約2.06mである。

10~12が近接して検出された。左奥隅からの距離は約2.5mである。これらとは約45cmの間隔を保って13・14が出土している。左奥隅との距離は約2mである。また、5の鉄鉢との間隔は1.4mである。

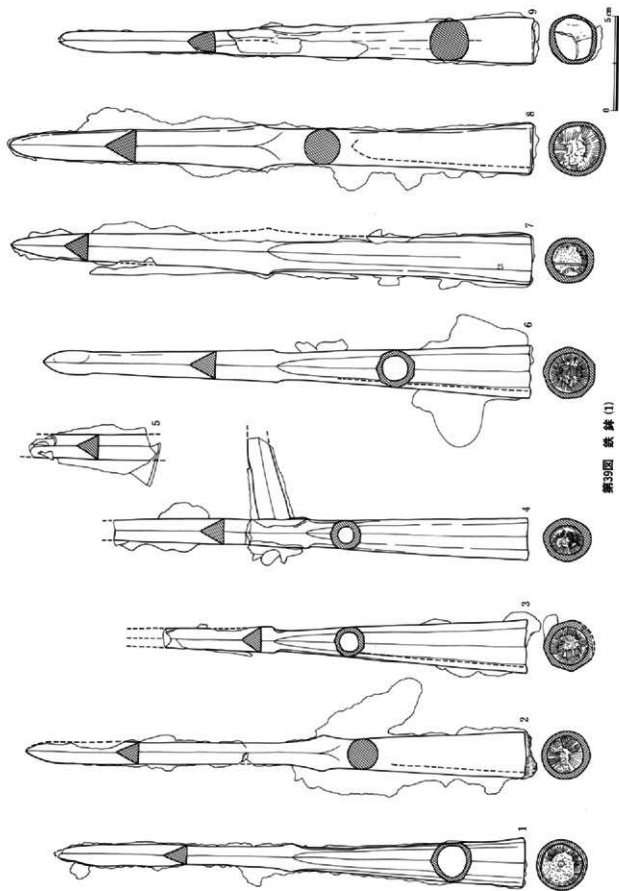
鉄鉢は、全体が錆化、欠損が著しく、今回は、調査直後1970(昭和45)年に図化した図を掲載した。現状では更に欠損が進行しており、9本のうち、5は、身部の一部が残存するだけで、全体形状は把握できなかった。2・5・7~9は完形、1は身の一部が、3、4は身の先端の一部が欠損している。

全体の形状については、細部の流量に相違がみら

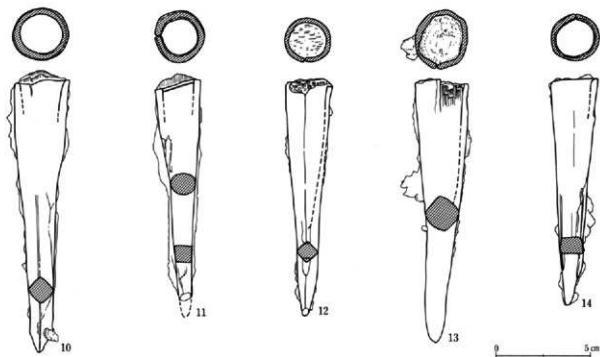
れるものの、共通した特徴を有している。全長は、8の27.9cmを最長に、9の25.2cmの最長までの中に各計測値が含まれている。身部は、断面正三角形の三角造りである。その中で、1は、三角形の一角が狭角をなす二等辺三角形状を呈す。身の長さは、全長に比して、6~9が0.46~0.50であるのに対し、2は0.59と他と比較してその割合が高くなっている。実寸長でも15.8cmと他より長くなっている。関は有関に分類されるもので、身部の下端が三方ともやや裾広がりととなった後、緩やかな弧をなして袋部へ移行している。

袋部の端部には折り込みはなく、全て直裁である。器厚は2.7~3mm前後を測る。2・8・9は、いわゆる円筒袋をなしている。これに対し、3・6・7は、袋部に弱い稜をなしている。3は、端部の形状からは断面形七角形に見えるが、やや形状に乱れが生じており、原形八角袋であった可能性が考えられる。他の2・8・9は、九角袋の範疇に分類される可能性が高い。1は袋部上位での断面形では九角をなすが、下端に至りその特徴は薄れ、稜線は不明瞭になっている。袋部内面には柄の木質が残存している。7のみ、袋部の端部から身部寄り1.8cmの位置に目釘が残存している。他には存在しない。

石突は5本検出された。鉢との組み合わせ(セット関係)は不明である。全体形状は円錐状を成している。器面の錆ぶくれ、剥離が著しく、変形をきたしている部分が少なくない。11は、下端が欠損している他は完存している。全長は、最大の11で14.5cmを測る。袋状を呈し、上端は断面、ほぼ円形を呈している。器厚は2~3mmを測る。現状では上位には袋部の合わせ目が明瞭な隙間をなして認められる。中位に移行するにつれて器面は稜をなし、下位における断面形は四角形となってくる。内面には木質が残存しており、袋状をなす部分の計測値を得ることは困難であった。11は、上端がやや傾斜を成しているもので、木質の残存状況から、柄は下端を柄状に折り込みを入れて、石突の袋状部分に装着されていたものと観察される。



第39圖 箭鏃(1)



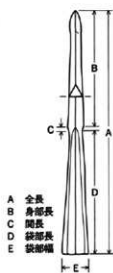
第40図 鉄 錐 (2)

第10表 鉄錐計測値一覧

No.	取上げNo	全長	身部長	身部幅	関長	袋部長	幅	備考
1	No. 1	(24.8)	(12.4)	1.5	0.4	12.0	2.6	
2	No. 3	26.6	(15.8)	2.0	0.6	10.2	2.5	
3	No. 4	(19.1)	(5.9)	1.4	0.2	13.0	2.7	
4	No. 5	(21.9)	(10.2)	1.6	0.2	11.5	2.3	
5	No. 6	(6.7)						
6	No. 7	25.7	12.3	1.6	0.4	13.0	2.7	
7	No. 8	27.4	13.6	(2.5)	0.4	13.4	2.4	
8	No. 2	27.9	13.3	2.4	0.9	13.7	2.9	
9	未注記	25.2	11.7	1.8	0.4	13.1	2.6	史跡整備時出土

石突

No.	取上げNo	全長	幅	備考
10	No. 1	14.5	3.0	
11	No. 2	(11.7)	2.7	
12	No. 3	12.4	2.5	
13	No. 4	13.9	2.8	
14	No. 5	11.9	2.6	



A 全長
B 身部長
C 関長
D 身部幅
E 袋部幅

第3章 遺物

(5) 鉄 鎌 (第47~67図)

① 総貫観音山古墳の鎌の構成と

出土状況について

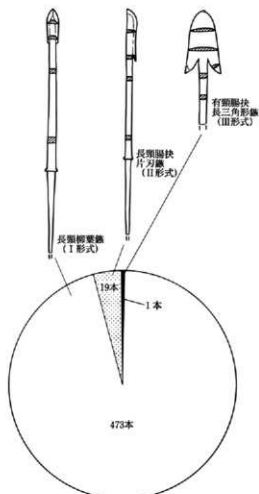
総貫観音山古墳は、後期古墳の中でもほとんど盗掘を受けていない状況で発見されたものである。

その副葬品の組成は、盗掘の多い後期横穴式石室の中で、実態を伺い知ることができる貴重な事例である。

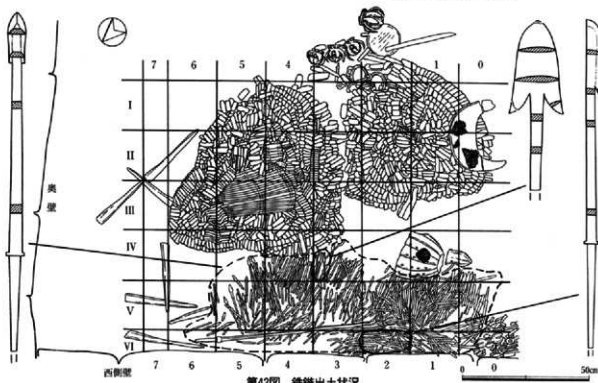
総貫観音山古墳からは、大きく3種類の鎌が出土している。長頸柳葉鎌と長頸脇袂片刃鎌と有頸脇袂長三角形鎌である。それぞれの鎌の出土数は、鎌身をカウントした統計では、長頸柳葉鎌が473本、長頸脇袂片刃鎌が19本、有頸脇袂長三角形鎌が1本である。この構成は、基本的に長頸柳葉鎌が観音山古墳の鎌の基本構成を成す鎌であること、そして有頸脇袂長三角形鎌が広根の鎌として、意識されていることを示している(第41図)。

では、このような鎌の全体構成で、それぞれの型式鎌の出土位置はどのようなものであったか、第42図を参考にしながら簡単に述べてみたい。

鉄鎌は玄室西壁に挂甲と冑などの武装具一式が置



第41図 鉄鎌の形式構成



第42図 鉄鎌出土状況

かれた空間と西壁との間に集中して直刀とともに置かれていた。また、墓群の北側には鉾と石突が置かれており、少し空間をあけて奥壁となる。この鉄鏃を含めた石室の西北隅の空間は武器・武具を集中して配置した空間であろう。

各形式鏃の出土位置であるが、長頸柳葉鏃は数十本のまとまりを有して刃先は石室中心の方に向けて置いてあったのではないかと想定している。また、長頸片刃鏃は墓群の中の西壁よりやや南側のIV-2区に集中して出土し、東になって出土したものと考えている。広根の有頸脇長三角形鏃は、中央部のIV-3区から長頸柳葉鏃と混じって出土した。長頸柳葉鏃は数十種類に分類できるが、特定類の鏃が特定の地区に集中するといったことはほとんど無いので、細かな類ごとの埋納はされなかったものと考えられる。

ほぼ、同時期の大量埋納例で、はっきりと副葬位置が分かるのは、藤ノ木古墳(奈良県)例・牧野古墳(奈良県)例、城山1号墳(千葉県)例などがあるが、それらの鉄鏃の出土状況を見てみる。

藤ノ木例の場合は石棺が奥壁に沿って並行しやや奥壁から空間をあけて置かれていたが、その石棺と西側壁の間の狭い空間に密集して長頸鏃・広根鏃ともに置かれていた。他の挂甲や馬具などは、奥壁と石棺の間に置かれていた。

牧野古墳例では、奥壁と並行して置かれていた石棺と奥壁の間に広根鏃を置き、石棺の斜め、西壁寄りに長頸鏃を4つの群に分けて、矢が壁面に立てかけられて置いたと推定され、長頸鏃と広根鏃を分けて置いていた。

城山1号古墳例では、棺の周囲に形式ごとにまとめて数か所に分散して置いている。

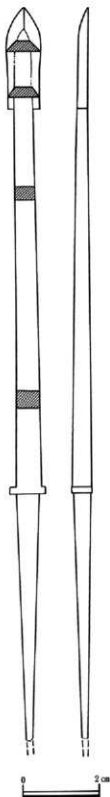
以上のように大量埋納例の古墳でもそれぞれ置き方が異っているが、基本的には、奥壁あるいは側壁の棺に近い位置に集中して置かれる場合が多いようである。観音山古墳もこのような大量埋納例の典型例としてあげられるだろう。

② 長頸柳葉鏃について (第43図)

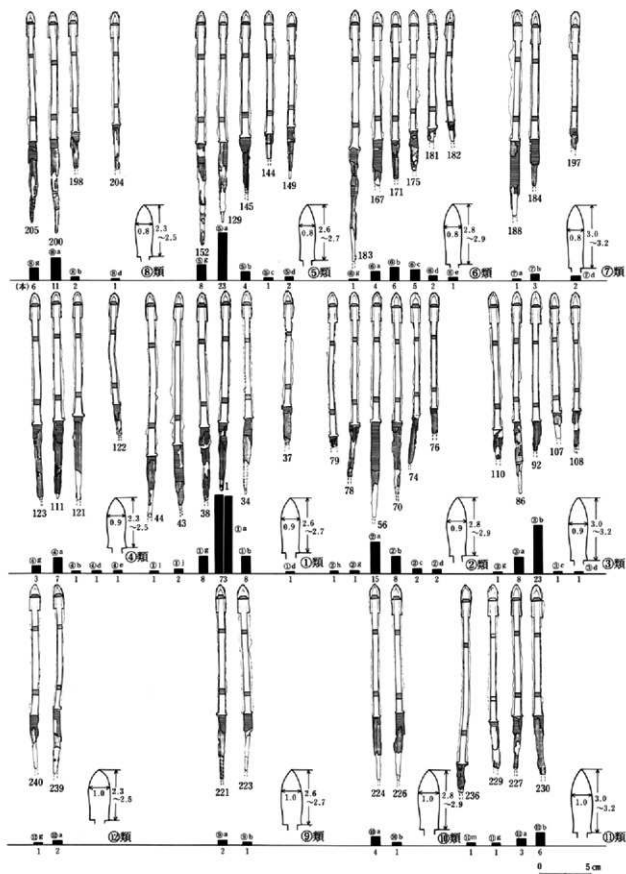
綿貫観音山古墳の出土鏃の中で主要な構成を占める長頸柳葉鏃は総数が473本を数え、一形式の鏃のみでこれだけの大量埋納例は全国的にみてもほとんど無い。この項では、この鏃の概要とそのさらに細かい分類と、本来この古墳に副葬される時にイメージされて制作されたと思われる代表的な類型を抽出する作業をしたい。

長頸柳葉鏃は、鋒よりふくらを有して0.5mmほど内湾ぎみに垂下して鏃身開部に向けてやや外湾し、ふくら部の巾とほぼ同じほどになる、いわゆる柳葉の形をとる。鏃身の巾と長さはかなり個体差があるので、後の項目で分類しながら説明する。刃部の造りは明瞭な片切刃造である。厚みは鏃身の上部では1.5mmほどで、鏃身基部では3~3.5mmになる。鏃身開は、直角開である。

頸部は、棘状開に向けてほんの少しではあるが広がりをみせ、刃部寄りでは巾4~5mmほどで、厚みは3~3.5mmある。棘状開付近では巾6~6.5mmほどで厚みは5~5.5mmになる。棘状開は明瞭に造り出され、1~1.5mmの厚みで、頸部から1~1.5mm程突出する。頸部の長さはかなり個体差が



第43図 長頸柳葉鏃
復原図



第44図 長頸柳葉綴分類図

あるので、後の項目で分類をしながら説明する。

茎はほんの少しの段差を有して続き、茎端に向けて巾、厚みともに細くなる。茎の長さは、完存例がほとんど無いため、はっきりしないがだいたい6～7cmほどである。

次に、この長頸柳葉鐵の細分類を行う。長頸柳葉鐵は刃部の巾や長さにより12分類できる。まず、鐵身巾で大きく3分類(0.8・0.9・1.0cm)し、その3分類したものをさらに刃部の長さで4分類(2.3cm以上2.6cm未満、2.6cm以上2.8cm未満、2.8cm以上3.0cm未満、3.0cm以上3.3cm未満)するもので2つの分類を掛け合わせると12分類となる。そのうち、最も数量の多いものを①類として以下に述べるような分類を行った(①類、巾0.9cm・長さ2.6cm以上2.8cm未満 ②類、巾0.9cm・長さ2.8cm以上3.0cm未満 ③類、巾0.9cm・長さ3.0cm以上3.3cm未満 ④類、巾0.9cm・2.3cm以上2.6cm未満 ⑤類、巾0.8cm・長さ2.6cm以上2.8cm未満 ⑥類、巾0.8cm・長さ2.8cm以上3.0cm未満 ⑦類、巾0.8cm・長さ3.0cm以上3.3cm未満 ⑧

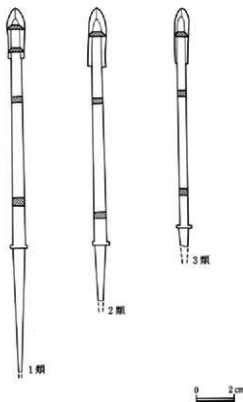
類、巾0.8cm・2.3cm以上2.6cm未満 ⑨類、巾1.0cm・長さ2.6cm以上2.8cm未満 ⑩類、巾1.0cm・長さ2.8cm以上3.0cm未満 ⑪類、巾1.0cm・長さ3.0cm以上3.3cm未満 ⑫類、巾1.0cm・2.3cm以上2.6cm未満)。

また、頸部の長さにより全体的に5cmずつに分類していくとa類9.51～10.00cm、b類9.01～9.50cm、c類8.51～9.00cm、d類8.01～8.50cm、e類7.50～8.00cm、f類7.50cm以下、g類10.01～10.50cm、h類10.51～11.00cm、i類11.01～11.50cm、j類11.51～12.00cm、k類12.01～12.50cm、l類12.51～13.00cm、m類13.01cm以上の計13分類となる。

さきほどの鐵身部の巾と長さによる12分類と頸部の長さによる13分類を掛け合わせると合計では156分類になるが、実際に存在するのは、第44図に示したように49分類となった。この図では、各鐵の形態とその数量をグラフで下に示した。

この図を見ると、分類された鐵の中で3つの集中ポイントがあることがわかる。まず、第一は、頸部長9.51～10.0cm、刃部巾0.9cm、刃部長2.6以上2.8未満の①a類(73本)を中心とする。この①a類に近いものとして⑤a類(23本)、⑨a類(2本)、②a類(15本)、④a類(7本)などがあり、まとまりをなす。次に集中する一群は頸部がやや短めで、頸部長9.01～9.50cmで、刃部の巾0.9cm・長さ3.0cm以上3.3cm未満の③b類(23本)を中心とする。③b類の周辺にも、②b類(8本)、⑪b類(6本)、⑦b類(3本)があり、ひとつのまとまりをなす。最も短い頸部を有する一群で集中するのは、頸部長8.01～8.50cmで、巾0.8cm・長さ2.8cm以上3.0cm未満の⑥c類(5本)を中心にして⑥c類(1本)、②c類(2本)③c類(1本)がある。

以上、49類に分類された鐵のうち、特に集中する3つの鐵を代表するそれぞれの鐵が、この観音山古墳の長頸柳葉鐵を代表する類型として捉えられる。その結果を第45図に示した。この3つの鐵形態をイメージして観音山古墳の鐵は製作されたと考えられ、それぞれを1～3類にした。



第45図 長頸柳葉鐵の3類型

③ 長頸脇片刃鏃について (第46図)

綿貫観音山古墳の長頸鏃では、柳葉鏃とともに、脇片刃鏃が19本出土したが、数量的には柳葉鏃に比べると圧倒的に少ない。柳葉鏃に比べると、均一に仕上げられており、刃部長は3.8~4.0cmで、頸部長は8.0~8.4cmでほぼ統一される。刃部は鋒よりほんの少しふくらを有して内湾し、ほんの少し外湾ぎみになって、外方に開きぎみに逆刺端にいたるものである。逆刺の深さは、0.5cmと浅く、この系統の鏃の中では年代的に下ることを示している。刃の造りは、両方から打ちたたいて造る両切刃造である。

頸部はほぼ直線状を呈し、茎近くになってもほとんど幅広くなることは無い。厚みは、鏃身基部から頸部端に至ると、2mmか3mmほんのすこしではあるが厚くなる。

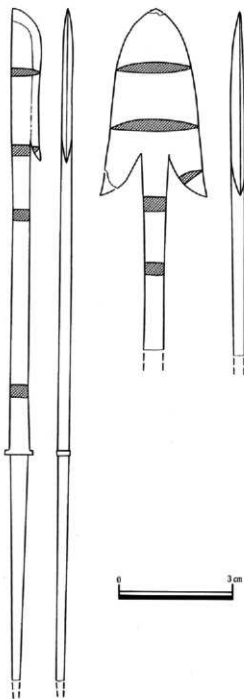
茎は断面長方形で、先端近くまで長方形状を呈する。重さは、約15~16gで、同じ長頸鏃の柳葉鏃が、20g以上あるのに比べると軽量である。

④ 有頸脇片長三角形鏃について (第46図)

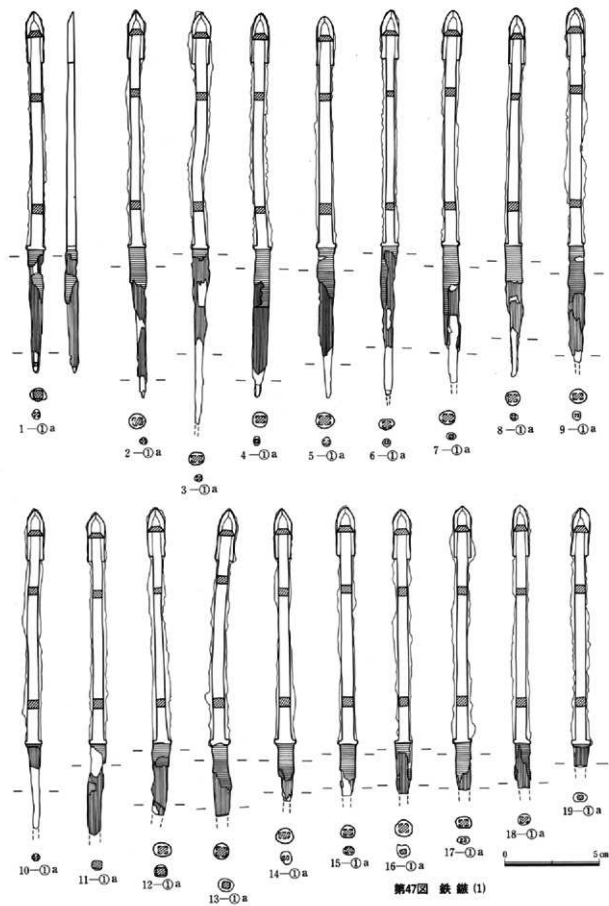
綿貫観音山古墳の鉄鏃の中で1形式1本の有頸で逆刺の深い長三角形鏃である。ただ、柳葉鏃とも近い形態を有し、外形で長三角形と柳葉のどちらにも帰属させるか、判断が難しい鏃である。

刃部は鋒よりややふくらを有した後、やや外方に拡がり、さらに逆刺端の手前でほんの少し外湾ぎみに拡がる。逆刺の内側はややふくらみを持って逆刺端に至る。鏃身の長さは4.8cm、巾は逆刺端の一番巾広い所で、想定長で2.3cmほどある。断面は平に近い両丸造である。厚みは茎の部分の基部付近が最も厚く3.5mmほどであり、刃部は突端基部の厚みが2mmで、基部に近づくにつれ厚くなり3mmほどになる。

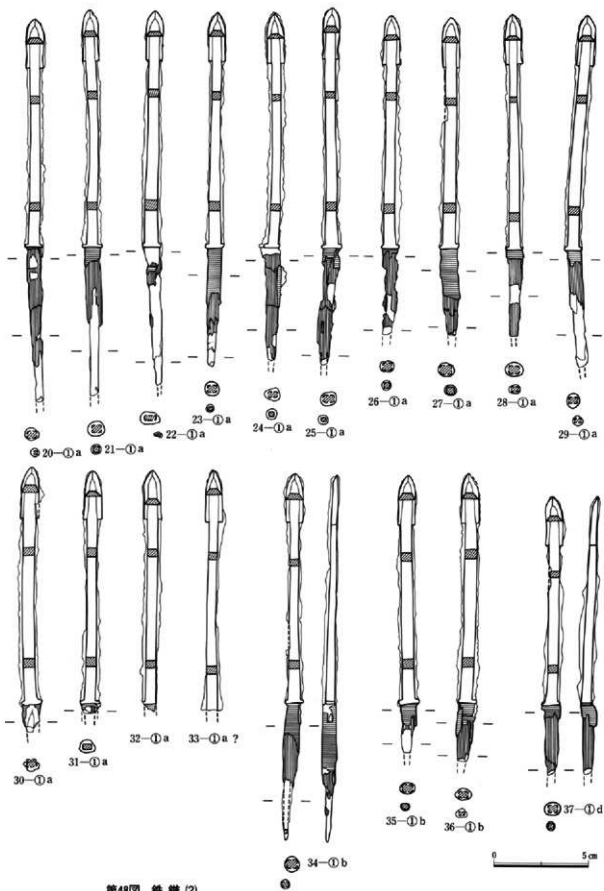
X線写真で観察した結果、頸部と茎の間は無く、基部からだんだんと細くなって、茎端に至る形態のものである。全体に頸部と思われる部分の厚みは薄めて、そのため頸部と茎の区別がつきにくく、頸部の長さははっきりしない。重さは約15gで、広根系の鏃としては平均的な数値である。



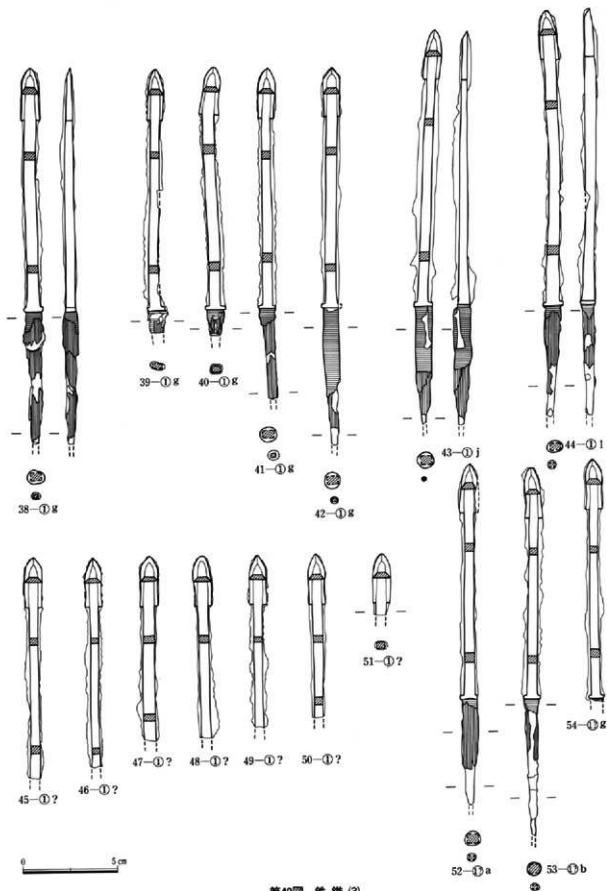
第46図 長頸脇片刃鏃・有頸脇片長三角形鏃復原図



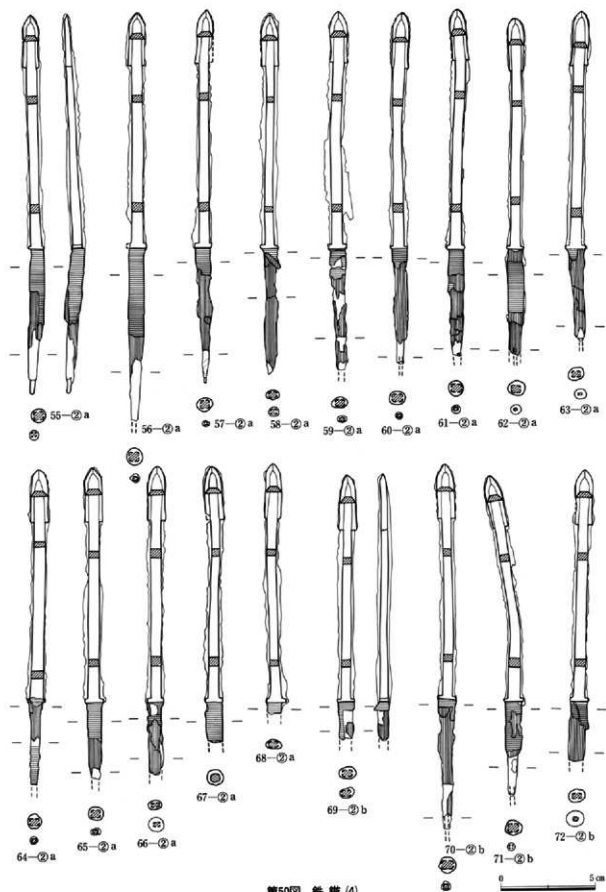
第3章 遺物



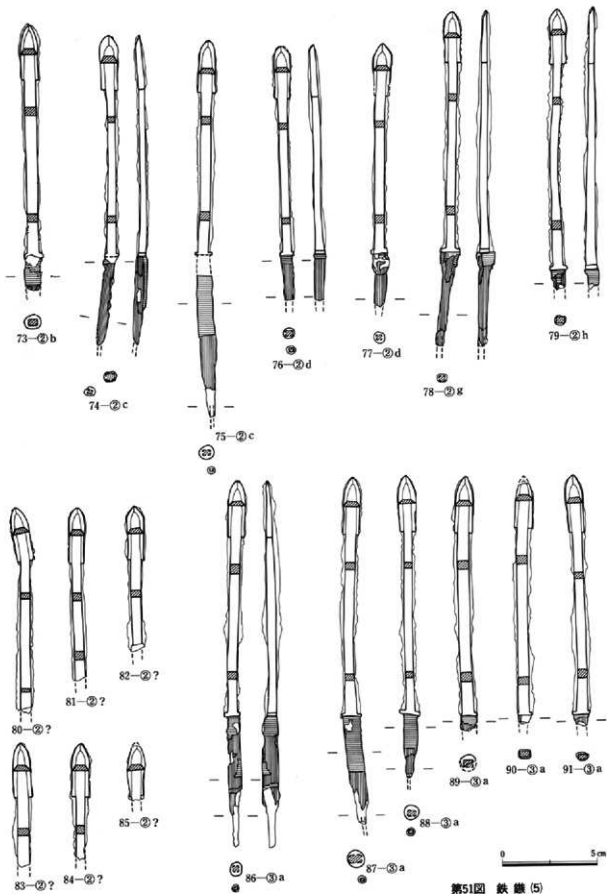
第48図 鉄 鏃 (2)



第49回 鉄器 (3)

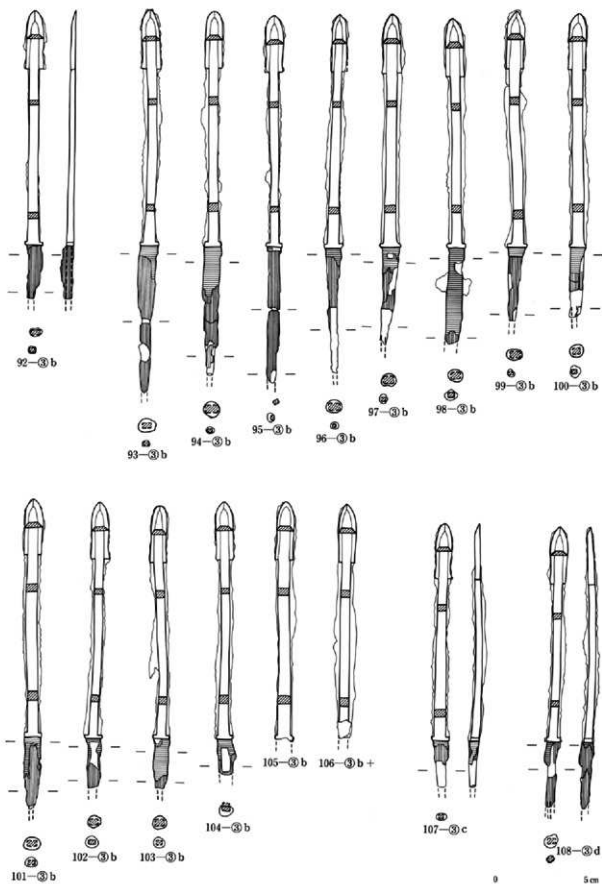


第50図 鉄鏃 (4)

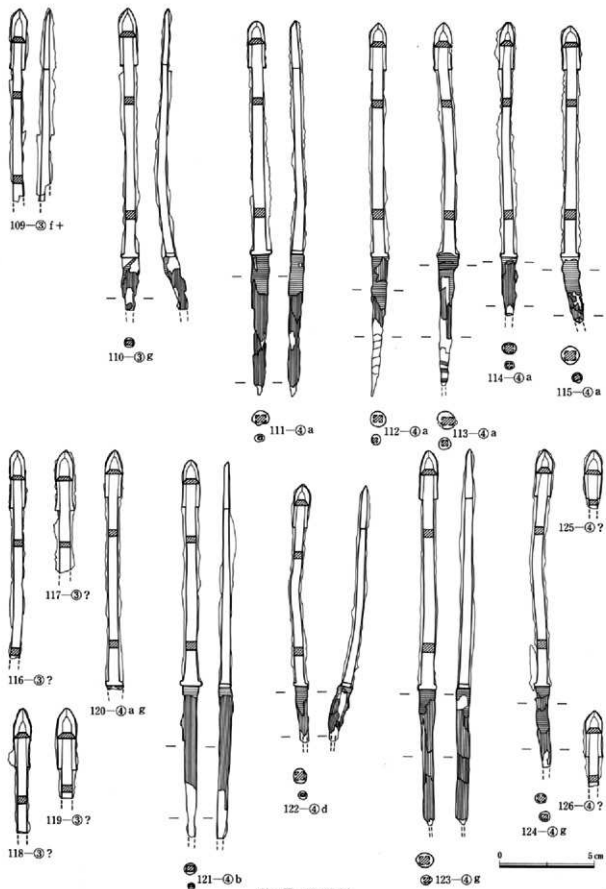


第51圖 鉄鏃(5)

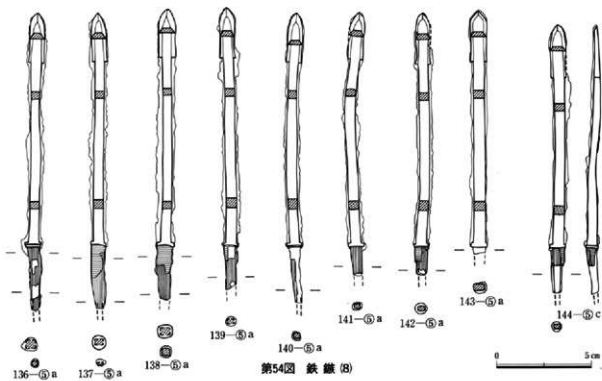
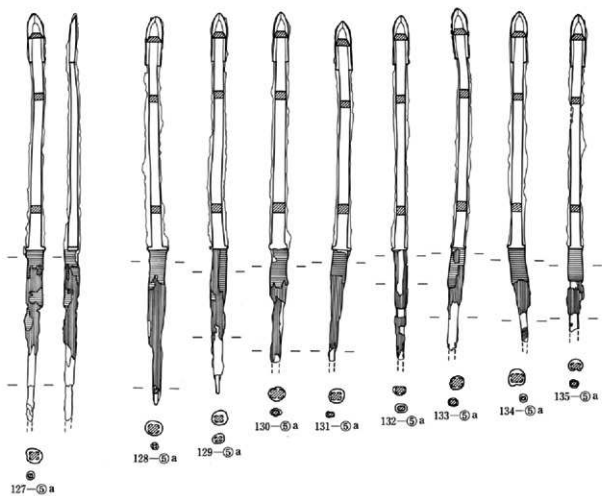
第3章 遺物



第52図 鉄 鐵 (6)

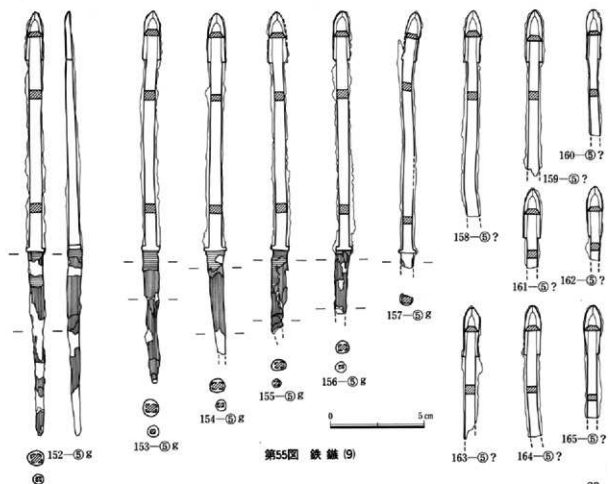
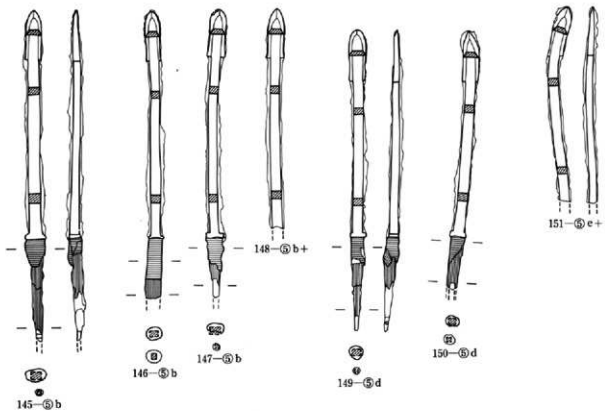


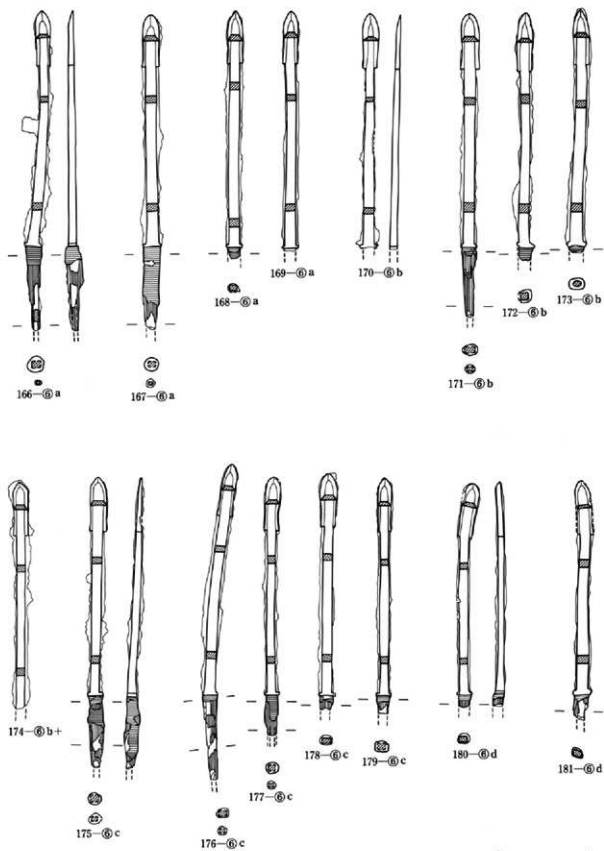
第53图 铁器(7)



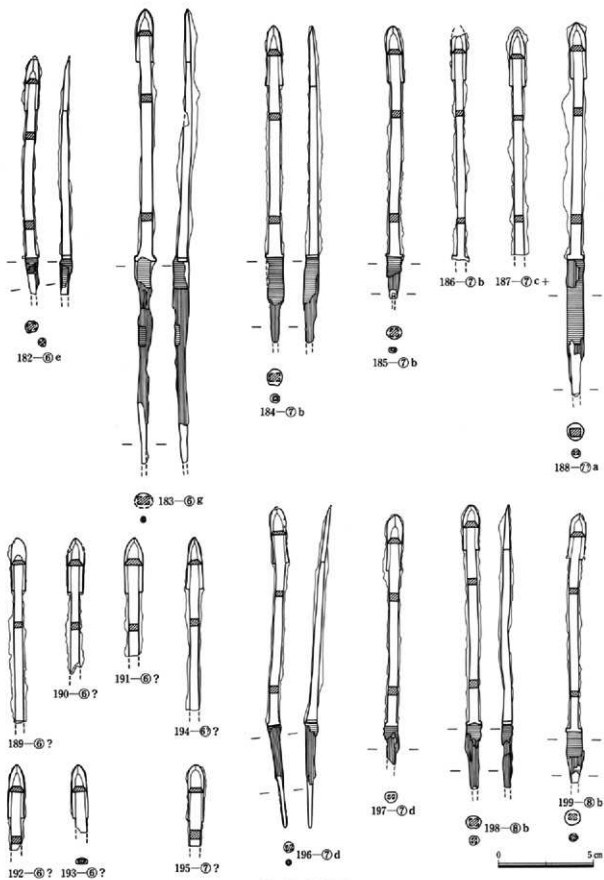
第54図 鉄器(8)

4. 武器・武具

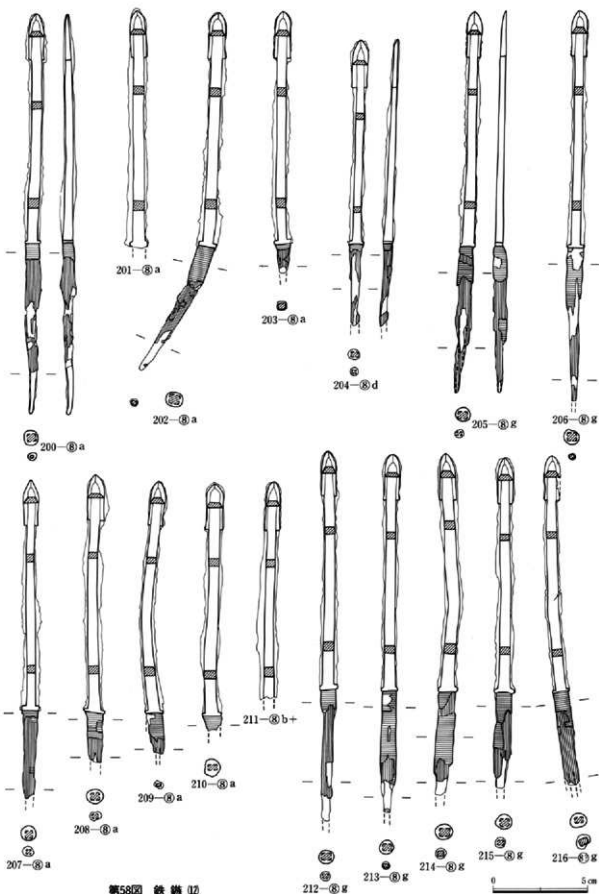




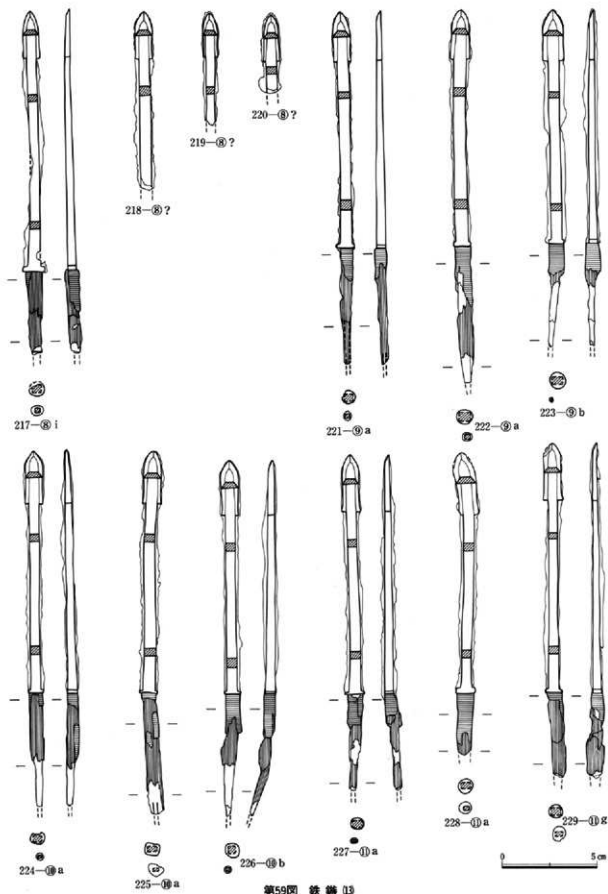
第56図 鉄器⑩



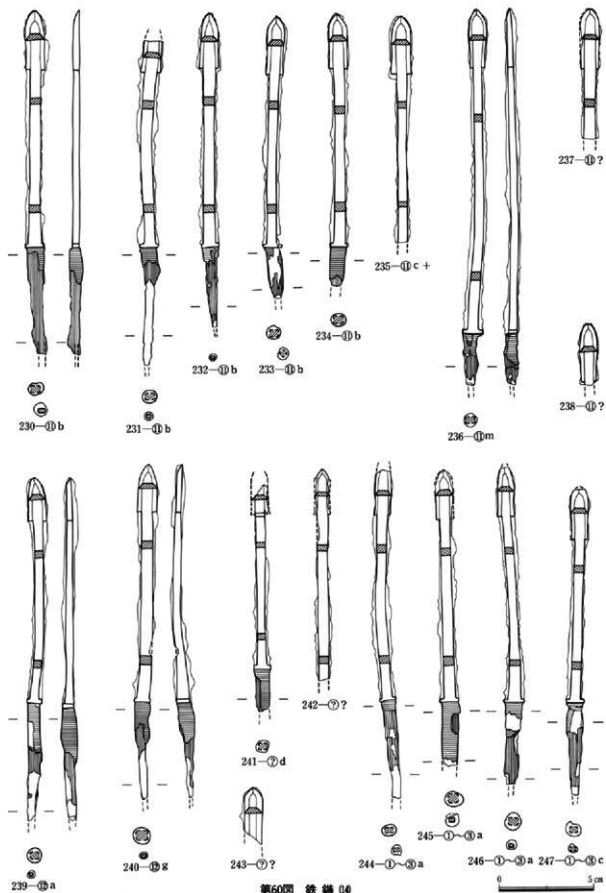
第57图 鉄 劍 Ⅱ



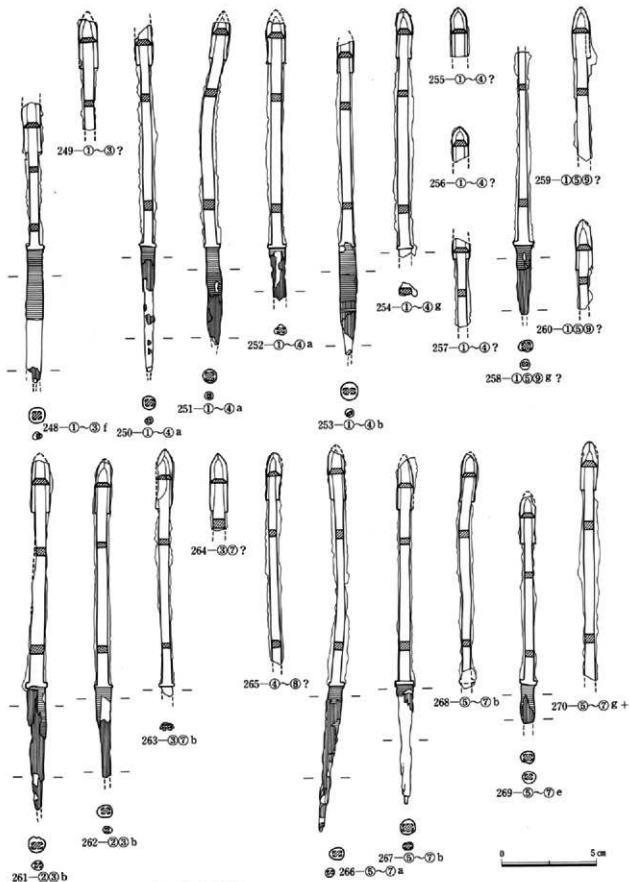
第58図 鉄器 12



第59图 鉄 劍 ⑧

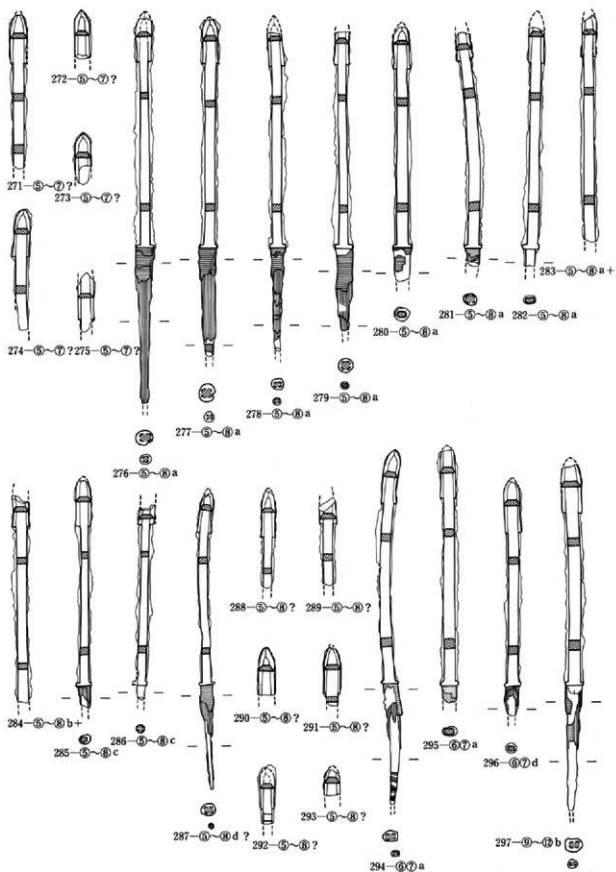


第60図 鐵劍 04



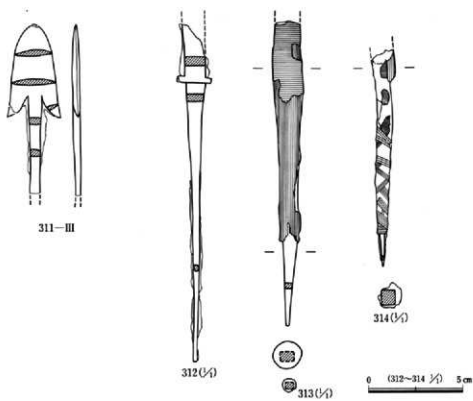
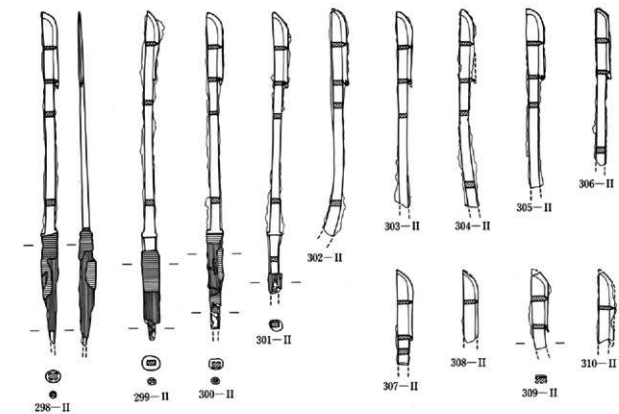
第61図 鉄鍔四

第3章 遺物

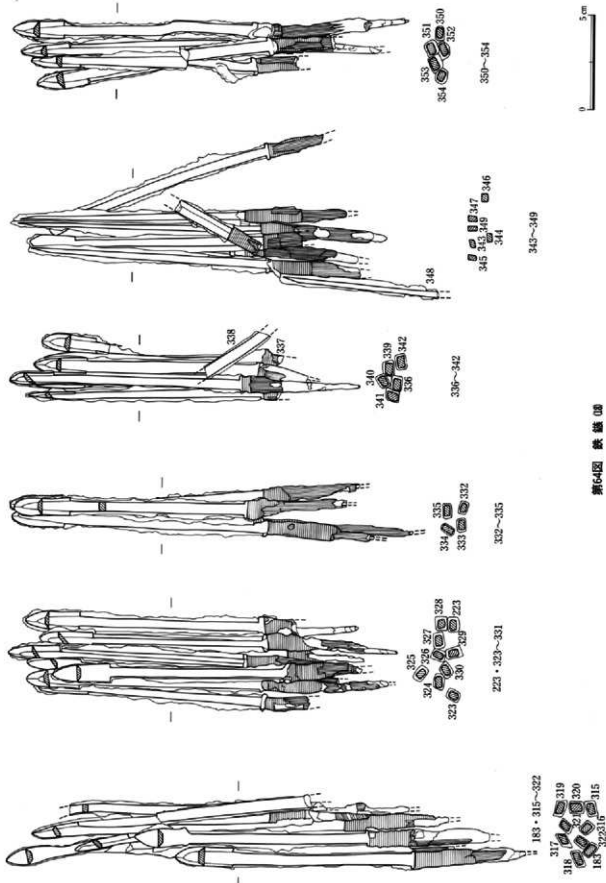


第62圖 鉄器 ⑩

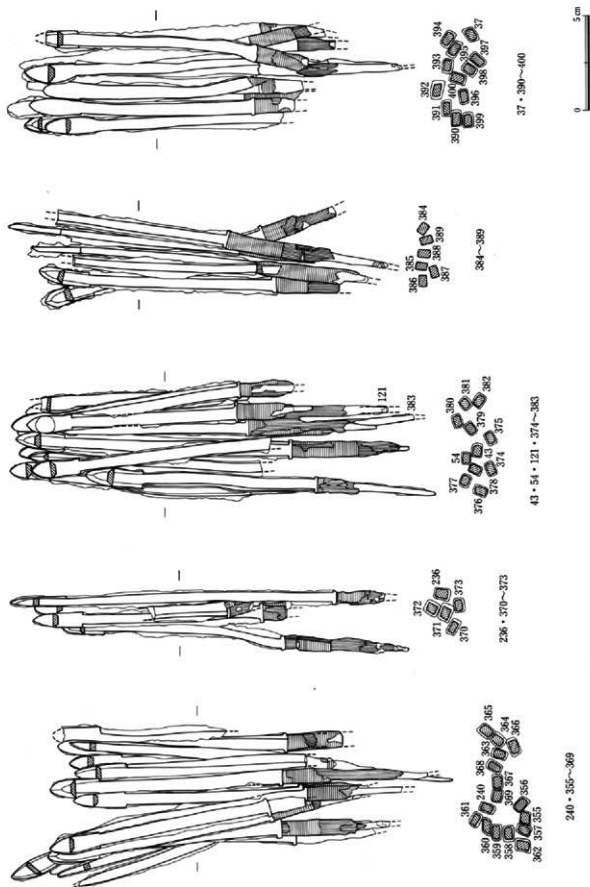
4. 武器・武具

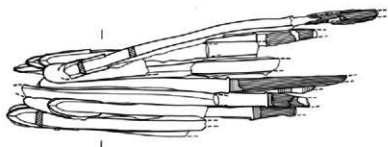
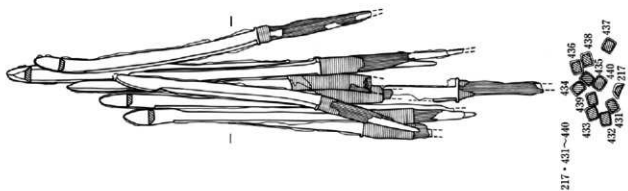


第63図 鉄 鐵 刃



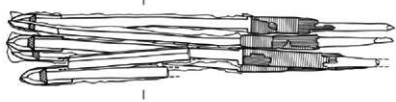
新64図 鉄遺物





425 426 427 430 419
194
421
424 423 422 33

33・194・419～430



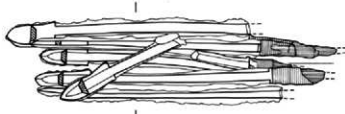
417
418 418 415
416 414

188・414～418



411 409
412 410

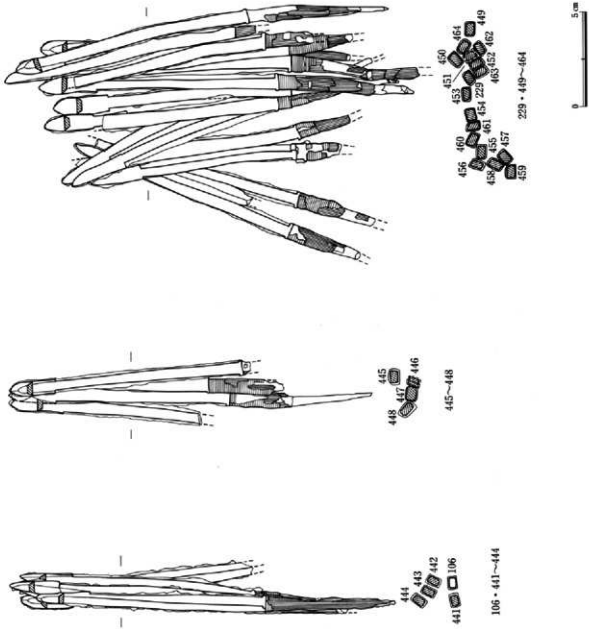
409～413



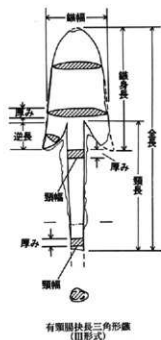
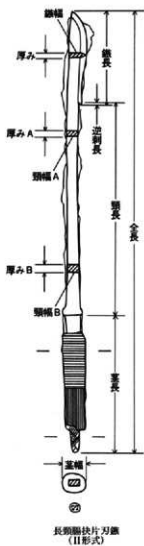
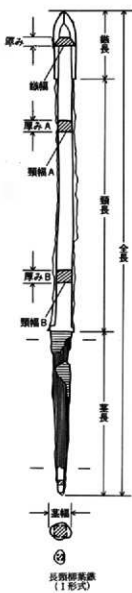
403 406
407
401 405 408
402
401～408



第566図 鉄鏃等



第67図 鉄鏃等



鉄鏃の部位名称と計測位置

単位 (cm)

第11表 鉄鍔計測値一覧

No	類	計 測 値										出土位置	備考(保存状況)		
		全長		鍔身部			鍔部			茎部				重量	
		最大	最小	最大	最小	最大	最小	最大	最小	最大	最小				
1	I①a	19.0+	2.60+	0.9	0.30	10.00	0.55	0.60	0.40	0.50	6.40+	0.80	21.8	IV-3-2	完形
2	I①a	20.6	2.60	0.9	0.30	10.00	0.30	0.40	0.55	0.45	8.00	0.90	21.5	V-3-1	完形
3	I①a	21.7+	2.70	0.9	0.30	9.70	0.60	0.55	0.40	0.50	9.30	0.80	20.6	IV-4-1	基部下位欠損
4	I①a	20.2+	2.60	0.9	0.30	9.80	0.55	0.55	0.40	0.35	7.80+	0.75	23.7	VI-1-1+ VI-2	基部先端欠損
5	I①a	20.2	2.60	0.9	0.30	9.70	0.65	0.70	0.40	0.55	7.90	0.80	(76.8)	V-2-1	完形
6	I①a	20.5+	2.60	0.9	0.25	10.00	0.48	0.45	0.30	0.40	7.90+	0.80	(43.4)	V-3-1+ VI-2	基部先端欠損
7	I①a	19.8+	2.60	0.9	0.30	9.90	0.55	0.60	0.40	0.45	7.30+	0.80	22.2	V-1-1	基部先端欠損
8	I①a	19.1+	2.60	0.9	0.30	9.60	0.50		0.35		6.90	0.80	(30.8)	VI-3-1①	基部先端欠損
9	I①a	18.8+	2.60	0.9	0.30	10.00	0.60	0.60	0.40	0.40	6.20+	0.80	23.2	IV-3-2	基部先端欠損
10	I①a	16.8+	2.70	0.9	0.25	9.70	0.50	0.55	0.40	0.45	4.40+	0.75	18.6	IV-5-1+ VI-1-1	基部先端欠損
11	I①a	16.3+	2.60	0.9	0.30	9.70	0.55	0.55	0.40	0.50	4.80+	0.80	21.8	V-1-1	基部下位欠損
12	I①a	16.2+	2.60	0.9	0.25	9.80	0.40	0.50	0.30	0.40	3.80+	0.90	(67.5)	V-2-1	基部下位欠損
13	I①a	16.2+	2.70	0.9	0.30	9.80	0.60	0.60	0.40	0.50	3.70+	0.80	23.3	IV-5-1	基部下位欠損
14	I①a	15.4+	2.70	0.9	0.30	9.70	0.50	0.55	0.40	0.50	3.00+	0.80	(22.9)	IV-3-1+ V-3-1	基部下位欠損
15	I①a	15.4+	2.60	0.9	0.30	10.00	0.60	0.65	0.40	0.45	2.80+	0.80	19.9	IV-5-1	基部下位欠損
16	I①a	15.8+	2.60	0.9	0.30	9.80	0.50	0.55	0.45	0.50	2.60+	0.85	(42.6)	V-3-1	基部下位欠損
17	I①a	15.0+	2.70	0.9	0.30	9.80	0.55	0.55	0.40	0.50	2.50+	0.80	20.1	IV-4-1	基部下位欠損
18	I①a	15.1+	2.70	0.9	0.30	9.90	0.50	0.55	0.30	0.45	2.50+	0.75	19.8	V-4-2+ VI-3-1+ VI-3-1②	基部下位欠損
19	I①a	13.8+	2.60	0.9	0.30	10.00	0.55	0.55	0.45	0.50	1.20+	0.80	(31.6)	V-3-1	基部下位欠損
20	I①a	20.4+	2.60	0.9	0.30	9.60	0.50	0.60	0.40	0.45	8.20+		23.8	V-3-1	基部下位欠損
21	I①a	20.4+	2.70	0.9	0.30	9.80	0.50	0.50	0.40	0.40	7.90+	0.80	22.8	VI-2+ VI-2	基部下位欠損
22	I①a	20.0+	2.60	0.9	0.25	10.00	0.55	0.65	0.40	0.50	7.40+		24.3	IV-3-2+ IV-5-1	基部先端欠損
23	I①a	18.8+	2.60	0.9	0.30	9.80	0.50	0.65	0.45	0.50	6.40+	0.70	(38.0)	VI-1-1+ V-1-1	基部先端欠損
24	I①a	18.5+	2.70	0.9	0.20	9.80	0.45	0.50	0.35	0.35	6.00+		22.2	V-3-1	基部先端欠損
25	I①a	19.0+	2.70	0.9	0.40	10.00	0.55	0.60	0.35	0.40	6.30+		26.1	VI-2-1	基部先端欠損
26	I①a	16.9+	2.60	0.9	0.25	9.70	0.55		0.40		4.60+	0.80	22.2	IV-3-2+ IV-3-2	基部下位欠損
27	I①a	17.0+	2.60	0.9	0.30	9.60	0.60	0.65	0.40	0.50	4.80+	0.90	(69.4)	V-2-1	基部下位欠損
28	I①a	17.1+	2.70	0.9	0.20	9.80	0.40		0.30		4.60+	0.90	(41.2)	VI-3-1③	基部下位欠損
29	I①a	18.6+	2.70	0.9	0.30	9.80	0.55	0.60	0.40	0.50	6.10+	0.70	24.8	IV-3-2+ IV-5-1	基部先端欠損
30	I①a	14.1+	2.70	0.9	0.35	9.90	0.65	0.65	0.40	0.50	1.50+		20.7	VI-2+ VI-2④	鍔身部下位一部・基部欠損
31	I①a	12.8+	2.60	0.9	0.30	9.70	0.50	0.55	0.45	0.50	6.50+		(38.0)	VI-1-1+ V-1-1+	基部欠損
32	I①a	12.8+	2.60	0.9	0.30	9.90	0.50	0.55	0.40	0.40	6.30		(39.2)	V-5-1	基部欠損
33	I①a?	12.5+	2.70	0.9	0.30	9.80+	0.45	0.55	0.35	0.45			(217.0)	V-5-1	鍔部下位・基部欠損
34	I①b	19.6+	2.60	0.9		9.50	0.45	0.50	0.35	0.45	7.50	0.80	(37.5)	V-5+ V-5-1№4	完形
35	I①b	14.6+	2.60	0.9	0.35	9.50	0.60	0.65	0.45	0.50	2.50+		19.1	V-1-1	基部下位欠損
36	I①b	15.1+	2.60	0.9	0.30	9.40	0.65	0.65	0.50	0.50	3.10	0.90	23.6	V-5-1	基部下位欠損
37	I①d	14.7+	2.60	0.9	0.30	8.50	0.55	0.55	0.35	0.40	3.60+	1.00	(234.0)	IV-5-1+ VI-2④	基部下位欠損
38	I①e	19.9	2.70	0.9	0.35	10.10	0.60	0.60	0.40	0.40	7.10	0.80	21.2	VI-1-1+ VI-2	完形

第3章 遺物

No	類	計測値											出土位置	備考(残存状況)	
		全身部			頸部				基部		重量				
		身長	胸幅	袖厚	肩長	頸幅A	頸幅B	頸厚A	頸厚B	基長		基幅			
39	I①K	13.8+	2.70	0.9	0.30	10.20	0.45	0.50	0.35	0.40	0.90+	(26.0)	IV-5・1	基部欠損	
40	I①K	14.6+	2.70	0.9	0.25	10.10	0.60	0.60	0.50	0.45	1.80	0.90	21.0	V-1・1	基部下位欠損
41	I①K	17.6+	2.70	0.9	0.25	10.10	0.50	0.58	0.40	0.45	4.80+	0.80	21.1	VI-1-1 + VI-2	基部下位残存
42	I①K	20.0+	2.60	0.9	0.30	10.10	0.60	0.60	0.38	0.40	7.30+	0.90	(67.0)	VI-2②+ VI-4-1	基部先端欠損
43	I①J	20.8 ?+	2.70	0.9	0.30	11.90?	0.45	0.55	0.35	0.45	6.20	0.90	(262.0)	V-2-1 + 史跡	基部先端欠損
44	I①I	21.4+	2.60	0.9	0.30	13.00	0.55	0.60	0.30	0.50	5.80+		(28.0)	V-3-1	基部先端欠損
45	I①?	11.6+	2.70	0.9	0.30	8.90+	0.45	0.50	0.35	0.40			13.7	V-3-1 + V-5-1	基部先端欠損
46	I①?	11.0+	2.60	0.9	0.20	8.40+	0.40	0.40	0.30	0.30			14.7	V-5-1	胴身部先端・基部 下位欠損
47	I①?	9.7+	2.70	0.9	0.25	7.00	0.60	0.65	0.40	0.40			(61.3)	IV-3-2	基部欠損
48	I①?	9.6+	2.60	0.9	0.25	7.00+	0.50		0.40				(34.2)	IV-3・2 + V-5-1	胴身部・肩部上位 残存
49	I①?	9.1+	2.60	0.9	0.25	6.50+	0.45		0.30				11.4	VI-2 + VI-2②	頸部下位・基部欠 損
50	I①?	8.6+	2.70	0.9	0.30	5.90+	0.50	0.40	0.35	0.40			(30.8)	VI-3-1③	胴身部・肩部上位 残存
51	I①?	3.2+	2.60	0.9	0.30	6.60+	0.55	0.45					(28.0)	V-3-1	胴身部残存
52	I①a	18.2+	2.60	0.9?	0.35	9.90	0.50	0.55	0.40	0.50	5.70+		(76.0)	V-2-1	基部先端欠損
53	I①b	19.5?	2.70?	0.9	0.20	9.50	0.45	0.50	0.30	0.40	7.30	0.75	(67.5)	V-2-1 + V-6	欠形
54	I①K	12.7+	2.60	0.9	0.30	10.10	0.45	0.45	0.35	0.45			(262.0)	V-2-1	基部欠損
55	I①n	20.1	2.80	0.9	0.30	9.70	0.50	0.50	0.40	0.45	7.60	0.80	(68.1)	V-1-1	欠形
56	I①a	21.5+	2.80	0.9	0.30	9.60	0.55	0.60	0.40	0.50	9.10+	0.85	24.8	V-5 + V-5 No.4のう ちの1本	基部下位欠損
57	I①a	19.8	2.90	0.9	0.25	9.70	0.50	0.55	0.40	0.50	7.20	0.80	(40.9)	VI-3-1 + V-5・1 + VI-3-1②	欠形
58	I①a	19.0	2.80	0.9	0.25	9.70	0.45	0.45	0.30	0.30	6.50	0.70	(43.4)	V-3-1 + VI-2	欠形
59	I①a	18.9+	2.80	0.9	0.30	9.70	0.55	0.60	0.55	0.60	6.40+	0.80	24.9	V-5-1	基部下位欠損
60	I①a	18.6+	2.90	0.9	0.25	9.60	0.50	0.55	0.35	0.40	6.10+		21.5	VI-1-1	基部先端欠損
61	I①a	18.4+	2.80	0.9	0.30	10.00	0.35	0.60	0.40	0.40	5.60+	0.80	19.2	VI-3-1	基部下位欠損
62	I①a	18.0+	2.80	0.9	0.30	9.50	0.50	0.50	0.30	0.40	5.70+	0.80	21.5	V-5-1	基部下位欠損
63	I①a	17.5+	2.90	0.9	0.27	9.60	0.55	0.55	0.35	0.45	5.00+		23.4	VI-1-1	基部先端欠損
64	I①a	16.7+	2.80	0.9	0.25	9.60	0.35	0.60	0.30	0.40	4.30+		19.1	IV-4-1	基部先端欠損
65	I①a	16.5+	2.90	0.9	0.30	9.60	0.35	0.55	0.35	0.40	4.80+	0.80	(39.2)	V-5-1 + V-5-1	基部下位欠損
66	I①a	16.3+	2.90	0.9	0.25	9.70	0.35	0.55	0.50	0.50	3.70+	0.70	(23.8)	IV-4-1	基部下位欠損
67	I①a	14.5+	2.80	0.9	0.30	9.60	0.45	0.50	0.40	0.45	2.10+	0.90	17.9	V-3-1	基部下位欠損
68	I①a	16.0+	2.90	0.9		9.70	0.50	0.50	0.35	0.35	0.50+		(37.5)	V-5	基部欠損
69	I①b	14.1+	2.90	0.9	0.30	9.10	0.45	0.50	0.35	0.35	2.10+		(34.2)	VI-3-1③	基部下位欠損
70	I①b	19.3+	2.90	0.9	0.20	9.50	0.50	0.55	0.35	0.40	6.90+	0.95	21.4	VI-2	基部先端欠損
71	I①b	17.0+	2.80	0.9	0.30	9.20	0.50	0.60	0.35	0.50	5.00+		19.5	VI-3-1	基部先端欠損
72	I①b	15.3+	2.90	0.9	0.30	9.30	0.35	0.60	0.40	0.40	3.10+	0.90	17.7	VI-2 + VI-2②	基部下位欠損
73	I①b	13.8+	2.90	0.9	0.30	9.30	0.60	0.55	0.45	0.45	1.60+	0.90	18.4	VI-1-1	基部下位欠損
74	I①c	16.3+	2.80	0.9	0.35	8.90	0.40	0.45	0.30	0.35	4.60	0.60	(24.3)	V-1-1 VI-1-1 + VI-3-1 + 史跡	基部先端欠損
75	I①c	20.5+	2.80	0.9	0.30	8.60	0.55	0.55	0.40	0.50	9.10+	0.80	(47.5)	IV-3-2	基部先端欠損

4. 武器・武器

No	種	計 測 値											出土位置	備考(残存状況)	
		全長	鎌 身 部			銚 部				茎 部		重 量			
			鎌長	鎌幅	鎌厚	頸長	頸幅A	頸幅B	頸厚A	頸厚B	茎長				茎幅
76	I㊸d	13.4+	2.80	0.9	0.25	8.40	0.45	0.50	0.30	0.35	2.20+	13.1	V・6	茎部下位欠損	
77	I㊸d	14.0+	2.80	0.9	0.25	8.40	0.50	0.50	0.35	0.40	2.80+	0.60	(24.3)	V-1-1, VI-1-1+ VI-3㊸	茎部下位欠損
78	I㊸k	17.7+	2.70	0.9	0.20	10.10	0.50		0.30		4.90+	1.00	(41.2)	VI-3-1㊸	茎部下位欠損
79	I㊸h	14.9+	2.90	0.9		10.90	0.40	0.50	0.35	0.45	1.10+	0.70	(16.9)	IV-4-1+ VI-2㊸	茎部欠損
80	I㊸?	16.6+	2.80	0.9	0.25	7.80+	0.55	0.55	0.30	0.20+			9.9	V・3-1	茎部下位・茎部欠損
81	I㊸?	9.0+	2.90	0.9	0.25	6.10+	0.45	0.50	0.40	0.45			11.0	IV-4-1	茎部下位・茎部欠損
82	I㊸?	7.6+	2.80	0.9	0.30	4.80+	0.55		0.35				8.4	V-1-1+ V・1-1	鎌身部・頸部上位残存
83	I㊸?	6.3+	2.80	0.9	0.30	3.50+	0.60		0.40				7.4	V-1-1, VI-1-1	鎌身部・頸部上位残存
84	I㊸?	5.9+	2.80	0.9	0.30	3.10+	0.45		0.40				6.6	VI・2	鎌身部・頸部上位残存
85	I㊸?	2.9+	2.90	0.9	0.30							(16.9)	VI-4-1	鎌身部残存	
86	I㊸a	19.4	3.00	0.9	0.20	9.60	0.50	0.50	0.50	0.40	6.80	0.65	21.3	V-5-1+ IV-5-1	完形
87	I㊸a	18.3+	3.00	0.9	0.25	9.60	0.55	0.50	0.35	0.40	5.70+	0.80	22.3	VI-1-1	鎌身部錆蝕せ、茎部先端欠損
88	I㊸a	16.1	3.00	0.9		9.70	0.40	0.40	0.30	0.30	3.40+	0.70	17.8	V-5-1	茎部下位欠損
89	I㊸a	13.4+	3.00	0.9	0.30	9.70	0.60	0.60	0.45	0.50	0.70+		(61.3)	IV-3-2+ V-5-1	茎部欠損
90	I㊸a	12.8+	2.40+	0.9	0.35	10.00	0.60	0.55	0.45	0.40	0.40+		14.8	V-1-1	鎌身部先端・茎部下位欠損
91	I㊸a	13.2+	3.00	0.9	0.25	9.70	0.50	0.50	0.35	0.45	0.50+		16.8	IV-5-1	茎部欠損
92	I㊸b	15.2+	3.00	0.9	0.25	9.40	0.50	0.55	0.27	0.37	2.80+	0.70	18.4	VI-2	茎部下位欠損
93	I㊸b	20.3+	3.20	0.9	0.25	9.30	0.45	0.45	0.30	0.35	7.80+	1.00	(47.5)	IV-3-2+ IV-3-2+ IV-4-1+ VI-3-1	茎部先端欠損
94	I㊸b	19.2+	3.00	0.9	0.25	9.40	0.50	0.55	0.40	0.45	6.80+	0.80	(26.0)	V・3-2+ VI-1-1	茎部先端欠損
95	I㊸b	19.4	3.00	0.9	0.25	9.30	0.40	0.40	0.30	0.30	7.10		18.5	VI-2	完形
96	I㊸b	18.8+	3.00	0.9	0.20	9.20	0.40	0.60	0.30	0.35	6.60+	0.80	20.8	VI-2-1+ VI-2	茎部先端欠損
97	I㊸b	17.3+	3.10	0.9	0.20	9.20	0.50	0.60	0.30	0.40	5.00+	0.90	23.4	VI-2-1	茎部先端欠損
98	I㊸b	17.3+	3.10	0.9	0.30	9.10	0.50	0.50	0.35	0.40	5.10	0.80	(59.4)	V-5+ IV・5-1+ V-5-1	茎部下位欠損
99	I㊸b	16.5+	3.10	0.9	0.30	9.50	0.55	0.55	0.40	0.50	3.90+	0.90	(43.5)	V-5-1	茎部下位欠損
100	I㊸b	16.0+	3.00	0.9	0.25	9.40	0.55	0.60	0.35	0.40	3.60+	0.70	20.5	IV-3-2	茎部下位欠損
101	I㊸b	16.5+	3.00	0.9	0.30	9.70	0.55	0.60	0.40	0.50	3.80+	0.80	20.4	IV-4-1	茎部下位欠損
102	I㊸b	15.2+	3.00	0.9		9.50	0.45	0.45	0.30	0.35	2.70+	0.70	18.2	V-3-1	茎部下位欠損
103	I㊸b	15.1+	3.00	0.9	0.25	9.30	0.50	0.50	0.40	0.40	2.50+		(40.9)	VI-3-1+ VI-3-1㊸	茎部下位欠損
104	I㊸b	14.5+	3.10	0.9	0.25	9.50	0.30	0.45	0.30	0.40	1.90+	0.80	16.8	VI-1-1	茎部下位欠損
105	I㊸b	12.6+	3.10	0.9		9.50	0.60	0.65	0.40	0.45			(61.3)	IV-3-2+ V-5-1	茎部欠損
106	I㊸b+	12.4+	3.10	0.9	0.25	9.30+	0.45	0.50	0.35	0.45			(107.2)	VI-3-1㊸	鎌身部・頸部上位残存
107	I㊸c	14.0+	2.95	0.8	0.20	8.60	0.50	0.60	0.35	0.40	2.45+		13.2	VI-3-1	茎部下位欠損
108	I㊸d	14.8+	3.00	0.9	0.20	8.40	0.45	0.45	0.30	0.30	3.40+		12.4	V-3-1	茎部先端欠損
109	I㊸f+	10.1+	3.00	0.9	0.25	4.50	0.45	0.50	0.35	0.50	2.60+		(33.9)	VI-2	鎌身部・頸部上位残存

第3章 遺 物

No	類	計											出土位置	備考(残存状況)		
		全長	鍍身部			鍍部				基部		重量				
			鍍長	鍍幅	鍍厚	鍍長A	鍍幅B	鍍幅C	鍍厚A	鍍厚B	鍍長				鍍幅	
110	I ㉓#	16.9+	3.00	0.9	0.30	10.20	0.60		0.40			2.80+	1.00	20.0	VI-2 + VI-2㉔	基部下位欠損
116	I ㉓?	11.0+	3.10	0.8	0.25	7.90+	0.50	0.50	0.35	0.40				10.6	V-1-1、VI-1-1	基部下位・基部欠損
117	I ㉓?	6.3+	3.00	0.9	0.20	3.30+	0.55		0.25					6.6	VI-2	基部下位・基部欠損
118	I ㉓?	6.5+	3.10	0.9	0.25	3.40+	0.49		0.40					6.3	V-6	鍍身部・基部上位残存
119	I ㉓?	4.6+	3.20	0.9	0.30	1.40+	0.35		0.35					6.2	VI-2	鍍身部・基部上位残存
111	I ㉔a	19.7	2.40	0.9	0.28	9.90	0.60	0.60	0.40	0.45	7.40	0.90	22.6	VI-2 + VI-2㉔	完形	
112	I ㉔a	19.7	2.50	0.9		10.00					7.20		(39.2)	VI-2	完形	
113	I ㉔a	19.3+	2.50	0.9	0.30	9.80	0.55	0.50	0.35	0.45	7.00+	1.10	21.2	VI-2	基部先端欠損	
114	I ㉔a	15.6+	2.50	0.9	0.25	10.00	0.45	0.50	0.45	0.50	3.10+	0.85	20.4	V-5-1	基部下位欠損	
115	I ㉔a	15.8+	2.30	0.9	0.25	10.00	0.50	0.60	0.35	0.50	3.50+		20.8	V-1-1 + IV-3-2 + VI-2	基部下位欠損	
120	I ㉔ag	12.6+	2.50	0.9	0.25	9.80+	0.50	0.50	0.35	0.40	0.30+		15.7	IV-4-1	基部欠損	
121	I ㉔b	20.1+	2.50	0.9	0.25	9.50	0.50	0.60	0.35	0.45	8.10+		(262.0)	V-2-1	基部先端欠損	
122	I ㉔d	13.7+	2.30+	0.9	0.30	8.40	0.45	0.45	0.35		3.00+		13.1	VI-3-1	基部下位欠損	
123	I ㉔#	19.7+	2.50	0.9	0.35	10.10	0.55	0.60	0.40	0.50	7.10+	0.85	22.7	VI-2-1 + VI-2	基部先端欠損	
124	I ㉔#	16.9+	2.50	0.9	0.30	10.10	0.45	0.50	0.40	0.50	4.30+	0.70	20.9	V-3-1	基部下位欠損	
125	I ㉔?	3.1+	2.50	0.9	0.25	0.60+	0.40		0.30				3.1	IV-3-2	鍍身部・基部残存	
126	I ㉔?	4.0+	2.50	0.9	0.25	1.50+	0.50		0.35				(6.6)	IV-4-1	鍍身部残存	
127	I ㉔a	21.6	2.60	0.8	0.25	10.00	0.50	0.55	0.35	0.40	9.00	0.80	21.7	IV-5-1	完形	
128	I ㉔a	20.4	2.70	0.8	0.20	9.80	0.45	0.50	0.30	0.35	8.10	0.90	22.5	VI-2 + VI-2№7	完形	
129	I ㉔a	20.1	2.60	0.8	0.30	9.80	0.45	0.55	0.40	0.45	7.70		23.2	VI-3-1	完形	
130	I ㉔a	18.6+	2.60	0.8	0.30	10.00	0.55	0.60	0.40	0.50	6.00+	0.90	(69.4)	V-2-1	基部下位欠損	
131	I ㉔a	18.1+	2.60	0.8	0.30	9.60	0.50	0.55	0.40	0.50	5.90+		21.6	VI-2-1 + VI-2	基部先端欠損	
132	I ㉔a	18.3+	2.60	0.8	0.30	9.90	0.50	0.45	0.40	0.45	5.80+		18.3	V-1-1	基部先端欠損	
133	I ㉔a	18.1+	2.70	0.8	0.30	10.00	0.50	0.60	0.40	0.50	5.40+		19.8	V-1-1 + VI-1-1	基部先端欠損	
134	I ㉔a	17.4+	2.70	0.8	0.30	9.80	0.55	0.59	0.35	0.40	4.90+	0.90	67.9	VI-2㉔	基部先端欠損	
135	I ㉔a	16.8+	2.70	0.8	0.30	9.70	0.50	0.55	0.35	0.35	4.30+		16.9	VI-2 + VI-2	基部下位欠損	
136	I ㉔a	15.7+	2.60	0.8	0.30	9.70	0.45	0.50	0.40	0.40	3.40+		17.3	V-3-1	基部下位欠損	
137	I ㉔a	15.6+	2.60	0.8	0.35	9.60	0.50	0.50	0.40	0.45	3.40		18.3	IV-4-1	基部下位欠損	
138	I ㉔a	15.2+	2.60	0.8	0.25	9.90	0.50	0.50	0.35	0.40	2.70+	0.80	(67.5)	V-2-1	基部下位欠損	
129	I ㉔a	15.0+	2.70	0.8	0.30	10.00	0.50	0.60	0.40	0.50	2.30+		20.1	IV-4-1	基部下位欠損	
140	I ㉔a	15.3+	2.60	0.8	0.25	9.75	0.45	0.50	0.40	0.50	3.00+		17.8	VI-2	基部下位欠損	
141	I ㉔a	13.9+	2.60	0.8	0.30	9.90	0.55	0.55	0.35	0.45	1.40+	0.60	19.5	VI-1-1	基部下位欠損	
142	I ㉔a	13.9+	2.70	0.8	0.30	9.60	0.50	0.50	0.40	0.50	1.60+		17.8	VI-1-1	基部下位欠損	
143	I ㉔a	12.9+	2.70	0.8	0.30	9.60	0.55	0.60	0.40	0.50	0.40+	0.70	(38.8)	VI-1-1	基部欠損	
145	I ㉔b	17.5+	2.60	0.8	0.25	9.50	0.50	0.60	0.40	0.50	5.40	1.05	18.1	V-1-1 + 史跡	基部先端欠損	
146	I ㉔b	15.2+	2.60	0.8	0.30	9.40	0.45	0.50	0.40	0.40	3.20+		(39.6)	IV-4-1	基部下位欠損	
147	I ㉔b	15.3+	2.60	0.8	0.30	9.50	0.45	0.45	0.40	0.40	3.20+		16.0	IV-3-2 + IV-4-4 + V-5-1	基部先端欠損	
148	I ㉔b +	11.6+	2.60	0.8	0.25	9.00+	0.48	0.55	0.35	0.40			14.5	VI-2	基部下位・基部欠損	

4. 武器・武具

No	類	計測値										出土位置	備考(残存状況)		
		全長	鎌身部			柄部				茎部				重量	
			鎌長	鎌幅	鎌厚	柄長	柄幅A	柄幅B	柄厚A	柄厚B	茎長				茎幅
144	I㊦c	14.1+	2.70	0.8	0.29	9.00	0.50	0.55	0.40	0.45	2.40+		11.1	IV・3・2 + V・6	茎部一部欠損
149	I㊦d	15.9	2.70	0.8	0.25	8.30	0.50	0.55	0.35	0.49	4.90	0.70	(27.2)	VI-3-1	完形
150	I㊦d	13.8+	2.70	0.8	0.25	8.30	0.50	0.55	0.40	0.49	2.80+	0.70	14.6	V-5-1	茎部下位欠損
151	I㊦e+	10.4+	2.60	0.8	0.30	7.80	0.50	0.50	0.35	0.35			9.6	V・3・2	鎌身部・柄部上位残存
152	I㊦k	22.3	2.60	0.8	0.25	10.10	0.60	0.60	0.45	0.50	9.60	0.60	24.4	IV・3・2 + VI-3-1	完形
153	I㊦k	19.7+	2.60	0.8	0.35	10.10	0.60	0.60	0.45	0.48	7.00+	0.80	23.4	VI-2	茎部先端欠損
154	I㊦k	18.0+	2.60	0.8	0.30	10.10	0.60	0.65	0.35	0.40	5.30+		22.7	IV・3・2 + VI-4-1	茎部先端欠損
155	I㊦k	17.3+	2.70	0.8	0.25	10.20	0.55	0.60	0.45	0.50	4.40+	0.80	22.4	IV-1-1	茎部下位欠損
156	I㊦k	16.1+	2.60	0.8	0.30	10.10	0.55	0.55	0.45	0.50	3.40+	0.70	19.9	IV-3-2	茎部下位欠損
157	I㊦k	13.5+	2.60	0.8	0.20	10.10	0.50	0.50	0.40	0.40	0.80+		16.7	IV・5・1 + V-5-1	茎部欠損
158	I㊦?	16.9+	2.70	0.8	0.30	8.20+	0.50		0.40				14.7	IV-3-2	柄部下位・茎部欠損
159	I㊦?	8.7+	2.70	0.8	0.30	6.00+	0.50		0.40				9.2	VI-2	柄部下位・茎部欠損
160	I㊦?	6.6+	2.60	0.8	0.20	4.00+	0.40		0.35				5.1	IV-3-2	柄部中位・茎部欠損
161	I㊦?	4.1+	2.60	0.8	0.25	1.50+	0.55		0.40				3.7	VI-2㊦	鎌身部・柄部上位残存
162	I㊦?	3.8+	2.60	0.8	0.25	1.20+	0.45		0.35				2.4	IV・3・2	鎌身部残存
163	I㊦?	7.1+	2.70	0.8	0.30	4.40+	0.50		0.48				7.5	V・5・1	鎌身部・柄部上位残存
164	I㊦?	6.8+	2.60	0.8	0.25	4.20+	0.50		0.35				7.7	VI-2	柄部下位・茎部欠損
165	I㊦?	5.8	2.60	0.8	0.25	3.20+	0.45		0.30				6.0	史跡+ V・5・1	鎌身部・柄部上位残存
166	I㊦a	17.0+	2.90	0.8	0.25	9.70	0.50	0.55	0.30	0.40	4.40+	0.80	(22.2)	VI-2	茎部下位欠損
167	I㊦a	16.6	2.70	0.8	0.30	9.50	0.55	0.55	0.35	0.40	4.40+	0.80	21.7	IV-3-2	茎部先端欠損
168	I㊦a	13.1+	2.80	0.8	0.30	9.70	0.50	0.50	0.40	0.45	0.60+		17.6	VI-1-1	茎部欠損
169	I㊦a	12.8+	2.80	0.8	0.30	9.80	0.50	0.55	0.35	0.40	0.20+		16.4	IV-3-2 + VI-2	茎部欠損
170	I㊦b	12.4+	2.80	0.8	0.22	9.60	0.25	0.55	0.40	0.35			14.9	VI-2 + VI-2㊦	茎部欠損
171	I㊦b	16.1+	3.00	?		9.50	0.55	0.55	0.40	0.50	3.60+	0.80	(39.2)	IV-4-1	茎部先端欠損
172	I㊦b	12.9+	2.90	0.8	0.20	9.30	0.48	0.55	0.50	0.50	0.70+		(33.9)	VI-2	茎部下位欠損
173	I㊦b	12.9+	2.90	0.8	0.30	9.50	0.55	0.60	0.40	0.45	0.50+		(46.3)	V・3・1	茎部欠損
174	I㊦b+	12.1+	2.80	0.8	0.25	9.30+	0.48	0.45	0.35	0.40			(16.0)	VI-2 + VI-2㊦	柄部中位残存
175	I㊦c	15.4+	2.90	0.8	0.25	8.70	0.55	0.50	0.35	0.40	3.80+		(27.2)	VI-3-1	茎部下位欠損
176	I㊦c	16.9+	2.80	0.8	0.25	9.50	0.50	0.50	0.35	0.40	4.60+		(36.4)	VI-3-1	茎部先端欠損
177	I㊦c	12.6+	2.90	0.8	0.20	8.60	0.45	0.45	0.40	0.35	2.10+		12.0	VI-3-1	茎部下位欠損
178	I㊦c	12.4+	2.80	0.8	0.25	9.00	0.50	0.50	0.35	0.40	0.60+	0.70	11.9	V・5・1 + VI-3-1	茎部下位欠損
179	I㊦c	12.3+	2.90	0.8	0.20	8.60	0.45	0.45	0.30	0.40	0.80+		11.8	VI-3-1㊦	茎部欠損
180	I㊦d	11.7+	2.90	0.8	0.25	8.40	0.45	0.45	0.30	0.30	0.60+	0.60	(22.4)	V・5・1	茎部下位欠損
181	I㊦d	12.6+	2.80	0.8	0.20	8.50	0.55	0.65	0.35	0.45	1.30+		(19.8)	VI-3-1㊦	茎部下位欠損
182	I㊦e	12.5+	2.70	0.8	0.24	7.90	0.45	0.38	0.45	0.43	1.90+	0.65	10.1	V-3-1	茎部下位欠損
183	I㊦k	23.9+	2.80	0.8	0.25	10.40	0.55	0.60	0.35	0.40	10.70+	0.90	(140.1)	IV-4-1 + V・3・2 + VI-2㊦	茎部下位欠損
189	I㊦?	9.7+	2.80	0.8	0.20	6.90+	0.45		0.30				9.8	V・5・1	鎌身部・柄部上位残存

第3章 遺物

No	類	計測値											出土位置	備考(残存状況)		
		全長	鎌身部			柄部				茎部		重量				
			身長	幅	厚	幅A	幅B	厚A	厚B	身長	幅					
190	I⑥?	7.2+	2.90	0.8	0.30	4.30+	0.40			0.35				8.4	VI-2	鎌身部・茎部上位残存
191	I⑥?	6.3+	2.90	0.8	0.30	3.40+	0.55			0.35				8.9	IV-4-1	鎌身部・茎部上位残存
192	I⑥?	4.5+	2.80	0.8	0.30	1.70+	0.50			0.40				4.5	V-1-1、VI-1-1	鎌身部残存
193	I⑥?	3.5+	2.80	0.8	0.25	0.70+								2.9	V-5-1	鎌身部残存
194	I⑥?	9.2+	2.80	0.8?	0.25	6.40+	0.45			0.30				(217.0)	V-5-1	鎌身部・茎部上位残存
184	I⑦b	16.7+	3.20	0.8		9.10	0.55	0.60	0.35	0.40	4.40+	0.90	18.8	V-1-1	茎部先端欠損	
185	I⑦b	14.3+	3.00	0.8	0.25	9.20	0.50	0.55	0.40	0.45	2.10+		18.3	V-5-1	茎部下位欠損	
186	I⑦b	11.9+	2.40+	0.8	0.20	9.50	0.40	0.40	0.30	0.30			14.0	VI-2 + VI-2-③	鎌身部先端・茎部欠損	
187	I⑦c +	11.9+	3.00	0.8	0.20	8.90+	0.45	0.45	0.25	0.35			14.1	VI-2	茎部下位・茎部欠損	
196	I⑦d	16.8	2.90+	0.8	0.15	8.50	0.40	0.50	0.30	0.40	5.40	0.50	(22.4)	V-5-1	完形	
197	I⑦d	13.2+	3.00	0.8	0.30	8.30	0.50	0.50	0.45	0.45	1.90+	0.80	14.9	V-5-1	茎部下位欠損	
195	I⑦?	4.2+	3.00	0.8	0.25	1.20+	0.60			0.50			3.8	IV-4-1	鎌身部残存	
188	I⑧a	28.0 ?	3.00?	0.8	0.30	9.60	0.50	0.55	0.40	0.50	7.40+	0.90	(117.0)	VI-1-1 + VI-1-1	茎部下位欠損	
200	I⑧a	21.1	2.40	0.8	0.25	9.70	0.55	0.55	0.40	0.50	9.00	0.70	20.1	IV-3-2 + 史跡	完形	
201	I⑧a	12.5+	2.50	0.8	0.25	10.00	0.60	0.65	0.40	0.50			(69.4)	V-2-1	茎部欠損	
202	I⑧a	19.7	2.50	0.8	0.30	9.70	0.60	0.65	0.45	0.50	7.50	0.90	22.7	V-5-1 + V-5-1	完形	
203	I⑧a	14.0+	2.50	0.8	0.30	10.00	0.50	0.50	0.45	0.50	1.50+	0.60	16.5	VI-2 + VI-2②	茎部下位欠損	
207	I⑧a	16.9+	2.40	0.8	0.30	9.80	0.40	0.40	0.45	0.40	4.70+	0.80	20.8	V-1-1	茎部下位欠損	
208	I⑧a	15.2+	2.40	0.8	0.20	10.20	0.50	0.55	0.30	0.40	2.80+	0.80	13.3	V-5-1	茎部下位欠損	
209	I⑧a	14.4+	2.40	0.8	0.30	9.90	0.50	0.60	0.30	0.50	2.10+		17.8	V-5-1	茎部下位欠損	
210	I⑧a	13.2+	2.50	0.8	0.25	10.00	0.55	0.60	0.40	0.45	0.70+	0.90	(38.8)	VI-1-1	茎部欠損	
198	I⑧b	14.9	2.40	0.8	0.30	9.10	0.50	0.50	0.35	0.40	3.40+		13.3	VI-3-1	茎部下位欠損	
199	I⑧b	14.3+	2.40	0.8	0.25	9.20	0.50	0.45	0.30	0.30	2.70+		12.3	V-6 + VI-3-1	茎部下位欠損	
211	I⑧b +	11.6+	2.50	0.8	0.30	9.10+	0.45	0.55	0.40	0.50			(34.2)	VI-3-1③	鎌身部・茎部上位残存	
204	I⑧d	15.2+	2.50	0.8	0.20	8.30	0.45	0.50	0.30	0.30	4.40+	0.70	11.4	V-5-1 + 史跡	茎部先端欠損	
205	I⑧e	20.2	2.40	0.8	0.25	10.10	0.45	0.55	0.30	0.40	7.70	0.80	18.4	V-5-1 + VI-2	完形	
206	I⑧e	20.6+	2.40	0.8	0.30	10.20	0.45	0.50	0.40	0.50	8.00+	0.80	20.6	V-1-1	茎部先端欠損	
212	I⑧e	19.4+	2.40	0.8	0.35	10.30	0.55	0.60	0.40	0.50	7.00+	0.80	19.3	V-5-1	茎部先端欠損	
213	I⑧e	18.9+	2.40	0.8	0.20	10.10	0.50	0.60	0.35	0.40	6.40+	0.85	21.0	VI-2	茎部先端欠損	
214	I⑧e	18.2+	2.40	0.8	0.35	10.20	0.50	0.60	0.45	0.50	5.60+		24.0	VI-1-1	茎部下位欠損	
215	I⑧e	17.5+	2.40	0.8	0.30	10.10	0.50	0.60	0.35	0.40	5.00+		22.9	V-5 + V-5-1	茎部下位欠損	
217	I⑧i	18.2+	2.50	0.8	0.25	11.30	0.50			0.35	4.40+	1.00	(225.0)	V-5 + IV-5-1 + V-5-1	茎部下位欠損	
218	I⑧?	9.3+	2.50	0.8	0.30	6.80+	0.60			0.50			12.3	V-5-1	鎌身部・茎部上位残存	
219	I⑧?	5.9+	2.30	0.8	0.30	3.60+	0.40			0.40			5.4	IV-3-2	鎌身部・茎部上位残存	
220	I⑧?	4.1+	2.40	0.8	0.30	1.70+	0.60			0.40			4.0	VI-2	鎌身部残存	
216	I⑧#	17.5+	2.40	0.8	0.30 +	10.10	0.55	0.58	0.35	0.40	5.00+	0.80	19.2	VI-2 + VI-2	茎部下位欠損	

4. 武器・武具

No.	類	計 測 値											出土位置	備考(残存状況)	
		全長	鎌身部			柄部				茎部		重量			
			長さ	幅	厚	長さ	幅A	幅B	厚A	厚B	長さ				幅
221	I㊟a	18.6+	2.60	1.0	0.30	9.90	0.60	0.60	0.35	0.50	6.10+	0.60	13.6	IV・5-1 + V-6	茎部先端欠損
222	I㊟a	19.5+	2.60	1.0	0.30	9.70	0.65	0.70	0.45	0.50	7.20+	0.85	(76.0)	V-2-1	茎部先端欠損
223	I㊟b	17.6+	2.70	1.0	0.25	9.50	0.60	0.60	0.30	0.35	5.40+	0.80	(207.0)	IV-4-1 + IV・3-2	茎部先端欠損
224	I㊟a	18.8+	2.80	1.0	0.30	10.00	0.50	0.40	0.50	0.45	6.00	0.70	(68.1)	V-1-1 + VI-1-1	茎部先端欠損
225	I㊟a	19.4+	2.80	1.0	0.30	10.00	0.55	0.60	0.40	0.40	6.40+	0.80	25.4	IV-3-2	茎部下位欠損
226	I㊟b	18.8+	2.90	1.0	0.30	9.50	0.50	0.50	0.40	0.50	6.40+	0.85	(68.1)	V-1-1	茎部先端欠損
227	I㊟a	17.8+	3.00	1.0	0.25	9.70	0.40	0.45	0.35	0.40	5.10+	0.75	20.3	V-1-1 + IV・5-1	茎部先端欠損
228	I㊟a	16.1+	3.30	1.0	0.30	9.60	0.55	0.55	0.40	0.40	3.20+	0.90	22.1	V-1-1	茎部下位欠損
230	I㊟b	18.2+	3.20	1.0	0.30	9.40	0.50	0.55	0.35	0.35	5.60+	0.90	24.2	IV-4-1	茎部先端欠損
231	I㊟b	16.8+	1.20+	1.0	0.30	9.40	0.62	0.60	0.40	0.40	6.20	0.80	(25.8)	V-3-1	鎌身部先端・茎部先端欠損
232	I㊟b	16.6+	3.00	1.0	0.25	9.40	0.60	0.65	0.45	0.40	4.20+	0.70	(39.2)	IV-4-1	茎部先端欠損
233	I㊟b	15.0+	3.10	1.0	0.30	9.20	0.50	0.50	0.40	0.45	2.70+	0.75	18.9	V-3-1	茎部下位欠損
234	I㊟b	14.5+	3.00	1.0	0.30	9.40	0.55		0.40		2.10+	0.80	(43.5)	V-5-1	茎部下位欠損
235	I㊟c +	12.0+	3.10	1.0	0.25	8.90+	0.50	0.50	0.35	0.25			(26.5)	VI-2㉔	柄部下位・茎部欠損
239	I㊟k	17.7+	3.00	1.0	0.25	10.20	0.45	0.50	0.30	0.40	4.50+	0.75	(334.0)	VI-3-1 + V-5-1	茎部下位欠損
236	I㊟m	19.9+	3.10	1.0	0.25	14.10	0.45	0.50	0.35	0.45	2.70+	0.70	(94.0)	V-4-2 + V-5-1	茎部下位欠損
237	I㊟?	6.9+	3.20	1.0	0.25	3.70+		0.60		0.40			9.6	V・1-1	鎌身部・柄部上位残存
238	I㊟?	3.1+	3.10	1.0	0.30								3.4	V・3-2	鎌身部残存
239	I㊟n	18.0+	2.30+	0.9	0.30	9.60	0.50	0.40	0.40	0.40	6.10+		(59.4)	V-5 + V-5-1	茎部先端欠損
240	I㊟k	17.7+	2.50	1.0	0.25	10.10	0.55	0.60	0.35	0.45	5.10	0.90	(301.0)	V-4-2 + V-5-1 + V-6	欠形
241	I㊟d	12.1+	1.70+	0.6+		8.20	0.45	0.40	0.30	0.35	2.20+	0.75	12.0	V-2	茎部下位欠損
242	I㊟	11.2+	2.40+	0.7+	0.20	8.80+	0.50	0.50	0.30	0.40			11.9	V-6	鎌身部・柄部上位残存
243	I㊟	2.7+	2.70+	0.9	0.30								(6.6)	IV-4-1	鎌身部残存
244	I㊟~㊟a	17.4+	2.40+	0.9	0.30	9.70	0.50	0.50	0.40	0.40	5.30+	0.70	(39.6)	IV-4-1	鎌身部先端・茎部先端欠損
245	I㊟~㊟a	15.7+	2.50+	0.9	0.30	9.70	0.50	0.55	0.40	0.50	3.50+	0.90	(42.6)	V-3-1 + V-3-1	茎部下位欠損
246	I㊟~㊟a	16.8+	2.60+	0.9	0.25	9.90	0.45	0.58	0.35	0.30	4.30+	0.90	17.8	VI-2 + VI-2㉔	茎部下位欠損
247	I㊟~㊟c	19.0+	2.70+	0.9	0.25	8.70	0.50	0.50	0.40	0.40	4.90+		13.6	VI-3-1	鎌身部先端・茎部先端欠損
248	I㊟~㊟f	14.8+	2.60+	0.9	0.30	5.20	0.45	0.48	0.30	0.40	7.00	0.90	20.9	VI-2	鎌身部先端・茎部下位欠損
249	I㊟~㊟?	5.8+	2.60+	0.9	0.25	3.20+	0.50		0.30				5.8	VI-1-1	鎌身部下位・柄部上位残存
250	I㊟~㊟a	18.4+	2.20+	0.9	0.30	9.60	0.45	0.50	0.40	0.50	6.60+	0.70	(37.8)	V-5 + V-5-1	鎌身部・茎部先端欠損
251	I㊟~㊟a	17.2+	2.00+	0.9	0.25	10.00	0.60	0.60	0.40	0.50	3.20+	0.80	23.2	V-5-1	鎌身部上位・茎部先端欠損
252	I㊟~㊟a	14.8+	2.20+	0.9	0.30	9.70	0.55	0.55	0.40	0.45	2.90+	0.85	18.4	IV-3-2 + V-1-1 + VI-1-1	鎌身部先端・茎部欠損
253	I㊟~㊟b	16.6+	1.70+	0.9	0.25	9.20	0.51	0.56	0.35	0.35	5.70+	0.90	19.2	VI-1-1	鎌身部・茎部先端欠損

第3章 遺 物

No	類	計 測 値											出土位置	備考(保存状況)	
		鏃 身 部				鏃 部				基 部		重 量			
		全長	鏃長	鏃幅	鏃厚	鏃長	鏃幅A	鏃幅B	鏃厚A	鏃厚B	基長				基幅
254	I①~④K	12.8+	2.40+	0.9	0.30	10.10	0.50	0.55	0.30	0.40	0.30+		18.4	V-3-1	鏃部下位・基部欠損
255	I①~④?	2.5+	2.50	0.9	0.20								1.9	V-4-2	鏃身部残存
256	I①~④?	1.8+	1.80+	0.9	0.30								1.4	V-6	鏃身部上位残存
257	I①~④?	4.6+	1.10+	0.9	0.25	3.50+	0.45		0.35				5.4	V-5-1	鏃部中位残存
258	I①⑤⑥K?	16.5+	2.60+			10.20+	0.35	0.45	0.30	0.40	3.70+	0.80	15.5	V-5	鏃身部・基部下位欠損
259	I①⑤⑥?	8.2+	2.70	0.9?	0.30	5.50+	0.60		0.40				(46.3)	V-3-1	鏃部下位・基部欠損
260	I①⑤⑥?	4.7+	2.60	0.9?	0.30	2.10+	0.45		0.35				(11.7)	V-5-1	鏃身部・鏃部上位残存
261	I②③b	18.5+	2.70+	0.9	0.30	9.20	0.50	0.75	0.40	0.40	6.60		21.0	IV-5-1	鏃身部先端欠損
262	I②③b	16.6+	2.70	0.9	0.20	9.20	0.50	0.60	0.30	0.35	4.70+	0.80	17.8	V-5-1	鏃身部・基部先端欠損
263	I③④b	13.1+	3.20	0.8+	0.20	9.40	0.55	0.45	0.35	0.25	0.50+		11.7	VI-2	基部欠損
264	I③④?	4.1+	3.10	0.7+	0.20	1.00+	0.60		0.45				3.3	V-1-1、VI-1-1	鏃身部・鏃部上位残存
265	I④?	11.3+	2.50	?	0.25	8.80+	0.40	0.50	0.35	0.40			(24.1)	IV-3-2	基部欠損
266	I⑤~⑦a	20.2+	2.60+	0.8	0.30	9.80	0.40	0.50	0.40	0.40	7.80	0.80	22.1	IV-3-2 + V-3-1	鏃身部先端欠損
267	I⑤~⑦b	18.3+	2.70+	0.8	0.20	9.30	0.50	0.55	0.30	0.45	6.30		19.8	VI-2-1	鏃身部上位欠損
268	I⑤~⑦b	12.4+	2.60+	0.8	0.20	9.50	0.50	0.40	0.50	0.35	0.30+		12.7	V-5-1	鏃身部先端・基部欠損
269	I⑤~⑦e	12.1+	2.50+	0.8	0.25	7.60	0.35	0.40	0.35	0.35	2.00+	0.70	(21.9)	IV-3-2 + V-6	鏃身部・基部先端欠損
270	I⑤~⑦K+	12.7+	2.60	0.8	0.30	10.10	0.50	0.50	0.45	0.45			18.0	V-5-1	鏃部下位・基部欠損
271	I⑤~⑦?	8.1+	2.50+	0.8	0.25	5.60+	0.55	0.55	0.40	0.45			7.9	VI-3-1	鏃身部・鏃部上位残存
272	I⑤~⑦?	2.5+	2.50+	0.8	0.20								2.1	史跡%21	鏃身部上位残存
273	I⑤~⑦?	2.7+	2.70+	0.8	0.30								2.1	V-5-1 + V-5 No 4	鏃身部残存
274	I⑤~⑦?	6.4+	2.60	0.8	0.30	3.80+	0.60		0.40				5.3	IV-3-2	鏃身部・鏃部上位残存
275	I⑤~⑦?	3.1+	2.50+	0.8	0.20	0.60+							2.5	VI-2	鏃身部残存
276	I⑤~⑧a	20.4+	2.30+	0.8	0.25	9.90	0.50	0.50	0.35	0.40	8.20+	0.90	(26.9)	V-5-1	鏃身部上位・基部先端欠損
277	I⑤~⑧a	17.8+	2.40+	0.8	0.30	9.70	0.50	0.50	0.35	0.40	5.70+	0.90	22.1	V-5-1	鏃身部上位・基部下位欠損
278	I⑤~⑧a	16.9+	1.70+	0.8	0.25	9.70	0.50	0.50	0.40	0.40	5.50+	0.70	(34.2)	IV-3-2 + IV-5-1 + V-5-1	鏃身部・基部先端欠損
279	I⑤~⑧a	15.7+	1.80+	0.8	0.30	9.70	0.45	0.45	0.35	0.40	4.20+	0.80	(59.4)	V-5	鏃身部先端・基部下位欠損
280	I⑤~⑧a	13.5+	2.30+	0.8	0.20	9.60	0.55	0.60	0.35	0.45	1.60+		(20.1)	V-3-1 + V-3-1	基部下位欠損
281	I⑤~⑧a	12.5+	1.50+	0.8	0.30	10.00	0.55	0.60	0.50	0.45	1.00+	0.70	15.9	VI-3-1③+史跡	鏃身部上位・基部下位欠損
282	I⑤~⑧a	12.6+	1.80+	0.8	0.30	9.80	0.55	0.55	0.40	0.40	1.00+		16.7	VI-1-1	鏃身部上位・基部下位欠損
283	I⑤~⑧a+	12.0+	2.20+	0.8	0.25	9.80+	0.50	0.55	0.40	0.50			13.8	VI-3-1②	鏃身部先端・鏃部下位・基部欠損
284	I⑤~⑧b+	11.0+	1.80+	0.8	0.25	9.20+	0.55	0.55	0.30	0.30			13.7	VI-2③	鏃身部下位・鏃部上位残存
285	I⑤~⑧c	12.4+	2.40+	0.8	0.25	8.80	0.40	0.45	0.35	0.40	1.20+		(24.1)	IV-3-2 + IV-3-2 + V-5-1	基部一部欠損

4. 武器・武具

No	期	計 測 値											出土位置	備考(残存状況)		
		全長				胴 部				茎 部		重 量				
		総長	鎌長	鎌厚	頸長	頸幅A	頸幅B	頸厚A	頸厚B	茎長	茎幅					
286	I⑤~⑥c	10.3+	1.00+	0.8	0.20	8.60	0.40	0.45	0.25	0.35	0.70+	(21.9)	IV・3-2+ V-5-1	胴部残存		
287	I⑤~⑥d?	15.7+	2.10+	0.8	0.30	8.10+	0.40	0.45	0.35	0.35	5.50	11.0	V・4④+ VI-3-1②	鎌身部先端欠損		
288	I⑥~?	5.0+	2.40+	0.8	0.20	2.60+	0.40		0.25			3.4	V-5-1	鎌身部・頸部上位残存		
289	I⑥~?	4.5+	1.40+	0.8	0.30	3.10+	0.50		0.45			4.5	VI-2	鎌身部下位・頸部上位残存		
290	I⑥~?	2.5+	2.50+	0.8	0.25							17.6	V・5-1	鎌身部残存		
291	I⑥~?	3.1+	2.40+	0.8	0.25	6.70+	0.60		0.25			2.2	VI-3-1	鎌身部残存		
292	I⑥~?	3.1+	2.30+	0.8	0.30	6.80+	0.45		0.35			2.9	V-6注	鎌身部残存		
293	I⑥~?	1.3+	1.30	0.8	0.30							0.7	V-6	鎌身部上位残存		
294	I⑥⑦a	18.9+	2.90+	0.8	0.30	9.60	0.55	0.60	0.40	0.45	6.40+	0.80	(67.0) VI-2②+ VI-3②+ VI-3-1	茎部先端欠損		
295	I⑥⑦a	13.4+	2.60+	0.8	0.30	9.90	0.55	0.60	0.40	0.50	0.90+	15.8	V・5-1	鎌身部先端・茎部下位欠損		
296	I⑥⑦d	12.5+	2.80+	0.8	0.30	8.10	0.50	0.50	0.40	0.50	1.60+	12.8	V-5-1	茎部下位欠損		
297	I⑥~⑦b	18.4+	2.60+	1.0	0.30	9.10	0.60	0.60	0.40	0.50	6.70+	22.1	IV-3-2	鎌身部先端欠損		
298	II	17.6+	4.00+	0.8	0.20	8.30	0.50	0.50	0.20	0.31	5.70+	16.9	VI-2+ VI-2②	逆刺長0.4+、逆刺長先端・茎部先端欠損		
299	II	17.5+	3.80	0.7	0.20	8.40	0.45		0.25		5.50+	0.90	4.9+	VI-2+ VI-2②	逆刺長0.2、茎部先端欠損	
300	II	16.8+	3.90	0.8	0.20	8.30	0.40	0.45	0.20	0.30	5.00+	0.80	15.0	VI-2+ VI-2②	逆刺長0.4、茎部下位欠損	
301	II	14.8+	4.00	0.8	0.20	8.00	0.40	0.45	0.20	0.25	3.10+	8.6+		VI-2+ VI-2②	逆刺長0.3、茎部下位欠損	
302	II	12.0+	4.00+	0.8	0.25	8.40+	0.50	0.50	0.30	0.30		(13.2)		VI-2+ VI-2②	逆刺長0.4、茎部欠損	
303	II	10.4+	3.90+	0.8	0.20	6.90+	0.45		0.20			8.9		VI-2+ VI-2②	逆刺長0.4+、頸部下位・茎部欠損	
304	II	10.5+	3.90+	0.8	0.20	6.90+	0.50	0.45	0.25	0.30		(12.6)		VI-2+ VI-2②	逆刺長0.3?、鎌身部・頸部上位残存	
305	II	9.5+	3.80	0.9	0.20	6.10+	0.50		0.25			11.5		VI-2+ VI-2②+ V-6	逆刺長0.4、頸部下位・茎部欠損	
306	II	8.5+	3.80	0.8	0.20	5.10+	0.50		0.30			6.4		VI-2+ VI-2②	逆刺長0.4、頸部下位・茎部欠損	
307	II	5.1+	3.70	0.8	0.20	1.60+	0.55		0.30			4.7		VI-2+ VI-2②	逆刺長0.2、鎌身部・頸部上位残存	
308	II	3.8+	3.80+	0.8	0.20							2.5		VI-2+ VI-2②	逆刺長?、鎌身部残存	
309	II	4.0+	3.20+	0.9	0.25	1.20+	0.50		0.25+			3.9		VI-2	逆刺長0.4、刃部胸断面内刃、鎌身部先端・頸部上位~茎部欠損	
310	II	3.8+	3.80+	0.8	0.20							3.4		VI-2②	逆刺長?、鎌身部先端・鎌身部下位~茎部欠損	
311	III	8.8+	4.80	2.1+	0.30	5.10+	0.65	0.50	0.35	0.30		14.7		IV-3-1	逆刺長1.1、茎部先端欠損	
312		9.0+				1.60+	0.50		0.21		7.40	3.9		VI-2②	頸部下位・茎部残存	
313		8.1+									8.10+	0.80	3.8		V-6	茎部残存
314		5.5+									5.50+		1.7		VI-2	茎部下位残存
315		13.7+				7.60+	0.55		0.35		6.10+	140.1			IV-4-1+ IV-5-1	183・315~322類群、鎌身部・茎部先端欠損

第3章 遺物

№	類	計測値										出土位置	備考(残存状況)			
		全長		鎌身部		頸部				基部				重量		
		最大	最小	最大	最小	頸幅A	頸幅B	頸厚A	頸厚B	最大	最小					
316	I ㊦㊧+	17.4+	1.20+	?		10.70	0.50			0.35		5.50+	0.85		IV-4-1+ VI-2	鎌身部先端・基部 先端欠損
317	I ㊦㊧b	18.9+	2.90	0.9	0.20	9.50	0.50			0.30		6.50+	0.90		IV-4-1+ VI-2	基部下位欠損
318	I ㊦㊧a	18.6+	3.00	1.1	0.30	9.70	0.65			0.30		5.90+	0.90		IV-4-1+ VI-2	基部先端欠損
319		8.3+		0.8	0.30	8.30+	0.60			0.35					IV-4-1+ VI-2	頸部・基部残存
320	I ㊦㊧~㊦㊧a	13.9+	1.90	1.0	?	9.60	0.50			0.45		2.40+	1.00		IV-4-1+ VI-2㊦	鎌身部下位・基部 上位残存
321	II	17.7+	3.30?	0.8	0.25	9.10	0.50			0.30		5.50+			IV-4-1+ VI-2㊦+ VI-3-1	基部先端欠損
322	I ㊦㊧b	16.1+	2.80	1.1	0.20	9.20	0.50			0.30		4.10+			IV-4-1	基部先端欠損
323	第37回参照															
323	I ㊦㊧㊦㊧b	14.7+	3.10	?		9.20	0.50			0.35		2.40+	0.70	207.0	IV-4-1	223・323~331 鎌身・基部下位欠損
324	I ㊦㊧b	19.2+	2.60	0.9	0.20	9.50	0.55			0.30		6.50+			IV-4-1+ VI-2	基部先端欠損
325	I ㊦㊧b	16.0+	3.20	0.9	0.20	9.40	0.55			0.30		3.40+	0.80		IV-4-1	基部下位欠損
326	I ㊦㊧a	18.8+	2.70	0.9	0.20	9.80	0.50			0.30		6.30+			IV-4-1	基部下位欠損
327	I ㊦㊧㊦㊧?	18.7?	2.80?	?	0.20	9.40+	0.55			0.30		6.50	0.90		IV-4-1	欠形
328	I ㊦㊧a	14.2+	2.70	0.9	0.20	9.80	0.40			0.40		1.70+	0.90		IV-4-1	基部下位欠損
329	第38回参照															
329	I ㊦㊧㊦㊧a	19.1+	2.80	0.9?		9.60	0.50			0.30		6.70+	0.80		IV-4-1	基部先端欠損
330	I ㊦㊧㊦㊧a	16.6+	3.00	?	0.20	9.70	0.55			0.30		3.90+	0.90		IV-4-1	基部下位欠損
331		1.9+										1.90+			IV-4-1	基部中位残存
332	I ㊦㊧㊦	18.6+	2.80	0.9		10.70	0.45			0.25		5.10+	0.90	81.7	IV-4-1+ IV・5・1	332~335鎌身・基 部先端欠損
333	I ㊦㊧a	20.9	2.70	0.8		9.70	0.50			0.30		8.50	0.80		IV-4-1+ IV・5・1	欠形
334	I ㊦㊧㊦㊦㊦?	19.3	2.70	?		10.80?	0.60			0.30		5.70	0.80		IV-4-1+ IV・5・2	欠形
335	I ㊦㊧b	17.6+	3.00	1.0	0.20	9.50	0.50			0.35		5.10+	1.00		IV-4-1+ IV・5・1	基部下位欠損
336	I ㊦㊧b	15.4+	3.10	0.9	0.25	9.50	0.60			0.40		2.80+		107.8	IV-4-1	336~342鎌身・基 部下位欠損
337	I ㊦㊧㊦b	13.1+	2.80?	0.9?	?	9.30	0.55			0.35		1.60+			IV-4-1	基部下位欠損
338		4.5+				4.50+	0.60			0.40					IV-4-1	頸部中位残存
339	I ㊦㊧㊦b	14.6+	2.80	0.9?	0.20	9.20	0.55			0.40		2.60+			IV-4-1	基部下位欠損
340	I ㊦㊧a	18.7	2.50	0.8	0.20	9.90	0.55			0.35		6.30			IV-4-1	欠形
341	I ㊦㊧a	13.6+	2.70	0.9	0.25	9.80	0.60			0.35		1.10+			IV-4-1	基部下位欠損
342	I ㊦㊧?	3.6+	2.90	0.8	0.25	0.70+									IV-4-1	鎌身部残存
343	I ㊦㊧a	14.5+	2.60	0.9?		9.80	0.40			0.30		2.10+	0.80	143.0	IV-3-1	343~349鎌身・基 部下位欠損
344		15.9+				9.20+	0.45			0.30		6.70+	0.80		IV-3-1	鎌身部・基部先端 欠損
345	I ㊦㊧㊦	17.7+	2.70	0.8		10.20	0.45			0.25		4.80+	0.80		IV-3-1+ V・3・2	基部下位欠損
346	I ㊦㊧~㊦㊧㊦	15.5+	2.30+	0.9		10.20	0.45			0.35		3.00+	0.75		IV-3-1+ V・3・2	鎌身部先端・基部 下位欠損
347	I ㊦㊧a	17.7+	2.60	0.8		9.80	0.45			0.30		5.30+	0.75		IV-3-1+ V・3・1	基部先端欠損
348	I ㊦㊧?	8.6+	2.70	0.9		5.90+	0.40			0.25					IV-3-1	鎌身部・頸部上位 残存

4. 武器・武器

No	種	計 測 値										出土位置	備考(残存状況)			
		全長	鎌 身 部			頸 部				茎 部				重量		
			鎌長	鎌幅	鎌厚	頸長	頸幅A	頸幅B	頸厚A	頸厚B	茎長				茎幅	
349	I㉔	17.4+	?			9.80+	0.50		0.25			7.60+	0.80		IV-3-1+ IV-5-1	基部先端欠損
350	I㉔a	21.1	2.70	0.9	0.25	10.00	0.50		0.30			8.40	0.80	100.6	IV-3-1+ V-3-2	350~354續着、完形
351	I㉔a	19.3+	2.70	0.9	0.25	9.80	0.60		0.35			6.80+	0.90		IV-3-1+ V-4-2	基部下位欠損
352	I㉔a	14.7+	2.70	0.9		9.80	0.60		0.40			2.20+	0.80		IV-3-1	基部下位欠損
353	I㉔k	16.4+	2.70	0.9	0.25	10.20	0.60		0.35			3.50+	0.80		IV-3-1	基部下位欠損
354	I㉔k	14.5+	2.70	0.9	0.30	10.10	0.60		0.40			1.70+	0.80		IV-3-1+ IV-3-1.8+ V-3-1 No15	基部下位欠損
355	I㉔b	17.4+	3.00	0.9	0.25	9.20	0.60		0.40			5.20+		301.0	V-4-2+ IV-5-1	240・355~369續着、基部先端欠損
356	I㉔a	18.0+	2.50	0.9	0.25	9.60	0.65		0.40			5.90+			V-4-2	基部先端欠損
357	I㉔㉔b	14.1+	2.90?	?	?	9.40	0.60		0.40			1.80+	0.85		V-4-2	基部下位欠損
240	第60回参照															
358	I㉔a	16.7+	2.60	0.9?	0.20	9.70	0.65		0.40			4.40+			V-4-2+ V-5-1	基部先端欠損
359	I㉔a	18.3+	2.60	0.9?		9.80	0.65		0.40			5.90+	0.90		V-4-2	基部先端欠損
360	I㉔㉔b	17.2+	2.60	?		9.50	0.65		0.35			5.10+	0.85		V-4-2+ V-6	基部先端欠損
361	I㉔b	13.9+	2.70	0.9	0.30	9.40	0.55		0.40			1.80+			V-4-2	基部下位欠損
362	I㉔~㉔b	12.0+	1.00+	0.9		9.40	0.60		0.45			1.60+	1.00		V-4-2	鎌身部先端・基部下位欠損
363	I㉔a	20.8	2.70	0.8	0.25	9.90	0.60		0.35			8.20	0.80		V-4-2+ VI-2	完形
364	I㉔a	13.8+	2.70	0.9	0.30	9.60	0.55		0.35			1.50+	0.85		V-4-2	基部下位欠損
365	I㉔~㉔?	8.7+	2.10+	0.9	0.30	6.60+	0.60		0.45						V-4-2	鎌身部下位・頸部上位残存
366	I㉔a	14.7+	2.70	0.9	0.30	9.90	0.68		0.45			2.10+	0.90		V-4-2	基部下位欠損
367	I㉔b	19.9	2.60	0.9	0.25	9.50	0.60		0.45			7.80	0.85		V-4-2+ VI-3-1㉔	完形
368	I㉔a?	12.3+	2.70	0.9	0.25	9.60+	0.60		0.35						V-4-2	鎌身部・頸部上位残存
369	I㉔?	9.5 ?+	2.70?	1.0	0.20	6.80+	0.50		0.40			2.40+	0.80		V-4-2	頸部下位・基部欠損
370	I㉔~㉔a	19.1	2.30+	0.9	0.20	9.90	0.60	0.35				6.90	0.80	94.0	V-4-2+ VI-3-1㉔	236・370~373續着、鎌身部先端欠損
371	I㉔a	13.5+	2.60	0.9	0.20	9.80	0.60	0.45				1.10+	0.70		V-4-2	基部下位欠損
372		5.2+				3.70+	0.50	0.50				1.50+			V-4-2	頸部下位・基部上位残存
236	第60回参照															
373	I㉔㉔b	13.5+	2.90+	0.8+	0.25	9.10	0.50	0.40				1.50+	0.80		V-4-2	基部下位欠損
374	I㉔k	13.3+	2.40	0.9	0.30	10.40						0.50+		262.0	V-2-1	43・54・121・374~383續着、基部下位欠損
121	第53回参照															
375	I㉔a	21.2+	2.70	0.9	0.30	9.80						8.70+	1.00		V-2-1	基部先端欠損
43	第49回参照															
376	I㉔~㉔k	17.4+	1.20	0.8		10.50						5.70+	0.80		V-2-1	鎌身部上位・基部先端欠損
377	I㉔b	18.6	3.10	0.9	0.30	9.30						6.20	0.80		V-2-1	完形
378	I㉔	12.2+	?	0.9	?	?	?	0.70	0.50						V-2-1	基部欠損
54	第49回参照															
379	I㉔	16.5 ?+				9.60?						6.90			V-2-1	基部先端欠損

第3章 遺物

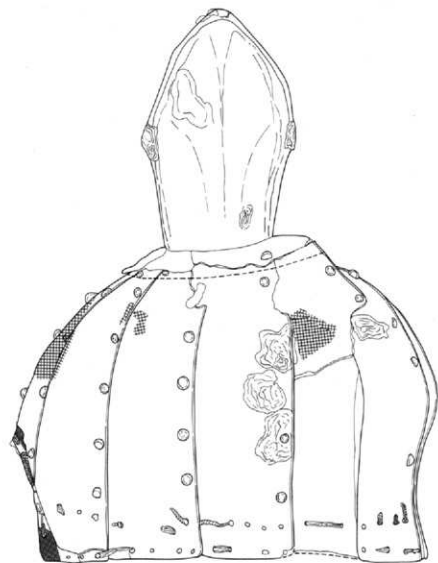
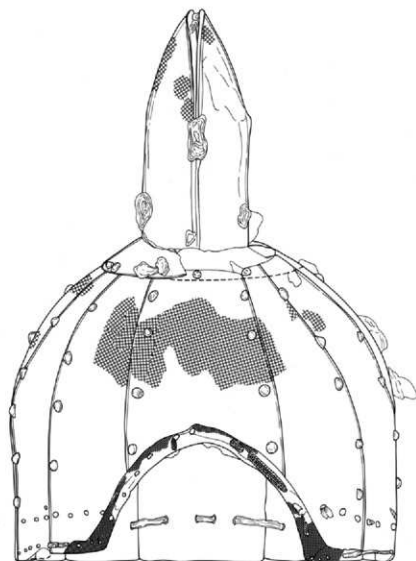
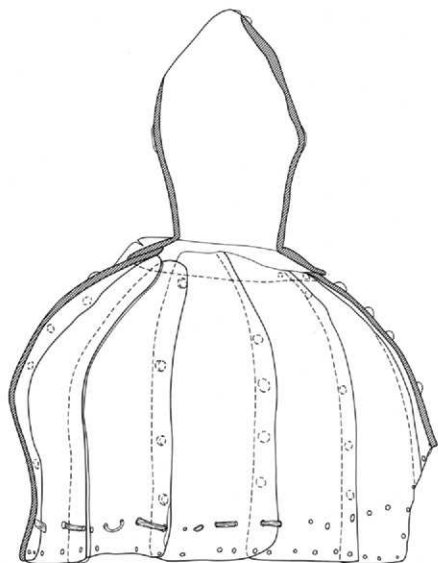
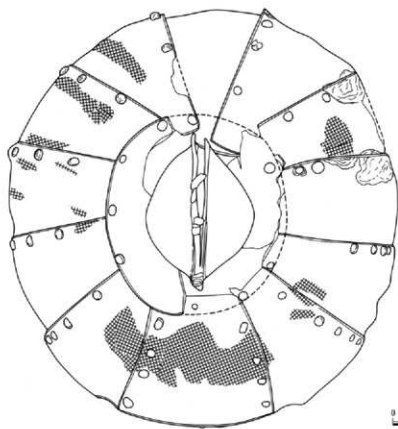
No	期	計測値										出土位置	備考(残存状況)			
		鎌身部			頸部				基部		重量					
		長さ	幅	厚	頸長	頸幅A	頸幅B	頸幅A	頸厚B	長さ				幅		
380	I①~④c	15.1+	1.90+	0.9		9.20						4.60	0.90		V-2-1	鎌身部上位・基部先端欠損
381	I②a	15.2 ?+	2.60?	0.9		9.70						2.90+			V-2-1	基部下位欠損
382	I①~④?	11.1+	1.80+	0.9		9.30+									V-2-1	鎌身部下位・頸部中位残存
383	I①⑤⑥?	4.3+	2.60	?		1.70+									V-2-1	鎌身部・頸部上位残存
384		13.4+				9.20+	0.55		0.40			4.20+		126.0	IV-5-1	384~389銅管、鎌身部・基部下位欠損
385		11.2+				5.20+	0.36		0.40			6.60+			IV-5-1	頸部・基部上位残存
386	I①#	16.2+	2.60	0.9	0.25	10.30	0.55		0.40			3.30+	0.80		IV-5-1	基部下位欠損
387	I②b	16.5+	3.00	0.9	0.30	9.40	0.60		0.40			4.10+	0.90		IV-5-1	基部下位欠損
388	I②b	17.7+	2.60	0.8	0.30	9.20	0.60		0.40			5.90+	0.80		IV-5-1	基部先端欠損
389	I②b	20.2+	2.70	0.9	0.30	9.50	0.60		0.40			8.60+	0.80		IV-5-1	基部先端欠損
390	I①a	12.5+	2.70	0.9	0.25	9.80	0.60		0.40			欠		234.0	IV-5-1	37~390~400銅管、基部欠損
391	I①b	13.8+	2.70	0.9	0.25	9.10	0.60		0.30			2.60+	0.80		IV-5-1 + V-1-1 + VI-1-1	基部下位欠損
392	I②	11.4+	?	0.9	0.30	?+	0.60		0.30						IV-5-1 + V-1-1 + VI-1-1	頸部下位・基部欠損
393	I①#	20.0+	2.70	0.9	0.30	9.60	0.60		0.35			7.70+			IV-5-1	基部下位欠損
394	I①~④a	14.0+	1.60+	0.9	0.25	9.60	0.70		0.40			2.80+	0.90		IV-5-1	鎌身部先端・基部下位欠損
395	I②a	15.4+	2.50	0.8	0.25	9.80	0.60		0.40			3.10+	0.90		IV-5-1	基部下位欠損
37	第48回参照															
396	I①~④a	15.2+	2.40 ?+	0.9	0.30	9.70	0.55		0.35			3.10+	0.90		IV-5-1	基部下位欠損
397	I①a	16.4+	2.60	0.9	0.35	9.70	0.60		0.38			4.10+			IV-5-1	基部下位欠損
398	I②	19.8	3.50	?	?	8.60	0.60		0.38			7.70	1.00		IV-5-1 + VI-2	基部下位欠損
399	I②b	13.3+	2.70	0.9	0.20	9.40	0.58		0.40			1.20+	0.85		IV-5-1	基部下位欠損
400	I①⑤⑥#	15.1+	2.60			10.20	0.60		0.38			2.30+	0.85		IV-5-1	基部下位欠損
401	I②b	14.9+	3.10	0.9	0.20	9.20	0.50		0.25			2.60+	0.90	123.0	VI-2-1	401~408銅管、基部下位欠損
402	I①a	12.8+	2.70	0.9	0.20	9.80	0.55		0.35			0.30+			VI-2-1	基部欠損
403	I④?	7.0+	3.20	1.0	0.25	3.80+	0.45		0.35						VI-2-1	鎌身部・頸部上位残存
404		6.4+				3.40+	0.50		0.35			3.00+	0.80		VI-2-1	頸部下位・基部上位残存
405	I⑤?	9.3+	2.60	0.8	0.25	6.70+	0.50		0.30						VI-2-1	頸部下位・基部欠損
406	I②b	14.1+	3.10	0.9	0.25	9.10	0.55		0.35			1.90+	0.80		VI-2-1	基部下位欠損
407	I②#	12.8+	2.50	1.0	0.30	10.10	0.60		0.35			0.20+			VI-2-1 + V-5-1	基部欠損
408	I②b	17.1+	2.90	0.9	0.25	9.30	0.70		0.35			4.90	0.80		VI-2-1 + V-5-1	基部先端欠損
409	II	12.3+	?	0.9	0.20	?	0.45		0.35			0.90+		43.3	VI-2 + VI-2②	409~413銅管、逆刺長?、鎌身部先端・基部下位欠損
410	II	8.8+	2.80+	0.8	0.20	6.00+	0.55		0.30						VI-2 + V-6	逆刺長?、鎌身部下位・頸部上位残存
411	II	11.2 ?+	3.90?	0.8	0.25	7.60+	0.45		0.30						VI-2	逆刺長0.3?、基部下位欠損

4. 武器・武具

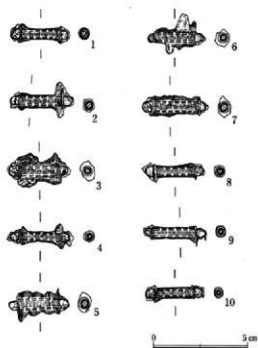
No.	類	計 測 値										出土位置	備考(残存状況)		
		全長	鎌 身 部			柄 部				茎 部				重量	
		鎌長	鎌幅	鎌厚	柄長	柄幅A	柄幅B	柄厚A	柄厚B	茎長	茎幅				
412	II	6.5+	4.00	0.8	0.24	2.50+	0.50		0.35				VI-2	逆刺長?、柄部下位・茎部欠損	
413	II	4.0+	3.70+	0.8?	0.15	0.30+							VI-2	逆刺長?、鎌身部残存	
414	I①a	20.3	2.70	0.9	0.30	10.00	0.50		0.40		7.60	0.90	117.0	VI-1-1 + V-1-1	188・414~418續着、完形
415	I①a	20.5	2.70	0.9	0.30	9.70	0.55		0.35		8.10	0.70		VI-1-1	完形
416	I⑤b	17.8+	2.80	0.8	0.30	9.40	0.50		0.40		5.60+	0.80		VI-1-1 + V-1-1	茎部先端欠損
417		6.9+				6.90+	0.55		0.40					VI-1-1	柄部中位残存
188	第57回参照														
418	I⑤?	7.9+	2.80	0.8	0.30	5.10+	0.50		0.40					VI-1-1	鎌身部・柄部上位残存
419	I⑤~④a	16.6+	2.20+	0.8	0.25	9.90	0.50		0.40		4.50+		217.0	V-5-1	33・194・419~430續着、鎌身部先端・茎部下位欠損
194	第57回参照														
420		6.2+				2.90+	0.60		0.50		3.30+	0.85		V-5-1	柄部下位・茎部上位残存
421	I①⑤a?	12.5+	2.70	?	?	9.80+	0.60		0.35					V-5-1	柄部下位・茎部欠損
33	第4回参照														
422	I⑤a	14.7+	3.00	0.9	?	9.60	0.50		0.35		2.10+	0.80		V-5-1	茎部下位欠損
423	I①⑤a	14.6+	2.70	?	?	9.40	0.50		0.35		2.50+	0.85		V-5-1	茎部下位欠損
424	I⑤?	9.3+	2.70	0.8	0.35	6.60+	0.60		0.35					V-5-1	鎌身部・柄部上位残存
425	I⑤?	10.7+	2.90	0.9	0.30	7.80+	0.60		0.40					V-5-1	鎌身部・柄部上位残存
426	I⑤?	8.6+	2.90	0.9?	0.3?	5.70+	0.55		0.40					V-5-1	鎌身部先端・柄部下位欠損
427	I⑤~④?	10.2+	1.90+	0.8	?	8.30+	0.50		0.35					V-5-1	鎌身部先端・柄部下位欠損
428	I①b	16.8+		?	?	10.60	0.50		0.35		6.20+			V-5-1	茎部下位欠損
429	I①⑤b	14.7+	2.90			9.50	0.60		0.35		2.30+			V-5-1	茎部下位欠損
430	I①~④?	10.3 ?+	2.60?	0.9	?	7.70+	0.60		0.35					V-5-1	鎌身部・柄部上位・柄部下位残存
217	第59回参照														217・431~440續着
431	I①a	18.8+	2.70	0.9	0.30	9.60	0.60		0.45		6.50+			V-5 + V-1-1 + VI-1-1	茎部先端欠損
432	I①~④a	14.7+	1.00+	0.9	0.30	10.00	0.65		0.48		3.70+	0.90		V-5 + V-5-1	鎌身部上位・茎部下位欠損
433	I①a	18.9	2.70	0.9	0.25	9.80	0.55		0.50		6.40	0.80		V-5 + IV・5-1	完形
434	I⑤~?	16.1+	2.20+	0.8	0.25	8.40	0.55		0.50		5.50	0.75		V-5 + V・5-1	鎌身部先端欠損
435	I⑤C	16.4	2.90?	0.8	0.30	8.90	0.60		0.45		4.30+	0.85		V-5	茎部下位欠損
436	I⑤a	17.4+	?	?	?	9.70	0.55		0.45		7.70	0.90		V-5 + V・5・No.4	鎌身部・茎部先端欠損
437	I⑤a	18.5+	2.70	0.8	0.25	9.60	0.60		0.50		6.20+	0.85		V-5 + V・5-1	茎部下位欠損
438	I①?	22.7	2.60	0.9	0.30	12.20	0.55		0.45		7.90	0.85		V-5 + IV・5-1	完形
439	I⑤b	15.6+	3.00	0.9	0.30	9.50	0.50		0.45		3.10+	0.95		V-5 + V・5-1	茎部下位欠損
440		6.5+				6.50+	0.60		0.45					V-5	柄部中位残存
106	第52回参照														106・441~444續着

第3章 遺物

No	類	計測値											出土位置	備考(残存状況)	
		全長	鎌身部			頸部				茎部		重量			
			鎌長	鎌幅	鎌厚	頸長	頸幅A	頸幅B	頸厚A	頸厚B	茎長				茎幅
441	I①a	15.6+	2.70	0.9	0.30	10.00	0.55	0.35		2.90+	0.90		VI-3-1④	基部下位欠損	
442	I①a	14.1+	2.70	0.9	0.25	9.80	0.65	0.35		1.60+	0.95		VI-3-1⑤	基部下位欠損	
443	I①a	17.9+	2.60	0.9	0.25	9.90	0.60	0.35		5.40+	0.85		VI-3-1④	基部下位欠損	
444	I②a	19.2+	2.80	0.9	0.25	9.60	0.60	0.35		6.80+			VI-3-1④	基部先端欠損	
445	I①a	12.9+	2.50	0.8	0.25	9.90	0.60	0.40		0.50+		65.0	VI-3-1+ VI-3-1④	445~448錆着、基部欠損	
446		13.1+				9.20+	0.55	0.25+		3.90+	0.85		VI-3-1+ VI-3-1④	鎌身部・基部下位欠損	
447	I②	19.1+	2.30+	?	?	9.10+	0.70	0.50		7.70			VI-3-1+ VI-3-1④	鎌身部・基部先端欠損	
448	I④?	16.2+	2.80	1.0	0.25	7.40+	0.70	0.35					VI-3-1+ VI-3-1④	鎌身部・頸部上位残存	
449	I⑤a	26.0	2.60	0.8	0.25	9.80	0.70	0.70	0.40	0.40	7.60		334.0	VI-3-1+ V-4-2	229・449~464錆着、完形
450		12.9				16.40+	0.60	0.45		2.50+	0.70		VI-3-1+ V-5-1	基部下位・頸部上位・鎌身部欠損	
451	I①j	18.4+	2.60	0.9	?	11.60	0.55	0.35		4.20+	0.90		VI-3-1	基部下位欠損	
452	I①k	17.4 ?+	3.00?	0.8?	0.25 ?	18.10	0.60	0.35		4.30+	0.85		VI-3-1+ V-6	基部下位欠損	
229	第39図参照														
453	I④a	19.4	2.90	1.0	0.25	10.00	0.60	0.35		6.50			VI-3-1+ V-3-2	完形	
454	I①a	13.3	2.60	0.9	0.25	9.90	0.55	0.40		0.80			VI-3-1	基部下位欠損	
455	I④b	15.3+	3.00	0.9	0.25	9.10	0.60	0.35		2.90+	0.75		VI-3-1+ IV-3-2	基部下位欠損	
456	I④a	14.4+	2.90	1.0	0.25	9.70	0.55	0.35		1.80+	0.90		VI-3-1+ VI-3-1④	基部下位欠損	
457	I⑤	13.9+	?	?	?	9.70+	0.60	0.45		4.20+	0.85		VI-3-1+ VI-3-1②	基部下位欠損	
458	I①~④?	9.1+	?	0.9	?	7.60+	0.60	0.40		1.50+			VI-3-1	鎌身部・頸部上位残存	
459	I④~⑤b+	15.4+	2.10+	1.0	0.25	9.40+	0.55	0.40		3.90+	0.80		VI-3-1+ VI-3-1④	鎌身部先端・基部下位欠損	
460	I⑤a	19.6	3.10	0.9	0.25	9.90	0.65	0.38		6.60	0.85		VI-3-1	完形	
461	I①k	18.6	2.70	0.9	0.30	10.20	0.50	0.35		5.70			VI-3-1+ V-6	完形	
462	I①a	16.5	2.70	0.9	0.20	9.70	0.60	0.35		4.10	0.70		VI-3-1	完形	
463	I④b	16.9+	2.80	0.8		9.40	0.60	0.38		4.70+			VI-3-1	基部下位欠損	
464	I④a	13.6+	2.50	0.9	0.25	9.90	0.60	0.35		1.20+			VI-3-1	基部下位欠損	



第68図 冑



第69図 弓一両頭金具

(6) 飾り弓 (第69図)

史跡整備時の石室解体修理に際し、両頭金具10点が出土した。詳細な出土位置は不明であるが奥壁際から出土したものか。これらの他に本引金具や縁金具等の出土はなく、両頭金具の装着状態をはじめとした弓全体の原形を復元することは困難である。また、これらの金具が何本の弓に装着されていたものかも不明である。

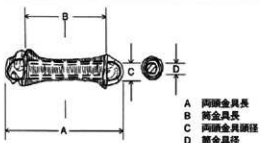
法量は第12表のとおりである。全長は2.95~3.20cm、筒金具の長さは、1.95~2.30cmである。幅の狭い個体が弣に近い位置に装着されたものと考えられる。

筒金具の端部は、その両端を折り曲げ、花弁状にする事例が他古墳出土例に見られるが、本事例でも同様の造作がなされたものと思われるが欠損が著しい。また、筒金具には木質が残存する。木目は金具と直交している。木質の樹種は不明である。筒金具の材質は、木質に隠れ、確認できないが、錆跡の少ないことから非鉄系の素材が使用されていると想定される。

筒金具から飛び出している頭部は、半球というよりマッチ棒の頭に近く、笠状を呈している。その全

第12表 弓一両頭金具計測値一覧 単位 (cm)

No	A	B	C	D	備考
1	3.00	2.05	0.50	0.35	史跡整備時出土
2	3.25	2.25	0.50	0.40	史跡整備時出土
3	3.10	2.00	0.50	0.45	史跡整備時出土
4	3.15	2.15	0.50	0.35	史跡整備時出土
5	3.20	2.15	0.50	0.55	史跡整備時出土
6	2.95	1.95	0.45	0.50	史跡整備時出土
7	3.25	2.25	0.60	0.45	史跡整備時出土
8	3.15	2.10	0.60	0.40	史跡整備時出土
9	3.20	2.30	0.45	0.35	史跡整備時出土
10	3.00	2.00	0.40	0.35	史跡整備時出土



A 両頭金具長
B 筒金具長
C 筒金具直径
D 筒金具径

て、粗い織り目の布が付着している。また、頭部と筒金具の間には靴状に延びる遺存物がある。弓本体に塗布された漆の残存痕と思われる。

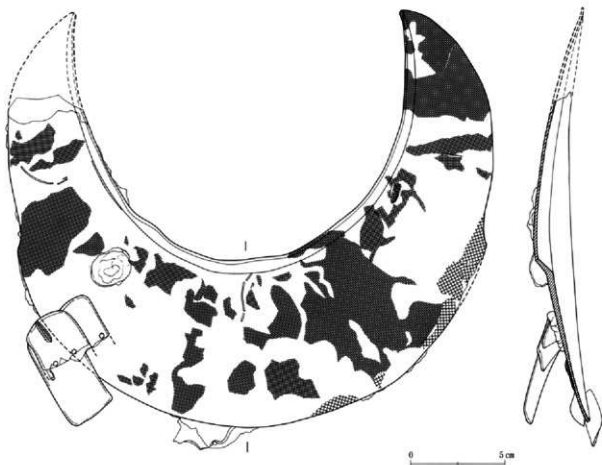
(7) 鉄 冑 (第68図)

玄室左奥部左側壁寄りからの出土で、左奥隅からの距離は1.45mである。挂甲・鉄籠に接して出土した。

頂部に突起の付く堅板鉾留式の頭冑である。出土時、突起は、鉢部から脱落していた。現状は修復が施され、変形も最小限となっているが、今回は、1970 (昭和45) 年に実測時点での状況を基礎に報告する。

器面は錆跡による変形、欠損が顕著であった。特に、頂部の伏板は、後頭部側が欠損、側板との接合もはずれていた。左側面、4枚目の側板は、中位から下位の3分の2が割れ、脱落していた(現状は、補修、復元されている)。また、後頭部の側板は鉾留がはずれ、外方に膨らみ、全体形状に変形をきたしていた。

全体の総高は、29.3cm、鉢部の最高位の高さは、15.5cmである。横幅は、20.2cm、前後長、22.0cmである。下端での円周長は、65.1cmである。



第70図 陶 当

鉢部は、12枚の堅形板を鉋留して成形されている。鉢部の前面、前額部に位置する3枚の鉄板は、下端を円弧形に折り込んでいる。折り込みの高さは6.4cm、横幅10.6cmである。

鉢部を構成する各鉄地板は、上端よりも下端の幅が広い長台形に裁断されている。下端の幅は4.4~5.5cmである。これを前額部の鉄板を起点に、その左右の鉄板を順次下重にし、側端部を、約0.8cmほどを重ねて鉋留している。これは後頭部まで同じ関係が続いている。左側面は4枚、右側面は4枚から成る。後頭部の鉄板は下幅7.0cmを測り、左右両側の鉄板を上に乗せられて接合・固定され収束する。

下端が折り込まれた前額部3枚の鉄板は、この側方部のそれと比較してやや幅広で、上端の幅は4.8cm、下端の幅は8.3cm、厚さ約2mmである。両側辺には約2.4~2.7cmの間隔を保って、各4個ずつの鉋留がなされている。その左右の地板金も縦列に5個の

鉋で留られている。その間隔は2.7~3.3cmで、他の側板でもほぼ一定である。鉋頭の直径は約0.6cmである。

鉢部の頂辺には直径10.5cmの円形板が、12枚の堅形板の上端を覆い、12カ所を鉋留している。

この伏板は頂部の突起と一体に成形されているように観察される。

頂部の突起は剣菱形を呈する。高さ、12.5cm、横幅、5.75cm、前後長は、5.31cmである。最大幅は伏板から5.5cm上位の位置にあり、前後幅7.4cmである。2枚の鉄板を合わせるが出土時には接合面は開いていた。覆輪状の板金の接合はみられない。

前額部の折り込み部分を含めた鉢部の下端には、幅0.8cmにわたり覆輪状に布がおかれ、この上を組紐で、留めている。また、下端から上方2.0cmの高さに径1.5mmの小孔が、同一レベルで並んでいる。減孔と考えられ、1枚の板金に4孔が穿たれている。後頭

部の地板には組紐が残存している。

鉢部の外面には広範囲にわたり織りの粗い布が附着している。

(8) 胸 当 (第70図)

屍床部左側壁寄り、挂甲小札の一群と重複して出土した。位置は奥壁から1.65m、左側壁から0.85mである。

厚さ1.5～4mmの鉄板1枚を成形したもので、弧を下向きにする三日月形を呈する。器面全体は附着物、錆跡により損傷が著しいものであった。図中、左上の一端は欠損している。縦21.8cm、横幅25.7cmを測る。内縁の端部は幅8mmほど外折し、折り返してある。内面側は弱い稜をなしている。内外縁とも端部は丁寧に面とりされている。外縁には、図中、右上から11.0～14.0cmの部分に弱い抉り込みが入る。反対の左側も対称的な形状を成している。形状はきわめてシンプルで、人体への懸垂あるいは装着のための帯紐をとす孔、あるいは縁部に覆輪を取るための孔は全く認められない。

外面には広い範囲に布の附着が認められる。布はその目の粗密から2種類に大別される。これらの布は、縁部の覆輪や体への装着のための機能に直接かわるものとは考え難い。

器面には挂甲小札の破片が着する他、長さ2.3cm、太さ2.1mm以下の細い革紐や組紐の残存が認められた。

(9) 挂 甲 (第73～108図)

① 出土状態

挂甲は、屍床部左側壁寄りの床面上から、最低2個分が出土した。その範囲は、玄室主軸方向で1.2m、直行方向で1.2mに及ぶ。奥壁際はやや隙間を有していたものの、左側壁際は壁際いっぱいまで小札が散乱した状況であった。

2領のうち、奥壁寄りに置かれたのがA種で、直径70cmほどに草摺が錆着し、円形を描いて出土している。この挂甲の内部には上端を石室開口部方向に向けて鬚当が、2枚重ねにして、一双方収納されていた。A種より石室開口部寄りからB種が出土して

いる。こちらも直径50cmほどの円形を描いて草摺が重なっていた。各段は輪軸を呈し、4段が入れ子状になっていた。その上に胴部を構成していたと考えられる小札が直立状態で出土した。B種の出土範囲の開口部寄りから胸当が出土している。背は小札の上に重なっていた。

籠手は、挂甲本体とはやや離れ、左側壁際から出土している。周辺から鉄製鎧、銅製環鎧が出土している。

収納容器の有無については確認できなかった。また、小札の器面には布の附着するものが多数存在したが、これらと収納状態との関係も断言できる状況はみられなかった。

これら挂甲小札は、2次の調査で4度にわたり取り上げられており、その都度、小区画ごとに区分して取り上げられている。

② 小札の分類と特徴

挂甲と籠手、鬚当などの付属具に使用されたと思われる小札は、総数で5,908枚以上が確認された。小札は、その形状、鍼孔、綴孔の様相から第71・72図のように26に分類できた。個々の出土量は第13表のとおりである。

小札IからVIIIは鍼孔が二列に配されたものである。XからXIIは鏃状鉄札である。小札XIIIからXIVは鍼孔一列が配されたものである。以下個々の特徴について記述する。

小札Iは、円頭形あるいは円頭形に近似する形状のもので、長さ6.57cm(平均値、以下も同様)、幅2.44cmを測る。鍼孔は二列で、頭部に4個、中央やや上位2個の合計6個である。綴孔は4個、下挿孔は2個である。

小札IIは、Iに近い形状を呈するもので、長さ6.44cm、幅2.41cmを測る。鍼孔は二列で4個、綴孔4個、下挿孔2個が配されている。

小札IIIは、頭部の形状が円形に近いものも含まれる。長軸方向の中央部分は強く内彎している。中央部と下部の境目には弱い稜を有しているが、中央部と上部との境目には明瞭な変換点は見られない。中

第13表 掛甲小札型式別数一覧

分 類	数量	残 存 状 況				緩 方 の 重 ね				備 考
		完形	上位残存	中位残存	下位残存	右上	左上	真中	不明	
I	78	55	15	1	7	21	50	1	6	
II	1,804	1,271	283	18	232	719	880	122	193	
III a	111	62	20	10	19	55	47	0	9	} 細分不能 9片
III b	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
III c	3	1	0	1	1	2	1	0	0	
IV	157	126	15	4	12	76	77	1	3	
V	46	35	5	0	6	9	26	0	11	
VI	368	277	51	2	38	252	98	1	17	
VII	339	309	16	0	14	172	160	1	6	
VIII	78	66	8	1	3	36	41	1	0	
IX	1	1	0	0	0	0	0	0	1	
X	48	36	12	0	0	31	15	2	0	} 龍手の露状鉄札 龍当の露状鉄札
X I	72	36	36	0	0	37	33	2	0	
X II	135	11	47	36	41	73	55	1	6	露状鉄札
X III a	549	395	66	11	77	241	201	2	105	
X III b	11	11	0	0	0	1	3	0	7	
X IV	1	1	0	0	0	0	0	0	1	
X V	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
X VI a	87	33	12	17	25	30	29	1	27	} 破片あり 細分不能 7片
X VI b	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
X VI c	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
X VI d	1	0	1	0	0	0	1	0	0	
X VI e	1	1	0	0	0	1	0	0	0	
X VII	1,201	712	253	34	202	528	522	7	144	
X VIII	261	139	87	0	35	151	79	1	30	
X IX	2	0	0	0	2	0	0	0	2	
X X	167	144	14	0	9	63	90	1	13	
X X I	169	140	5	1	23	70	96	2	1	
X X II	28	26	0	0	2	12	15	1	0	
X X III	27	23	0	0	4	20	7	0	0	
X X IV	32	27	5	0	0	10	21	0	1	
X X V	1	0	1	0	0	0	1	0	0	
X X VI	1	0	0	0	1	0	0	0	1	
パターン不明	125	0	7	102	16	11	10	1	103	
合 計	5,908	3,942	959	238	769	2,625	2,558	38	687	

中央部の孔の有無とその位置により、a、b、cに細分した。III aは、長さ13.75cm、幅2.38cmである。頭部に二列で4個の鍼孔、4個の綴孔を、下部に二列で2個の鍼孔、4個の綴孔、2個の下綴孔を配している。III bは、III aと頭部、下部の孔の配置は同様であるが、中央部のやや右側寄りに孔2個が配されている。III cは、中央部に孔1個が配されている。

小札IVは、頭部が円形を呈するもので、中央部は弱く内彎する。長さ6.36cm、幅2.38cmを測った。鍼孔は二列4個を頭部に配する。綴孔は下部に二列4個を配し、最下段には下綴孔2個がある。

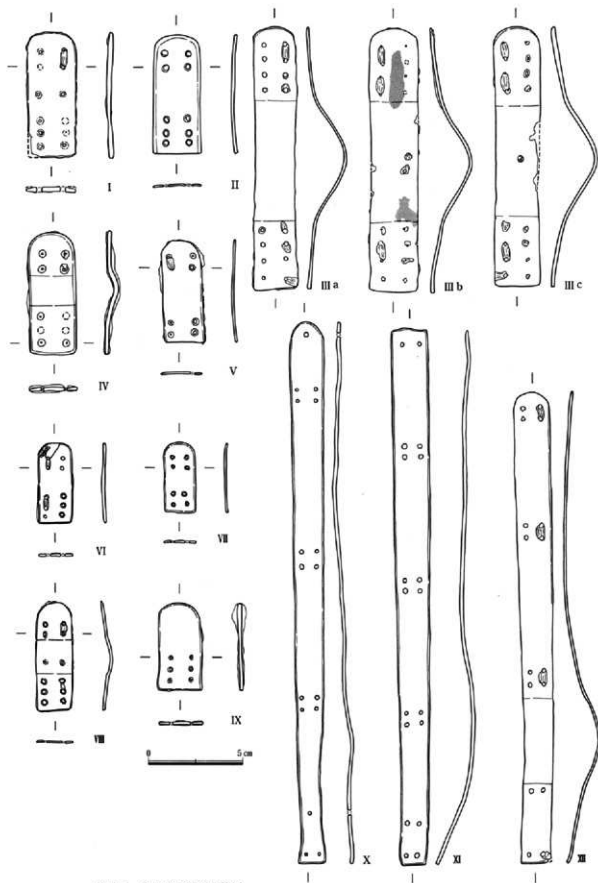
小札Vは、IやIIに比してやや小型である。長さ

は、5.69cm、幅2.24cmを測った。頭部の孔は、二列4個の鍼孔である。下段の2個は下綴孔と考えられる。

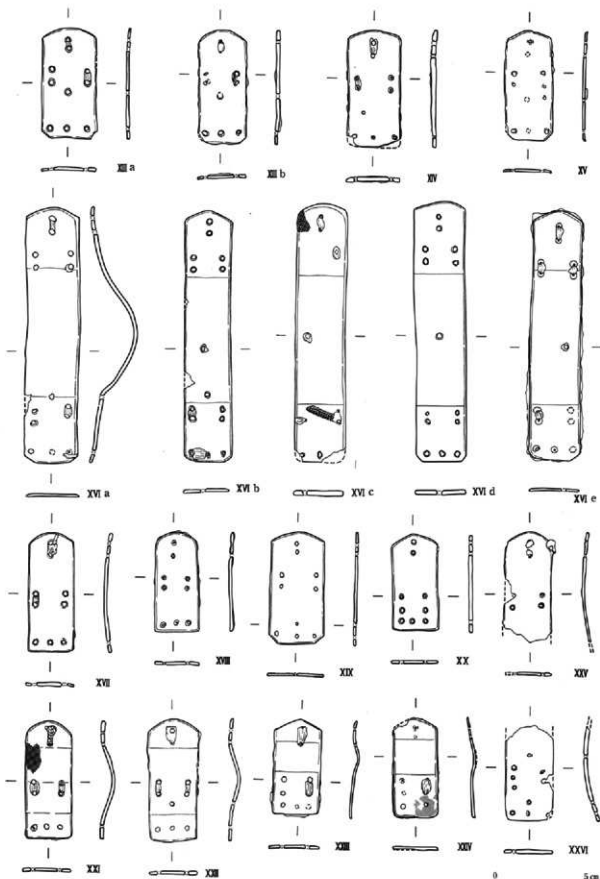
小札VIは、Vよりさらに小型の小札である。長さは4.28cm、幅1.81cmを測る。頭部には二列4個の鍼孔がある。下部の6個のうち上位4個が綴孔、下位2個が下綴孔と考えられる。

小札VIIもVI同様、小型の小札である。長さ3.85cm、幅1.76cmを測る。頭部に二列4個、下部に二列4個の孔を配している。頭部は鍼孔、下部は上位2孔が綴孔、下位2孔が下綴孔であろうか。

小札VIIIは、頭部が円形を呈している。長さは、5.82



第71図 各型式の控甲小札(1)



第72図 各型式の挂甲小札(2)

cm、幅1.92cmと横幅に比して長さを有する形状である。断面形は中央部でやや内彎している。鍼孔は二列6個で、頭部に4個、中央部に2個を配している。下部には二列4個の綴孔と2個の下掘孔がある。

小札IXは、下半に二列6個の孔がある。上半についてはX線透視でも判然としなかった。長さは4.69cm、幅2.45cmを測る。

XからXIIは、鎌状鉄札である。

Xは、上幅約1.9cmを測る。下端からやや中央部に寄った部分がわずかに内彎する断面形状をなす。孔は、最下段の2個が下掘孔、この孔の上方、中央に配された1個が鍼孔になる。他は綴孔と考えられ、頭部に1個配し、これ以下に2列4孔を3段、ほぼ等間隔に配置している。

XIは、上幅1.7～1.9cmを測る。長さは構成部位により、長短の相違が大きい。断面形状は、下位部分が表面方向に向かって反り返っている。孔は、X同様、最下段の2個が下掘孔となり、この孔の上位にある二列2個が鍼孔となると考える。これより上方に配された孔は綴孔である。

XIIは、頭部が円頭形を呈している。長さは、7.05cm、幅1.82cmである。断面形は、下位に、その両端と比較的明確な後をもって内彎する部分を有している。孔の役割は、X、XI同様、最下段の二列2個が下掘孔となる。内彎部分より上位の孔は綴孔であろう。

小札XIIIは、頭部が偏円頭形に近い形状を呈している。また、下端の両隅が欠かれていることも特徴的である。長さは5.95cm前後であるが、横幅の広狭によりa、bとした。XIII aの幅は2.64cmで、XIIIの中の多数を占めている。XIII bの幅は2.45cmである。孔の配置は両者ともに共通である。鍼孔は一列で、頭部に2個、やや間隔を開けて中央やや上方寄りに1個の合計3個である。綴孔は、二列4個を中央やや上方寄りに配されている。最下段の下掘孔は3個である。

小札XIV、小札XVも形状、孔の配置は小札XIIIと共通している。XIVは、第3鍼孔がやや左側縁寄

りに位置している。XVは、右列の第2綴孔の下位に孔1個が見られる。

小札XVIは、長軸方向の中央部分が強く内彎する形状である。中央部と下部の境には明瞭な稜を有している。頭部は尖頭形に近い形状のものも見られる。また、下端の両隅はXIII同様欠かれている。中央部に見られる孔の様相により細分した。XVI aは、長さ13.18cm、幅2.67cmを測る。鍼孔は、一列で、頭部に2個、中央部、下段との後近くに1個の合計3個である。綴孔は、頭部に二列4個、下部に二列4個が配される。下掘孔は最下段に3個である。XVI bは、第3鍼孔の上方に孔1個が配されたものである。

XVI cからXVI dは、第3鍼孔が見られない点が共通している。その代わりに中央部に孔1個が配されている。XVI cは左側縁寄りに、XVI dは中央に、XVI eは右側縁寄りにある。

小札XVIIは、長さ6.27cm、幅2.77cmを測る。下端は平坦に成形されている。鍼孔は、頭部に一列2個が配される。綴孔は、中央やや下位より二列4個ある。最下段の下掘孔は3個である。

小札XVIIIの孔の状況はXVIIと全て共通するが、長さが5.23cm、幅2.26cmである点が大きな相違点である。この小札も下端は平坦である。

小札XIXは、完形品が残存していない。XIIIからXVと共通する形状と考えられるが、最下段の下掘、中央孔の上方に孔1個が配されている。鍼孔とするとはより一段下位にある。

小札XXは、長さ5.20cm、幅2.35cmを測る。下端は平坦である。鍼孔の配置は、頭部に一列2個、綴孔は下部に二列4個、下掘孔は一列3個の合計9個である。

小札XXIは、中央部が弱く内彎する断面形状である。長さ5.20cm、幅2.35cmを測る。形状は、下端が平坦なものと、両隅が欠かれたものがあり、細分される必要があらうか。鍼孔は、頭部に一列2個配されている。綴孔は、中央部、内彎部分に二列4個がある。下部には下掘孔が一列3個見られる。

小札XXIIは、長さ6.37cm、幅2.49cmを測る。断

面形状は、中央部が弱く内彎する。孔は、鍼孔が一系列合計3個である他はXXIと共通している。

小札XXIIIは、頭部が突頭である。上位の一部が弱く内彎する断面形状を呈する。長さは、5.18cm、幅2.37cmを測る。孔の配置はXXと共通で、頭部に鍼孔一列2個、下部に綴孔二列4個、下揃孔一列3個である。

小札XXIVは、XXIIIと共通する形状である。鍼孔は頭部に一列2個、綴孔は下部に二列4個である。下揃孔が2個である点がXXIIIとの差異である。

小札XXV、小札XXVIは破片資料で、一部分の残存である。XXVは、幅2.61cmで上位の破片である。XXVIに類似するが、頭部から中央部への移行の度合いが異なる。XXVIは、幅2.49cm、下半部の破片である。中央部は内彎する断面形状を呈するか。孔の配置は、内彎部の中央に1個、下部上位に二列5個、下位に4個である。

③ 製作時の特徴

小札の遺存状態が必ずしも良好と言えないため、細部の観察は困難な点が多かった。鉄板の厚さは、錆跡の無かった小札IIが0.8~1.0mm、小札IIIが1.0~1.7mm、小札XIIが1.0mmを測った。

きめだしは、XIII、XVI等、鍼孔一列のB種小札の上端、両側縁部に見られる。折り返しは、確認が困難であったがXVIの下端に弱く残っていた。

小札II・XIIIは綴じた時、外側に器面が露出する側の側縁のみ面とりをして角を落としている。

鍼孔、綴孔の穿孔は、表面側の直径が一回り大きく、裏面に向かって斜辺をなす例もみられた。

④ 各小札の帰属

挂甲は、形状、鍼孔、綴孔の様子から最低2領が存在すると考えられる。鍼孔の穿孔位置から二種に大別した。

A種は、鍼孔二列配置されたものである。胴部は、竪上・小札Iが使用されていたと考えられる。竪上・長側には小札IIが使用されている。また、小札IIは鍼の方法を変えて草摺にも使用されている。腰札には小札III22枚が確認できた。草摺の裾札には小

札IVが当たると考えられる。

B種は、胴部の竪上・長側に小札XIIIが、腰札に小札XVIが、草摺にXVIIが、草摺裾札にXXI・XXIIが当てられていたと考えられる。

挂甲の主要部分を構成していた小札の他に、鎌状鉄札として随手に使用されている小札X、胴部に使用されていた小札XI、用途不明の小札XIIがある。小型の小札としては、鍼孔二列のもので小札V、IXがある。鍼孔一列のものに、XIII、XX、XXIVがある。これらは付属具を構成していたものと考えられ、肩甲、膝甲、背の綴、頬当等の存在が推定される。

⑤ 小札の観察

小札Iの出土総数は78枚である。そのうちの1~14を図示した(第73図)。

1~3は、単品の資料である。付着した布の残存から1・2は左を上、3は右を上にして綴じられているものと考えられる。4~6、7~9、13・14はいずれも左を上、10~12は、右を上重ねて綴じられている。鍼には組紐が使用され、表面では立取に鍼されている。裏面では第3鍼孔を横方向に千鳥に鍼していることが見える。綴は判然としない。下揃は右斜下方向にラセン状に紐をくくっているが覆輪については確認が難しかった。いずれの資料も裏面に平織りの布片が付着している。7~9の布の織りは、1cm幅に経(図上において、以下同様)50本、緯(図上において)26本の糸が数えられた。他の小札も同様である。

小札IIの出土総数は1,804枚である。そのうちの1~30を図示した(第77・78図)。

1・2・5・10は、単独の資料である。3・4は左を上重ねている。綴紐の動きが観察できる。6・7は裏面で鍼の紐が横方向に二列見られる。20~22は、左を上重ねた資料である。鍼は上段からの紐が第2鍼孔を通り、下段からの紐が第1鍼孔を通っていると思われる。下揃のラセン状のくくりがわかるが紐の材質は判然としない。23~28は6枚が右を上にして接続された小札である。裏面で斜行状に

なった綴が見られる。29・30は左を上にした小札で20~22と同様の綴が見られる。綴は、23~28と同様であるが傾斜の方向を逆にしてしている。

3・4の表面に付着した布の織りは1cm幅に縦12本、横8本を数えるもので、8・9・10も同様である。

小札Ⅲの出土総数は124枚前後である。Ⅲaの出土は111枚で、今回は1~28を図示した(第73~76図)。Ⅲbは1枚の出土である(第76図)。Ⅲcは3枚の出土である(第76図)。

Ⅲaの1~21は単独の資料である。1・2では下部裏面で斜行状の綴が観察できる。7・8、27・28では頭部裏面で綴、綴の紐の動きが判る。15・17・20の下部から下拵がラセン状に綴じていることが推定される。22~26は左を上に関連された5枚の資料である。

Ⅲbは、裏面に中央部の2孔を通る紐の痕跡を確認できた。Ⅲc-1・2は、中央部の右側縁寄りに、3は左側寄りにそれぞれ孔1個が配されている。

小札Ⅳの出土総数は157枚であった。ここでは1~31を図示した(第79図)。

1~6は、左を上重ねた6枚の小札である。綴は、組紐で、裏面では千鳥に綴していることが知られる。第1綴孔の裏側には波縫状に巡る紐の動きが観察できる。綴は、裏面で斜行状を呈するもので2本の首糸が交差している。下拵は革包覆輪の技法が採用され、皮革の上から組紐あるいは、革紐を通して、25~27の左端の小札では側縁部にも皮革が残存していた。他の小札も綴、綴の技法はほぼ共通している。

小札Ⅴの出土総量は46枚であった。ここでは1~27を図示した(第78図)。

12・13は単独の資料である。1~11は3段に連貫された11枚の小札である。いずれの段も左を上に関連されている。綴の残存状況は不良である。残存の最上段左端の小札では、綴孔に裏面で立取になった組紐が観察できる。綴は、斜行状に接続しているが、やはり上段左端の小札の裏面には綴紐が立取になっ

た状況が見える。第1段と第2段の紐の斜行は同方向である。14~23も3段が連貫する資料である。綴は裏面の残存が不良である。綴方は紐の斜行方向が第1段と第2段で傾斜の方向が異なっている。第2段・第3段左端の小札の裏面には組紐が見える。24~27は右を上に関連した4枚の小札である。いずれの資料にも表裏両面とも布片が付着している。裏面では布を組紐が貫いており、小札の裏面に布が貼られていた可能性が高い。布の織りは密で、1~11の裏面の布は1cm幅に縦22本、横17本の糸を数える。

小札Ⅵの出土総量は560枚である。

小札ⅥⅢaは、549枚のうち1~42を図示した(第80・81図)。20~25は単独の資料である。1~4は右を上重ねて接続した4枚の小札である。綴は表面の第1綴孔と第2綴孔の間に立取った組紐が残存している。第3綴孔の裏面では一つ置きに横方向に動く組紐が観察できる。同様の状況は、5・6、14~16、17~19でも見られる。綴は1~4では裏面で斜行状の技法が見られる。17~19も右を上重ねる資料であるが綴の斜行方向は1~4と同様である。26~31、33~38はいずれも右を上重ねて接続する6枚の小札である。26~31の左端の小札は段の端部に位置していたか。第3綴孔は表面に立取った組紐の一部が見られる。裏面には千鳥に横方向に動く組紐が残存している。綴は、波縫状に綴じている。26~31の左端の小札では綴紐の裏面部分に組紐が通されていることから一段の端になる可能性も考えられる。33~38は下拵の紐の残存が確認できた。綴の技法は波縫状の綴じである。

39~42は左を上重ねて接続する4枚の小札である。裏面に第1綴孔と第2綴孔を巡る組紐の状況が観察できる。綴は波縫状である。下部の付着物は布または、皮革であろうか。

第81図、26~31、33~38、39~42はいずれも頭部の表裏両面に広範囲にわたり布が付着している。26~31ではこの布を貫通して綴紐が巡っている。このことからこれらの小札に付着する布は、ワタガミ状、あるいは覆輪と考えられる。第80図に掲載した

布が付着した小札も同様の部位を構成していた可能性がある。1～4の布の織りは、1cm幅で縦48本、横28本の糸を数えた。他もこれと同様、密な織りである。

XIII bは11枚を確認した。XIII aとの細分は、小札の横幅の広狭によったが明確な区分はなしていない。ここでは1～4を図示した(第81図)。

いずれもが単独資料である。緘紐、綴紐の残存状況は不良であるがXIII aと同様と思われる。

小札XIVは小札XIIIと類似する小札である。1枚を確認した(第81図)。XIIIとの相違点は、綴孔と下拵孔との間、中央からやや右側に寄った位置に孔1個を配することである。

小札XVも小札XIIIに類似する小札である。1枚だけ確認した(第81図)。XIIIとの相違点は、左列の綴孔が3個であることと、その孔に横並びの位置で中央にもう1個、孔が配されていることである。

小札XVIは、綴孔一列の腰札である。内彎する中央部分に配された孔の有無、その位置により細分した。出土総量は91枚であり、その内訳は、XVI a87枚、XVI bからXVI e各1枚である。

XVI aは7枚を図示した(第82図)。1は右上にXVI eが重なっていた(第82図)。3～6は右を上重ねた4枚の小札である。裏面の観察から第1綴孔と第2綴孔とを結ぶ紐の動き、第3綴孔を通る紐の繋がりが判る。また、下部の綴が斜行状であることも見られる。下拵の技法には、覆輪技法が採用されたのであろうか、一部に波縫状の綴じと思われる痕跡がみられる。

XVI b-1は、第3綴孔の上方、やや左側縁に寄って孔1個が見られる(第83図)。XVI c-1はXVI d-1と重なっている(第83図)。裏面、中央部の内彎部分に配された孔には組紐が通っている。

小札XVIIの出土総数は1,199枚である。ここではその中の91枚を図示した(第82・84～86・90・92図)。下端の形状の相違により、1～7、9～28と8、29～91に二細分するべきなのかもしれない。4～7は4枚が左を上、9～18は9枚が右を上、19～24

は6枚が右を上重ねて接続されている。緘、綴の技法は共通している。緘は裏面で2本の組紐が、小札一枚置きに横方向に平行して通されていることが観察できる。綴は、管糸を使用し、裏面で斜行状をなすものである。下拵は残存が不良でその技法は判然としないが、4～7、19～24では下端近くに覆輪状の付着物が確認できる。

30～35は、5枚が左を上重ねて接続されたものである。緘は、裏面で、第1綴孔と第2綴孔を、交互に、一枚置きに、横方向に動く組紐が見られる。これは、46～51と共通している。37～45は9枚が右を上重ねて接続された小札である。緘は4～7、9～18と同様であるが、左端3枚ではやや乱れを生じているか。綴は管糸を使用した斜行状の技法である。この技法は、52～53、57～73、65～73にも採用されている。下拵についてはいずれの小札も綴紐の残存が不良であるが、37～45左端小札の裏面では波縫状の技法を推定させる痕跡が見られた。また、下端の表裏両面には布あるいは皮革が付着している事例が多数見られることから、覆輪技法が採用されていたと考えられる。

小札XVIIIの出土総数は261枚である。ここでは36枚を図示した(第87図)。

1～4、5～9は緘の技法が共通し、裏面の組紐の運びは山形、あるいは交差しているように見える。綴は、5～9で、裏面に斜行状の技法が見られる。同様の技法は、10～12、23～28、30～33でも認められる。16～21は6枚が左を上重ねて接続された小札である。緘の技法がこれまでのものと異なり、裏面で見える組紐は、小札一枚置きに、二本が平行して横方向に動いている。下拵は資料全体にわたり残存状態が不良であるが、16～21をみると波縫状の技法が取られていたようである。残存する有機質は皮革であろうか。

付着した布の織りは密で、30～33の裏面のそれは、1cm幅で縦40本、横24本の糸を数える。

小札XIXは、下端の破片2枚が出土している(第81図)。

小札XXの出土総量は167枚である。ここでは37枚を図示した(第82~84図)。

7~10は単独の出土である。1~6は、右を上に乗ねた6枚の小札である。18~27は左を上に乗ねた10枚、28~37も左を上に乗ねた10枚である。いずれも共通した鍼、綴の技法が用いられている。鍼は裏面の組紐が小札一枚置きに、二本が平行となり、横方向に動いていることが観察できる。綴は、斜行状の技法であるが、左右の重ねに関係無く、裏面から見て、右斜上方向に紐が動いている。下綴は18~27、28~37で波縫状に綴じられた状況が見られる。下綴には皮革と思われる有機質がみられる。

小札XXIは草摺の柁札として接続されていたものである。出土総数は、169枚である。ここでは141枚を図示した(第88~93図)。

72~87、あるいは115~130は、小札XVII 2段と銷着した状態で出土している。1~22は右を上に乗ねた22枚を接続した資料である。鍼は、第2鍼孔を波縫状に結ぶ組紐が良好に残存している。これは他の資料にも共通している。また、この鍼の組紐に接し、第1鍼孔と第2鍼孔を斜行状に結ぶ紐がみられる。綴は斜行状に管糸を使用して接続するもので、これは各小札に共通している。また、96~114にみられるよう左右の重ねが変換しても同一方向、右斜上方向に紐が動いていることがわかる。

23~29は、右を上に乗ねた7枚を接続した小札である。鍼は第2鍼孔を通る組紐の動きは1~22と同様であるが1~22では第1・第2鍼孔を通して斜行状を呈していた紐が、第1鍼孔のみを通り、波縫状となっている点が先の小札と異なる。同様の事例は、45~54、55~59でも見られる。

下綴の様子は、45~54、96~114で観察できる。覆輪の布あるいは、皮革と思われる有機質を波縫状に組紐で綴じている。

小札に付着した布の織りは、23~29の表面のものが1cm幅に縦15本、横12本を数えた。30~44の下綴部分のものが1cm幅に縦44本、横24本の糸を観察した。

小札XXIIの出土総数は28枚である。ここでは17枚を図示した(第94図)。

1~6は左を上に乗ね、7~11は右を上に乗ね、12~17は左端から3枚目を真中に6枚を接続する小札であるが、鍼、綴、下綴の技法はいずれも同一である。鍼は、第2鍼孔を通り、千鳥に鍼組紐が見られる。裏面では第1鍼孔に管糸が波縫状に動いている。綴は斜行状を呈する技法である。下綴は波縫状に綴じている。7~11の下綴には布が付着しており、覆輪技法が採用されていたものと考えられる。

小札XXIIIの出土総数は27枚である。ここでは19枚を図示した(第91・92図)。

1~11は右を上に乗ねて接続した11枚の小札である。鍼の状況は観察できない。他の資料も残存状態は不良であった。綴は管糸で斜行状を呈していた。12~14は、左右の相違が斜行の方向に反映している。下綴は覆輪技法で波縫状に綴じている。

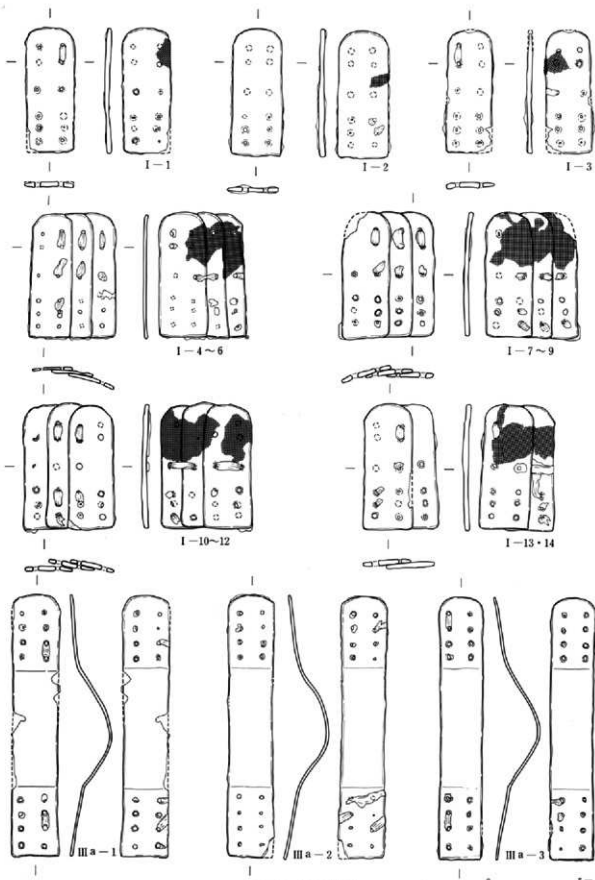
12~14に付着した布の織りは、1cm幅に縦30本、横28本の糸を数えた。

小札XXIVの出土総数は32枚ある。ここでは21枚を図示した(第93・94図)。

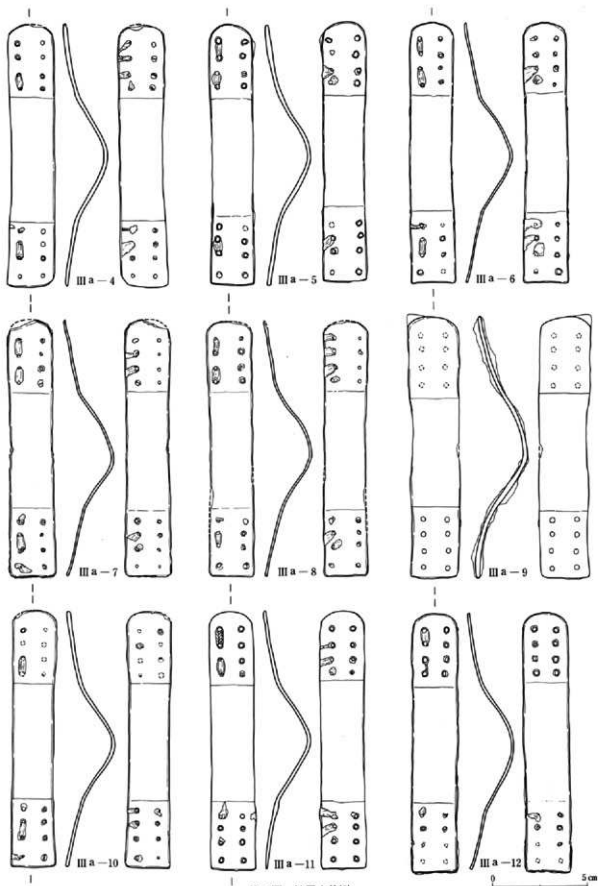
鍼、綴、下綴の技法は全てに共通する。鍼は組紐を第2鍼孔を通す方法で千鳥になっている。これとは別に第1鍼孔と第2鍼孔を斜行する管糸が観察できる。綴は斜行状を呈する。斜行の方向は14~18、19~21にみられるように接続の重ねとは必ずしも一致しない。

6~11に付着した布は、覆輪として、紐で綴じられていたが、1cm幅に縦14本、横11本の糸を数えた。

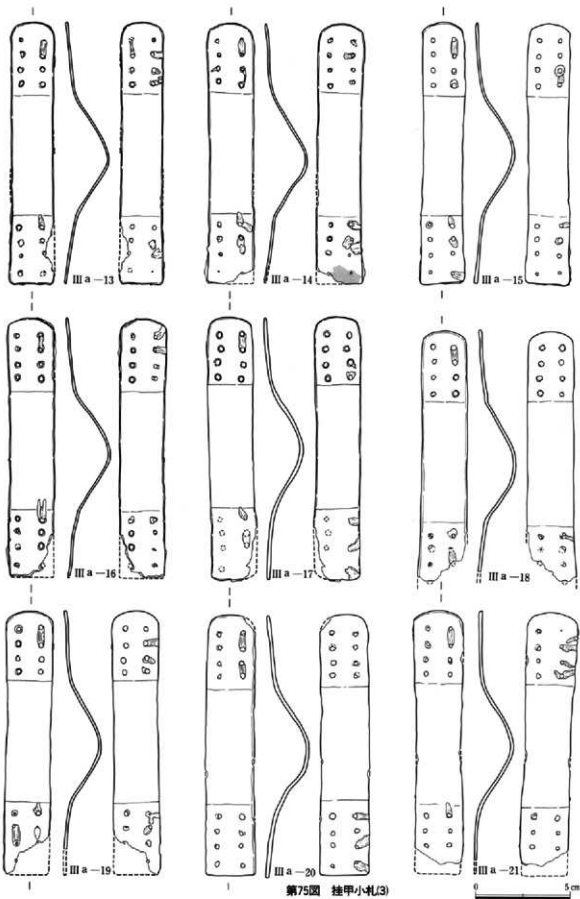
小札XXV、小札XXVIIは一部分の残存で、完形品は無い。



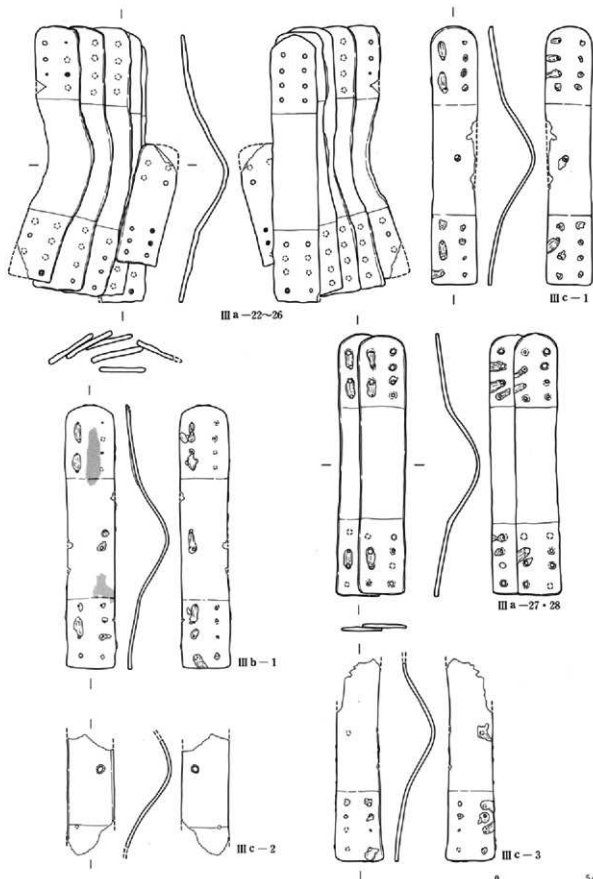
第73图 挂甲小札(1)



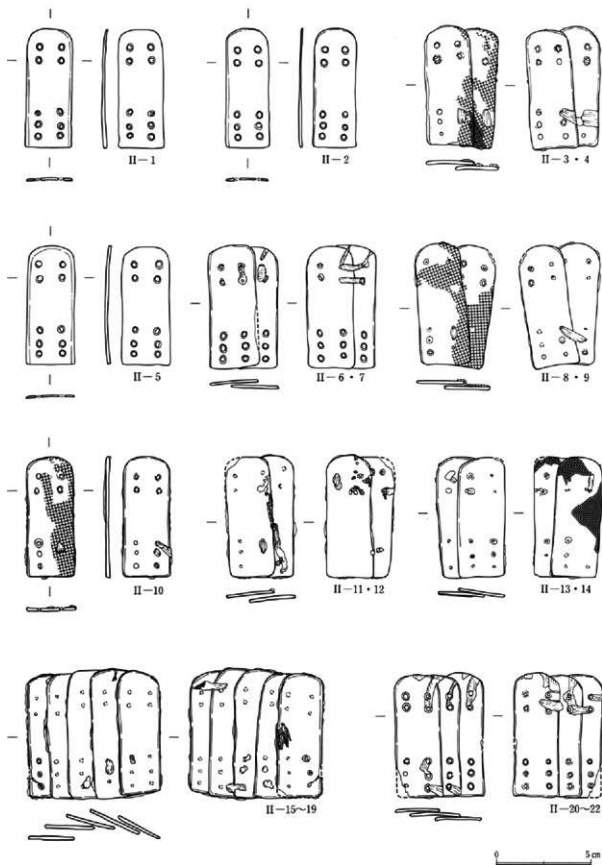
第74图 挂甲小札(2)



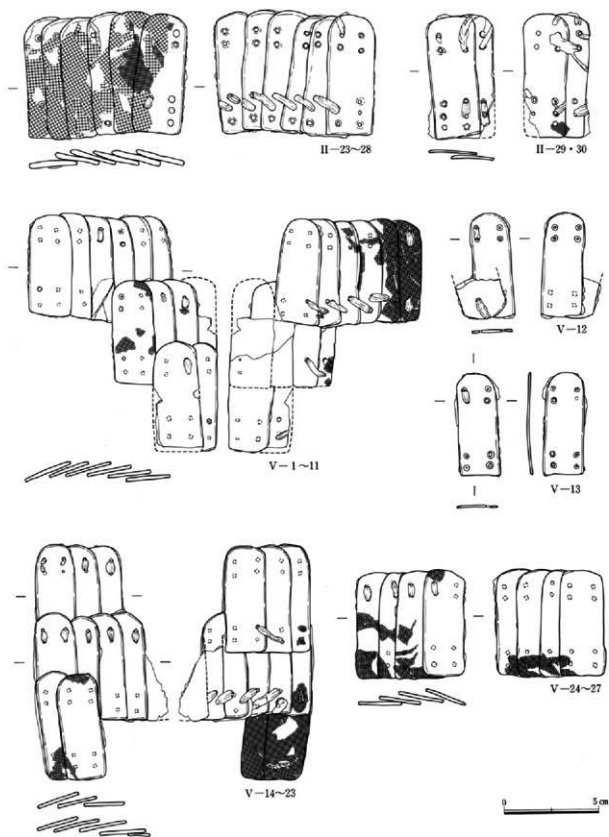
第75图 挂甲小札(3)



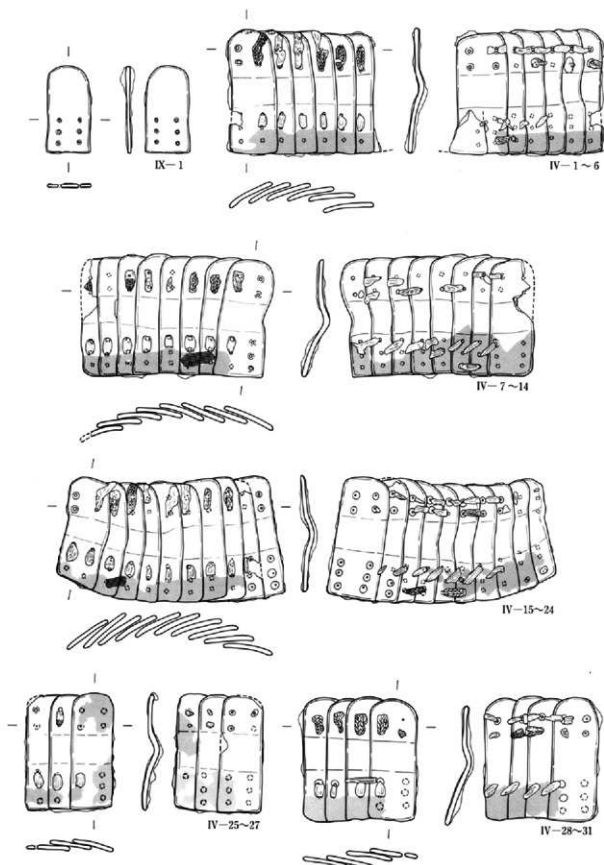
第76图 挂甲小札(4)



第77図 挂甲小札(5)

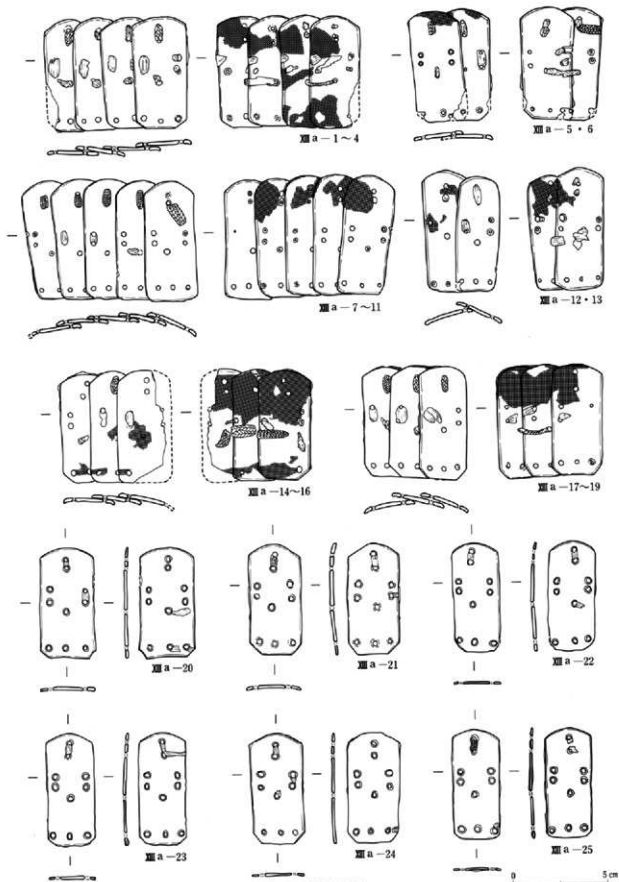


第78图 挂甲小札(6)

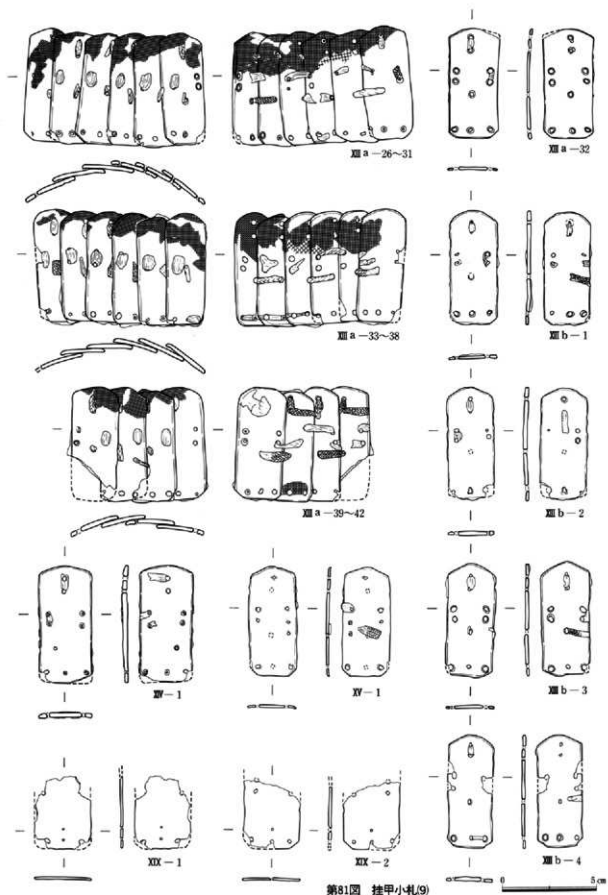


第79図 挂甲小札(7)

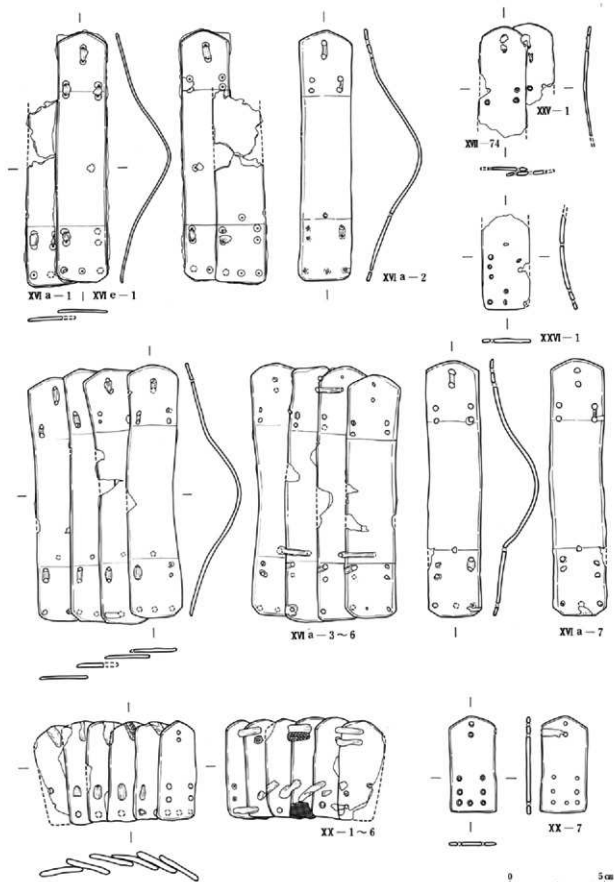
0 5cm



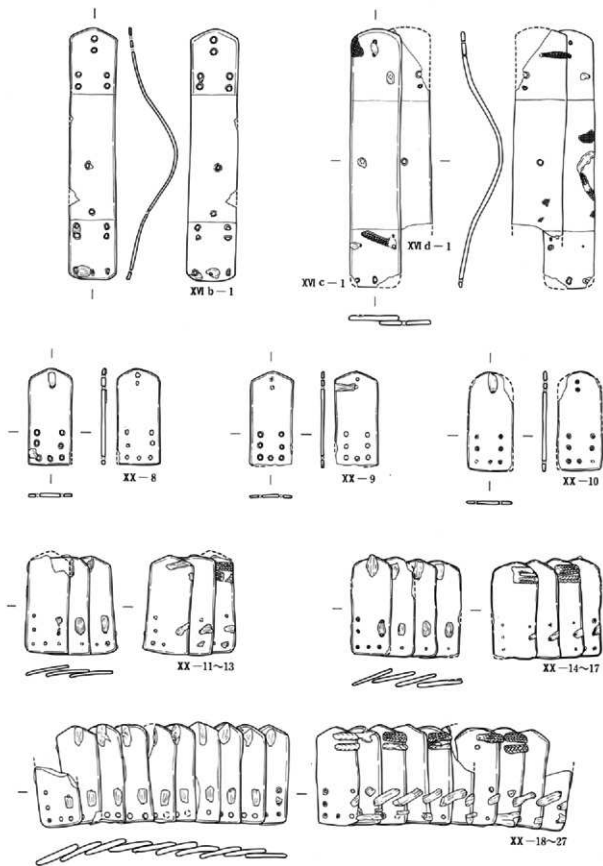
第80图 挂甲小札(8)



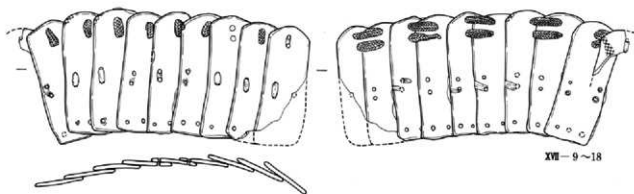
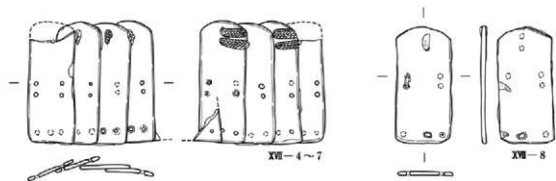
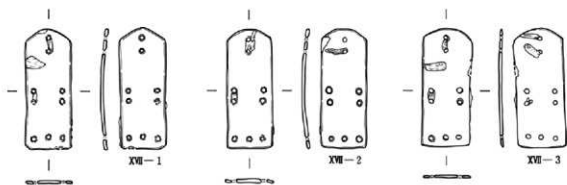
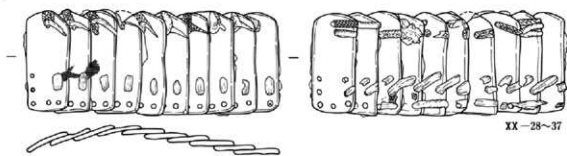
第81回 挂甲小札(9)



第82图 挂甲小札(部)

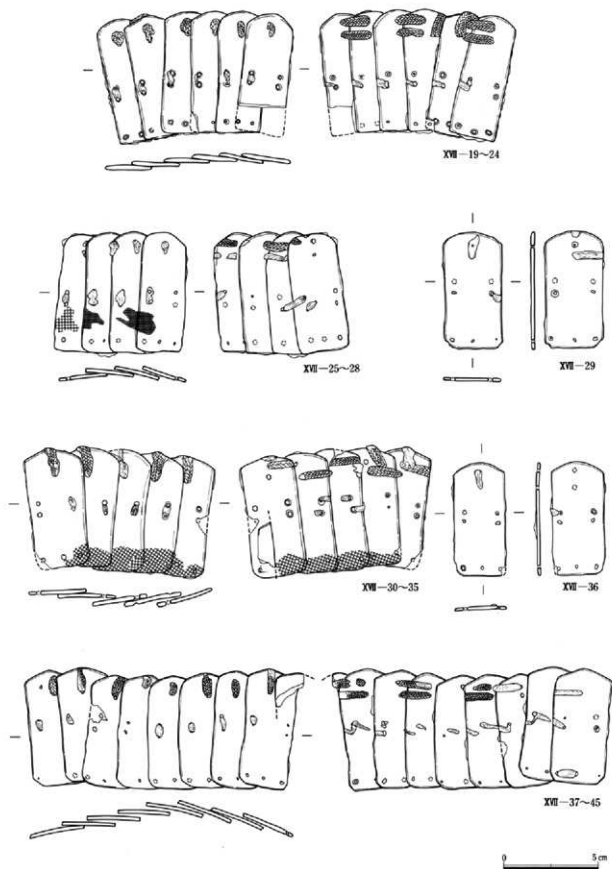


第83图 挂甲小札(10)

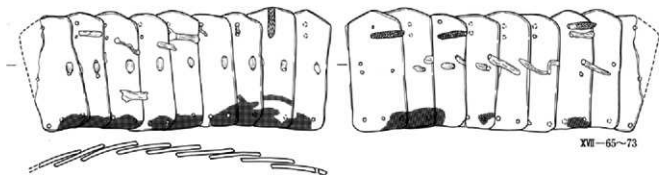
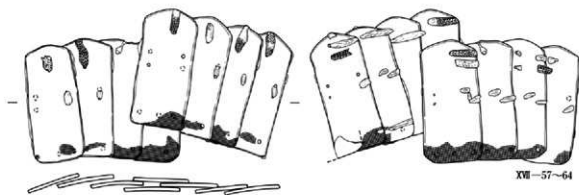
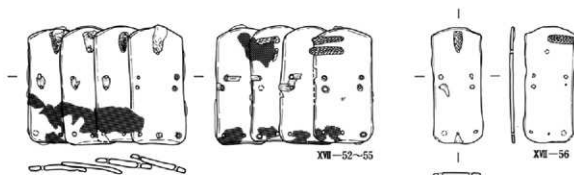
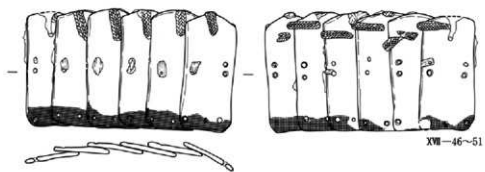


0 5cm

第84图 挂甲小札(2)

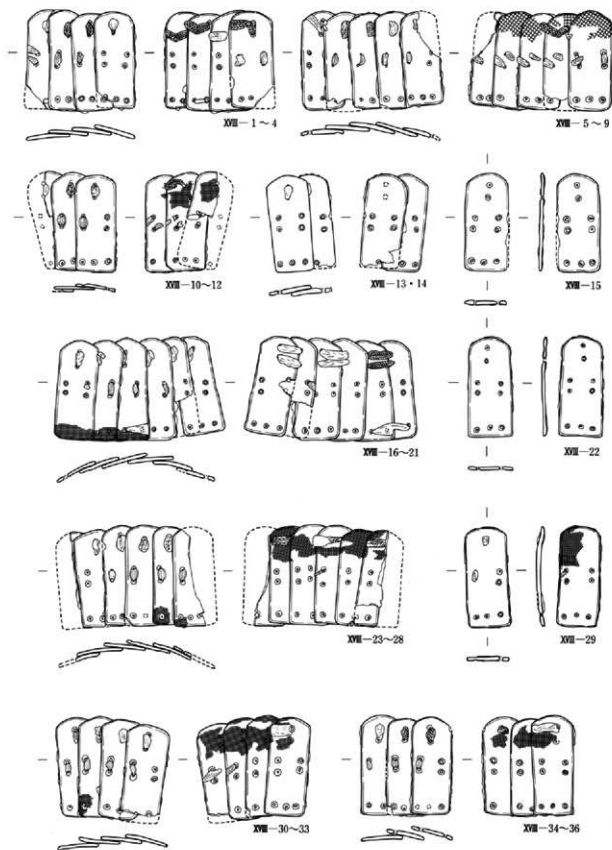


第85图 挂甲小札(13)

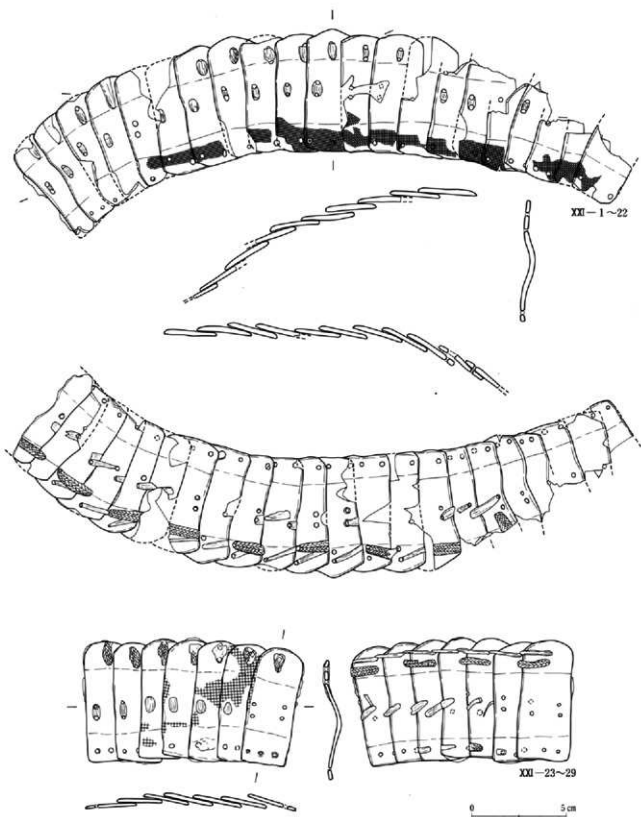


第86图 挂甲小札(10)

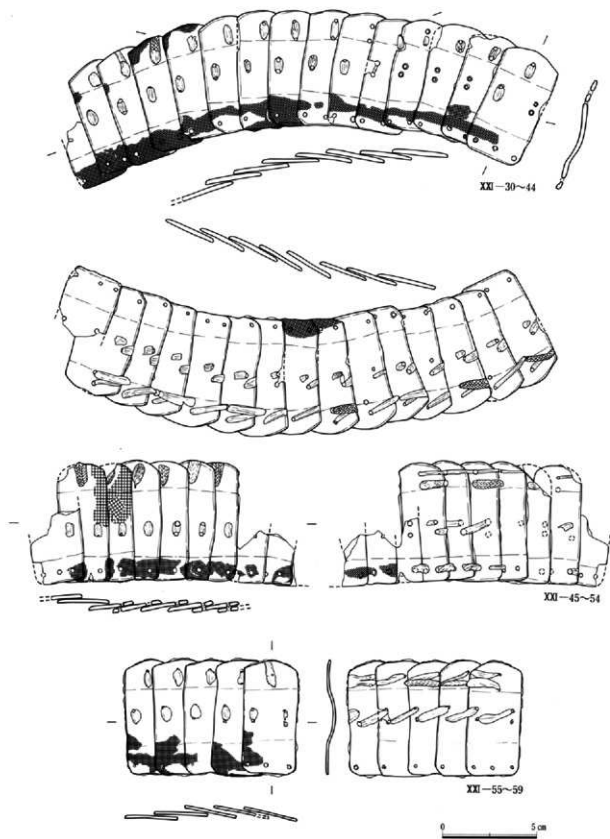
0 5cm



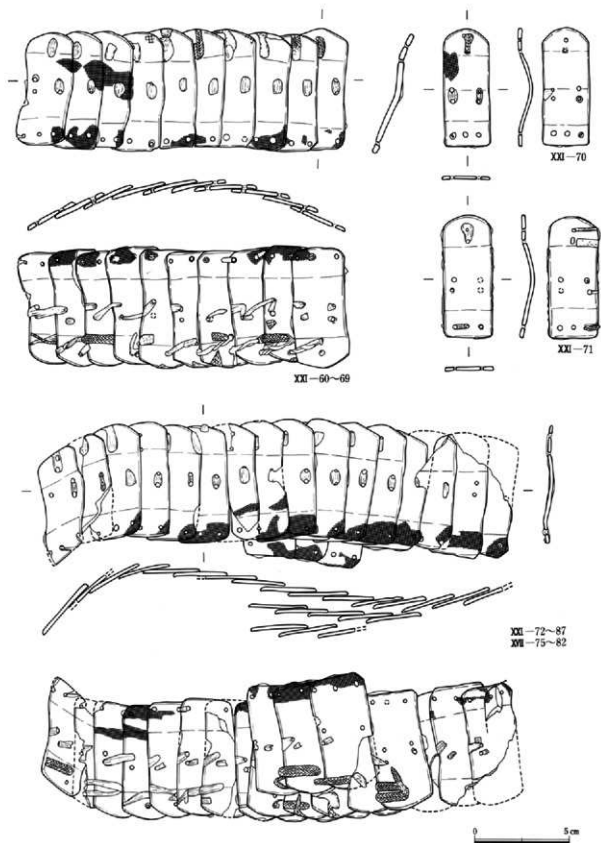
第87图 挂甲小札(15)



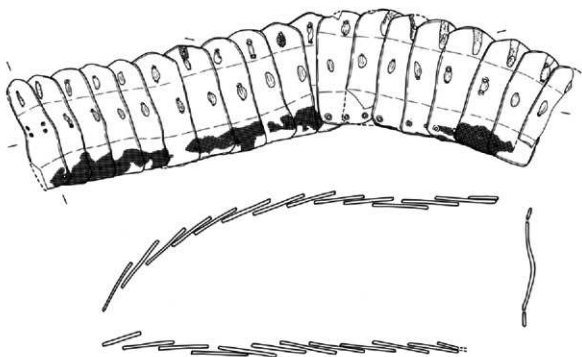
第88回 挂甲小札(16)



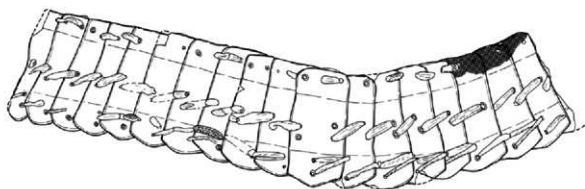
第89图 挂甲小札(1)



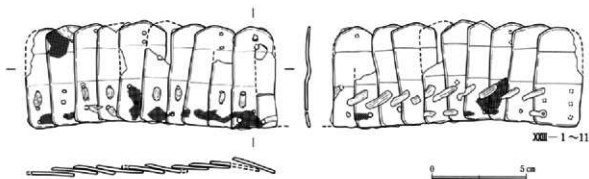
第90图 挂甲小札图



XXI-88~106

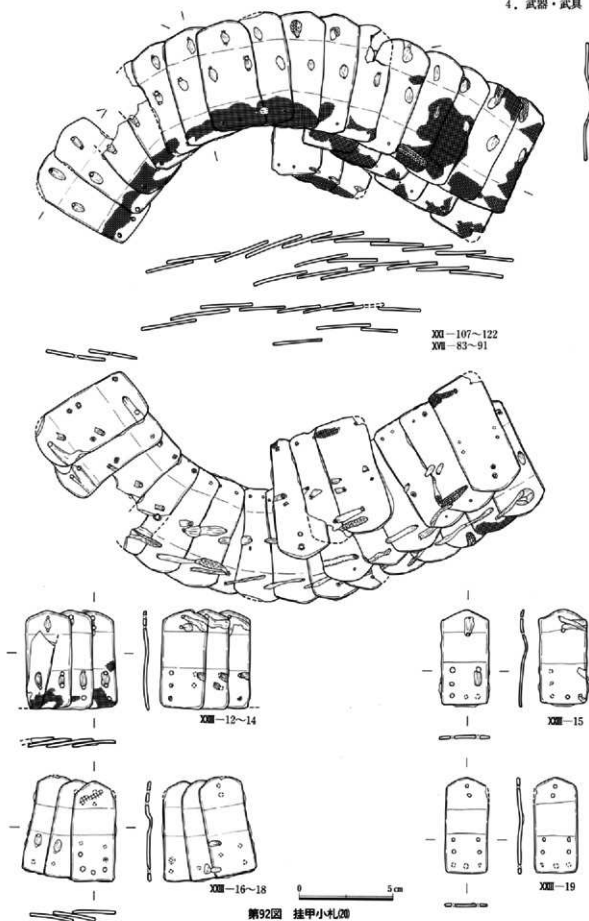


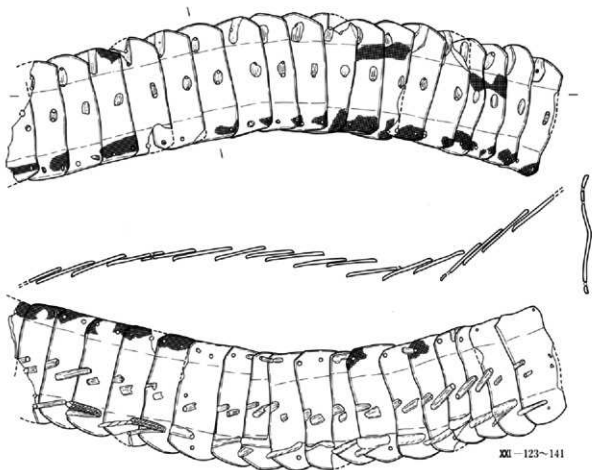
XXII-1~11



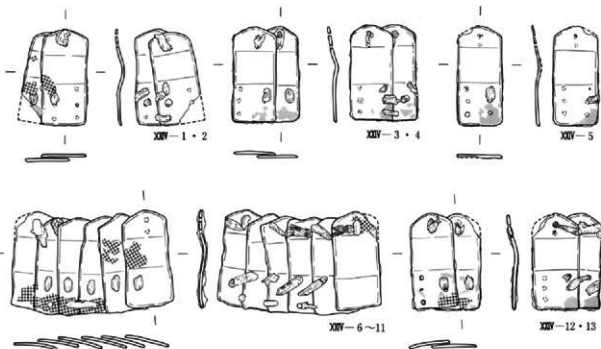
0 5cm

第91图 挂甲小札(19)



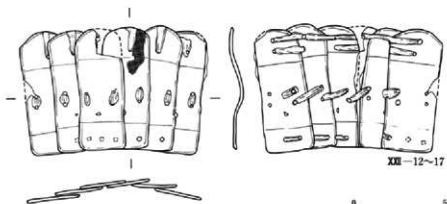
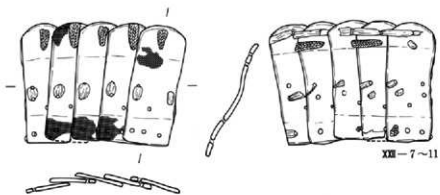
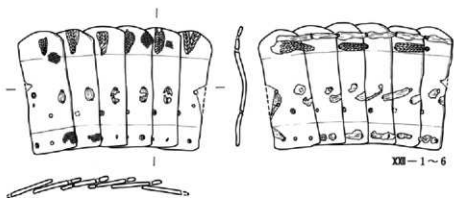
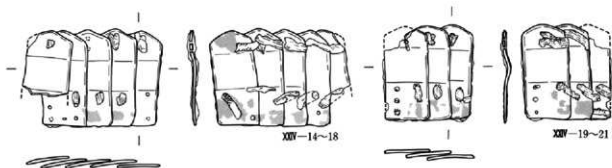


XII-123~141

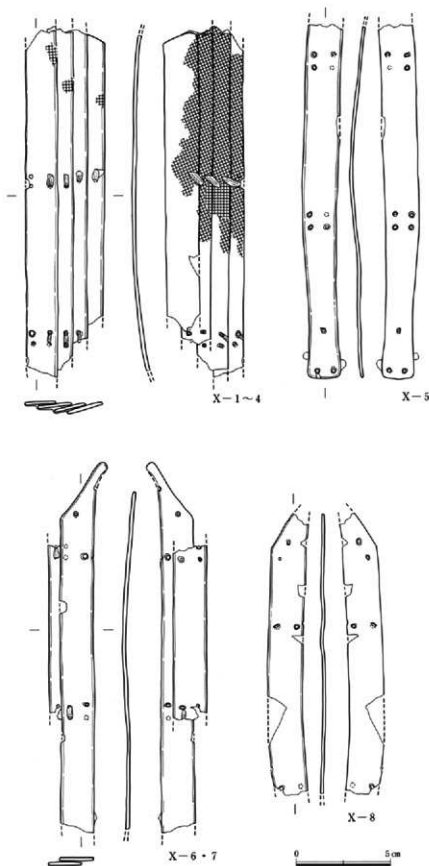


第93図 挂甲小札(2)

0 5 cm



第94图 挂甲小札ZB



第95図 挂甲籜状鉄札(1)

⑤ 籜状鉄札

籜状鉄札は、形状、綴・緘孔の位置の相違から小札X・X I・X IIの3種に大別できる。

小札Xは後述する籠手の腕被覆部分を構成する鉄札である。良好な資料は第100・101図に提示したので、ここではX-1からX-8までを掲載した(第95図)。いずれも籠手の一部を構成していたものと考えられる。

X-1~4は、中位部分の残存である。4枚の鉄札が左の上に重ねている。2列4孔の綴孔が3カ所に認められる。綴は、綴紐が表面では縦方向に、裏面では斜方向に選ばれている。裏面には平織の布が付着している。

X-5は、中位から下位の残存である。下位の綴孔、緘孔の位置関係を把握できる。

X-6・7、X-8はともに上位の破片である。上端は急角度の斜辺を形成している。X-7は、上端右側が籜状に延びている。X-8は、上端の綴孔が他の資料と比較して不規則な配置となっている。

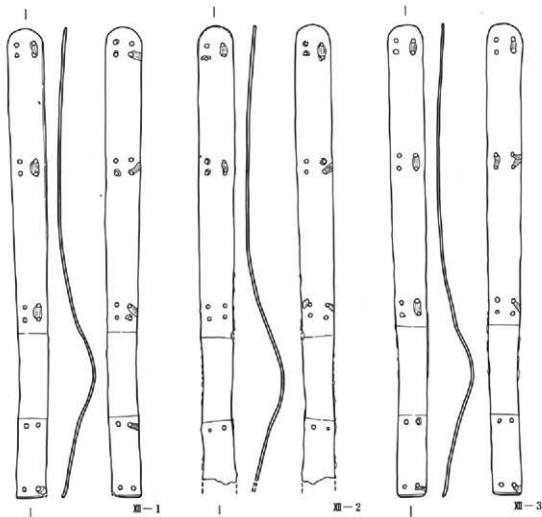
小札X Iは、後述の籠手を構成する籜状鉄札である。上端は、X同様、本体を構成する箇所により形状を異にするが、下端は一律、平坦面を形成している。鉄札個々の長さにも差異が生じている。幅は上端が下端と比較してやや広く、1.7~1.9cm前後、下端は1.3~1.5cm前後である。孔の配列は、上端から1列2孔、2列4孔、

2列4孔、2列4孔、1列2孔となっている。

小札XIIは、出土総数135点を確認した。これを一段で綴じ合わせる約25cmの幅になる。全体の構成は不明である。また、付属の小札についても把握できなかった。ここでは33枚を図示した(第96~99図)。籠手、鬮当を構成する前二者の鉄札とは異なる篠状鉄札で、長軸方向の断面をみると下端から上方寄り3.0cmほどを中心に腰札状に、弱く内彎していることが特徴的である。平面形状はいずれも上端が円頭形を呈しているのに対し、下端は平坦である。ただし、細かく観察すると、側縁部と下端のつくる角度は微妙に異なっている。これが製作時に意図的に表出されたものであるのか否かは判断し難いものである。

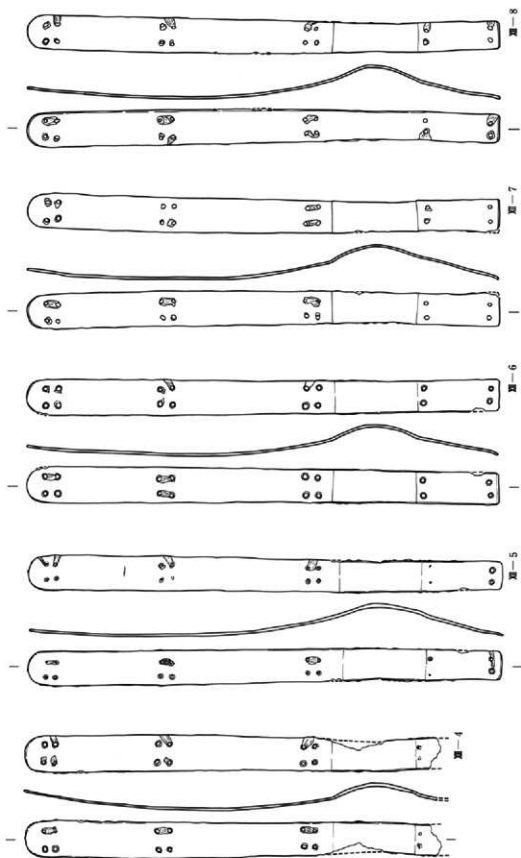
法量では長さが24.75~25.40cmである。幅は上位で1.8~1.95cm、下位で1.76~1.95cmを測る。

XII-1からXII-8までとXII-22はいずれも単体となってしまった資料である。孔の配置はいずれも共通する。頭部上端に2列4孔を配置、その下列の孔から5.6cmの間隔を保ち、2列4孔を配している。さらに6.8cmの間隔を保ち内彎部分の上位に2列4孔がある。下位には内彎部分の直下と下端の2カ所に横並の1列2孔が2カ所配置されている。上位~中位の2列4孔は綴孔である。裏面をみると、中位の2段目と3段目の孔部分で斜行する綴紐の痕跡が認められる。首糸と思われるが、2段目と3段目では傾きが異なっている。これによればXII-1か



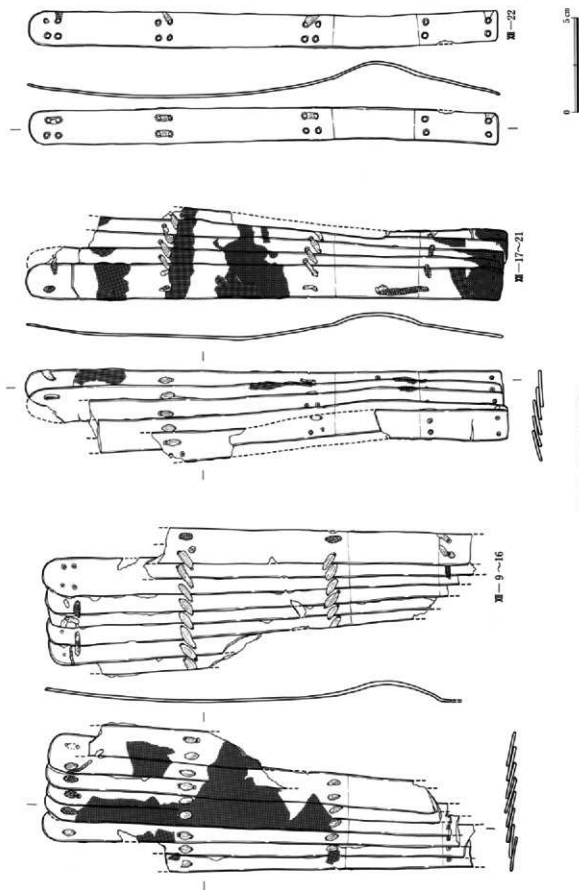
第96図 挂甲篠状鉄札(2)

0 5cm

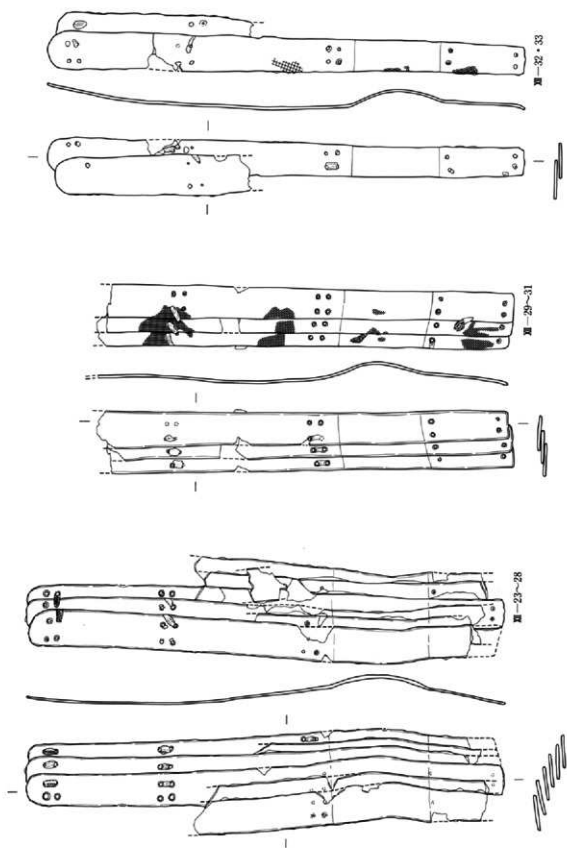


第97圖 挂甲犀狀獸札(3)

4. 武器・武具



第98图 挂甲藤状板札(4)



第95図 挂甲鐘狀鐵札(5)

ら8、XII-22のいずれも右を上にして綴じられていることが確認できる。下位の1列2孔のうち、上段の孔は、緘孔になろうか。

XII 9～16は、8枚の鉄札が右を上にして重なっている。いずれも下端は欠損している。XII-11からXII-15は上端が残存している。XII-9は左側縁部を構成していた小札であろうか。幅は1.73cmと他よりも若干、狭いものである。覆輪の有無は確認できないが、中位2列4孔の左側孔の裏面には組紐が残存していた。この他に頭部上端、下位内彎部分直下の1列2孔の箇所にも組紐が通っている。中位2カ所の綴は菅糸によるもので、裏面では糸が斜行する運びであるが、上下段でその傾斜が異なる。表面には綴方向が1cm幅中に12本、横方向が10本の平織の布が付着している。

XII-17～21は、左を上にした5枚の鉄札である。XII-21は完存する鉄札であるが、右側縁を構成していた鉄札であろうか。XII-9と対をなすように中位の2列4孔の綴孔の右側孔に組紐が残存している。また、下位、彎曲部分直下の綴孔にも組紐が残存しており、XII-21の裏面には紐端が長く付着している。中位2段の綴は、上下段同段とも傾斜を同じにして斜行している。この資料にも裏面を中心に表裏両面に布が付着している。織りはXII-9～16と同様の平織で2枚以上が重なって残存している。

XII-23～28は左を上重ねた6枚の鉄札である。XII-17～21と共通した綴方が認められる。

XII-29～31は右を上重ねた3枚の鉄札である。上端は欠損している。裏面に他にみられたのと同様の平織の布が付着している。

XII-32・33は左を上して下錯着した2枚の鉄札である。内面の一部に布が付着している。

⑦ 籠手

籠手は一双方が出土している。両者ともに完全ではないが比較的良好な遺存状態である。

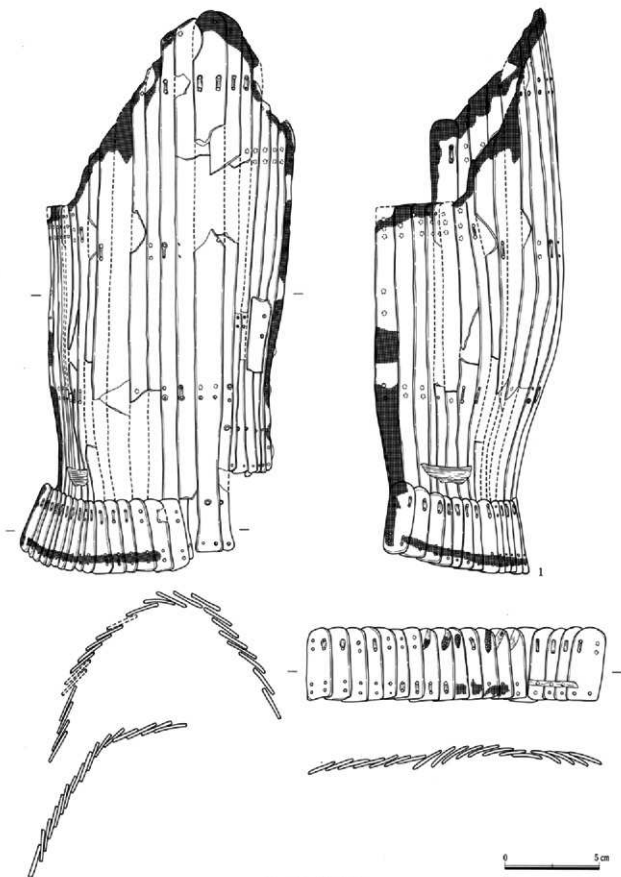
籠手1(第100図)は、二の腕を覆う篠状鉄札Xと、これに付属し、手首・手甲を保護する小札VIIから構成されている。現状での横断面は装着時のように筒

状に彎曲している。副葬時にこのような状態で石室内におかれたものと考えられる。

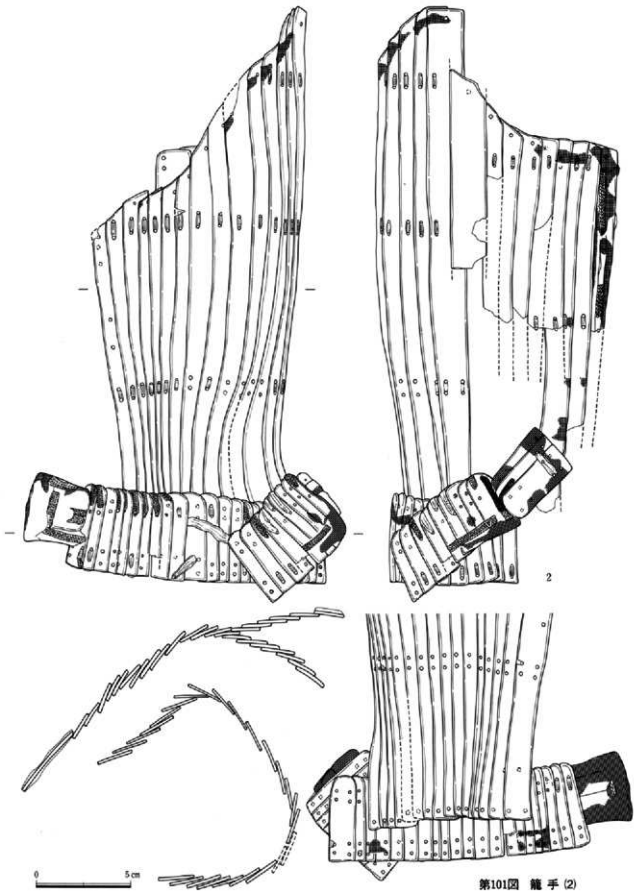
篠状鉄札Xは、23枚が重なって錯着状態をなしている。図の左側縁から16枚目を中央の重ねとし、ここまでは右を上、これより右側は左を上にして重ねて連貫している。下端は、平坦に揃えられているが、上端、頭部は中央の重ねに向かって斜度をなしている。16枚目の鉄札上端は圭頭、あるいは舌状を呈していたと思われる。ただし、現状では、中央16枚目から右側6枚が、それまで左側を構成している鉄札と下端の位置が大きく上方に食い違っている。これは、原形がそのまま残存したものと思われず、17・18の上端は16から連続するものの、17・18の下端及び、19より右側の鉄札は何らかの変形をきたしていると考えられる。長さは、16枚目が29.0cmに復原することが可能で、これを最長に、両側縁の小札に向かってその数値を減じている。左側縁部の長さは17.0cmである。各鉄札の幅は上端1.9cm、下端1.6cmで、下端から上寄り4.4cmほどの位置が最も狭く、1.3cmを測る。縦断面の形状では下端から上方6.6cmの位置で、内面に向かって弱くくびれている。

孔の位置やその数値は、錯の付着や各所の欠損の爲、原状を把握できない部分が多かったため、図中には肉眼視できたもの、位置の存在が確実視されたものを図示した。

鉄札に配された孔の位置を中央の重ねでみると、まず、上端の中央に覆輪用と考えられる1孔が配されている。次に上端から3.6cm、12.1cm、19.8cmそれぞれ下位に綴孔が4孔ずつ配置されている。上下2列の間隔は約0.7cmである。下端近くには2孔が横並の位置にある。下揃、あるいは覆輪用であろう。また、この2孔より上方2.3cmに綴孔1孔がある。中位にある4孔一単位の綴孔は、左側縁から数えて14枚目から18枚目までが3カ所、これより左右の部分は2カ所の配置である。左側縁における鉄札の孔は、上端から、上端の覆輪用の2孔、綴孔4孔、1孔、1孔、綴孔4孔、1孔、綴孔1孔、1孔(2孔か)、下端覆輪用の2孔となっており、他の鉄札と比較し



第100圖 龍手(1)



第101図 籠手(2)

て、綴孔の間に側縁覆輪用の孔を増している。右側縁も同様である。鉄札の中心4カ所にみられる綴の技法は鉄札の裏面で斜行状となるように綴られるものである。

上端、及び両側縁には皮革状の付着物が残存しており、革包覆輪が施されていたことが確認できる。

篠状鉄札の下位には小札Ⅶが錯着、残存している。手首から手甲を覆うための小札である。現状での数量は16枚である。これらの小札の法量は、平均で長さ3.8cm、幅1.6cmである。全てが右を上を重ねられまている。下端の綴孔の位置には筋状の革紐が残存する。

上記の篠状鉄札、小札とは別に小札Ⅷ19枚が籠手の付属品として収蔵・保管されていた。図中の右から5枚目を中央の重ねとし、これより右側4枚は右を上、左側14枚は左を上を重ねている。緘の組紐の残存が確認できる。綴、下端の留まりの状況は先述の小札Ⅶと同様である。

籠手2(第101図)は、1と対をなすと考えられる。篠状鉄札25枚から構成される。重ねは、左側から17枚目を中央とし、これより左側の16枚は右を上、17枚目より右側の8枚は左を上を重ねている。現状では右側部分は残存状態が不良で、下端の2分の1ほどが欠損している。全体の形状は1と同様で、上端は中央の重ねに向かって端部を斜位としている。ただし、綴孔の配置を観察すると中央の17枚目を境に左右でその位置にずれが生じており、現状が原形を乱したものである可能性が高い。

各小札の長さは、中央の重ねの鉄札が長さ29.0cmで最長を測る。左側縁の鉄札は上端の一部が欠損するもの、長さ17cmを、幅は上端で1.9cm、下端で1.5cmを測る。右側縁の鉄札は20.4cm以上が復元できる。

覆輪用の孔、綴孔の配置は1と同様であるが、下端寄りに配置されたと考えられる緘孔の位置が判然としなかった。

右側縁の鉄札には、皮革状の付着物の上に組紐が重なって残存していた。

篠状鉄札Ⅹの下位には小札Ⅶが20枚錯着してい

る。これらは左を上を重ねている。これらの左端に左を上にして3枚、右側寄りに右を上にした7枚、左を上にした3枚のブロックが重なっているが、これは原状を保ってはいない。これらの形状あるいは綴孔の状況は1の付属小札と同様であるが、長さが1のそれが3.8cm前後であるのに対し、4.5cm前後とやや長いものであった。

これらの小札の上位には緘の組紐が良好に残存する。下位には皮革の残存がみられ、この上を組紐で押さえている。革包覆輪が施されていたと考えられる。

左端に接する3枚重ねの小札は、皮革の上に横方向、両側縁の3方向に組紐が残る。3枚で一段となり、親指を保護する部分であろうか。右側、7枚重ねの小札は皮革の上を横断する組紐が残存する。

この他に籠手1、2との関連が不明となった小札Ⅶが存在する。

⑧ 臙当

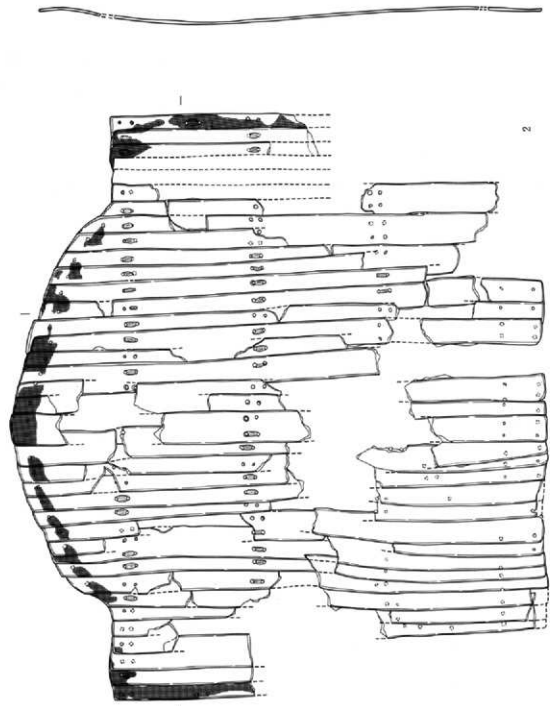
臙当は一説がI群の掛甲内から、これらに包み込まれるような状態で出土している。個々にみると欠損している箇所も少なくない。変形をきたしている箇所も見受けられるが、ほぼ現状を留めていた。

臙当1(第102図)は、篠状鉄札ⅩI37枚を連貫して構成されている。付属の小札は直接、本体と接合する状態では検出されていない。

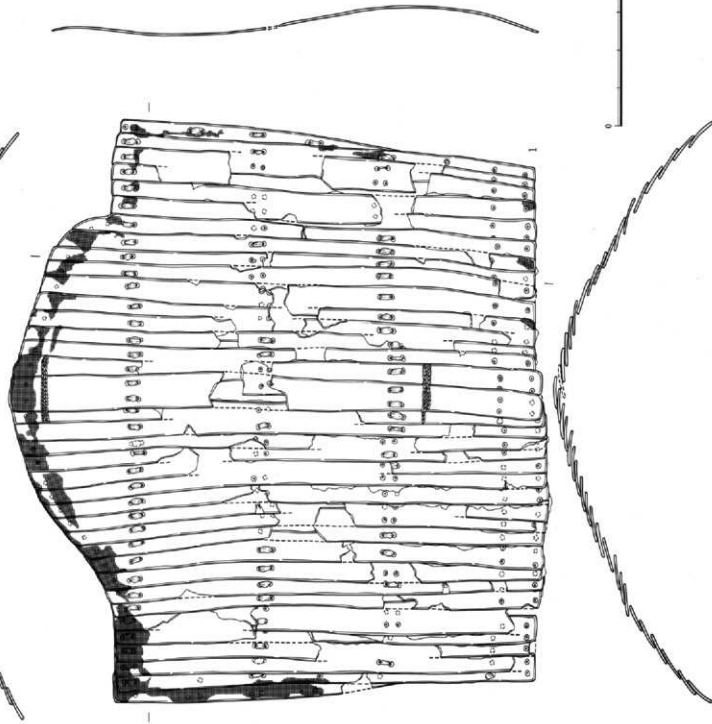
現在の最大長は中央で28.2cmが復元できる。両側縁は22.3cmを測る。最大幅は両側縁の上端を結んだ位置にあり、約36.0cmである。

重ねの状況は、左側縁から20枚目までが右を上重ね、21枚目を重ねの中央にして綴じ、これより右側の16枚は左を上重ねている。

各小札の形状は、両側縁寄りの1~6枚と32~37枚が上端がほぼ平坦であるのに対し、7~31枚目までは上端頭部が斜辺をなし、臙当全体では弧線を形成する。全体は左右が線対称とならない。図左側が緩やかに移行するのに対し、右側は、31枚目の先端が刀子の切先状を呈し、平坦から曲線に移行する変換点を明瞭に示している。これに対し、下端は平坦



2



1



でほぼ直線をなしている。

両側縁を形成する1と37は、長さ15.4cmと他の小札より短く、隣の2・36の中途まで終わっている。

篠状鉄札の各部位の計測値は、上端の幅が1.7cm～1.9cm、下端の幅が1.3～1.5cmである。小札の側縁は直線をなして上端から下端に向かって移行している。外面の側縁は緩じ重ねたとき表側に出る側縁部のみ明瞭に面取りをしている。

綴孔は、2から7枚目と32から36枚目までが頭部に2列4孔を配し、その下位の孔から6.2～6.5cmの間隔を保ち2列4孔、さらに5.7～6.2cmの間隔を開け2列4孔を配している。中央の重ねとその左右2枚ずつの合計5枚ではこの間隔がやや長く、6.5cm前後を保っている。下端には下端に接し横並びに2孔を穿っている。これは下揃あるいは覆輪用の孔か。その上位1.7cm前後の位置に横並びに2孔を配している。その中で2枚目は2列4孔の中間点にさらに1孔を開けている。36枚は下位の2列4孔と下端の2孔の間に1孔の存在が確認できる。これより上位の状態は観察が困難であった。左右で対称の位置にある左から2枚目では孔の存在は確認できなかった。

8から31枚目までは先の鉄札と同様の位置に各孔が配される他に、上端寄り、端部の形状に沿って、各2孔が配されている。覆輪用の孔と考えられる。

両側縁に位置する1枚目と37枚目は、2列4孔の孔の間に2孔ずつが縦列して配されている。これも側縁の覆輪用の孔と考えられる。

装着時の引合緒の紐を通した孔の存在は把握しがたかったが、36枚目の下位にある1孔は他よりもその径を若干増している。

綴紐は、籠手の場合と同様と思われるが、遺存状態は良好とはいえない。

綴は表面で縦行で、裏面では斜行状となるよう施されている。

上端、及び両側縁の1・2、36・37には覆輪状に布の付着が残存する。上端における幅は約1.5cmである。

下端の下揃あるいは覆輪の状態は不明である。

これらの篠状鉄札の表面側にはほぼ全面に平織布が付着していた。布の織り方は1cm幅に13・14本の糸が数えられた。

胴当2(第102図)は、胴当1と対を成すと考えられるが、残存状態は1と比較すると不良であり、個々の小札の変形も小さくなかった。構成する小札の中で頭部から下端まで完存する資料は皆無であった。

1を参考に全体の構成を復原すると図の右側部分の3枚の小札とそれより左側部分の間には2枚分の小札が欠損しているものと考えられる。残存する上半分の状況から、1同様、両側縁寄りの上端は平坦であり、中央が上位に向かって舌状に張り出す弧線をなしていることが知れる。また、平坦面から弧線への移行の在り方は1と左右が逆になることが理解できる。すなわち、図の左側縁から7枚目に位置する鉄札の上端に著しく斜辺をなす形状を見てとれる。中央の鉄札の長さは28.5cmが想定される。横幅は36.5cmが想定される。

各鉄札の幅は上端が1.7cm～1.9cm、下端1.5cm～1.6cmである。

綴あるいは覆輪用と考えられる孔の配置状況は1と同様である。両側縁に位置する鉄札は、中位から下端がほとんど欠損しているため、1と同形を呈していたとの想定に留めざるをえないが、綴孔の中位に側縁の覆輪用と考えられる縦列の2孔が配置されている点は1と共通している。

重ねは左側縁から18枚目を中央に、これより左側は右を上、これより右側は左を上重ねて綴じている。それぞれ外面にでる側の縁は丁寧な面取りがなされている。7枚目から30枚目までの24枚の鉄札の頭部上端にはその形状に則して2孔ずつの孔が配されている。上端、及び両側縁には覆輪と考えられる布の付着が幅1.5cmほどの範囲で帯状に確認できる。鉄札の上位から中位には2列4孔の綴孔が3カ所配され、下位には1列2孔の孔が2カ所施されている。

小札VIIは、籠手の端部に錆着して出土したことから

ら籠手の付属品として手甲を構成していたものと考えられる。総数で339枚が出土している。ここでは120枚を図示した(第104・105図)。

この中で1～52は、出土時から籠手の付属品と認識され、取藏、保管がなされていた小札である。52までとそれ以降とは若干長さの平均値に差異があり、細分する必要があるか。

1～17は右を上重ねて接続した17枚の小札である。鍼は第2鍼孔に組紐を通してあり、裏面では波縫状になっている。下段は覆輪技法で、縦は斜行状に縦じている。18～25では裏面で第1鍼孔を通る横方向の紐が見られる。26～52では縦の裏面に斜行状の紐の運びが見える。53～56は鍼孔が第1・2鍼孔とも平行に通っている。62～66では第2鍼孔を千鳥状に通る組紐が左端の小札の裏面で立取になっている。これは67～74の左端小札の裏面にも認められるもので、両者とも一段の端になったものであろうか。この二つは第1鍼孔を通る紐の状況が異なっている。62～66は菅糸が波縫状に動いている。これと同様の小札に84～93、95～108、114～120がある。67～74は組紐が上下二段で交互に動いている。縦は裏面で斜行状になるよう縦じけ付けている。

小札VIは、横幅がVIIとほぼ同数値の小札であることから付属品を構成していたものと考えられる。出土総数は368枚である。ここでは91枚を図示した(第106・107図)。

鍼、縦の技法は3種類に分類できる。全体の残存が良好であったのは63～76の左を上14枚を接続した小札である。鍼は第2鍼孔を通った組紐が千鳥状に鍼されている。第1鍼孔は波縫状になるよう菅糸で各小札を縦じている。下段の縦は裏面で斜行状をなしている。下層は覆輪技法で波縫状に組紐が通っている。これと同様の鍼、縦が、41～47、48～62、77～89で見られる。縦、下層はこれらと同様であるが鍼の様相が異なるものに1～11、13～23がある。1～11の鍼は第2鍼孔を通る組紐は63～76と同様である。第1鍼孔を通る組紐が、第2鍼孔を通る組紐と交互に小札を通っている。35～40がこれと同様で

ある。13～23は第1・2鍼孔を通る組紐が上下二段とも同じ列で裏面に表れている。25～33が同じ状況である。

1～11の左端の小札は裏面の右列第2鍼孔に組紐の結び目が見られる。77～89は右を上12枚の小札である。両端の小札は鍼孔の裏面に立取で通る組紐が見られることから、両端とも接続の側縁部分となり、一段がこの13枚で構成されていた可能性が考えられる。25～33、35～40、41～47、48～62ではそれぞれ片端の小札の裏面で、鍼孔に立取で通る組紐が観察できる。

小札VIIIは幅がVIやVIIとほぼ同数値であることや、64～78が環状鉄札と錆着していたことと考えあわせると、環状鉄札の付属品を構成していたものと考えられる。出土総数は、78枚である。ここでは78枚を図示した(第107・108図)。

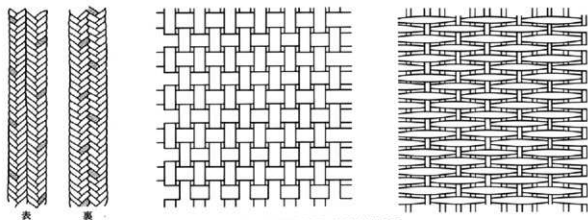
接続状態のまま残存する小札が多数見られる。例えば、1～19は、右端から6枚目を真中に、左を上にして5枚、右を上13枚、合計19枚が接続している。鍼、縦は共通する技法が採用されている。頭部の4孔については、鍼でなく縦孔とされており、裏面で斜行状を示すよう組紐が通されている。中央部の一列2孔は鍼紐が残存し、裏面で波縫状を呈している。下段の6孔により、縦、下層がなされている。菅糸が使用されている。上位二列による縦は裏面で斜行状をなしている。下層は覆輪技法によるものであろうか、表面は64～78のように波縫状の紐の運びが観察できる。裏面は残存状態が不良であるが、表面と同様であろうか。

64～78の右端の小札は、頭部裏面の組紐が2本とも立取になっており、接続の側縁部にならうか。

Ⅷ—20～32は頭部の表裏両面に布の付着が見られる。また、1～19、64～78の裏面には二種類の布が全面に付着している。

⑨ 鍼、縦、覆輪に使用された材料について

鍼には、組紐が使用されている。材質については分析していないが、撚りの掛かっていない糸を引きそろえ、組んでいる。これを模式的に提示したもの



第103図 組組織織様式図・布織様式図

が第103図である。現在の組紐の組み方でいうところの「冠紐」に類似している。

紐については、燃りの掛かっていない繊維をそろえたものが多用されている。その下に革紐が使用されていると思われるが^{註4}明瞭に残存していない。

下層の紐については緇と同様の組紐と、それ以外の紐が見られる。後者に付いては革紐と考えられる。

覆輪技法については、小札IV・XVIIで革包覆輪が見られる。小札XIIIでは布の残存が確認できる。

出土した小札の器面には布の付着するものが多数存在する。これには、挂甲を構成する上で関係する布と二次的に付着したものとがある。

糸の太さや織り目の相違から第103図に上げたような二種類に大別できる。材質は不明である。一つは小札Iに代表されるもので、1cmの幅に30本以上と織り目の密なもので、もう一つは小札IIに代表される織りの粗い布である。前者には小札XIIIのように二本綜統のものもある。これは、織りの乱れ、あるいは、この布に柄の可能性があるとされる。

Ⅷ-1~19の裏面では頭部の二列4孔の部分に布の付着がみられる。この布は、2枚の重なった平織りの布（両者の織り目に若干相違があるようにもみえる）、あるいは1枚の布を折り、二重にしたものと思われる。組紐が布の下端をまつり縫いするように綴じている。頭部側は欠損しており、ワタガミ状をなすのか、折り山をなすのかは不明である。

XXI-115~130では、上段の右端から3・4枚

目の表面に横取された組紐があり、これによって貫かれた複数の布が残存している。これは、組紐のやや上位で折り山をなす2枚、合計4重の布からなっている。下の布は折り山の内側に紐が通されていたのか、現状では折り山が破れて、茶色の燃りの強かった紐状部分が外部に露出している。同様の状況はXXIV-6~11の表面でも観察できる。

⑩ 原形面の残存について

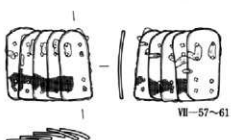
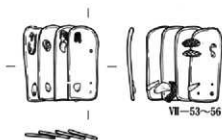
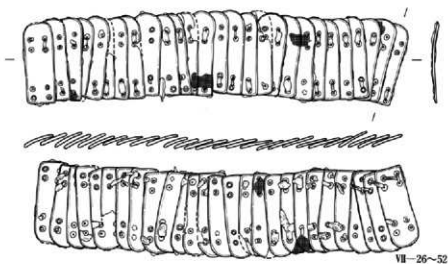
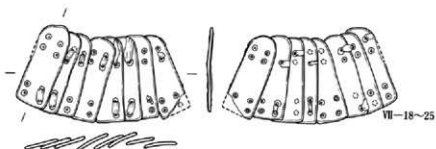
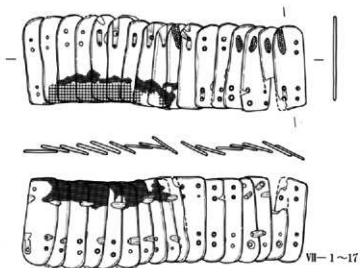
出土した小札は、錆化が進行し、器面は著しく変形をきたしたものが大半である。その中で小札II、III、XIIの中には、鉄板地金の光沢が残る資料が少量ずつ存在した。器面の観察からは漆塗布の状況は確認できない。これは、錆化した他の小札も同様であろう。IIIの小札は器面に長軸方向に平行する擦痕が見られる他、側縁部にも長軸の直行方向に工具の動いた痕跡が見られる。

註1 用語については、清水和明「掛甲と付属具」『彫堀藤ノ木古墳第一次発掘調査報告書』を参考にした。

註2 『藤ノ木古墳と東国古墳文化』に青銅の小札が写真図版として掲載されている。この小札は以前から籠手の一部として実測図が作成されていたもので、今回は、従前を踏襲し、第100・101図に籠手の付属品として掲載した。今回の分類では小札Ⅶとなる。

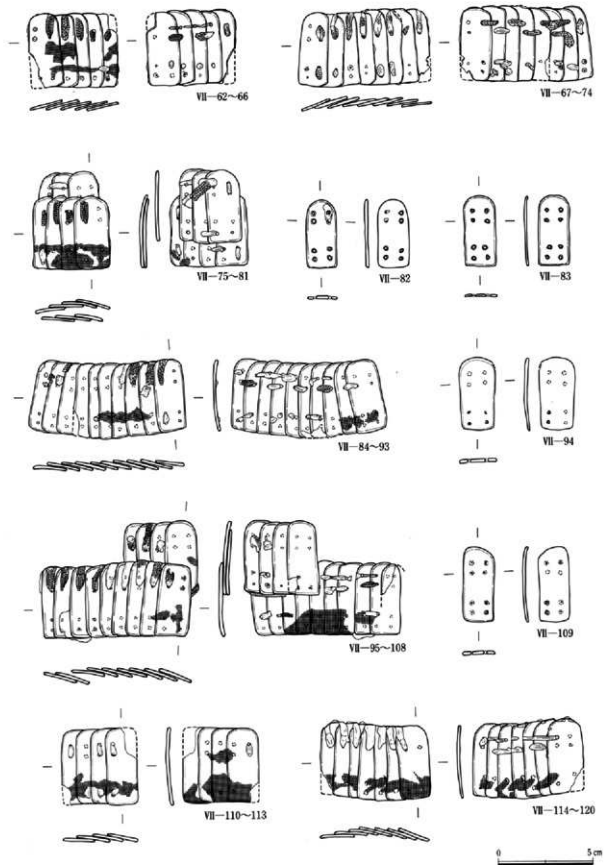
註3 形状は、藤ノ木古墳出土の條状鉄札に類似する。藤ノ木古墳のそれは太鼓を覆う一種の籠甲と想定している。

註4 清水和明「挂甲」『彫堀藤ノ木古墳第一次発掘調査報告書』では、本古墳出土の挂甲に革紐の後、音糸をかけていると思われるとしている。

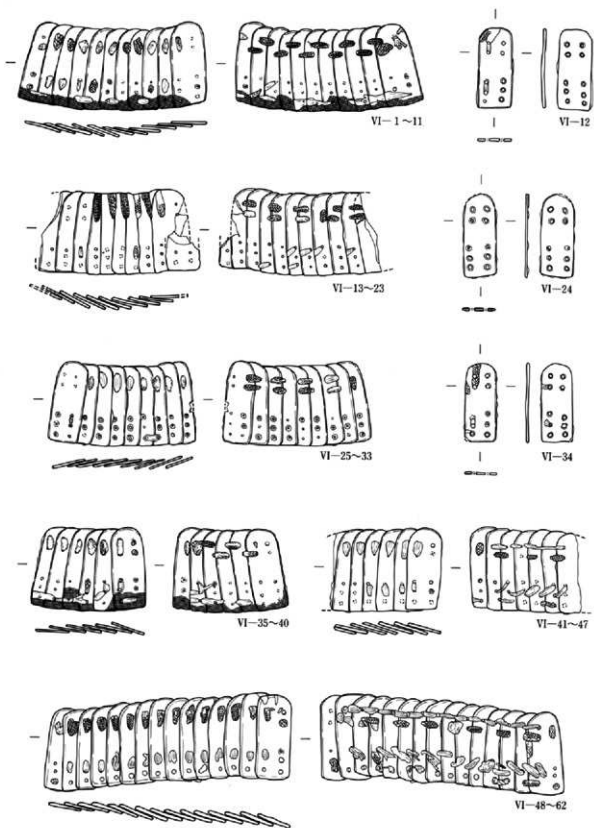


第104図 挂甲小札29

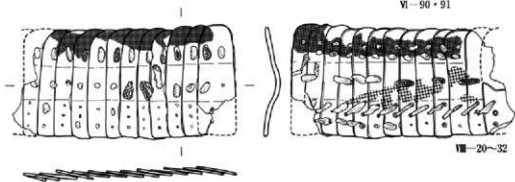
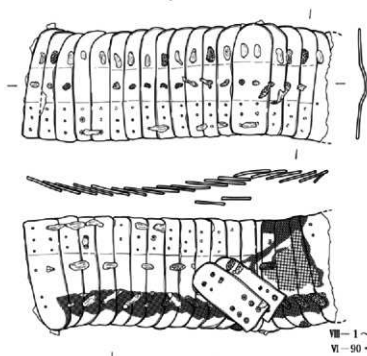
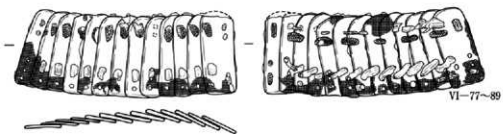
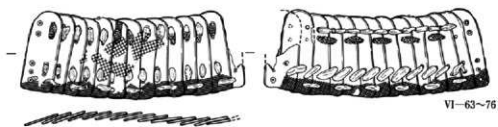
5 cm



第105图 挂甲小札20

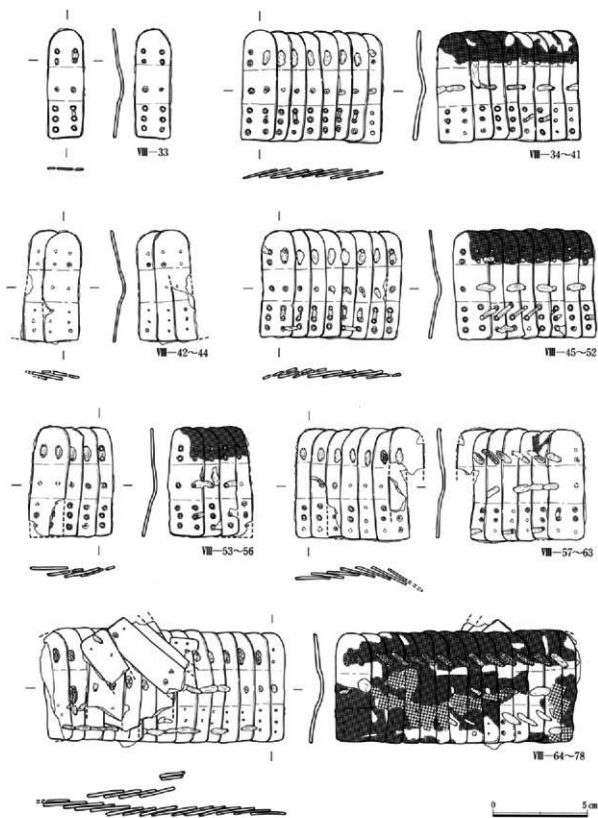


第106图 挂甲小札(2)



0 5 cm

第107图 挂甲小札(2)



第108图 挂甲小札(z)

5. 馬具類

(1) 轡

① 出土点数および出土状態

本観音山古墳から、4点の轡が出土している。これらの出土位置は、玄室左側壁寄りに、玄室手前方向から、鉄地金銅張心葉形鏡板付轡が、金銅製心葉形杏葉、金銅製歩揺付飾金具、鉄製雲珠および辻金具、鉄製革帯当金物類、鉄製壺鏡とともに存在し、その部位から玄室奥方向に105cm程離れた部位に、鉄製鏡轡、尻床部分の左前面側壁寄りに、鉄製環状鏡板付轡が、そして、尻床左側に崩れ落ちた状態で分布した挂甲小札群の一角に混入した状態で金銅製環状鏡板付轡が、金銅製花卉形鈴付雲珠1点、金銅製花卉形鈴付辻金具3点、鉄地金銅張革帯当金物とともに存在していた。すべて、馬具類は左壁側に配置されていたが、轡類4点は、それぞれ、その位置を別にして、置かれており、副葬馬具類のユニットの中核を占めるものであることが、推定された。

② 法量および形態的特徴

(a) 金銅製環状鏡板付轡 (第109図)

その出土状態から見て、本轡は、金銅製花卉形鈴付雲珠・同辻金具を飾る面繫に装着されていたものと推定される。尻床上、最も遺骸の安置位置に近く添え置かれた遺品であり、他の馬具類に比べて、被葬者の愛用品として、あるいは、葬送儀礼上直接被葬者の身辺近くに供えられるべく、配置されたものと推定される。引手一方の手綱装着用の先環部分に手綱材の一部麻平織り布が巻きついており、また、

第14表 金銅製環状鏡板付轡素環鏡板部計測値一覧 単位 (cm)

	環部 外径	全高	立間部(外法) 幅 高さ	立間部(帯通穴)	環部 太さ	立間部 厚さ
左環	8.00× 6.20	7.80	3.40× $\begin{cases} 1.80(左) \\ 1.80(右) \end{cases}$	2.40× $\begin{cases} 0.8(右) \\ 0.7(左) \end{cases}$	$\begin{matrix} 0.80 \\ \sim \\ 0.90 \end{matrix}$	0.50
右環	7.90× 6.40	8.00	3.40× $\begin{cases} 1.70(左) \\ 1.65(右) \end{cases}$	2.30× $\begin{cases} 0.8(右) \\ 0.7(左) \end{cases}$	$\begin{matrix} 0.80 \\ \sim \\ 0.95 \end{matrix}$	0.50

第15表 同上轡引手部計測値一覧 単位 (cm)

	全長	棒状部長	元環径	手綱装着環径
左引手	15.00	10.30	2.50×2.30	3.40×3.70
右引手	15.10	10.20	2.30×2.45	3.30×布付着

素環鏡板の立間部分に皮革残片が残存した。このことから、面繫は、皮革製で、付近に残存した鉄地金銅張革帯当金物類を併い、金銅製花卉形鈴付雲珠・同辻金具を装飾し、手綱は、芯地を麻平織布とした皮革製のもので、本轡は、それに装着されたものであろう極めて豪華な造りのものであることが推定できた。

本轡は、二連の馬銜の端部環と素環鏡板と引手元環を1個の環に絡む構造であり、馬銜端部に素環鏡板と引手元環とを絡む構造のものに比べ、複雑な構造である。

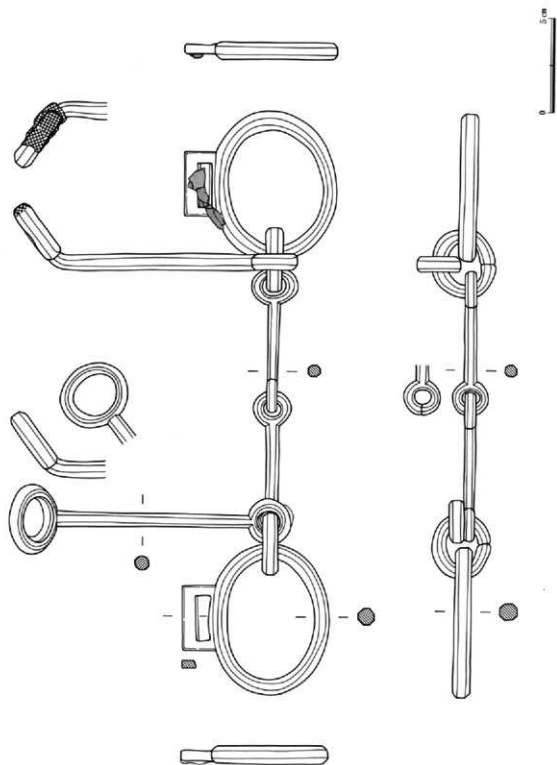
馬銜部、素環鏡板部、引手部とその結束環はいずれも太さに若干の相違があるものの、断面が六角形に面取りした棒状にこしらえている。

馬銜部は、径0.70cmの2本の六角形棒の両端を環状につくり、その一端を絡み合せて連結し、端環を結束環に絡ませる構造で、口中位の連結環は外径が、左1.95×2.00cm、右1.70×1.90cm、端環は外径が、左1.80×2.30cm、右1.70×2.50cmで、やや大きく楕円形である。馬銜部は、左側部長7.80cm、右側部長7.50cmで、二連した全長は14.30cmを計る。端環部を除く口中部の長さは10.60cm内外である。連結は、右側部環の端部を切斷、喰い違いを作り、右側部環をはめ込み、喰違部を原形にもどす方法で行っている。

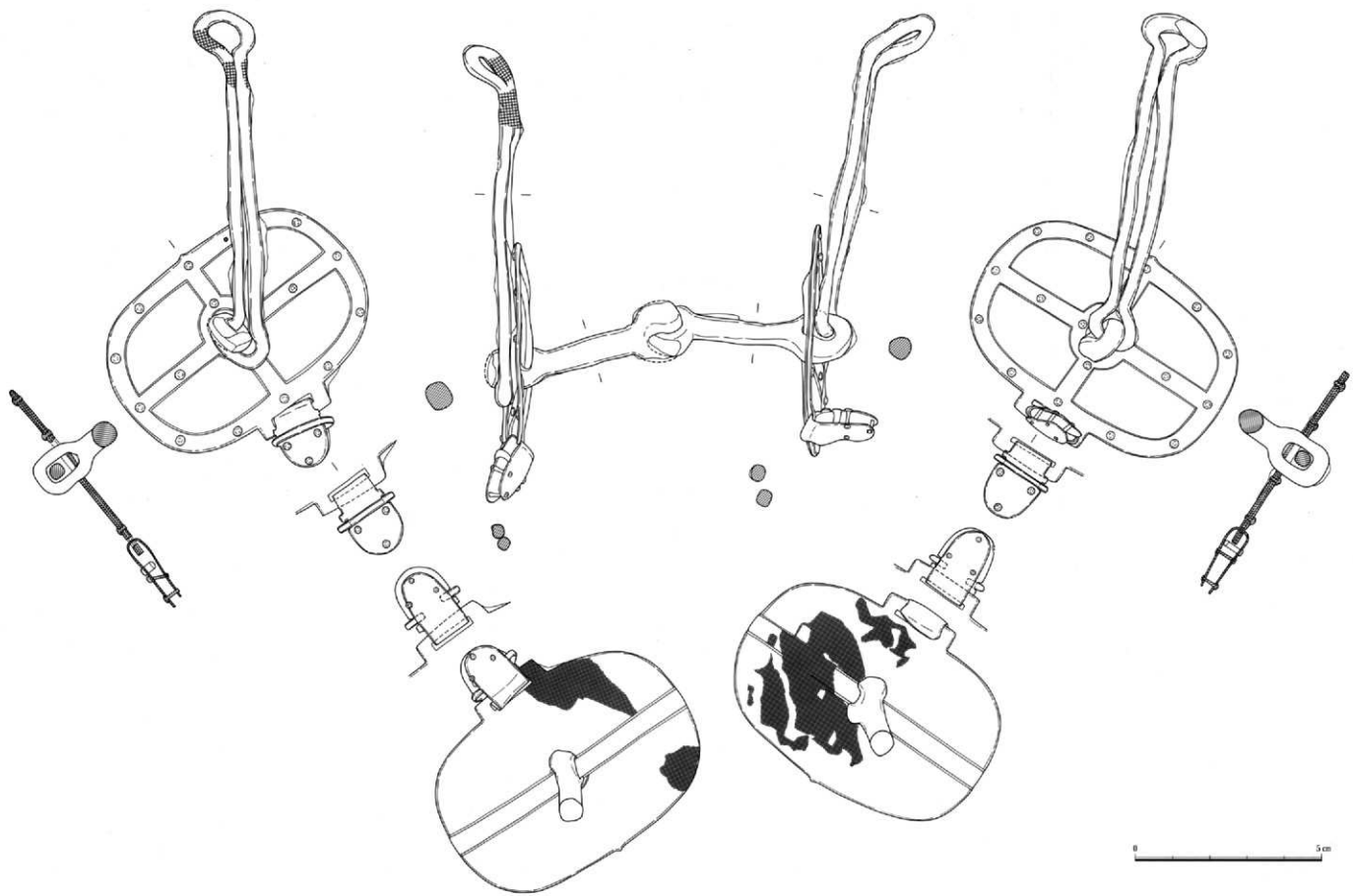
素環鏡板部は、楕円形で、長辺部の一方に方形の立間部を伴造りにしている。このことは、本轡が鋳造品であることを示している。各部位の計測値は、第14表のとおりである。

引手部は、ほぼ素環鏡板と同太の金銅六角形棒で、最大径0.80cmである。元環にたいして手綱装着環が大形で外側に約53度(左引手)54度(右引手)折りまげている。各部の計測値は第15表のとおりである。

以上、馬銜部、素環鏡板部、引手部を結束する馬銜端結束環は、太さ0.70～0.80cmの六角形断面の棒状で、外径は左環が3.00×3.25cm、右環3.20×3.50cmを計測する。両者とも、切斷接合面があり、喰



第109図 金製環状鎖及び付番



第110図 鉄地金銅張心葉形鏡板付骨

い違いを広げて馬銜部端環、鏡板部、引手元環を鋳造した環を切断し、その部分をはめ込み、原形にもどして、完成させたものである。

(b) 鉄地金銅張心葉形鏡板付轡 (第110図)

その出土状態から見て、金銅張心葉形杏葉、金銅製歩留付金具群とセットを構成する馬装の轡と推定される。鉄製二連の馬銜の端環を鏡板部の中心部に穿けた穴を通して、引手元環に絡め、同時に、鏡板部の裏面に長軸方向で裏打ちした銅製当板を通して、馬銜に絡めている。馬銜部分と引手部分は、錆化が進んで、当初の材の太さは変形している、馬銜部が径1.20～1.40cmの膨んだ形状であるが、若干細い鉄棒であったと思われる。引手部は、径0.50～0.70cmの鉄棒を輪状に作り、それを「二本の棒状」形に延ばし、その一端の環形部を馬銜端環に絡めている。引手の片方には手綱結絡環部に麻平織り布痕を付着しており、それを芯地とする手綱が結ばれていたことが推定された。

馬銜部は、二連で、11.00cmと11.50cmの両端を環状にした鉄棒を絡み、連結し、全長20.50cmとしている。端環部を除く口中部の長さは、13.50cm内外である。連結部の環は、外径2.50cm内外であったと推定されるが、端輪の外法の長さ3.20～3.40cm、幅2.40cm内外の隅丸形の短形をし、環部も、それを一回り小形にした1.70×1.20cmの大きさで、それに鏡板の当金と引手元環を通してある。端環部の環材径は、0.60～0.70cm内外であったことになる。

この馬銜端環に装着された鏡板部の形状は、隅丸方形に近い楕円形で、長辺部の一辺に立開、他辺の中央位を稜状に張り出し、つぶれた形的心葉形としている。裏面の一部に布痕が付着していた。表面には幅1.20～1.30cmの帯の、「十字車」形に切り貫いた縁当飾り金銅板を地板の金銅板に重ね、釘留めしている。釘留めは周縁部を12個、中心軸周囲を4個、十字部は長軸部のみ、中央位に留めている。計18個を飾る。

立開部には面繫の帯端繫番金具が残存していて、面繫が皮革製であったことがわかる。面繫帯端繫番

金具も、金銅製で、表当て幅2.80cm、裏当て幅2.20cmで、その形状は両端丸胴形をした金銅板の裏当て部を立開帯吊穴に通し、折り曲げ、面繫皮革の端を挟み、3個の新で留めるとともに、蝶番軸寄り部表当て部の側部を小さく「コ」字形に切り込み、その部位で甲丸鏡形の留金で締めている。

鏡板各部位の計測値は、第16表のとおりである。

第16表 鉄地金銅張心葉形鏡板付轡鏡板部計測値一覧
単位 (cm)

	長径	短径	全高	立開幅	立開高	立開部穴
左側杖	14.70	10.20	4.30	1.00	2.60×0.50	11.20
右側杖	14.70	10.20	4.10	1.00	2.80×0.20	10.90

引手は、鉄丸棒を馬銜端環に通し、その両端を接着し、輪形にしたものを棒状に延ばし、その両端を環形に整形している。長さは、左側引手が19.5cm、右側引手が18.00cmで、両方とも約50度、手綱連結環部を外反させている。馬銜連結環は、外径において左引手が3.00cm内外、右引手が2.80cm内外。手綱結絡環も、外径において左引手が3.30cm内外。右引手が3.70cm内外につくられている。

(c) 鉄製環状鏡板付轡 (第111図)

出土時、右側馬銜の連結環が損失していて、ばらばらの状態で存在したが、表面には所々に麻平織りの布が付着していた。

馬銜は、二連式で、馬銜端環に素環鏡板と引手元環を連結したつくりの轡である。形式的には最も類例の多い種類の轡であるが、鏡板部のつくりが大型、かつ入念で、特徴的である。

馬銜部は、完存の左側部が全長10.20cm、連結環外径が2.50×2.80cmで、太さ0.85cm内外断面が六角形に面取りされている。馬銜端環が3.45×4.20cmで、太さ0.70～0.90cmの断面四角形に面取りされている。環部を除く部分の太さは、0.90～0.95cmで、断面は七角形に面取りされた棒形である。右側部は連結環部を除いて残存し、端環径が3.30×3.50cmと左側部端環にたいし、やや小形のつくりとなっているが、太さ、断面等、ほぼ同大のつくりである。このことから推定して、馬銜の全長は19.50cm内外、端環

第17表 鉄製環状鏡板付素環鏡板部計測値一覧

単位 (cm)						
	環部長径	環部短径	全高	立開幅	立開高	立開部帯穴
左枝	11.50	9.50	11.60	5.40	2.10	3.80×0.65
右枝	11.60	9.60	11.90	5.35	2.40	3.70×0.65

第18表 同上轡引手部計測値一覧

単位 (cm)					
	全長	元環外径	手綱結環外径	軸部径	軸長
左引手	21.80	2.80×2.80	3.45×3.45	0.70~ 0.80	15.6
右引手	21.70	2.70×2.50	3.85×3.85	0.90	16.0

部を除く、口中部の馬銜長は12.80cm内外である。

この馬銜の端環に直接連結する素環鏡板は、寸詰り形の卵形の輪郭で、その緩弧辺部の一端に大形の立開を共造りにしている。環部は、断面が偏平五角形で、幅広である。各部位の計測値は、第17表のとおりである。

なお、環部の断面は、左右両環とも、幅1.60~1.80cm、最大厚0.70cm、縁厚0.25cm内外、立開部の厚さは、左環が0.30cm、右環0.40cmである。両者、ほぼ同大、同形である。

引手部は、太さは左側引手が0.70~0.80cm、右側引手が0.90cm内外で、断面が六角形に面取りされた鉄棒で、その両端に環をつくりつけている。馬銜に結絡する元環は小形で、手綱結絡環は大形につくり、外反させている。その外反角度は左右とも約30度である。各部の計測値は第18表のとおりである。

引手部、および鏡板部の馬銜部との結絡は、引手元環と鏡板環部をあらかじめ喰い違い状に広げ切断していた馬銜部端環に絡ませ、その喰い違いを鍛造しもどしたものと推定される。

(d) 鉄製轡轡 (第112図)

角形、または、弓張り形造りの鏡板をもつ轡で、古墳出土事例としては、類例の極めて少ないものの一つである。出土位置は、これも左右で馬銜部が分離し、屍床寄り部に銅製環鈴等とともに残存した。

馬銜部は、二連式で、その内端環に鉸具付き円弧状鏡板を結絡し、さらに、そ

の内端環の外側に固着した外端環に引手元環を結絡するという馬銜端環が、内環・外環の二環から構成される構造である。複端環二連式馬銜ともいふべき構造で、内側端環の外方に外側端環を直交する位置で重ね、固着している。馬銜各部位の計測値は、第19表のとおりである。

軸の太さは、左右とも0.75~0.80cmの丸棒で、結絡環・内端環・外端環とも、太さ0.70cm内外と若干細目であるが、左右均正のとれたつくりである。端環部を除いた口中部の馬銜部長は、長さ11.40cmである。

この馬銜の内端環をもって連結する鏡板部は、断面四角形の弧状の棒で、その中央位の内曲面に面繫連結用立開鉸具を固着する。鉸具は、先端が茄子形断面の外形で、その足部を鏡板部に穿たれた留め穴に差し込み、固着したもので、先端部は太さ0.70cm内外の断面円形の棒をU字形に曲げ、その両端部を鏡部弓形棒の幅に合せて、偏平のつくりになっている。馬銜内端環は、この鉸具を固着する前に弓形棒を通し、その内端環を鉸具基部で絡めた構造である。鏡板部の各部位の計測値は、第20表の通りである。

右側鏡板が左側鏡板にたいして、若干大形のつくりである。

馬銜外端環に結絡する引手は、馬銜部とほぼ同大の径0.80cm内外の鉄丸棒で、その両端に小形の元環、大形の手綱着装環をつくらせている。引手各部の計測値は、第21表のとおりである。手綱着装環部は、左右引手とも約30度程度外反するつくりとしている。

第19表 鉄製轡轡馬銜部計測値一覧

単位 (cm)						
	全長	結絡環径	端内環径	端外環径	口内部長	
左銜部	11.90	2.60×2.90	3.40×3.40	2.50×2.50	6.70	
右銜部	11.60	2.70×2.80	3.15×3.10	2.60×2.75	6.50	

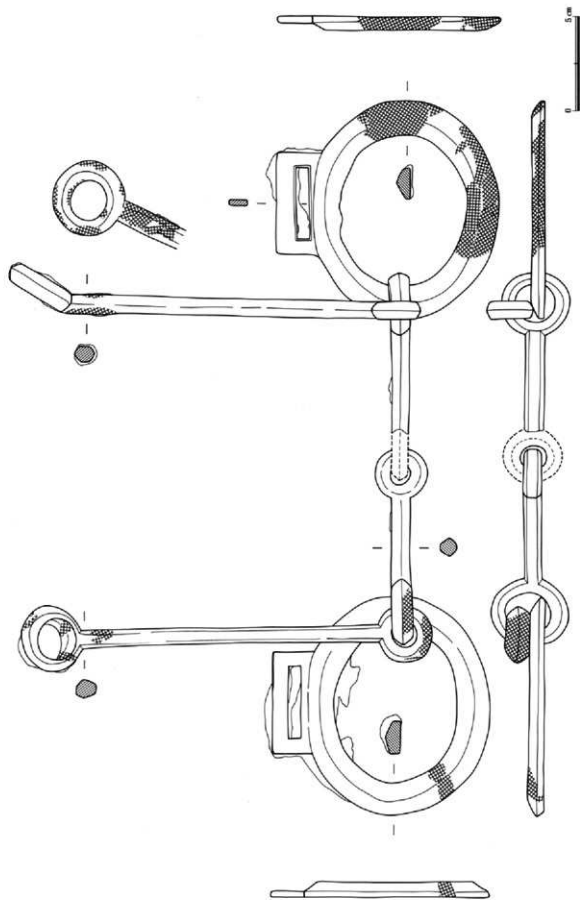
(※口内部長は端環部を除く長さ)

第20表 同上轡鏡板部計測値一覧

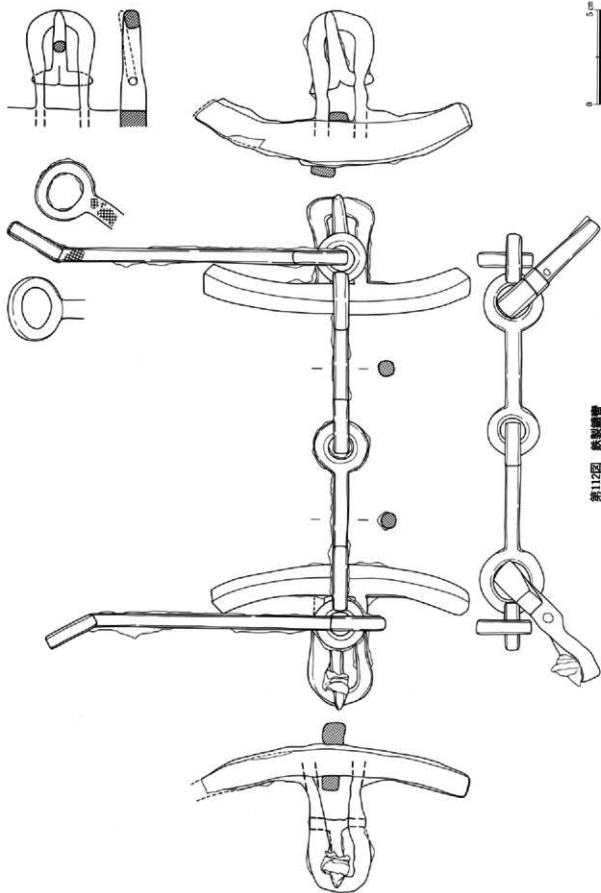
単位 (cm)						
	全長	反り	中央位断面 (厚さ×幅)	端位断面 (厚さ×幅)	鉸具部 長さ	爪長
左側	外	1.30(内面)	1.50×1.30	1.20×0.90	6.10	2.80
	内					
右側	外	1.50(内面)	1.70×1.30	1.40×1.10	6.20	2.80
	内					
	13.00					

第21表 同上轡引手部計測値一覧

単位 (cm)				
	全長	軸長	元環径	手綱結絡環径
左引手	18.50	12.40	2.50×2.90	2.80×—
右引手	18.00	12.20	2.80×2.90	2.90×3.30



第111圖 鍍銀環狀鐵板付轡



系112図 鉄製鎖輪

(2) 金銅製鞍橋表飾板 (付図4)

① 出土位置および保存状態

副葬された馬具類のなかでは、最も玄室入口部に近い部位、玄室入口部の左隅部から3.80mの付近に存在した。後輪飾板が側壁際に表側を上にして、爪先部を壁面に接するように、また、前輪飾板が側壁から約0.50m離れて、表側を下にして、これも爪先部を側壁方向に向けて、礎床上に散在した。両者とも玄室部右側壁の中央部分が崩壊した時に転落した壁材の一部によって、前輪部分は跳ねとばされ、後輪部分は左側壁際に押しやられた状態を示している。付近には鈎具類、銅製環鈴1点が存在した。前輪、および、後輪部分の位置関係から見て、両者は、同一鞍のものであり、前輪部を内側に向けて、左側壁寄りの部位に置かれたものと推定された。

保存状態は、おおむね全形をとどめる状態で残存していたが、前輪部分にたいして後輪部分の保存が良好であった。前輪部分は、飾板部材のみで、木胎部の残存はほとんど認められない。右肩部分で、同部位を中心にして、同部位から爪先部にかけて海部飾板の欠損部分が広がり、海・磯部飾板を木胎部に固着する帯状縁当金板も欠損しており、また、左爪先部の海部飾板の帯状縁当金板も欠損していた。この前輪部分にたいして、後輪部分は、海部飾板の所々に部分的な欠損箇所が存在し、また、右側爪先部分の海部飾板・帯状縁当金が折損しているほかは、おおむね全形をとどめていた。特に、後輪飾板の裏面には全面に木胎部の朽敗木質が残存し、木胎部木取りの仕様を良くとどめていた。

② 前輪

(a) 全 景

木胎鞍橋の表面に貼った海部の金銅製唐草文様飾板と磯部の鉄地金銅張無文様飾板、それに両者を木胎部に固着する連珠様飾新留鉄地金銅張帯状縁当金が残存した。飾板の一部には布痕の付着も認められた。覆輪は、単独部材を示すものは存在しない。海部外輪の連珠様飾新留鉄地金銅張帯状縁当金が兼用したものか、あるいは木胎鞍橋の縁部には金銅製覆

輪を装着しない意匠構成のものかのいずれかということになる。覆輪材と考えられる金銅製部材が存在しないこと、さらには、海部飾板の外輪帯状縁当金の幅が細造りであることから見て、その新留め代の強度確保という点で、鞍橋木胎部の縁は残存前輪飾板の外形を一回り大きくした造りのものであったとする方が無理のないところである。とすると、前輪鞍橋縁部には海部・磯部のように金銅製飾板を装着して覆輪部を構成するものではなく、残存する前輪飾板の外形よりも一回り大きく造った木胎鞍橋の縁部を深造り仕上げたものとすべきであろう。この意匠構成は、後輪部分にも共通するものであったことは勿論である。

残存する前輪飾板部の全形は、外形が蒲鉾断面形を呈し、その爪先部は切出形に切り込んだ形状である。両爪先間の幅が40.80cm、両爪先間を底辺とした頂部の高さは31.00cm、肩部の最大幅は、爪先先端位から15.00～16.50cmの高さのあたりにあり、40.00cmである。ややなで肩である。このことから覆輪部を含めた前輪鞍橋の外形は、以上の飾板の外形を一回り大きくしたものであり、覆輪部幅を帯状縁当金の幅と同規模内外のものとすれば、概形が爪先間幅44.00cm内外、全高32.50cm内外ではなかったかと推定できる。同木胎鞍橋に金銅板打出し唐草文様海部飾板・鉄地金銅張無地磯部飾板を連珠様飾新留鉄地金銅張帯状縁当金で固着している。

(b) 海部飾板

右爪先部から右肩部にかけての折損欠部分がある。他は、おおむね全形を残している。丸縁先形に裁断された金銅板は、頂部中央位で5.10cm、両肩部で5.20cm、爪先基部では右側が4.00cm、左側が3.80cmで、その先端は覆輪側を棟とする切出形である。外形は、左右爪先間の幅が38.30cm、高さ27.60cmである。この飾板の縁部は、幅0.10～0.15cmの縁当金を取っているのを見掛け上は、0.20～0.30cmが縁当金の下に隠れ、その分幅狭となっている。

この海部飾板に描かれた文様は、2段に構成された複線菱幹単線菱枝葉の唐草文様である。その描出

手法は、裏面から錐状型で列点を打出し、みみず膨れ様に表面に浮き出した唐草文様の縁取りを毛彫り手法で列点を刻んで表出したものである。描出された唐草文様の基本図柄は、幅0.50cm内外の複線蔓幹で、波長5.00~5.50cm・波高2.00cm内外の外側位唐草文と、波長4.50cm内外・波高2.00cm内外の内側位唐草文からなる。外側位唐草文は、左→右方向（装着時の正面感は逆方向となる）の偏向唐草文。内側位唐草文は、右→左方向（装着時の正面感は逆方向となる）の偏向唐草文である。それを模式的に図示すれば、第113図上段のとおりである。蔓幹・蔓枝葉を表現する列点は、おおむね1.0cmの間隔に6列点を打出している。各列点の径は、0.05~0.10cmの大きさで、蔓幹は「みみず膨れ」状に連続する。蔓枝葉は蔓幹波底部に上下対称的に構成した「の」字形、「逆の」字形の渦巻文で表現し、蔓幹の先端は外側位唐草文が蔓幹複線構成の「藤手」形の双脚輪状文様で完結するが、内側位唐草文は右側爪先部位において蔓幹単線構成の唐草文を逆方向に表現している。左側爪先部の蔓幹先端部は折損失っていて明らかでないが、右爪先部に対称するものとするれば蔓幹を単線表現したものが推定される。

(c) 磯部飾板

長径13.80cm、最大幅4.60cmの鳩胸形の無地の鉄地金銅張板で、縁部は海部飾板と同様、幅0.10~0.15cmの縁当金当代を取っている。磯部飾板は、見掛け上は縁当金当代分だけ表面は小形となる。左右対称で、海部の下部に爪先部の切出形に斜めに裁断された下縁の延長線に、磯部下縁を位置するように木胎

部に固着している。左右磯部の間隔は、爪先部で30.20cm、上部の海部接合部で12.50cm内外である。

(d) 縁当帯金

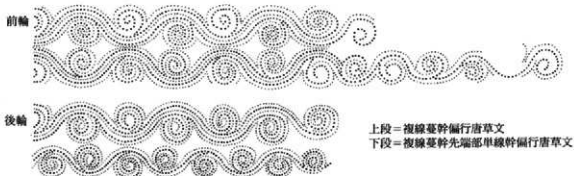
海部飾板・磯部飾板の鞍橋木胎部固着は、それらの縁部に幅0.10~0.15cmの縁当金当代を取り、その当代の上から帯状縁当金を当てがい、鋲留めする方法を取っている。

帯状縁当金は、幅1.40cmの鉄板の片面を金銅板で包み込むように張った鉄地金銅張板である。この鉄地金銅張板に最小間隔1.80cm、最大間隔2.30cmの、ほぼ均等分した間隔で一列に頭部丸形の鉄芯金銅張飾鋲を連珠状に打ち、木胎部に固着している。鉄芯金銅張飾鋲の頭部は、径0.80~0.90cm、高さ0.30cm内外であるが、多くは鉄芯部が錆化し、豆瘤状に膨んでいるか、頭部が損欠していた。海部外縁の覆輪内側の縁当金は、39個の飾鋲、海部内縁と磯部外縁を固着する縁当金は、24個の飾鋲を連ねている。磯部内側縁を固着する縁当金の飾鋲は、左右とも10個である。これらの縁当金は、連珠式飾鋲留縁当金ともいうべき仕様である。なお、両磯部に挟まれた海部下縁当金の下部には縁部を弧状に裁断した金銅板を当てがい、また、海部爪先部の切出形に裁断された縁部にも、幅0.70cmの鉄地金銅張帯状縁当金を鋲留めしている。

③ 後輪

(a) 全景

後輪鞍橋表面を飾る飾板は、前輪鞍橋のそれに比べ、損壊部分は少なく、爪先部の一部に損欠部分が認められるほかは、海部飾板の縁部の錆蝕と海部飾



第113図 金銅製鞍橋表飾板海部唐草文模式図

板中央部分に損欠箇所がある以外は、おおむね全形をとどめていた。また、飾板裏面には全面に鞍橋木胎部の腐蝕木質の残材が付着残存していた。

外輪飾板は、前輪飾板に比べ、大形で、漣断面形の外形は、両爪先間の幅が52.00cm、両爪先先端間を底辺とする中央部位の高さは33.60cmである。肩部は、ややなで肩の形状で、その最大幅は左右部位とも爪先先端部から17.00cmの高さにあり、幅51.20cmを計る。前輪飾板に比べ、幅が11.00cm、高さが2.60cm程大形のつくりである。

(b) 海部飾板

金銅板を中央部位で幅4.50cm、左肩部位で4.60cm、右肩部位で4.40cm、爪先基部で3.10cm（右側部は欠失・左側部と同幅が推定される）で、爪先部を切り出形に裁断した丸線先形で、その外形は、爪先先端間幅44.70cm、高さ29.40cmである。この飾板の縁辺に縁当金当代を0.10～0.15cmの幅で取っているところも前輪と同一であり、その当代分だけ、飾板の見掛け上の幅は狭まることになる。

この海部飾板の全面には、前輪海部飾板と同じく、裏面から錐形型で打出した列点文で唐草文様を描出したもので、「みみず彫れ」状に走る唐草蔓幹の輪郭を際立たせるため、蔓幹に沿って表面に毛彫り列点を刻んでいるところもまったく同一の意匠を採っている。

しかし、後輪飾板の唐草文構成は、前輪部にたいして若干海部の幅が狭くなっていることによるのか、2列に走る唐草文の蔓幹は、外側が複線構成で、前輪部と同一表現なのたいて、内側は単線構成である。外側唐草文は左→右方向を取る偏向唐草文で、その波長は最小4.50cm、最大5.60cm、波高は2.20cm、蔓幹幅0.40～0.50cmで描出されているのたいて、内側唐草文はやや小振り描かれている。波長は最短4.00～5.00cm内外で、波高は、1.30～1.50cmである。右→左方向を取る偏向唐草文である。しかし、蔓幹根部にあたる右爪先部は、前輪部と同じように左爪先部と対称する唐草先端を描出するため、右方向に延びる唐草文を描出したものと推定さ

れる。蔓幹は後線をもって走る「みみず彫れ」状を呈しているが、その側部を際立たせる毛彫り列点文を配しているところは、複線蔓幹の唐草文意匠と同一である。これらの唐草文は、前輪部も同じで、単一波長単位に割り付けした上で、フリーハンドで蔓幹を打出し、描出したもので、さらにそれに毛彫り列点文を添描出したものである。後輪海部飾板に描出された唐草文は、模式的に示せば、第113図下段のものとなる。

(c) 磯部飾板

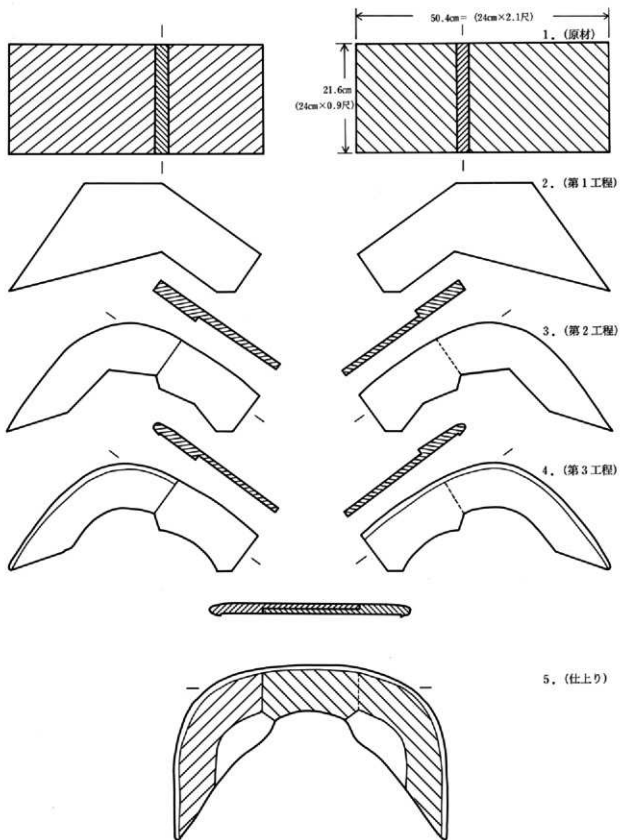
「眉」形の左右一對の鉄地金銅張板で、海部下縁に13.70cmの間隔を取って鞍橋木胎部に縁当金で鋳留めしている。表面は、無地で中央部が若干鳩胸様に膨らむ。前輪磯部飾板に比べやや幅狭・切れ長の形状を示し、見掛けの上の大きさは、最大幅4.30cm、最大長16.5cmであるので、縁当金当代の0.10～0.15cm幅を加えた大きさに裁断されたものである。中央部に鞍装着の1辺約1.10cmの方形の穴を有している。右側磯部の鞍装着部には鉸具足金具と、その座金が残存した。足金具は、鉄製の幅0.90cm内外の帯板状で、その鉄板の中央位を環状に折りまげ、鉸具軸受けとしたもので、居木木胎部の木口に打ち込み、固着したものと推定される。その軸受け足金具の座金は、金銅板製径1.90cmの偏円形で、鉤付縁部の形状を示している。

(d) 縁当帯金・被覆板

前輪部と同一仕様で、連珠式飾鋳留め縁当帯金ともいうべき形状である。


海部外縁の縁当金は、一部に2.40cmの間隔を有して配鋳したものもあるが、平均して1.90～2.10cmの間隔で、総数47個の鉄芯頭部金銅張板で留めている。海部内縁と磯部外縁は同一の縁当金を当てている。その縁当金の鉄芯頭部金銅張板は、30個を外縁縁当金と同じくほぼ均等間隔に連ねている。磯部分は、左右とも12個の鋳留めで、それは磯部下縁の縁当金の鋳数10個に対応している。

一方、海部爪先部の縁当金も前輪部と同様、0.60～0.70cm幅の鉄地金銅張板で、これも3個の釘で木胎



第114図 後輪木胎部の木取り模式図

部に固着している。

左右磯部間には海部下縁線当金の外側に前輪部と同一仕様の縁部を弧状に裁断した「」形の金銅板を当て、木胎部の被覆板としている。被覆板の右寄りには3個の木胎部に固着する釘穴を穿っている。

④ 鞍橋木胎部の樹種と木取り法

後輪部鞍橋飾板の裏面には、鞍橋木胎の残存木質がほぼ全面に付着していた。この木胎部材の樹種は、発掘調査直後の遺物類整理・調査の段階で、当時、東京国立科学博物館技官、山内文氏から、桂種という材質鑑定の中継報告を受けている。この樹種が日本列島地域に広がりをもつ植生分布を示す樹種ということから見て、その材料調達地は日本列島域内でなされたことは間違いないところで、本鞍の製作地は日本列島地域にあるとするのが無理のない見解ということになる。このことは前輪・後輪飾板の海部文様の唐草文の意匠感覚においてもいわゆる「倭風化」が強うかがえることから、妥当性のある見解と思考される。

そうした材質を使用している本鞍・後輪鞍橋木胎部は、一木の板材を裁断した「一木造」ではない。残存する木質の木目は、2枚の板材を「入」形に接合した構成である。第114図に示すように、左爪先部から右肩部までを一木で造り、その右肩部から垂直に裁断した木口部面に、右爪先部～右肩部にかけての木胎板の木口部面を、木目が直交するように接合している。接合面を鞍橋中央位から左側肩部にずらしているのは、鞍橋部の堅牢性を確保するための構造的配慮によるものであろう。鞍橋木胎部は、磯部分が左右とも残存木質を欠失している。磯部分は、居木を鞍橋部に固定する木組みの切込みが鞍橋部に設けられていたことによるものと推定される。鞍橋木胎部の接合下端部位は、右側居木木組み切込みの肩部に当る。

⑤ 本鞍の名称

以上述べて来た各部の特徴から、本鞍は、金銅製縁部連続状飾板留式二段偏向唐草文飾板付無覆輪鞍

橋鞍という名称で呼ぶのが適しい。

(3) 鍔

① 点數および出土状態

鉄製査鍔一对、木胎漆塗査鍔一对の計2具がある。これら2具の鍔は、玄室入口部左隅部から奥へ約5.00m入った玄室左側壁際付近の尻床部手前約0.4mを中心に、約50cmの範囲に分布していた。鞍の出土位置とは約50cmの間隔を置いて出土したが、両者の間には副葬品の配置は認められず、左側壁際に配置されていた馬具類は、これら2具の鍔を中心とする配置群から尻床側部にかけて、約3.2mの範囲に集中していた。

その配置状態は、鉄製査鍔一对を上位に、その下に木胎部が腐蝕し、鉄帯板部のみを残存する木胎漆塗査鍔が重なる状態で位置し、その周囲には鍔類の漆塗り仕上げにしたものと推定される漆被膜残欠片が残存し、それに埋るかのような状態で、鉄地金銅張心葉形鏡板付轡、金銅製心葉形杏葉、金銅製歩部付飾金具群が混在する状態で存在した。なかでも、金銅製歩部付飾金具群の一部は、鍔の上部にも散在する範囲を拡げていた。

鉄製査鍔は査部踏み込み部を上にした状態の左鍔(第115図1)を上位に、査部底面を斜め上にした状態の右鍔を下位に、重なる状態で残存した。左右両鍔とも全形をとどめてはいたが、右鍔については査部踏み込み部の縁線に破損欠部分がある。

② 法量および形態的特徴

(a) 鉄製査鍔 (第115図)

・左鍔(1)

吊手の鍔粗金の先端から査部底部までの全高、27.80cmを計測する。査部開口部の最大幅(外法)20.00cm、周高(外法)16.60cm、査部最大長(外法)19.30cm、吊手部は、全長11.20cmで、幅3.50×長3.80cmの鍔粗金部と、幅2.60×長7.40cmの軸茎部から形成されている。吊手部の厚さは、鍔粗部、軸茎部とも同一で、0.60cm内外である。各細部位の寸法は、第22表の通りである。

以上のごとき寸法の本左鍔は、査部口縁部が鍔背

第3章 遺物

形断面を呈し、その頂部に帯板状の吊手を固定した吊り環形で、その環部に舌先形に鉄板を成形した壺部を嵌め込み、固定して柄杓形の全体形に仕立てている。壺部は底板の縁部を断面が浅い「 \llcorner 」形につくり、その上にこれも断面が「 \frown 」形につくられた甲板を重ねて舌先形に成形している。鍛造による成形であろう。これにたいして、吊手部は、軸基部が基部で幅2.60cm、厚さ0.60cmの帯板を壺部口縁部に平行する向きに取りつけていて、壺部口縁部も、ほぼその幅で縁取りしているが、その内側の部分を幅1.80cm内外の断面が「 \llcorner 」形の切刃状につくり、壺部の口縁部の補強を兼ねたつくりとしている。壺部の吊手環部への固着は、環内に嵌め込んだ壺部の口縁部を環部から差し通した釘の先端をつおす手法を要所で採用したものと思われるが、その痕跡は錆化していて明らかでない。しかし、壺部踏み込み部には底板部に厚さ0.90cm内外の木製踏み板を張ったものであることを示す鋭尖が吊手環底部から等間隔で6カ所に打たれた状況を残している。吊手環底部と壺部底板部とを固定した釘留めを兼ねていたものと思われる。壺部表面には、所々に平織布片が付着

残存した。

・右鍔(2)

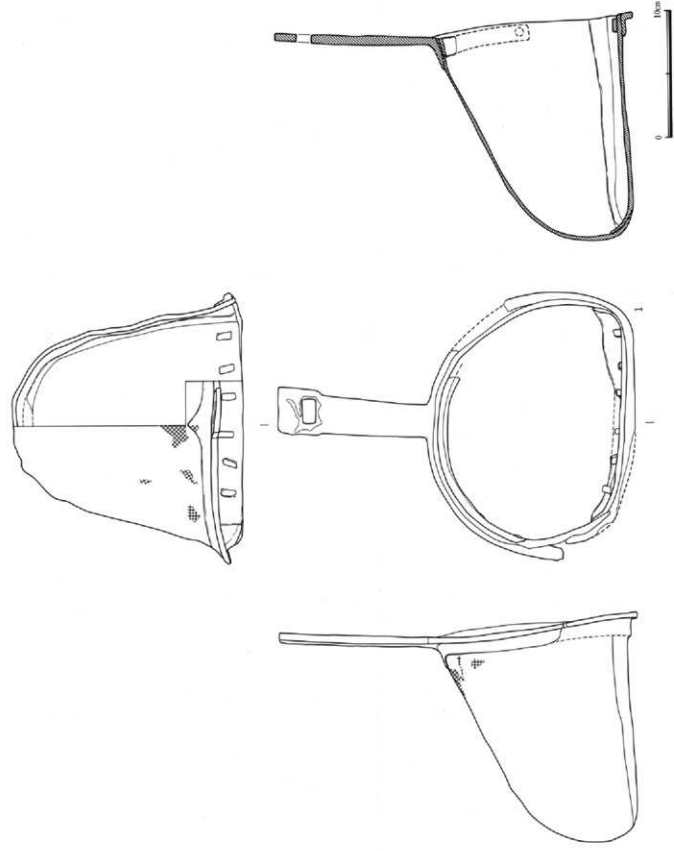
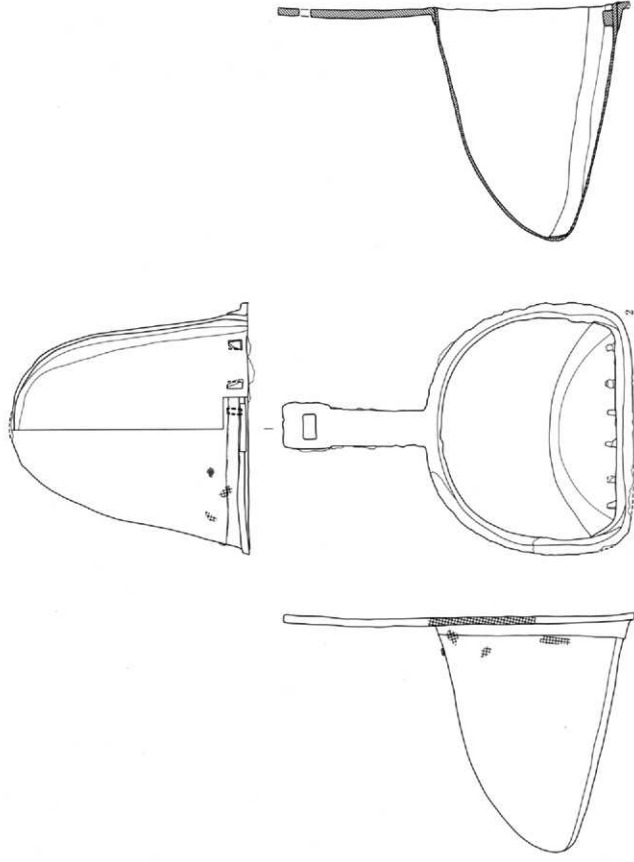
吊手の鍔粗金先端から壺部底部までの全高は、28.50cmを計測する。左鍔にたいして0.70cmほどの丈高である。壺部は、開口部が最大幅(外法)19.00cm、同最大高(外法)16.50cm、最大長(外法)17.70cmである。吊手部は、全長12.00cmで、幅3.80×長さ3.30cmの方形の鍔粗金部と、幅が鍔粗金部寄りで3.30cm、壺部寄りで2.60cmと、下方に向かって狭まっている長さ8.30cmの軸基部からなる。鍔粗金部・軸基部とも厚さは0.60cm内外と均一で、左鍔部のそれと変わらないが、軸基部が下方に向かって幅を狭めているという点と、鍔粗金部帯通し穴の形状が不整形で、長さ2.00×幅1.20cmと、ために穿たれているという点で異なる。各細部の法量は、第22表のとおりである。

壺部は、開口部の縁金にあたる吊手部と共造りの環部が右肩部と左下側部で欠損失しているが、他は旧状をとどめていて、壺部本体を嵌める環部が断面を「 \llcorner 」の切刃形にしている形状も左鍔と同仕様である。しかし、左鍔と異なり、壺部中心頂部、す

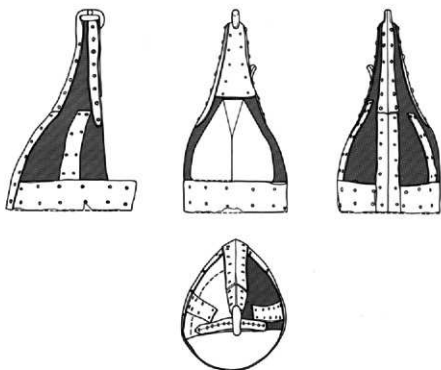
第22表 鍔各部位計測値一覧

単位 (cm)

部	部位	鉄製壺鍔		木胎漆塗壺鍔		備考		
		左(1)	右(2)	左(1)	右(2)			
壺部	全長	27.80	28.50	32.20	31.70			
	口縁部	外法	20.00	19.00	16.50	16.80		
	最大幅	内法	18.40	18.90	—	—		
	口縁部	外法	17.00	16.50	15.80	16.40		
	底部幅	内法	14.80	15.20	—	—		
	口縁部	外法	16.60	16.50	15.80	15.00		
	高	内法	15.00	13.90	—	—		
	壺部	外法	19.30	17.70	20.70	20.30		
	最大長(深)	内法	19.10	17.40	—	—		
	壺部	外法	20.40	15.60	19.80	19.40		
	底部長	内法	19.40	16.00	—	—		
	全長	長	11.20	12.00	16.40	16.70		
	吊手部	鍔粗金部	幅	3.50	3.80	4.50	4.60	
			長	3.80	3.30	3.00	2.70	
厚			0.60	0.60	径 0.80	径 0.80		
鍔粗穴幅			0.70	1.20	1.20	1.80		
鍔粗穴長			1.80	2.00	2.80	3.00		
吊手軸基部		全長	7.40	8.30	壺甲上	壺縁上	壺甲上	壺縁上
					13.40	12.10	14.00	11.60
		幅	2.60	(上)3.40 (下)2.80	1.50 3.60	2.20 6.50	1.70 3.70	2.10 5.80
		厚さ	0.60	0.60	0.10~0.20		0.10~0.20	



第115図 銅鏡部復



第116図 木胎漆塗壺籠（左籠）復原図

なわち、吊手の直結する部位の切刃形部に、「人」形の二山形の切り込みを入れた意匠表現を採っている点で特徴的である。また、壺部本体は「 \llcorner 」形断面の底板部に「 \frown 」形断面の甲板を被せている仕様も左籠と同一で、鍛造製と考えられるが、左籠にたいして、全体の形状は爪先甲部が丸味を有し、甲高である。なお、壺部開口部の左甲部には壺本体の甲板板金を補強する当板金が内側から2本の紙で貼られている。破損修復の当板金の可能性は、吊手籠鍔金の帯通し穴が磨滅した形状を示していることと関係して充分考えられるところである。右籠壺部表面にも平織布痕の付着部分が残存している。

(b) 木胎漆塗壺籠（第117・118図）

発掘時、木胎部はほとんど朽腐し、わずかに鉄帯板裏面に木質の残存が認められたにすぎない。鉄帯板が漆被膜残片の散在するなかに折り重なる状態で残存した。

残存した鉄帯板は、壺部と吊手籠鍔金部のものからなるが、それらの形状から判断して、本籠の木胎部は、正面断面形が「 Δ 」形をした細頸の徳利形

で、側面断面形は、その細頸徳利形の片側部の底部を残して削り取った残形で「 Δ 」形が復原できる。

この木胎部の壺部底縁部と開口部縁部、および、爪先甲部の筋目部から吊手・籠鍔金部に鉄帯板を紙打ちで張り、その表面全体を漆塗装して、仕上げたものと推定される。

そうした本籠の鉄帯板張りは、壺部と吊手・籠鍔金部の2パーツから構成される。

壺部の底板平面形は、爪先部に稜をもつ卵形で、底板厚は5.00cm内外であり、その周囲にほぼ同幅の短冊形の鉄帯板をその端部が爪先部に来るように巻いている。その鉄帯板の両端は、爪先部に無張り部を残しているが、その無張り部分を被覆するように、爪先甲部の筋目部に当てがって、衝角状に中央に稜の通った鉄帯板を底縁張りの鉄帯板の両端部を押えるように、その当代の上からこれも釘打ちで張っている。壺部爪先甲部に張った衝角状の鉄帯板は、底部から左籠が15.80cm、右籠が15.10cmの部位まであり、この部位は左右両籠とも壺部開口部の外側縁に張る鉄帯板の上端位にほぼ一致している。これに

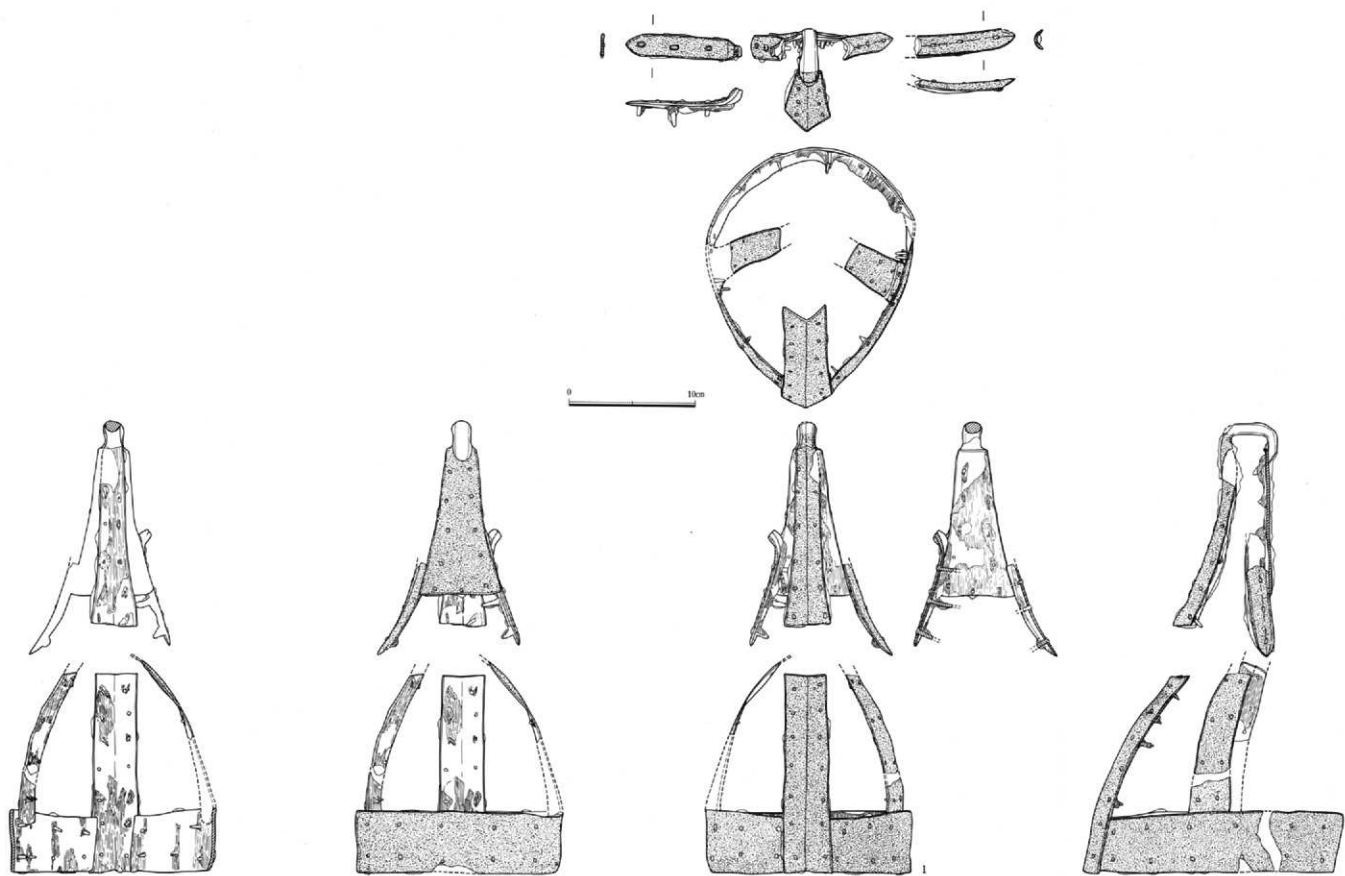
第3章 遺物

たいして壺部開口部の内側縁に張る鉄帯板の上端位は、内側縁のそれに比べ上位に位置するように張られている。これら壺部開口部側部の縁張り鉄帯板は、その下端部を底部縁張り鉄帯板が押えるように、底部縁張り鉄帯板の上縁より1.00cm内外の当代を取って、これも釘打ちで張っている。各部位の鉄帯板の釘穴は、2列、その各列内の間隔は最小1.50cm内外、最大4.50cm内であるが、多くは2.00～2.50cmの間隔で穿たれている。穴形は、辺長0.15cm内外の方形である。また、釘は頭部がつぶし平頭形の軸長1.00cm内外である。壺部開口部の側部縁張りの鉄帯板の立上り部は、壺部底部の最大幅位にあり、壺部全長の2分の1の位置より若干後退した部位を占めている。踏み板の踵部分が踏み込み爪先部分にたいして幅広の半円形である。

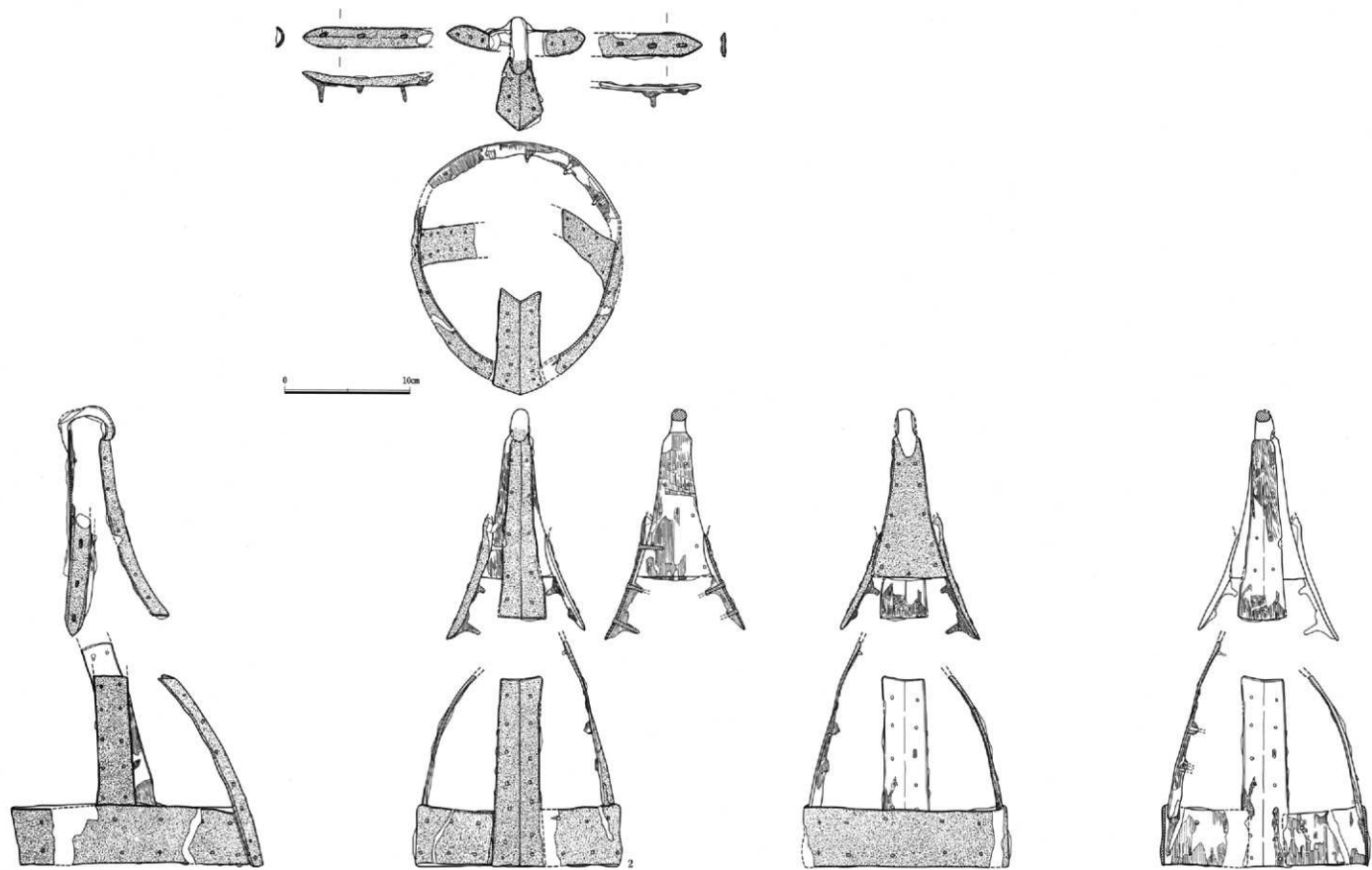
こうした壺部にたいして、吊手・鍔金部は、壺部爪先甲部の衝角状鉄帯板から接続する同形の鉄帯板を当てがい、その先端部を棒状に加工し、鉤形に

こしらえ、環状の鍔金としている。その先端部は、釘先形に尖らせ、壺部開口部上部の頸部に張った楔形鉄帯板の上端部を押えるようにして木胎部に固定させている。構造的には楔形鉄帯板張りの部分が本鍔の吊手軸部に相当し、その下端部分の両側部を補強するように、細篋状の鉄帯板を、これも釘打ちして、張っている。この細篋状の鉄帯板の下端は、壺部開口部側部縁張りの鉄帯板の上端位外方で、下方に位置する。これら吊手・鍔金部の鉄帯板の釘穴は、壺部鉄帯板のそれに比して大形で、使用釘も長大である。残存状態の良好な側部縁張りの細篋状鉄帯板部の釘は、軸長2.00cm内外、軸径0.20cm内外のものであり、吊手・鍔金部の鉄帯板が、吊手の機能を重視した堅固な構造であることが看取できる。

左右両鍔の各部位の計測値は、第22表に掲げるとおりであり、その復原形は第116図のものとなる。壺部開口部にたいして、鍔金部の革通し環が直角方向の位置に設けられていて、(a)の鉄製壺鍔とは異なる。



第117图 木胎漆塗臺座(1)



第118図 木胎漆塗器Ⅱ

(4) 金銅製心葉形杏葉 (第119図)

忍冬文の透かし彫りが施された心葉形の杏葉で3枚ある。一部が欠損し、変形も認められるがいずれも遺存状態は良い。

その作りは緑板、透かし文地板と台板の3枚を合わせて鋳留したものである。材質は鉄を含め、すべて銅製で表面および周縁に鍍金が施されている。鍍金は透かし文地板の文様と重なる台板の部分にも認められる。それぞれを鍍金した後、鉄によって留めたものである。銅板の厚さは緑板が2mm前後で最も厚く、次に約1mm程度の台板、透かし文地板の約0.8mm前後の順となる。

緑板は中央を心葉形に刺り貫かれ、その上部に逆三角形の透かしがあく。立開の部分を除く周縁には鋳頭が鍍金された鉄が1、3では32個、2では30個ある。鉄針は台板の裏面まで貫通し、先端が叩き潰されている。この鉄針によって緑板、透かし文地板と台板の3枚が固定されることとなる。

透かし文地板には心葉形の透かしを中心として蔓が左右対象に広がる忍冬文の文様が銅板を刺り貫いて施されている。文様部の周縁に沿っては列点文が表面より打ち出されてめぐる。

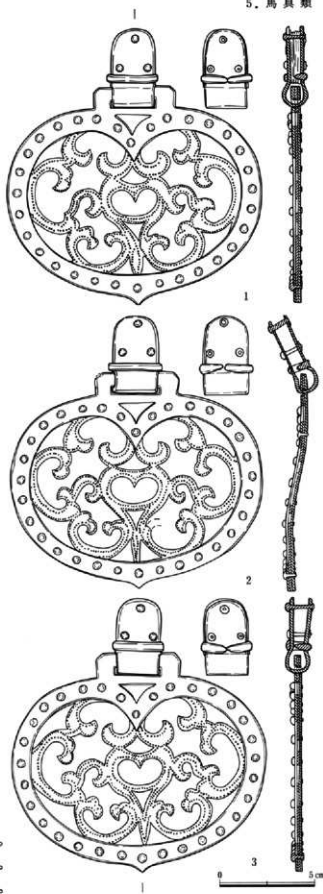
台板は立開孔のみが穿たれた金銅板である。

立開は角が取れた長方形の形状のもので、中央の孔を介して、3個の鉄と責金具をもつ銅製の鈎金具が付けられている。裏側に貫通した鉄針の先端は銅製の留金をはめてから叩き潰されている。1の内部には繫の革片が残存している。鈎金具の作りは鉄地金銅製心葉形鏡板付轡の面繫金具とほぼ同様であるが、鍍金が表側のみ、責金具と接する縁部に切り込みのない点が異なる。計測値は以下のとおりである。

1は全長146.5mm、最大幅136.0mm、立開幅23.5mm。

2は全長144.6mm、最大幅133.5mm、立開幅24.1mm。

3は全長145.0mm、最大幅135.0mm、立開幅23.5mm。



第119図 金銅製心葉形杏葉